

ゲリイ・リャボフ

どのように行ったか

ロマノフ一家：
遺体の隠蔽、探索、結果

「ポリト・ビューロー」
モスクワ
1998年

著者より

私が、このドキュメンタリ小説を書く身を決心したのは、幾つかの理由がある。

第1の理由は、最も主要な理由である。1998年の7月17日、政府は、皇帝家族と彼らの従僕達を、サンクトペテルブルグ市のペトロパブロフスキー寺院に埋葬することを決定したからである。このことは以下のことを意味している、この約束が本当に実行されるならば、人類の歴史の中で最も酷かった革命のページがひっくり返されるであろう。というのは、私はロマノフ一家と彼らの従僕達の秘密の埋葬地を、1976年から1979年の間に、最初に見出す試みを行ったグループの一員であったからである。ここに至って、これ以上を沈黙を続けることは意味がない。

第2の理由。私は、いわゆる「ソ連人」から、人間に戻った。それにより、ポリシェビキと彼らによって行われた革命の本質、この革命から生まれた非人道的な法律を深く究明するようになった。これらの経過は、誰かに興味を持って貰えるものと思う。

第3の理由。埋葬地の探索と発見の状況は特別のものがああり、多くの人に興味があると思っているからである。発見物のその後は、どうなっているのか？

ゲリイ・リャボフ

1998年、モスクワ

「・・・私を裏切った者達へ、より大きな罪・・・」

ヨハネ福音書、19章、11。

1952年秋、好天続きのある日の朝、私はいつもどおり、1時限の授業に出るために、法科大学に着いた。玄関の所に、学生と先生達が群をなしていた。青色の制服外套を着た警官の姿も見えた。誰も通していなかった。群衆の中に、刑事部の捜査係であるイワノフが素早く潜り込んだ。小柄で、華奢、いつも通りの仕事服を着ていた：見窄らしい灰色の外套、クロム革の長靴、頭には「クバンカ帽」。犯罪集団は「オペル」を暗記しており、彼らの通称「秘密のエージェント」はちまたの噂であった。密告者の中で犯罪者を後ろ指を指し、脅かし、時折懲らしめた。当時、非合法活動は漫談のような特徴を帯びていた：「昨日、ある人物と出会い、価値ある情報を得た一売店を検挙する予定らしい。」あるオペルがのたまう。よく調べたら、全てはくだらないことであった。

「何かあったのか？」私はイワノフに聞いた。（私は2年生であった。1年間以上にわたって、「警察援助隊」で活動をしていた。政府機関の援助を目的とした、当時そのような社会団体組織があったのである。好評化を得ていた：不良、ほったらかしにされ、犯罪に手を染めている子供との戦いを辞さなかった。これらは私には向いていた。）

「ここで、5人組が、仕事前に、朝から酒を飲んで酔っ払っていた。濁酒と一緒に、アセトンの入った瓶を誰かが置いた。みんなが喜んで、飲んだ。が、はき出したというわけだ。」

「誰が置いた？」私に興味がわいた。

彼はカッと目を見開いて、

「シオン、というのは・・・」その時、玄関の所に自動車飛び込んできた。車から制服を着た無表情の顔をした人物達が群がり出てきた。国家保安省（* МГБ）・・・内心、私はドキドキした。

国家安全に関して、私は何の幻想も抱いては居ない。内務省から警察部門を整理し、国家保安省⁽¹⁾に移したことを、全職員が大いに自慢した。「Госужас（ガスウジャス）」（* МГБの蔑称、建物のあった場所名からリュビャンカともいう）は、偉業をなすかのような幻想を作り出した。ここは、些細な盗みや空き巣を担当するのではなく、愛する祖国を、帝国主義、スパイ、破壊分子、毒殺者、シオニスト等から守るものであった。医者の仕事（*）「ユダヤ人問題の最終解決」の大きな仕事に対する準備段階にあった。ロシアでは全てを根底から、徹底的にやる。ここで「解決」を始める。ヒムラーとカルテンブルンナーは棺の中で、さぞかし羨ましかったであろう。

私が、ドイツの第3帝国（* ヒトラー統治の時代）の国家保安部の指導者について言及したのは、偶然ではない。というのは以下のわけからである。全体主義の頭領は、ある種の経験を昔から「交換し合う」からである。ムッソリーニとヒトラーは、ポリシェビキ党の活動概念などを、レーニンから借用した。両方の政党の間に、似たような単語を見いだせる。全ソ連邦共産党（改名してソ連邦共産党）とドイツ国家社会主義労働者党。ボス、党、大衆、雄弁術、文化における枠決め。これら全てで、2つは双子か兄弟のようである。1936年から1937年には、スターリンは、「特別称号」を保安機関に導入した。これは、軍の称号と国家保安部の称号の間に抗しがたい分界線を置くことになった。軍はその外で活動しなくならなくなった。国家保安部はその内側で。これは原則。連隊長の襟章は、最初は3個の階級章、後に4個となった。地位的には同格の内務人民委員部（НКВД）の職員は「国家保安部のキャピタン」と呼ばれ、変わらず3つの階級章をつけた。1943年に、肩章が導入されるまで。軍の少佐は、「国家保安部の上級中尉」に相当した。内務人民委員会（НКВД）、国家保安人民委員会（НКГБ）の制服は、一種独特ながら、軍と同じく地味なものであった。革命から時間がたった。チェキストは軍服の左袖に、金糸で「盾と矛」の刺繍をした。

どこからこれを仕入れたのか？

アドルフ・ヒトラーから。1933年に、権力へ到達するまで、当初に、ヒトラーは「突撃隊」を組織し、その後、保安の目的で「親衛隊」を組織した。軍と違った特別な階級役職を設けた。

2人のボス（* ヒトラーとスターリン）はお互いに学び合った。

脚注（1）記憶に間違いがなければ、これは1951年に行われた。全ての捜査と懲罰の機関を1つに、「一人の手」に、集中させることに、スターリンは決めた。労農社会主義政府の懲罰機能を強化することに他ならない。（注釈 著者）

特別部局の略称について触れてみよう。略称は国の状況、および「ソ連邦の発展」の程度に依存して変更されてきた。非常事態を重点としていた、反革命・サボタージュ及び投機取締全露非常委員会（ВЧК 別名チェーカー）は市民レベルのものであった。国家政治

保安部（Г П У）は、同士ジェルジンスキーの所管庁を、もっぱら政治分野の仕事に集中させるために、レーニンが決定した。内務人民委員部（Н К В Д）、これはずるさ。内務人民委員部の本質は、その最も重要な部局である国家保安総本部（Г У Г О Б Е З）にあった。その他諸々。

これら全ては、大人が子供の遊びをしているように思われる。そのとおり。門外漢や嫌いな人にとっては、これは血の遊びであった。結果として。

しかし、実際には、そう簡単なことではない。

不安定な政治システムの中では、国民は社会的に不安定な心理を持つ。その結果—不満、暴動、過去の同胞の優しい心への社会の指向性。

ヒトラーとスターリンはこのことをよくわかっていた。

ヒトラーは自身の持って生まれた才能で、独特の様式を考え出した。奇妙で、酷く、悲劇的で、壮大な様式を。国民は、最初、恐怖とパニックにとらわれ、その後、普段になかった光景に気をとられ、拍手を送り始める。

スターリンは、国家保安部内に、上辺だけの「ボリシェビキ的な質素さ」を保った。これは暗喩ではなく、実際であった。国家保安部（Г Б）は永遠に、「党の武装部隊」である。質素の制服を覚えているロシア国民は、直にそれを血と関連づけた：銃殺で、逮捕で、捜査で、弾圧で。誰も間違っていない。袖に盾と矛が描かれた記章を付けた人間が現れる。貴方は疑わないかもしれない：矛は貴方の頭のために、盾はクレムリン権力集団の保護のためにあった。いやある。

イワノフは、私を「死の部屋」へ案内した。それは環境衛生研究所の一室であったと思う。5人が、うなだれて円形テーブルに座っていた：テーブルの上には、かじられ黒ずんでいるソーセージが一本、パンの食べ残しがあり、室内には、きついアセトンの臭いがしていた。

「私には君が必要だ・・・」 イワノフは廊下に出た。私は彼に続いた。階段を、そして、渡り廊下をずんずん進んだ所で、周りに誰も居ないことを確認して、低い声で、しかもしっかりと話し始めた：

「君は余計なことをしゃべりすぎている。3日目、党の歴史に関するセミナーで、22年に、スターリン同志は10年後ではないと語ったと、君は話した。矛盾を見つけたのか？ 見ろよ・・・」

私は呆然となった。先生との何かはっきりしない討論において、私は質問をした：

「本質は何か？」 先生は返答した：

「全て。ボスの口から出たもの、それが本質だ。矛盾は明らかだ。が、本質において、何の矛盾も存在しない。」

「どこから・・・君は知ったのか？」 私はばかげた質問をした。

「そこから」 彼はにこりともせず返答した。

「口をつぐめ。偶然に知っている。君の幸福を。学んでおけ：君の41番グループには、エージェント（＝スパイ *）がいることを。わかった？」

この「抜け目なさ」で、私は大分前に酷い目に遭った。国には、あらゆるレベルのあらゆる目的を持ったエージェントが張りめぐされている。公園のベンチで、恋人同士が「余計なことを」話し合っているとすれば、「組織」は、これをあつという間に探知する。もちろん、短い作り話。が、少し怖い本質・・・ イワノフは「ポリ公」。41番グループで「働く」と言うことは、警察とは関係ない全く違う所でのことである。

これが国家保安省（М Г Б）である。私は単についていた・・・

「君は、この「人物」を気に入っている。この人物は過渡的年齢であるが、君は・・・」 イワノフは、にやりと笑った。

「君は未だ青二才だ。君のような青二才は、いつも「過渡的年齢の者を気に入る。それが、君を危うくするものだ。」

そして、私はわかった。私たちのグループに、何人かの熟女や年増（私の未熟な視点からだが）がいた。彼女らの中の一人の女性が、私を時折じっと見つめていた。「彼女だ。」そう思い、私は感謝の気持ちを込めてイワノフの手を握った。

古い歴史は・・・ その後の出来事に、自分は何の関係も持っていないと、誰にもそう思われるか。否。そうではない。読者は理解しなければならない。「ロマノフ家」の課題はどのような状況の下で起こったのかを。

さらに追加しておく。少し前、多分1年生の終わり頃、一人の若者、学生がいなくなった。彼は陰で「カメネフ（＝レフ・ボリソビッチ？ レーニンの同志、スターリンにより粛清される *）の継子」と呼ばれていた。亜麻色の髪、空色の目、彼は我々学生の中での崇拜の的であった。彼の後を皆が夢遊病者のようについて回った。その彼が、消えてしまった。名前が彼を追い詰めた。それ以外何が言えようか。

ある日の、政府の歴史と権利の2時間目の講義・・・ 中背で、眼鏡をかけ、口うるさ

く、皮肉屋で厳しい、チェルニロフスキー教授が講義を行った。その後、試験の時、古代ローマにおける国民集会に関する問題に答えた。私はこの集会を「コンデチア（規準、ノルマ？ ＊）」と名付けた。ついでに言うが、これがごくありふれたことである。とにかく、私たちはまあ適当に勉強をしていたのである。

教授は眼鏡を外し、こすって拭き、近視の目で見つめ、静かで平静な声で語った：

「この国民集会は「民会（コミチア）」と言います、君。「コンデチア」とは・・・これは商品の規格のことを言います。それはそれとして、私たちにとって、この単語は何か意味を持っているのでしょうかね・・・」

祖国の「商品」に対して向けられた隠された嫌み。私は後になってこれに気がついた。評価「2」（日本のかつての5段階評価とほぼ同じ ＊）をもらった。今後は少しは勉強をしようと思い立った。

教授の言葉をいい加減に聞いていた。講義室内のあちこちで話し声が続いていた。教授は突然講義を中断し、嘆いて語った：

「無勉強・・・ 君たちは何をやり、何になりたいのか？」

ざわめきは止んだ。が、静寂は長くは続かなかった。

1年生の学生、レラ・テプローバが、列の間を、ネズミのように気づかれないよう、こっそり進んでいくのを、私は突然に見つけた。ウエストの締まった服を着て、額の上には黒みがかった亜麻色の髪がふわっと掛かっている小柄な女性である。可愛いレラ、いい感じ（惚れているのだろうか？ それとも、簡単な気持ち。誰が知っている？ 当時、私の胸の中では浮子が不安定に震えており、錨のようではなかった。しかし、これに君の罪があるか？）

彼女は並んで座わり（空き席がたくさんあったが）、幾つかの写真を取りだした。手の平の上に顎を落とし、見つめた。愛する人を見つめるかのように。私はこの視線を退けた。

私には、ネバ市に女性がいた。青色の目をし、丸顔で、小さい上向いた鼻をしている女性であった。初めての女性では無かった。若さに任せた軽い付き合いであった。

「これは何？」 私は当惑して見た。

「これは、ロマノフ一家の死刑。」

「ええー、ロマノフの」 冷たい汗が流れた。イワノフの警告が思い出された。壊れたガラスの上を、私は歩き始める・・・

「ほら、・・・」 肩を大きくすぼめる。「ニコライ二世本人、そして全員。貴方は彼らを銃殺したことを知っていますか？」

注意深く見る。後ろでは、何か陽気に遊びをやっている。前の方では、無駄話をやっている。演壇の向こうにかりうじて教授が見えた。私たちが何かになるという、希望を完全に失っている。いつか。

「知っている。君は適当な場所を見つけられなかったの？ 時間も？」

「え？ どういうこと？」 彼女は怪訝そうな目をした。何の欺瞞もなさそうな。

「誰かが見ている。えらい目に遭う・・・」 私はまじめに小声で話す。が、写真全てを見て、全てを記憶した。

写真は約10×12（＊ 単位なし）。つや消しが4枚、つや出しが2枚、全てで6枚、色があせており、古い。最初の写真には、左側に軍服姿の4人の男性、同じ軍服姿の男性3人と、2人の女性は右側に。土手があり、蒸気機関車が煙を吐き、彼らの背後には客車。銃を持った兵士が隊列を作って立っている。

「これは、皇帝をスベルドロフスク市に連行したときのものの。」 レラが説明をする。

「ほら、皇后、ほら、皇帝・・・」

「並んでいるのは誰？」

「知らない。」

レラは、間違えることなく「スベルドロフスク」と発音した。切口の下に署名（ネガ版に引っ搔いた形で）。「スベルドロフスク。ロマノフ一家をウラルソビエトに引き渡す。

1918年9月30日」（ウラルソビエトの単語は括弧で囲われている。そこには無意識のユーモアの感覚が疑いなく感じとられる）

25年経過してから、私は知ることになる：写真は画家プチェリンの絵を撮影したものであった。この絵は、スベルドロフスク市のカルル・リフクネフタ記念通りにある、スベルドロフ同志の博物館に、かつて展示された。「血の皇帝」に対する憎しみが荒れ狂っていた間、掛かっていた。憎しみが忘れられ、支配世代がなくなり、絵を保存するのが良いと見なすようになった。1989年夏に、私は現物を見ることができた。雑誌「祖国」で、皇帝家族の滅亡の記事を読んだ博物館の館員が、私に見せてくれたのである。プチェリンは決して天才肌の画家ではない。キャンパスは、注文主の意向に従って描いた。階級的憎しみは持ち合わせており、容赦はなかった。彼らに対しては、愛や同情の欠片もなかった。周りには悲しみが溢れており、出口はなく暗黒であった。スベルドロフの友人である、ワシリ・ワシリエビッチ・ヤコブレフがニコライ二世の前に立ち、ペロバロドフ人民委員

(＝コミッサール)に何かを説明している。ペロバロドフと並んで、ウラルソビエトの軍事人民委員であるフィリップ・ゴローシェキンが。

歴史とは奇妙なものである。特にロシアにおいては。ヤコブレフ(偽名 ミャチン)はギャングであり、強奪者であった。かつて彼は、アナトリイ・ルナチャルスキーの学校に、バロニで強奪した金を供給した。好青年のアナトリイ・ワシリエビッチは、ポリシェビキの強奪者を養成する仕事を行っていた。党は、生き抜き、強くならなければならなかった。このような手段なくしては、何もできなかった・・・

2番目の写真。エカテリンブルグ市の事業家であったニコライ・ニコラエビッチ・イパチェフの屋敷内の客間。机、棚、椅子、鋳物製の暖炉。有名な画家の、あまり上手ではない複製の絵が壁に。天井からはシャンデリア、大分重そうな食器戸棚。好き嫌いは論外、ロマノフ一家はつらい最後の日々に、口では言えないほどの喜びをここで味わったことであろう。ここに、毎夕ごとに集まり、皇帝は低く聞き取りにくい声で歌った。「軍病院で、かわいそうな人が死んだ、父は長い間苦しんだ・・・」コンスタンチン・ロマノフの書いた詩である。メロデーは誰がつけたか、私は知らない。

3枚目の写真。高い天井の部屋。姿見、小卓。床にはゴミが少し。ここで、オリガ、タチャナ、マリヤ、アナスタシアが生活していた。

4枚目。闇に繋がっている階段の入り口。この階段を、最後に、彼らは降りていった・・・カウンターのような仕切り版。全てが有りふれた光景。

5枚目。丸天井の部屋。「見て・・・」レラが私の耳元で囁いた。「穴は全て弾丸の跡よ。下の床にも。ロマノフ一家達は臆病者であったので、射撃の時、床に座り込んだ、と私に父が話しました。」

彼女の父はもう亡くなっていた。大分昔に。彼はチェキストであった。彼の考えはわかる。私には、特段の感情もわかなかった。私の父は、白軍との内戦を戦った。母は父を心配した。私は伝統に従って教育された。多くがそうであったように。

不明瞭な写真を見たとき、どのように感じたか、今では思い出すのが難しい。ただ一つだけ、薄ら寒さがしたのを覚えている。背中に、手の平に。

そのような写真を、私は見たことがなかった。我々の国は幸せで、幸せな国民がいる、そう信じていた。他の世界など考えたことがなかった。

最後に、明瞭に書かれたテキスト(タイプ印刷)

「78号。政治委員ボイコフから、硫酸の要求。」旧式の正書法。私が問います。

「これはどこから手に入れたのか？」

「知らない。」

これは、ソコロフの本「皇帝一家の殺害」からの抜粋であった。25年後に、私はこのことを知った。

その時は、講義中であった・・・

何故硫酸が？

何故？

「多分、遺体を焼くために・・・」レラが低い声で語った。彼女は事情通だ。よく知っている。

なんと言ったらいいのか・・・

ああ、全く何も。焼いた？何を？これこそ人民の敵をだ。ニコライ二世は血にまみれていた。処刑者。虐待者。虐殺集団の長。では、ウラジーミル・イリッチ(*レーニン)は？「頭をもぎ取る必要がある。」それとも、何かそのようなことを。

しかし、彼らはもぎ取った。

何年もたってから、私はソ連邦の外交官ベセドフスキーの書いたものを読んだ。ロマノフ一家銃殺の後、現場にいたボイコフが皇后の首から、鎖にルビーの付いた金のリング(皇帝からの婚約用贈り物)を剥ぎ取った。ボイコフは終生それを指にはめ、じっと眺めるのが好きだった・・・

いろいろなことを開示できる。もちろん、ベセドフスキーの話が、正しければだが。

ベセドフスキーは頑固な人物であった。裏切り者であり、敵であった。彼はほら吹きで、平気で話に尾ひれを付ける。そして、主張している：ポーランドで、全権代表の地位にあったボイコフは、いつもぐでんぐでんに酔っ払った。彼の執務室内には、空になったコニャック瓶が何十本とあったのを、著者は見たことがあった。(多分、良心が、ピョートル・ラザレビッチ・ボイコフを悩ませていた？誰が知る・・・)；ボイコフは事情報告のためにモスクワに召喚された。特別な仕事のために、巨額な外貨をモスクワは渡していた。大使(当時の全権代表)は全てを片付け、報告をした。失ったと。

ワルシャワ駅のホームで、ボリス・コベルダが全権代表に近づいて来た。ボイコフがウラルソビエトに硫酸を提供したということを知った、このボリス・コベルダは、殺された皇帝家族のために復讐を誓った。ボリス・コベルダは、ボイコフを直ぐそばで銃撃した。全権代表はその場で死んだ。

ボイコフとコベルダの不意の出会いに、彼らの名前に関して、神秘的な関係がありそうである。

В О Й	К О В	(ボイコフ)
К О В	Е Р Д А	(コベルダ)

表中の十字は、両名に今後起こる「靄」を示していた。(？ ＊)

モスクワに、ボイコフの遺体の入った棺が運ばれた。遺骨の入った骨壺は、ポリシェビキの仕来りに則って、クレムリンの壁に埋葬された。

クレムリンでの、ある会合に、故人の未亡人が招待されたとき、誰となく言った：「もし生きていれば、彼は刑務所送りだ。クレムリンの壁は、彼にとって、輝かしい最後だ！金を盗んだ！」このことを、ベセドフスキーは確言している。

ボイコフの妻はそれを聞いて、陰口をたたき同志にまともなびんたを浴びせた。

1989年、ボイコフの未亡人の電話番号を見つけた。出版関係者を通じて。アデライダ・アブラモブナ。ドキドキしながら電話をした。明瞭な声が聞こえた。中年の女性の声が返事をした：

「そう、わたし。で、どうしてほしいの？」

「貴方に会いたいのですが。お話をしたいのです。貴方の知っていることをいろいろと伺いたいのです・・・」

「何について？」

知らんぷりをしていた。

「ロマノフ一家の銃殺についてですが。貴方とペトル・ラザレビッチ（＝ボイコフ 彼女の夫 ＊）が、1918年にエカテリンブルグに住んでいたことについて。銃殺後、アレクサンドラ・フェドロブ（＝皇后＝ニコライ二世の妻 ＊）の首から、貴方の夫が、取り外したらしい宝石付きの指輪について。」

彼女は直ぐに返事をした：

「私は今病気です。2週間後に電話をください。」

彼女は拒否はしなかった。怒って反論もしなかった。

しかし、2週間後に私は電話をしなかった。雑務に追われて、忘れてしまっていた。棒に振ってしまった。

どうにもならぬ、お手上げだ・・・

ディテリフスは、自分の著書「ウラルにおける皇帝家族と彼らの従僕の殺害」において、アデライダ・アブラモブナ（ボイコフの未亡人 ＊）に若干触れている。将軍（？ ＊）は、食料コミッサールであるボイコフの若い妻が催した狂宴について書いている。シャンパンの川についても・・・

映画「白馬」で、私はこの狂気場面を復元した。映画は芸術作品であり、それ以上のものではない。

この歴史はこのようにして始まった。奇妙で不可解な皇帝一家の受難と、私が終生関係すると、当時わかっていたのだろうか？

数年が過ぎた。1967年に、新聞「コムソモール・プラウダ」で、1918年7月17日夜におけるロマノフ一家処刑に関する短い記事を、私は読んだ。（10月革命50周年を国が祝った。革命などに関する興味ある詳細が初めて公開もされた。）記事に私は揺さぶられ、暗黒に落とされた。私はもうとっくに子供では無かった。犯罪との戦いの分野で活動して、大分時間がたっていた。国家保安局の優秀な元職員達と一緒に、（当時、警察はゴミ溜、沈殿タンクであった。国家保安省－国家保安委員会は自分らの勤務員の罪に猫かぶりをしていた。）私は漸く慣れた。両方の組織は内務人民委員部（НКВД）から育ち、自身の活動において、同じ原則と方法に従っていた。ただ目的は異なっており、秘密活動も異なっていた。私は子供では無かった。死刑の執行がどのように行われるかは知っていた。しかし、かつては私は信じていた。私たちの所では、仕事で銃殺を行うものであると。いたずらにではなく。それらは私の仕事にとって関心がなかった。

ここで、私は見聞きし、理解した。人民の前では、罪とはならない人たちなら、やりかねないことを理解した。（全ての罪は苦悩の死でもって償われ、血でもって洗い流される。ということのエバングエリアで、私は既に読んでいた。）階段をゆっくりと降りて行った。皇帝は病人の息子を抱えていた。大事なこと、それは、何も考えないことである。そう、何も。

党からの天下りで、準医師、宝石商、写真家であるヤコフ・ユーロフスキーは、先見の

目があり、準備の良い人物であった。

心理学者・・・

達人。

「期待されるコミュニスト」。これらの言葉で、ユーロフスキーは評価され、ウラジミール・イリッチ（＝レーニン ＊）は絶対的に信用をしていた。

「ユーロフスキーが彼らを案内する、それとも私が彼らを案内する、いやそれとも、私を彼らが案内する、彼らを銃殺するために・・・」 私は詩を書いた。私はどうやら自分を失った。私は恐怖を感じた。もう疑念は無い。確かだ。私は動揺しなかった。

再び、年が過ぎた。9年。私は今になって確信するようになった。これと共に生きた、悩んだ、再解釈をした、その他のことを。－私は嘘を言っているかも。あの衝撃は闇の中へと去って行き、記憶も忘却の川に飲み込まれた。私は全てを忘れた。
が、火はくすぶっていた。

1976年に、ソ連邦内務省大臣ニコライ・アニシモビッチ・シェロコフが、最近亡くなった、私の共著者アレクセイ・ペトロビッチ・ナゴルニイと私を、自身の印刷物と映画に関する定員外相談員に任命した。「長編映画」の第3シリーズ「革命家として生まれて」の撮影を終了し、シェロコフに試写して見せた後の事であった。映画は、大臣に好印象を与えた。彼はこの映画を支持し、それ以来、長期にわたり熱心な庇護者となってくれた。私は覚えている、一度、ゴステレラジオで、シリーズの一つを見た後（話は、場所はモスクワで、1941年10月20日夜のことである。当時、モスクワはドイツ軍に占領されるかもしれない瀬戸際にあった。スターリンは「包囲規則」を制定した。審理や裁判なしで、犯罪者、戦場泥棒、その他を射殺できる権利を警察と内務人民委員部に与えるとした。）、副議長の女性がシェロコフに感情丸出しにして不賛成を表明した。スクリーンに審査も裁判のない2人の銃殺されたギャングを見つけて。彼女は確信していた。彼女と同じく、テレビの全指導者と同じく、大臣は、祖国のスクリーン上には血は許さないと。

シェロコフの名誉のために言うておかなければならない。彼はきわめて冷静であり、当時、キッパリと反論をした：「警察は何時もギャング達を根絶やしにしていた。今後もそうであろう。」 女性は沈黙をした。多分、全て具合良く終わった、が・・・

我々に通告をした：内務省のベテラン達は、嘘で甘酸っぱいブレジネフ時代の流儀で、大臣に対応した：彼らは書いた。1941年、我々はモスクワにいた、通りは秋が深く、小雨が降っていた。以上・・・

一人のベテラン（大祖国戦争時の兵士の呼称 ＊）に私は質問をした：

「どうでしたか？ 貴方は、当時について本を書いています。10月20日の夜における人の抹殺についての言葉がありませんが？」

彼は言葉に詰まった。つまり、フィルム中でこの残酷なシーンが残るとすれば、特別重要な政府の秘密を広く知らしめたことで悪く評価される、と老人達は判断した。コミュニストやチェキストは、人を殺すことは常では無かった。

「たしかに、それは戯言だ！」 私は憤慨した。

「情報の出所は貴方であると、何故、貴方は決心したのですか？」

「我々はチェキストだ！」 彼は自信を持って答えた。

その通り、その通り。60年が過ぎた。全ては元のままだ。ただ、デマと嘘が止めどもなく広がっていた。

「君はこれをどこで知ったのか？」 ベテランは疑い深そうに尋ねた。

「私に目撃者が話をしました。貴方より、より勇気を持って。」 私は肩をすぼめた。

シェロコフはベテランの手紙には触れなかった。フィルムは、変更なしで、映写されることになった。

これは信じられないことであった。我々は勝ったが、テレビ局の上層部の説得に従って、スクリーン上で、警察について説明をする必要があった。今日では、人々はごく普通に彼らを「親切な人」と呼んでいると、質はいろいろだが。ある警官が、老母の道の横断を手助けをした。が、警官は転倒し、足を骨折してしまった。その後、老婆は孫達を連れて、せっせとこの警官の家に通い、食事の手伝いをした。子供達は夜には、この勇気ある救助者（＊ 警官）に、おとぎ話をして聞かせた。

しかし、ここに、シェロコフがいた。彼は我々のフィルムを助けてくれた。

国家保安局から、電話はなかった。ルビャンカ（＊ 国家保安局の俗称の一つ）は警戒を怠ってはいない。戦争に関する、シリーズの5本目「国境」のシナリオを我々が提示したとき、我々に語った：「書き方が間違っている！ 全員が犠牲になっている。これは自己犠牲だ。これを我が党は避難している。次のようではいけない：もし1人の国境警備兵が殺されたならば、残された2人はパルチザンへと去っている。国境警備隊は一人ぼっちでは死なない。赤軍が援助にいつでも向かう。愛国的な調子で、フィルムを開始せ

よ：国境警備隊での党員集会。国境警備兵が、ドイツファシストの侵略を反撃する問題を解決する。」我々は質問をした：「そのような集会の記録を見せてください。」残念ながら、そのような記録は見つからなかった。我々には映画「国境」を継続する価値はないと、国家保安局は決定した。映画は他の人たちが継続した。彼らは「組織」の指示を忠実に守った。映画は永久に滅亡した。この時、アレクセイ・ペトロビッチ（＝ナゴルニイ＊）は軍病院で亡くなった。私は至る所から追い出された。出版社にはいけなくなり、映画の撮影所にも行けなくなった。私の貢献は必要なくなったと、丁寧に説明された。

シェロコフは私達に、内務省の高位の勲章をくれた：ソ連邦内務省の功労ある労働者。私は、テレビ関係の仕事で警察官と話し合うために、スベルドロフ市に行くことを願い出た。が、ナゴルニイは行くことはできなかった。私だけが出かけることになった。出発前に、出張書と通行書を渡ししながら、シェロコフは物思いにふけりながら語った：

「スベルドロフ市で、私は全ソの会議を催した。市街に出たとき、イパチェフの家に案内してくれるように頼んだ。ロマノフ一家が処刑された所に立ち寄りたと言ったのである。」

大臣はうつろで、奇妙な目をした。何故か、私は彼の軍服、肩章、勲章に気がとらわれなかった。白髪之交った黒髪、疲れ切った人物を見た。が、明るい目の輝きを持った。その目には、悲しみが凝結していた。

さて、この私の想像は、何年後にも「働いている」のであろうか？

私はそうは思わない。みんなと同じであろう。

私は覚えている。あるときのインタビューで、シェロコフがマルクスの論文「労働者大衆の貧困と貧困下について」から、ある部分を引用した。マルクスが次のように語った部分である「社会制度のど真ん中に、何か腐ったものがあると、それは自身の富を増大し、貧困は減少しない。そこでは、犯罪率は出生率を追い抜く」教育があり、全く馬鹿では無い人物（シェロコフはまさにそうだ）がこの言葉を言うことができるであろうか？この言葉が愛する祖国になんと言っているのかを、知らないで、かつ理解しないで。ソ連邦では、貧困が決して減っていないことを、シェロコフはよく知っていた。が、戦前まで犯罪率は出生率を追い抜いてはいなかったことを。

いや、私はシェロコフを反体制派の人として見なしたくはない。決してそうではない。しかし、彼は全てを見通していた。全てをわかっていた。

・・・私は狼狽した、どう答えて良いのか、どう話を持って行けば良いのか。目の前には、全能の大臣、ソ連邦共産党の中央委員、ブレジネフの個人的な友人が立っていた。私は後悔し、黙りこくった。

「ソ連」時代には、旅行用の切符を手に入れることが、どれほど難しいことだったかを知っている人は、今では少なくなった。私はヤロスラヴ駅（＊モスクワ市内にあり、シベリヤ、極東方面への長距離列車の出発駅）に到着した。大臣シェロコフの紹介の人物としてではなく、普通のソ連邦の住民として。直ぐにわかった。普通の市民では、切符を手に入れるのは大変であることを。長い果てしない行列に並ばなければならない。いつ貰えるかわからない切符のために、毎日毎日、疲労困憊しながら。

私は降伏した。長い行列には並びたくなかったのである。私は警察署に向かった。所長室に私は簡単に通っていった。暴漢や強盗に手厳しい彼らは、何故か、私には何の注意も向けなかった。署長は制服を着た人と何か話し込んでいた。この人は次長とみた。私は旅行書類を取りだした。署長は激昂した：

「君は何をうろつき回っているのか？」

ここで、私の予想外のことが起こった。マヤコフスキー並の。誰かが「刑事」を見る。その刑事は「憲兵」を見る。（？＊）私は次長の視線を感じた。彼は私の胸を見ていた。

所長はむせて、言いよどみ、声を止めた。

2人は私のバッジを見た。「功労賞」。「そうだ、これがあつた・・・」頭に思い出した。かつて、指導者の制服に、このバッジを見たことがあつた。そのバッジは、私には何の感銘ももたらさなかった。が、今では・・・

「切符？どこへ？今すぐに？」署長は、抜け目なく、きわめて愛想良くなった。

10分後、警官の誰かが切符を持ってきた。私は映画の主任顧問の言葉を思い出した：「君の所に、いつか車（＊秘密警察などの）が現れたとしても、このバッジが君を助けてくれるだろう。」彼は本当のことを言ってくれた。

・・・汽車は4時間遅れ、8月の暑苦しい未明に、スベルドロフスク市に到着した。無人のプラットホームに停車した。2人の警察将校が私を迎えてくれた。無言で、丁寧であった。が、彼らの外見から判断すると、結構疲れ切ったようであった。私を「スベルドロフスク」ホテル（「Hotel」という看板が屋根の端にあった。長く、外国人に対して

閉鎖されている町の中に。住民は皆、例外なく、英語を話していた！）まで案内してくれた。部屋の中が、正常であることを確認した後、退去していった。

私は一人だけになった。眠くて、疲れて、頭がボーとなっていた。朝になったら、内務局（УВД）の政治部部長に電話をしよう、と考えた。就寝の準備をした。ベットを整えた。旅で疲れた。が、突然眠たくなかった。未明であった。窓の外の空には、黄金色で透き通った空気が広がっていた。高い教会の鐘楼が見える。鐘楼は、天を突き刺す、黒い剣のようだ。私は当惑しながら立っていた。突然ある考えが、あれは、あれは。

あれは何？ 私は考え込まなかった。そのようなことは必要はない。足は独りでに階段を降りていた。エレベータは動いていなかった。歩きに歩いて、ロビーに到達した。（労働者の町のホテルで、何故リフトが、夜に？ 何と戦っているつもりなのか？） 出口のところで、制服を着たドアマンがまどろんでいた。私に気がつき、立ち上がり、声をかけた。

「どこへ？」

「外へ。」

「何も聞いていない。」虚ろなまなざしで答えた。

「戻りなさい。歩き回ってはいけません。してはならないことになっている。」

「ここへ、私は誰と来たか、君は見ていた？」私は彼をたしなめようとした。

「警察官と。それが何か？ 警察は警察、ここにはこの秩序がある。戻りなさい。私は十分に睡眠を取りたい。」

私は最後に、証明書を見せることにした：「ソ連邦内務省」

彼は降伏した。

「行って下さい、行って下さい・・・ 私も警察に勤めていた。規則ではあるが・・・」

私は通りに出た。通りは曲がりくねっていた。曲がった路面電車のレールは明るく光っていた：小さな家々は木造りで今にも壊れそうであった。これらの建物達は未だ覚えているのであろう、と私は思った。私はあまり深く考え込まなかった。が、覚えていた。全てを。

早歩きで、私は「カール・リブクネフト（＊ ドイツの革命家。1919年に反革命側により殺された）」大通りを進んだ。私は思った：「我々は外国人の革命家が好きである。多分、全員を銃殺することができなかったからである。ここでは殺さなかった。ドイツ人自身が彼を殺した。が、彼にアーメン。」 そうしているうちに、公園に着いた。窓から見えていた鐘楼である。ウラルのコムソモール団である、旗を持った青年・女性の金属製銅像に対向して。かつて彼らは喜んで建設に参加した。そして復讐にも。大通りの反対側には、半地下階を持った、低い家があった。（半地下階は左側に見え、小さな通りに沿って下に消えている。）私はこの建物の名前を聞いていた：「イパチェフの家」 しかし、私は一度も写真で見たことはなかった。この家についても何も読んだことはなかった。2冊の雑誌に触れた記事があった。が、私は手に入れることができなかった。というわけで、イパチェフの家については何も知らない。

しかし、私は、家を前にして何かを感じず。この家が・・・

小さな通りの方から。もう一つの玄関。アーチ型をした窓がふさがれている。家の壁から直接柵が始まっている。柵に取り付けてある板が揺れている。それらを外せそうである。黒ずんだ板の後ろに、古木の曲がった幹を見つけた。理解しがたく奇妙なことだが、私は謎解きを試みる。彼ら（＊ ロマノフ一家）は、この木の下で散歩をしていたであろうと。散歩し、ぶらぶらした。多分、警備兵達は草の上に座り、退屈したであろう。彼らの悠長な遊びが終わるのを焦りを持ちながらじっと待ちながら。散歩とは？

板を押しよける。中庭がある。死んでしまった古木が音を出している。長く、神秘的に、そして悲しく。そして、直にそのように。葉の下を、かつて誰が散歩したかを、木々はもう覚えてはいない。あの自らが招いた大変な時代・・・ その時代は疲れさせる。間違いなく。そして、それ故の寂しさを。

2階の窓が、時々かすかに輝く。壁は汚れ、漆喰が崩れ落ちていた。ここは昔通り。壁よ、君は全てを見ていた？ 窓は？ ガラス越しに、人の目が見ていた。彼らは死の準備をしていた。彼らはそれを受け入れた。壁よ、窓よ、話してくれないか？

・・・見窄らしいが、きちんとした身なりの中年の男が近づいてきた。ひげのそり残しがある。数歩先からでも、酒の臭いがする。

「のぞき見をしているのか？」

私は黙ってうなずく。なんと云えば良いのか・・・

「ここは良くない・・・」

「誰に？」

「我々に・・・」

「行こう・・・」

彼は私の前を進んだ。玉石を敷き詰めている斜面。道路の対面を、頭巾をかぶった老婆

が、教会に向かっている。記念碑はない。高く密の柵の所を長いライフル銃を持った衛兵が歩いている。どこからか、辻堂が現れた。

私の道連れは門に向かって進んでいく。扉が開く。ライフル銃を持った、詰め所のひげずらの衛兵達は何故か我々を見ようとしない。全ては本物だ。私は壁に手を当ててみる。石だ、全て現実だ。私は、1918年にいるのか？ そんなことはない。あり得ない。

「行こう・・・」 彼は脇の壁の所にあるドアの方向に進んでいく。周りを見回す。漸く私は気がつく。彼はある人物によく似ている、大分昔の、長い間見たことのない人物に・・・

「もしや、ニコライ二世？」 喉がつかえる。突然思い出す。私はウラル・ソビエトからの者ではない、警備隊からの者でもない、クレムリンからの者でもない。「陛下？」 小説からの単語が記憶に蘇る。「・・・貴方は？」

「私は貴方に示したいことがある。」 彼は頭で、白い塗料の上に書かれた文章を指す。自分の目を疑いながら、私は読む：「***（？ 辞書にない文字だらけで和訳困難 *）***」

彼の顔は陰鬱であった。焦げた臭いもそれほどではない。皇帝だ。

再び、読む：「***（？ 辞書にない文字だらけで和訳困難 *）***」

「これは大事なものだ。」 皇帝は手で指した。

「世界革命こんにちわ。国際帝国主義、資本主義さようなら。君主制よさらば。」

「何故？・・・」

彼は肩をすばめる：

「何故・・・ 書いたのか？ それとも、何故君に・・・ 読める？」

「読めます。」

彼はまた肩をすばめた。沈黙する。目はうつろ。

「えーと・・・ 見える・・・ 親しい人・・・ 私にも見えるかな？」

彼は微笑む。焦げた臭いで辟易する。

「親しい人？ そうだ、君！」

体を揺らしながら去っていく。不吉な声で、何かを歌っている。

私はついていない。

・・・空想にのめり込んでいた。陽炎。幻想。夢のまた夢。これは当てにならない。意識朦朧状態だ。勘違いだ。

正確さを期さなければならない。正しさが必要だ。ほら、漸く正しく発音した。かつて学校で勉強したように：単語の集まりは完成した思想を形成した。

階段はきしむ。重い足取り・・・

多分そうであったろう。ロシア最後の皇帝の最後の歩みの元できしむ。ソ連邦は当時、まだ無かった？

・・・ホテルに戻る。ホテル・スベルドロフ。全ては過去のこと、吹雪で埋まっていた。そのせいで、悲しげで明るい。

アレクサンドル・ニコラエビッチ・ベルチンスキーを良く言わない。彼は詩人。彼の言葉は非常に正確であり、表現に富んでいる。ロシアが死んでしまったとき、彼は詩を書き始めた。彼はそう感じていた。

私もそう感じている。私は突然理解する、これに応えなければならないことを。私に。全てはそのまま、例外なく。誰も避けられない。誰も。

夢－悪夢。朝、ドアのノックする音で目が覚める。頭が割れるように痛い。夢ではなく拷問だった。スベルドロフスクの内務局の政治部部长、と随伴者は元気な顔をしていた。

「科学技術部から写真を持ってきた。多分君は撮りたいのでは？」 部長は私をじらす。「行こう。朝の方が好都合だ、人目がつかないから。この家の訪問は、我々は推奨していない・・・」

「何故？」

歩きながら話をし、私は、学生時代に、軍の野営地でしたような服装をした。

「というのは、若干の疑念があるのだ。いたずらに、家族を殺してしまったということ。下士官達が・・・ 君はそう思うか？」

私は視線を挙げた。彼は意地悪ではなく真剣に私に問いかけをしている。。私も真剣に答える：

「必要がないことだった。これは・・・犯罪だった。そうでは無いかね？」

「んー・・・ どうなのか・・・」 彼は当惑している。「一般的には・・・ よろしい、行こう。ここに並んで。」

「私はいた。夜に。」（？ *）

彼は驚きを隠さない。そして、説明が：

「そういえば、君は作家で、シナリオ作家ですね。君には想像力が必要ですね。」

*

*

*

部屋、廊下、床、天井、全て本物である。記憶にあるとおり。ホールに入る。左に暖炉。昔もそうであったのであろうが、昔のシャンデリアが、天井から吊され揺れている。ただ家具類がない。有名なチェロ奏者が、それらをねだって手に入れた。彼はコンサートを主催しており、指揮者の部屋にそれらの家具を配置した。著名さを拒否することができなかった。

「死んだ、かわいそうな人が、軍病院で・・・」

そうではない・・・ 私は何も聞いてはいない。これは大分後のことだ：私はロマノフ一家惨事をフィルムに撮ることにする。著名な俳優で監督のゲンナジイ・グラゴレフ、彼の顔は皇帝にそっくりである。彼はこの歌を歌う。ここではない。この家はもうないであろう。モスクワの命令を実行した、ボリス・ニコラエビッチ・エリチンは、今度はこちらから、邸宅を爆破するように命令をする。ゲンナジイはセットの中で歌うことになる。

いや違う。彼は歌わない。映画での歌は、ドルスキーの仕事である。ドルスキーが歌うことになる。

地下室に降りていく。経路は昔通り。廊下は曲がっており、そしてドア、取っ手（後になって私は図面と比較してみた。その通りであった）。なかなか歩を進められない。そして・・・

「ロマノフ一家が殺された場所に、私も立ってみたかった。」 シェロコフの声が、耳に響く。ここがその場所だ。丸天井、コンクリートの床、右には閉じられた窓、角にはいろいろなガラクタ。

「板張りの間仕切りがここにあった。」 政治部部長が示した。

「今は無くなっている。ここで彼らが・・・」 彼は手を広げる。全員奇妙な顔をしている。結構びっくりした。

「イパチェフ邸宅の庭は、以前には「人民の復讐」と呼ばれていた。戦前まで、ここに博物館があった。この壁を背景として全世界の革命家達は、写真を撮りたがった。」

「何故ここへ入れないのかは、貴方は知っている。」 案内者が、話に入り込む。

「塞がれた窓に花を置いている。ほら。」

「無駄話だ。」 隊長は顔をゆがめた。

「その時、何故、再び博物館が再開されなかったのか？」 私は質問をした。

「何故かという・・・」 部長は不機嫌になった。

「何故かという、この博物館には賛成と反対があり、・・・」

「仕切り壁はどこへ？」 私は話した。

「正確には私は知らない。話では、今はアメリカだと。」

「アメリカ？」 私は自分の耳を疑った。

「しかし、前にはこの博物館にあった。」

彼は当惑して肩をすぼめた。説明はない。皇帝の宝石類が消滅したことを私が知ってから、大分後のことであった。ソビエト権力は、銀、金、宝石、絵画を売り尽くした。例えば、レーニンの友人のアルマンド・ハメルに。多くの他の希望者達に。私は全く間違いを犯している：金持ちの異常者には「土産」が必要である。全てが売られている。ロマノフ一家が殺された所にあった壁も売られた。私達は鍛冶や、私達若者の心・・・（？ ＊）

・・・道路に車が止まっている。スベルドロフ警察の教育係に、地元の熱心な郷土研究家を紹介してくれるように依頼をした。

「わかった。詳細を知りたいのでしょう。もしあればだが。明日返事をしましょう。」

私は長い間通りの向こう側を見ていた。向こうには家。長く、低く、1階建て。陰気な家・・・

私の視線の先を気にして、部長が語った：

「あれは、ポポフの家だ。そこに、特命の家であるイパチェフの警備隊が住んでいた。ここへ、ユーロフスキーは皇帝の料理人と、雑用の少年を哀れに思い、連れてきた後、残りの者達を・・・」 彼は手を振り下ろした。

彼らは去っていく。私は、見知らぬポポフという人の家の前に立っている。このポポフについては、全く誰も知らなかった。何故か心臓がざわめくが？ 何か病でも・・・

直ぐに私は気がついた、非常に恐ろしく、あり得なく、理解できない事に関わりだしたことに。

自分の仕事において、私は少なくない死体に出会ってきた。銃弾の穴のついた者、ナイフや斧で一撃で血のついた者。が、これらは自分にはありふれたものである。平凡な事件である。

これらの遺体は、私は決して見たことがなかった。

何が起きたのか？

私は理解できなかった。

早朝に、ホテル・スベルドロフスクの朝食後、郷土研究者と会うために出かけた。私のガイドは、イパチェフの家で私を待っている。そこから歩いて行く。日曜日、車はダメ、相手は言う「きわめて経済的だ。」 内務局で、大事な仕事の時でさえ、ガソリンが無い。緊急時の時でさえ、と私に話してくれた。

皆さん・・・ かつてブルガコフはかように書いていた：はじめに、彼らは革命家を歌い、その後、彼らの所では水道管が凍結をする。小説「犬の心臓」は、地下出版の物－薄紙の上に、色あせた青色の消えそうな字体で印刷された－で読んだ。読み終わって考えた：これは何だ？ 日時は過ぎ去り、再び戻る；話をし、そして忘れ去られる。そして、再び、誰かが身に覚えのある言葉を繰り返す。全てが夢の中のように。プレオブラジェンスキー教授が1978年の早朝に目覚めると、必ず言った：「おやまあ、みんな知った顔だ。彼らは再び薬や石油を節約している。が、再び1トンもこぼしている；。彼らは話では以前通りだが、仕事ではそうではない。」

休日のせいであろう、幾つかの通りには人通りは無い。手入れの行き届いていない中庭がある。家は5階か、6階建て。茶色のペンキが塗られている。階段も汚く、エレベータは無い。階段を登り上がる。多分、終わりから2番目の階。右側にドアがある。私のコミッサールがベルを鳴らす。入り口の所に、生き生きとした表情をし、目の堀が深く、視線のきつい中年の人がいた。自分一人で思った：「美男子・・・ 多分女性は、彼がいれば何でも許してくれそう。」 これでは、女性に対して失礼に当たるかも？ それとも、私の目の前に立っている人物を褒めすぎ？ 知らない・・・ 人それぞれである。

少し話をしたが、すっきりとは行かなかった。部長は時計を見た：「さて、君は話を続けたまえ。私には仕事がある。」 部長は去る。少し打ち解けた。

「私たちの地方の何に、特に貴方は興味があるのですか？」 彼は警戒し、少し緊張していた。（私の警察の「勲章」に罪があったと、後になって明らかになる。この勲章は内務人民委員部に属していることを示していたからである。）

「私はロマノフ一家に興味があります。彼らに関する全てのことに。」

私の新しい友人は、地球物理学修士であり、収集家である。イパチェフの家を写した20年代の絵はがきを持参してくれ、私にくれた。

「もらって下さい。私には未だあります。当時、この絵はがきは大量に印刷されました・・・」

私は全てを直接に話すことに決めた。国家保安委員会にも、党古文書部にも、援助を求めていることも。

夜に、私のつたない頭に、とんでもないアイデアが浮かんだ：もしや、銃殺された家族の遺体を探索できたら。（小文字の「家族」を用いたのは、最初から「皇帝家族」を目指して始めたものではなかったことを意味している） 結局、人々が埋葬をしたのであるから、他の人によってそこを探索することは、全く禁止されてはいないということの意味していよう。

何故、このような考えが私の頭に浮かんできたのであろうか？

その夜、私はいろいろと考えた。宗教、祖国、市民、社会のことなど。私は神を信じている。私の保母は、私を洗礼したと、私に話したことがある。もちろん両親には秘密であったが。洗礼など両親が許すはずも無かったのだ。しかし、私は教会に一度も行ったことは無かった。ただ、興味だったか、仕事でだったかで、何年か前に行った。懺悔の時に、ワインとパンがなかった。私は教会には全く関係がなかった。

1969年に、「モスフィルム（映画会社の1つ *）」が、私の脚本で、ある冒険ものを撮影した。撮影はコストロマ市で行われた。国内戦時の「教会の反革命」と関連した映画であった。必要に迫られて、私は教会をたびたび訪れ、ミサにも立ち会った。私は真摯に理解するよう努めた。

教会を気に入るようになった。意外にも、あつという間に、あまり考えること無く。神への回帰のために、そのような精神的な状態－最も良い土台。

その時から、この土台が私には残り続けた。

この奇妙な夜に、私は他のことを考えた：運命は私に、全くあり得そうも無い可能性を与えてくれた。かつて、シュリーマンはトロイを探索することを決めた。自分の人生をこの発掘に捧げ、ついに発見した、トロイの遺跡を。

それならば、私も見つけよう。とにかく、できることを全てやろう。

考えは、幼稚じみており、真剣さもなかった。「白軍は熱心になって（私は幼稚に考えた、ボリシェビキのいとも、シベリアの革命家も、白軍も全く探査をしなかったと。）探査をした。が、見つけられなかった。それなのに、60年以上も経過して、私、いや我々が探し出すとは。」とにかく幼稚じみていた。ただ、時がたつにつれて、私は神意に触れてきたような気がしてきた。

・・・「ロマノフ一家の埋葬場所の探索をしてみようか？」

アレクサンドル・ニコラエビッチ・アブドーンは当惑気味に私を見た。このような場合に最も適当な言葉「君は、本気なの？」を彼が言いそうな気がしたのだが。彼は全く他のことを言った：

「それは本当のことなの？ 私の知る所では、彼らはウラル地区に埋葬された。そこには、工場や鉄道がある。が、嘘であろう。彼らを誰も未だ見つけてはいない。」

「しかし、やってみることはできるだろう？ 私たちは何か失うものはある？」

「君を擁護はするが、私はいやだ。危険が大きい。」

「誰も私を擁護はしないし、貴方も擁護はしない。そのとおり、これはリスクのある企てだ。報道などで公開したくはない？」

彼は黙りこくった。が、私の突拍子もないアイデアが、彼の興味をかき立てたようである。うつむいていた彼は漸く、目を上げた。

「よろしい。君はモスクワにいる。君はシェロコフと面識がある。書類や証拠を集める努力をして下さい。私の所には、カスビノフの本「23階段・・・」がある。読みました？」

「いや。」

「それではだめです。読みなさい。パベル・ビコフの本もある。持っていますか？」

「いや。」

「そうか。」彼は苦笑いをする。

「この本は、今では本屋では売っていない。」彼は少し座を外し、写真のフィルムロールを持って戻ってきた。

「これが、「ロマノフ家の最後の日々」の本のコピーです。調べて下さい。私も当然調べます。興味があるので、しかし・・・」困惑したように、彼は両手を広げた。

「君の話したことに応じて。彼、パベル・ビコフは我々の援助者ではない。私は心配しています。ろしい。それでは貴方からの連絡を待っています。」

* * *

レーラ・テプローバを探しに、モスクワで、私は内務省を尋ねた。彼女の写真が助けになると思っていた。もちろん彼女が変わっていなければだが。私は簡単に彼女を見つけることであろうと考えていたのだが。どれだけ月日経っていたのだろうか。23年。全てが通り過ぎてしまっていた。若さも過ぎ去った。そう、この仕事の他は・・・

ポケットに住所録、電話番号。電話をした。彼女は驚いていたが、喜んでくれた。乗り物で行く。（今、この文章をタイプしているのだが、1976年当時、レーラがどこに住んでいたが、なかなか思い出せない。モスクワのある新しい地区で会ったと思うが。新しい建物で、リフトがあったと思うので、何階かであった。）

「やあ、今日はかな？」彼女は小柄で、痩せており、大きな目をしていた。私は彼女の入念な化粧に目が引きつけられた。多分、私は決してよく考えたことはなかった。今では、私に残されているものは僅かであることを。以前のもの。若々しさ。

部屋に入る。親愛のキスを軽くした。女の子が出てきた。綺麗な子。「娘さん？」女の子は、軽く挨拶をして去っていく。

「夫が亡くなりまして・・・」悲しそうにレーラが話をした。

神よ、なんと時間が経ったものだ・・・

私たちはレニングラードに到着した、多分同じ汽車で。レーラは私を、母と妹に紹介をした。彼らの住まいは旧ネフスキー街の地区からあまり離れていなかった。ここで、禿げた30歳のある軍人が現れた。彼はなんかというレニングラード・アカデミーを卒業し、真剣に結婚をすることを決心をした。レーラと。彼女は待ち構えていた。しかし、私は突然彼女に何かを言った？非常に大事なことを。ただ一つ可能な。ああ・・・

私は非常に焼き餅を焼いた：

「彼は年寄りだ！（私たちは全く馬鹿だ、もし、我々が20歳だったら・・・）」

レーラが言う。

「彼は私を愛している。散歩に行かない？ ほら、成人した娘、将軍（？ *）は死んだ、皆ばらばらとなった。」

私は何も話さなかった。これは既に済んだことだ。過去のことだ。

・・・レーラは私に写真をくれた。笑顔に溢れ、うれしそうな、彼女は私のためにあれやこれや親切であった。

私たちは別れた。永久になるのを心配している。

写真は過去を復活した。しかし助けてはくれなかった。レーニン図書館長に、手紙を書くよう、シェロコフにお願いをした。私は特別保管室に入りたかった。

特別保管室・・・

反抗する知識階級の夢は、残念ながら、実現される夢とは限らない。何をしたのか、共産党は知っていた。そして、より十分に知っていた、3億人の奴隷を、自身の奴隷状態に

関して、永久に無知の状態に残すために、しなければならないかを。

全ては専門的に、かつ正確に行われた。以前の体制の滅亡と、国内戦終結後、直ちに、労働者達の頭に、出来事に関する必要な事実をたたき込むことに、レーニンは決断した。白軍のボス、亡命中の王制の活動家、白軍側として国内戦に参加した者たちの回顧録が発刊された。

後になって、靄にかかった時代を隠し、成長しているとされた活動が花と笑みを与えられるのを止めたとき、幸福のために、それまで列挙してきた事例全てを、歴史科学のためだと称して。特別保管庫の資料には、誰も手を出せない。つまり、これが国家保安部（ГБ）

その後、西側のロシア系新聞は、前述の文献に合流するようになった。亡命、あれやこれやの研究成果、個人の書物、ソ連邦の作家の本。それらの内容は政治状況の変化故に、体制を損ないかねなかった。ここへ、押収品を運んできた。ここへ、ソ連邦大使館の特別職員達が、祖国に関するあらゆるものを送ってきた。

特別保管庫は、西欧主義者達に自由に解放した。彼らは全てを知った。ソ連邦の・・・

特別の手紙が要求された。テーマや課題に従って。特別保管庫は、「探求者達」がまごつかないように気を配った。

簡単な例：特別保管庫には、「2箇所6角形の検閲台」のうしろに、亡命軍事組織（POBC）の雑誌「歩哨」が保管されていた。もちろん、合同国家政治保安部（ОГПУ）→内務人民委員部（НКВД）の活動については、誰も読めないことになっていた。その雑誌には、ソ連邦のスパイ将軍スコ布林と歌手ナデジダ・ブレビツカヤーの手口が公表されていた。POBCの幹部である将軍クテポフ、彼の後任の将軍ミレルを打ちのめすために、2人ともソ連邦諜報機関を手伝った。

今、人生で2度目、図書館の巨大なロビーにいる。特別保管庫は・・・そこは秘密となっており、よそ者にはわからないようになっている。それなりの人だけがそこへ入っていける・・・

階段はきしむ、曲がった廊下を進んでいくと、表示板の無い両開きのガラス製の扉が。

（国家保安部の伝統を強く受けている。それはロシアでは消えて無くなることは無い。というのは、ロシアは何時も自分の秘密を、他の世界から永久に保管するからだ。永久に！）

私は入っていく。魅力的な女性が机の向こうに。周りは、読書中の人々。静寂。私は名を告げる。

「わかっています。手紙は受け取っています。館長の決裁もあります。内務省（МВД）は何か大事なものに興味があるのですか？ 私たちの所は良く国家保安委員会（КГБ）の者が尋ねてきます。今回は、貴方が・・・」

彼女はわかっていた。おまえが何者なのかを・・・

自分の興味ある分野を線で囲む。素っ気なく話す。動揺に気がつかれないように。（私は本当にもの知らずだった・・・）

私は説明をする。「警察の仕事について、最初の期間のことに関することです。」「革命家として生まれて」、心理的にこれが光を遮っている。彼女はしつこくは問いたさない。

彼女はしつこくは問いたさない。そして、毎日、毎月、私は自分の祖国の過去の中に埋もれる。現在まで何も知られることが無かった過去の中に・・・

何十冊もの本。書類、公開された手紙、記録。そのうちに、私は、詩人ベフテフの詩集の貴重な1冊に巡り会った。「ロシアの悲嘆と涙の歌」。彼はこの歌を、トボリスク市で囚人となっていた皇帝一家に送った。普通の郵便で。それらの中によく知られた2つの詩が書いてある。ひとつは今では広く知られている。「私達には似合っていた。神様。耐えることが。」2番目は「オリガ・ニコラエブナの手紙の若干の改作：「父は皆に伝えることを願っている。泣き、不平を言う必要は無い。悲しい日々が使わされた・・・」」簡単で単純。人生で初めて認識する：私も関与していると。この罪に。犯罪に。福音書から思い出す：法の無い所には犯罪は無い。全てが許される。ポルフィリイ・ペトロビッチとラスコリニコフ（* ドストエフスキーの小説「罪と罰」の主人公）は100年前にこれがわかっていた。しかし、我々は今日でもわかっていない。そして、決して・・・

私は悲嘆に陥る。（エセーニンよりましとは言えない。）我が党と政府は銃殺を行っている。チェーカー（ВЧК）の厳しさー国家政治保安部（ГПУ）はそれ以上ーは極度で、不明瞭。全てが偏執狂。国民は気が狂った。昨日の同志を数千人単位で殺す。（人殺しが正しい者となる。いとも単純である。）村を、銃で取り囲む。例外なく。コルホーズを作らなければならない。

簡単に短く話すように努めよう。全ては昔からわかっていた。ただ、パラドックスがあった。全く何も変わっていないという。ただ、他の形式や方法は幼稚なほど開けっぴろげである、これに対する恐怖は強く、乾いた血のように粘っこなっている。

突然、私の頭に、平凡な考えが浮かんだ。これはそう簡単なことではない。全然そのよ

うな事は簡単にはない。17年の10月以降、殺人者の世代が交代している。人民は沈黙している。即ち、耐える。即ち、責任をとる。我々全てが責任をとる。(？＊) 神が我々全員を許したとしても。

頭の中が、茫洋としてはっきりしない。真実と向き合う準備が、私には未だできていない。私は啞然とすると共に落胆した。私は真実を知っていない、真実を解き明かすこともできない・・・

頭ががががする。ゴミ溜のような所からもはや抜け出せないのではないかという、嫌な考えがつきまとっている。興味心から自分自身でそこに追い込んだのであるが。

しかし、この興味心はつまらないもの？ 理解したものは別人となる。果たしてそうではないだろうか？ 許しを神に請うことはできる・・・

1977年夏。私は再びスベルドロフスク市に。サーシャが私を出迎えた。私が約束を守り、戻ってきたことを、何か情報を掴んだことを、サーシャは喜んだ。

ダメであった。特別保管室は、私には何の情報の与えてはくれなかった。全く関係のないものが、私を助けることになった。私はマヤコフスキー(詩人＊)の小説のページをめくった。これは宿命！ 詩「皇帝」に出くわした。この詩は、政治色彩を持った、単純な詩では無かった。私にはわかった、皇帝とその家族が葬られている場所を、この詩人は、正確に人に教えているのが。

私は、大文字でこれらの単語を書く。犯行を止めることができなかった(あるいは希望していなかった。いろいろな理由で。) 彼ら(皇帝一家？＊)の家来のように、彼らに接する。

1927年、10月革命記念の年に、マヤコフスキーは、連邦を巡る旅行に着手した。巡る町の中に、スベルドロフスク市があった。スベルドロフスク市に到着すると、彼は秘密の埋葬地を教えてくれるように頼んだ。執行委員パラモノフは、詩人をコプチャコフスキー通りを乗せて行った。

イセチ川の向こうに、坑道と断崖、
イセチ川の向こうで、風が唸っていた、
執行委員会の御者が急に黙り、
9露里の所に立ち止まった。(1露里=約1km)

ここでは、マヤコフスキーの「階段」は利用しない。(＊？) 意味が無いから。

サーシャは肩をすぼめる：

「「ここで、杉に斧で手を加える。根元の樹皮に斧傷の目印。杉の根元の所に道があり、そこに、皇帝を隠した。」？ これは戯言だ。このタイガには、杉は生長してはいない。」

以上。袋小路入り。詩的な表現と処刑の実際の状況。残念ながら同じでは無い。

しかし、私は固執する。子供のように、愚かなように。狐のしっぽを捕まえるように、自分の発見に、私は固執した。サーシャは宣言者(著者のこと？＊)を見る：「ここでは、直ぐにはダメだ・・・」 しかし、彼は同意し、「時系列に従って」、我々は進むことにする。

汽車はシュバキシ駅(当時は待避駅であった。)に着く。コプチャコフスキー道路に出る。何時間もの間タイガを歩く。沢山の採掘場、穴(サーシャはこれを「ザコプシュカ」と呼ぶ)、あちこちに、松の大きな切り株。多分、この当たりで、「4人兄弟」(現地にあった鉱山の一つの名称＊)の鉱区が始まっていた？

多分。我々は太い松の下を猛然と掘返す。(と、突然、頭にひらめいた。マヤコフスキーは実際の松かトウヒを、「杉」に変えた？) シャベルが、堅い木の根にぶつかる。全て無駄。特に私には。

「何も無いことがわかったでしょう。」 サーシャが論じた。「レッペルが必要です。」

私はこの言葉「レッペル」がわからない。彼は説明をする、学校の先生のように。

「これは地質調査の概念です。基準点。当分ダメです。時間の無駄です。」

肩を落として町に戻る。座ってウオッカを飲む。サーシャに來客。彼の古い友人。中年で硬貨などの採集家。かつて、彼は地方新聞の製版工であった。それ以前には、実科学校で学んだ。

「シベリア軍団が、ここへ、この町に入ってきたとき、貴方はここに住んでいたんですか？」

「実科中学と中学の我々を、権力はチュバキシ(少し、訛りが入っている)に移送し、軍に編入するように命令があった。」

「なんと？」

「軍へ編入され、そして、出発。誰かが、タチヤナ・ニコラエブナのイニシャルの入ったスカーフを見つけました。それ以外何もなし。探したのだが。ユーロフスキーが隠した。」

うまく隠したので、誰も見つけていない。全く。」

私はがっかりした。第一に：当時のポリシヤビキは苦役や流刑になれており、秘密保持などに関する、その直感力は憲兵に劣る所は無かった。我々は何も見つけられないだろう。老人の言うとおりで・・・

「リマと話してみたら。」 突然、旧新聞記者であった老人がしゃべり出した。

「ユーロフスカヤと。」

私は死んだ人が、現在に生き返ったような驚きを受けた。我々の目の前に。

「ユーロ・・・ ユーロフスカヤ？」 私は問い直す。

「あー、彼らは皆無くなったのでは？」

「というのは・・・ 弟の、エブゲニイは本当に亡くなっている。が、彼女と、もう一人の兄弟であるアレクサンドルは存命中だ。」 彼は冷笑した。

「毎年、リマはここにやって来る。旧ポリシェビキの集会に。彼女は「投獄」されていた。ユーロフスキーはスターリンに手紙を書いた。組織上の混乱とか言っているが、罪の無い人が収容所で苦しんでいると。スターリンは返事をしなかった。わかる気がする。これは娘のことだ。返信は無かった。

さらに、また・・・

来年会うことにして、サーシャと別れた。リマ・ユーロフスカヤが探し出せることを願う。是非とも、必ず。

しかし、とても信じられない。

汽車で戻る車中、森の湿った臭い、永遠の静寂を感じず。奇妙なこと－汽車の車輪はゴトン、ゴトン・・・

* * *

内務省の本部。当直が、レニングラードと連絡を取る。5分後、リマ・ヤコブレブナ・ユーロフスカヤの住所が、私のポケットに収まる。バイバイ、モスクワ。

レニングラードは陰鬱である。私の好きだった女性がいなくなって久しい。最初の愛であった。結婚してしまった。彼女は遠くへ、遠くへ行ってしまった。通りは昔通り、言葉は覚えている、何故なのかを。

リマ・ヤコブレブナはスタチェック通りに住んでいる。今では町外れ。30年代に建てられた、労働者のための典型的なアパートである。地味なアパート、綺麗な階段、綺麗な部屋。部屋は別れているが、狭く、うるさい。近親者が多いためか。リマ・ヤコブレブナは大柄で、声は低音、気が強そうで、人をあざけるような女性であった。

「皇帝？ 何故、皇帝に興味があるの？ 指導部が決定し、父に委任し、父はそれを実行した。それが全て。」

「えーと、詳細は？」

「んー・・・ 何故貴方に？ 詳細について何か変わったことが？ 血の皇帝が、血の皇帝として亡くなったとか。 あ、そう、貴方は映画関係の人ね・・・ わかったわ。兄弟に電話をしてみよう。彼はあの銃殺に、きちがいじみた程熱中していた。興味を持ち、それに関するものを集めている。彼は私より、貴方の役に立つでしょう。」

彼女は長期間、ラーゲリに収容されていた。20年前に自由の身となった。以上の通りに、彼女は信念、理想、輝ける明日、その他を満たした。コムソモール（ВЛКСМ）大会に彼女は招待された。彼女は幹部会に入った。何も変わらなかった。何も・・・

多分、私は彼女の見方を間違っていた。1000万もの人が収容所に送られた。数百万人が生き延びた。全てがわかった数百万の人々が集まれば、再解釈が行われ、結果は違うものとなった。「党は我々の操舵手！」 永久に。多分、彼らは、特別保管室の山積みの書籍を、私と同じく、読まなかった人々なのであろう。

果たしてそうであったろうか？ たとえ読んだとしても、証拠を、嘘、中傷、濡れ衣と評価した。この大衆における確信が最大の障害であった。それは、再び重要なこととなる。

ゴルバチョフ時代、上院の選挙があった。私は、「青春」の主編集長である詩人アンドレイ・デメンチエフの代理人であった。選挙運動中、私は沢山の演説を行った。そのような演説の一つで、候補者アンドレイ・ドミトリエビッチを支持する中で、「我が党」

（党は未だ権力を持っていたし、未だ好きでもあった。）の血に汚れた経歴について、イパチュフの邸宅で実行された悪夢について話をした。皇帝につけた醜悪なあだ名「血の皇帝」についても。これは коммунист の汚いねつ造であると。私は証拠を示した。第一に：宮殿広場における、1月9日の銃殺に関しては、ペテルブルグ軍管区の司令官であるウラジミル。アレクサンドロビッチが責任を負っている。犠牲者数は、全ての教科書で、歴史家が主張している5000人ではなく、188人である。これで悲劇は小さいものだというわけでは無いが。

著名な作家、強制収容所の囚人、尊敬すべき人、知性ある人が、議会で席を立ち、手を振り上げ、あえぎ声で叫ぶ：「その通り、奴（皇帝？ *）は気が狂った！ 奴は何をや

ったか！ 奴にかまうのか！ 奴は何百回も血を流させている。奴について話すことなど全く必要はない！」

馴れの力、最も酷い力、これをレーニンさえ一度も口にはしていない。お婆さんやお爺さん、やや鈍いジャーナリストのような知性ある人の後ろを、ヒヨコのように親鳥の後をつけていく群衆がいたとしたら？ 革命を、ソビエト権力をユダヤ人がダメにすると確信し、スローガンを叫ぶ。矛盾・・・

しかし、他に非常に深刻なことが。私の映画「白馬」は、コルチャック将軍の悲劇、コルチャックの妻アンナ・チミレバ、ロシアの破滅、皇帝家族の滅亡、についてである。この映画を知人に見せた。彼らの年長の息子は、「ソ連邦の組織」に勤めている。少佐であり30歳。KГБの高等学校を卒業していた。1995年が過ぎた・・・

映画の最後のタイトルシーンを見終わったとき、少佐は何と言ったか？

チミレバは強制収容所に入れられていた、36年間？ しかし、彼女は正に人民の敵の妻であった。他のやり方は無かったのであろうか？

コルチャックは？ 彼は最大の敵であった。

選挙では少佐は共産党に投票をした。

ソ連邦の各組織等、ソ連軍参謀本部情報総局（ГРУ）内には、そのような軍人はどれだけいるのであろうか？ 参謀本部には？ 権力の末端機関には？

そのような問題に関して、ブロック（＊？）の一文が最適であると、あえて推定してみる：闇、闇、全くの闇。それらと戦うことを試みよ。それらは静かに、当分は穴の中にいるネズミのように。保証された自分の机に座り、待っている・・・。彼らはじっと待っている。これが、全ての人の不幸の元である。

少佐は話した：弾圧は無かった。これは敵の謀略である。権力に反抗したものだけを罰した。このような若者が権力の座につくならば、ロシアは花盛りとなる。本当に素晴らしい花が咲く。毒々しい血の・・・

そうはならないように、願いたい・・・

リマ・ヤコブレブナが電話をしてきた。明日、私に合ってくれる。そして、別れる。束の間の出会い、私は多くのことをわかった。彼女は相変わらずだ。

朝早く、墓地オフタに出かける、と約束してくれた。以前この墓地には良く来た。古い墓は非常に少なく。画家が葬られている墓が珍しい。かつて、彼は初めてレーニンを描いた。彼が幸せなほど、私は馬鹿になった：わからない、彼が何故幸せだったのか。

河岸沿いの、戦後に作られた建物。記憶に残っていることは少ない。寺院、板、割れたレンガ、あらゆるゴミ。

退役将軍アレクサンドル・ヤコブレビッチ・ユーロフスキーは快く私に合ってくれた：

「リャボフ？ 「革命家として生まれて」？ リマが私に電話をしてきて、私は会うことを承諾した。しかし、本当のところ、貴方は何が聞きたいの？」

「何か、あれ、銃殺後？」

私をじっと見つめる。かような話をする価値があるのか、多分決めかねていた。が、ためらいながら決意をし、目撃者達の証拠を読み上げる。ソコロフの本「皇帝一家殺害」から、既に私は全てを知っている。しかし、私は注意深く聞くことにし、録音もすることにした（許可を得て）。この録音テープは現在まで手元にある。

漸く彼は話し始めた：

「歴史家パクロフスキーのために、父は書いた。何がどうであったのか。これの複本を私は博物館に配った。革命の、デルジンスキーの。別の複本を君にあげよう。私は既に読み終わった。

背筋がぞっとした。虫などでは無い、象の群れが足で踏んだかのように。「19日の朝3時半頃、自動車が動かなくなった。停車した。坑道（ユーロフスキーはモスコフスキー街道にある遠方の坑道を予定している。そこに遺体を隠すことに決めていた。一著者）まで行けないので、焼いて葬る。」そして、さらに「遺体を穴に並べ、痕跡を消すため、顔、体全部に硫酸を注いだ。そのために悪臭が立ちこめた。穴はあまり深くなかった。土をかぶせ、小枝をばらまき、上には枕木を載せた。その上を、車で何往復かして固めた。穴の形跡は全くなくなった。秘密は完全に守られる。この埋葬地を、白軍は見つけられなかった。」

「遺体を乗せた自動車は、線路を横切った。」とユーロフスキーは述べている。記述されている。

第184番踏切の番人ヤコフ・ロブヒンの証言（ソコロフの本の202頁にそれが記載されている、）を、暗唱して覚えている：「あそこの窪地のところで、彼らの自動車がはまり込んだ。鉄道の柵の所から、枕木を持ち出し、窪地に橋のように張り渡した。」

・・・深く垂れ込めた、全く無音の霧の向こうに、・・・、何か精神病のような、なんと言ったらよいのか？ 自前の「ロマノフ・アルバム」に貼り付けてあった、白黒の写真を見る：原っぱ、端に森、中央に小灌木、そして、森の向こうに鉄道。私とサーシャはこ

の鉄道を横切った。ここが埋葬地、果たしてそうであろうか？ この森に？ ここに？
本当に？ 頭が回る・・・。

ユーロフスキーの声は、聞き取りにくい、並みの音質であった。が、私はまだ聞いてはいない―彼が何について― 私は急に聞く、彼はどのように話をするのかを・・・ 否、話した―出合いの時、悲しそうに、少し微笑みながら：「ユーロフスキーで生きていくのは大変であった。」

枕木で作った小さい橋・・・

それは足の下にあった。私たちはその場所を歩いたことがある！ かつて、ソコロフも歩いた。今ではこの橋は土に埋もれている！

ソコロフ検事は、この橋を写真に撮っていた。彼の本の76頁に下書き付きで差し込まれている：「橋、コプチャコフスキー道路に、ポリシェビキが投げ込んで作った橋。皇帝一家の遺体を鉱山に運んでいた貨物トラックが、ここで泥濘にはまった。」

私は専門家である。あれやこれやが私を教育したと思っている。教育の不足分を、私は実践で補った。私は確信している：幼稚園の先生が、私の立場に立ったとする。彼女は全てを理解しよう。私と同じように！

場所は、論理的に、反駁が無いほどに暴露された。

この場所を、確認することだけが残された。

取り調べや操作の仕事に縁遠い人々は、しばしば、彼らの視点から見た「恐るべき」質問をする：「ソコロフはそれなりの人物であった！ それなりの！ が、見つけれなかった。が、ほら、リャボフは、あつと言う、間に見つけた！ そんなことはあり得ない。」

1988年2月には、私は、政府委員会が関係した出版会議に参加した。私は質問にありきたりの返答した。会議終了後、私に、手厳しいジャーナリストが近づいてきた。

「えーと、説明をお願いします。ソコロフはどうだったのか・・・」

いつもそうだ・・・。実際において、説明が分かり易かったとしても。

私の視点からはすれば、次の通りである。ソコロフは輝ける世紀の人間であった。どんな詩が朗読されていたか・・・ どんな音楽が・・・ あの世紀初めに、どんな文化が形成されたか！

人を絞首刑にした。人を銃殺した。鎮圧をした。検閲をした。しかし、その後の結果と比較すると、これらはエイズに対しての鼻風邪のようなものであろう。ソコロフは、深く考えていなかった。彼は、人間というものは時折法を犯すが、それ以上では無い、と考えていた。ソコロフは何も知らなかった。考えつきもしなかった、死体の入った穴、ゾツとするような火葬場、強制収容所管理本部（Г У Л А Г）、強制収容所の有刺鉄線等について。彼は考えることができなかったのである。確信を持って拷問、死刑、収容所、死を体現するために、高い演壇上から美辞麗句を持って演説をする人間がいると言うことを。

ユーロフスキーが裸にした死体を、道路に投げ捨てたと、もし、誰かがソコロフに話したとしたら、ソコロフは卒倒したであろう。

全ては単純であった・・・

* * *

スベルドロフク市に住んでいるサーシャに、私は全てを書いて知らせた。「ユーロフスキーのメモ」を手紙に書く決心が、私にはつかなかった。我が国の国家安全部の偉大なる英知を、我々はどれだけ過大評価をしたことか。保安部は警戒を怠らなかった。誰かがこれに反論をする・・・

少し立ってから、サーシャから返事があった：「私たちは必要な物を全て見つけた」。事件の現場の記述が、特に彼が気になった。その場所は、ディテリフスが、ソコロフの複写本である自分の「ウラルにおける皇帝家族とロマノフ家の従者の殺害」で、示していた。ディテリフスは、非常に詳細に、非常に正確にこの場所を記述していた・・・。

しかし、大事なことが待ち構えていた。

「レニングラードーモスクワ」間の列車の中で、私はアレクサンドル・ヤコブレビッチ・ユーロフスキー（ユーロフスキーの息子 *）との話を思い出していた。彼は、ロベルト・ウルトンの英語の初版本を持っていた。ウルトンはアメリカの新聞「タイムス」の特派員であった。彼は、ソコロフの「4人兄弟」鉱山での探査に参加していた。そこで多くのことを見聞きした。

ユーロフスキーは悔しさから、私に本の中の場所を案内した。そこは、著者が容赦しない熱情を持って「恥ずべきユダヤ人殺人者の血の行為」について書いた場所であった。退役将軍には、大変なことであった。ユーロフスキーに宛てて、皇帝家族の貴金属に関する嫌疑について、彼は悔しさを持って訴えた。ヤコフ・ユーロフスキーを、貴金属の大半を横領したことで告発をした。私たちは、本質的に、何もわかってはいない。何が起きたの

かを。書類と目撃者の話は証言している、命令の実行は完遂され、銃撃チームは死体から剥ぎ取ったものを、モスクワへ、スベルドロフへ送ったことを。これらの物はどうなったのか？

気をつけておく必要がある、私が初めてユーロフスキーのメモを読んだとき、死体からの略奪をした事を読んだとき、私は唾然とした？ 酷いショックを受けた？ 何もわからない・・・何を言ってもむなしい言葉となる・・・これら労働青年達は学が低く、彼らは心から、ポリシェビキを支持していた。そういうわけで彼らは信じていた：彼らに「輝く新しい人生」をもたらすと。皆は宝石や金の価値は知っていた。***？*****。

80年間、何も変わらなかった。当時よりは、今日のほうが他人により厳しい。権力が知らないわけでは無い・・・

なんだか人間らしく。

シェロコフは国家保管局（Г о х р а н）の局長に相談をし、私とナゴルニイは出かけた。

国家保管局はガラスとコンクリート張りの現代建築であった。クツーゾフスキー大通りの端で、ボロネジの遠望が見える所に位置していた。私たちは約束の時間に到着した。我々を特別に選別した職員が出迎えた。我々はロビーに向かった。

その後、びっくりすることがあった。私とナゴルニイは頻繁にルビャンカに出入りし、チェキストや国境警備隊の映画を作成していた。K G B の建物の通行管理システムは非常に厳しかった。が、ここでは・・・

「カーペットの上に立って！」 守衛長－内務軍の曹長－が命令をした。

「私はシェロコフの相談役だ。」 ナゴルニイは威厳を持って発言し、証明書を差し伸べた。

軍曹は、黙って証明書の検査を始めた。その後、通行証、その後、証明書の写真と本人の顔との照合。長々とじっくりかけて。ナゴルニイはこれには慣れていなく、怒り始めた：

「軍曹、ここであえてするの？！ 見てわからない？」

「落ち着いて下さい、アレクセイ・ペトロビッチ・・・これは全員に対して行っている同じ一般の規律です！」 同僚はナゴルニイを説得することを試みた。

しかし、ナゴルニイは警備司令官を呼び出すように要求をした：

「君の所の軍曹は、行動の仕方ができていない。」

司令官は少し笑みを浮かべた：

「この規則は、財務大臣が作りました。そして、承認しました。我々は特別支隊です。理解して下さい・・・」

ナゴルニイは漸く先に進むことができた。が、今度は私がカーペットの上に立たされた。同じ事の繰り返し。

なんとも驚いたことだ。私はカーペットに立ったとき、私たちを出迎えた同僚は、じつとこの手続きを堪え忍んでいた。

15分後、我々は国家保管局局長を先頭に、建物の見学に行った。全員が何回か、例外なく、あのカーペットの上に立たされた。ナゴルニイは、誰も彼を侮辱するつもりがないということを知って、冷静になった。

シェロコフの手紙を指で回しながら、最高責任者－禿げて、50歳ぐらい－は漸く聞き取れる声で質問した：

「何？ シェロコフは我々の所に、どんな質問をしているのか？」

その当時の全てのソビエトの最高責任者達は、自分自身を最重要視していた。これは伝染病のようなものであった。自分はブレジネフの代理であり、引けを取るものではない、と。

「私たちは、ずっと以前に、ニコライ二世と彼の家族から没収した貴金属類を拝見したい。」

最高責任者は、私に冷たい視線を投げて：

「私は5代目の最高責任者だ。以前の4代目は、銃殺された。」

建物の新規さに驚く時間を与えてくれた後、彼は話を続けた。

「物的証拠は何も無い。我々の所には何も無い。可能性としては、かつてはあったのかもしれない。が、今では、我々が謎解きできるかも・・・行こう。さらに案内をしよう。」

面白い見学であった。

何も無く、大変なあのときには、ダイヤモンドなどお目にかかれる品物では無かった。白いガウンを着た女性。ガウンの上には・・・これは今ではありふれたこと。しかし、当時は・・・当時は1979年。

「君たちに、ガツンとくる注射を打って差し上げよう。」 最高責任者は冷酷な声で話した。

「行こう。」

どこかへ下っていく。警備所、検査。そして、漸く国家保管局の博物館に。

口まで、金、プラチナ、銀貨で満たされている袋（極ありふれた、砂糖を入れたもの）。宝石と金でできた作品。ショウウインドウの1つに、金製の懐中時計を見つけた。縁にはダイヤモンドの双頭の鷲。私は理解する：あそこから。イパチェフの家から。地下室から。。見つけた貴重品を、銃殺後直ぐに遺体から剥ぎ取った。これは皇帝の、これは誰の・・・

「えーと・・・このブローチは100カラットあるかな？」

最高責任者と同行者達は当惑したように見交わす：

「我々の所には、かつてこのようなものはなかった！」 最高責任者は心から叫んだ。もしあったとすれば、その場所は、ダイヤモンド財団の中だ。しかし、そこにはない、決して無かった！」

私は彼を信じる。ウラルのチェキストは、没収物をモスクワへ送り出した。しかし、モスクワでは・・・苦勞の種が尽きない。世界、あちこちの国や人民が「友情」の援助を渴望している。援助を渴望し、それを受ける。巨額の金は、世界中に労働の赤旗をたなびかせる・・・

アレクサンドル・ユーロフスキーの部屋や調度品には、明らかに「ダイヤモンド」に関係してそうも無かった。これは、私が証言する。むしろ、貧相な調度品であり、貧乏そうであった。押しつぶされたソファ、自作の本棚、その他、似たようなもの。

私は確信した：その通り、ヤコフ・ユーロフスキーは死刑執行人。レーニン主義者。彼は泥棒では無かった。

1978年の夏、私とアレクサンドル・ニコラエビッチ（アブドーン *）はエカテリンブルグ（市 *）ーコプチャキ（村 *）の経路を辿った。沢山写真を撮った。我々はガйна窪地に出た。タイガの中の小さな干上がった（ソコロフの探査時には干上がってはいなかった。）湖となっていた。ソコロフの隊列の車が、ここを通過したことは知っていた。この車の形跡を我々は見つけ出した。深く、密集した轍。右の轍と左の轍の間に、古木があった。それらの木は成長して、そのまま残された。これは驚くべき事であった。恐ろしい夢であった。私は気がついた。全くあり得ず、ミステリーな考え、感覚にあると：ほら、今、エンジン音が響き、曲がり角から車が出てくる。ソコロフの兵と労働者を乗せた。

ガйна窪地の端に、ホースの残片が見えた。底に沿って、手つかずの柵がある。斜面には中をくり抜いた丸太が転がっている。採金者の洗浄用の丸太。ソコロフの本中の写真と、寸分違う所は無い。我々は、比喩的では無く、文字通り、歴史に触れた。

その後、鉱山跡に行った。坑口跡は、サーシャ（アレクサンドルの愛称、アブドーンのこと *）がディテリフスの指示に従って発見した。ここにも、我々を啞然とさせるものが待っていた。

ベルフネ・イセトスキイ工場の労働者達が、ソコロフの手伝いをするために作り上げた丸太製の柵がそのまま残っていた。

彼ら400人あまりの労働者は、極ありふれた人たちであり、決して君主主義者ではなかった。ソコロフは彼らに助けを願い出た。彼は応じた。彼らの皇帝の痛みや不幸は、自身の痛みであり不幸であると、ロシア人民でそう考える人々は少なくは無かったからである。

未調査の区画（ソコロフができなかった箇所）を我々が掘り始めたとき、直ぐに遺物を見つけた：焦げた長靴の胴の一部分、下着用のボタン；鷲の文様の入った金製のボタン、非常に強く焦げている（レーニン冠称軍事政治アカデミーの学生である、ブラッド・ペソツキイがそれを見つけた。彼は非常に熱心に、至るときでも我々を援助してくれた。ゲンナジイ・ペトロビッチ・ワシリエフは大事な援助者であった。ニジニイ・タギラ出身の地質学者。アレクサンドル・ニコラエビッチ（＝アブドーン）の後押しで、我々のグループに入ってきた。人物は申し分ない。私の記憶にはそのように残っている。）現場の処理はなかなか終わらなかった。交通が不便であったので。あるとき、人気の無いコプチャキの道路上で、警官が私たちを止めた。立派な制服を着て、許可証を提示するように丁寧に問いかけてきた。どこへ何をしに行くのか問いかけてきた。

私は自分の許可証を提示した。

「広げて」 警官は言った。

このように、警察は全く機能していなかった。この警官は異常に丁寧で、言葉も少なかった・・・

「これは国家の安全に関することであり・・・」私はちょっと考えた。「内務局（УВД）における私の精力的な活躍に、スベルドロフスク市の者が気がつかないはずはなかった。私に、地図、図面、書類、を与えてくれた。かつてトボリスク市で没収した家族の宝石類、写真の入ったアルバムさえ見せてくれた。（アルバムは内務局に残っていた。仕事

はКГБに。これは1954年に、МВДが再びМВДとКГБに分割された後のことである。⁽¹⁾ つまり、内務局の誰かが私について、「戦友」と「兄」に対する私の関心について、友人などにしゃべった。割合早く謎解きはできた。3世代目の国家安全局はしっかりと働いていた。内務省（МВД）下で・・・」。

脚注（1） 1918年4月、トボリスクにおいて、皇帝の近侍であったテレンチイ・イワノビッチ・チェモドゥロフは、地方修道院ラヒラの修道女（俗名 マルファ・アンドレーブナ・ウジンチェバ）に皇帝家族の貴重品を引き渡した。前の権力の復帰まで、保管しておくことで。責任に驚いて、ウジンチェバは貴重品を、コルニロフ、漁業経営者（彼の所には何艘かの船と、漁網があった）に引き渡した。修道院にはコルニロフはよく知られていた。1933年に、ウジンチェバは、ウラルに関する合同国家政治保安部（ОГПУ）全権代表によって、逮捕された。この貴重品に関して証言をした。1933年当時において、没収した金銀その他の価値は、3270693ルーブルであった。小さい桶2つと、2つのガラス瓶に保管されていた：ダイヤモンドのブローチー100カラット、半月型ダイヤモンドー5個のダイヤモンドー70カラット；ダイヤモンドのヘアピンー1つのダイヤモンドは44カラット、2つー各々36カラット；ダイヤモンド付きの5つの冠；ダイヤモンド付きの勲一等アンドレイ勲章；長杖、首飾り、ヘアピンーダイヤモンド付き；勲章群ーダイヤモンド付きのエカテリナとアンドレイ；英国のエリザベータの絵ーダイヤモンドと真珠の縁取り付き；首飾り；大きなベリル宝石のついたダイヤモンドのブローチ。誰も100カラットの宝石など見たことはない。私がこれについて、モスクワ・クレムリンにあるダイヤモンド基金の人に話したとき、彼らはびっくりしたり、言葉を失った。一人が話をした：「たわげたことだ。ショーウィンドウの中には、最も大きい磨いていないダイヤがある。「シャー」という。ペルシア国王からの贈呈品だ。官使であったグリボエドフの狂信者達による非業の死に対しての。全てで87カラット。」が、それについては、我々は知っては居た。（1カラット＝0.2g。現在では、宝石店で販売されるダイヤモンドは、希に2カラットや3カラットがある。ー編集による追記）

警告の「電話」があった。「私の女房は高等党学校で働いている！」 サーシャは不安がった。彼の不安は十分に根拠があった。我々を容赦しないであろうーもし何かあれば・

探索を、もう1年、春まで延期することに決めた。サーシャはそれなりの器具類を集め、現地の再調査の準備をした。秋には、私は彼から手紙をもらった。サーシャは書いていた、自分の友人であるミハイル・カチュロフを仕事に参加させたいと、地質学と野外調査の専門家であった。カチュロフは知らなかった、サーシャが人を探していることを、何のためかを。サーシャは次のように彼に話をした：枕木を発見する必要がある。枕木はエカテリンブルグとコプチャキの間の道路にある。窪地のどこかに。

この窪地は、少し早く、夏に我々は確定をしていた。写真を撮った。皇帝の「埋葬地」は、我々の写真では明瞭であった。本当に明瞭に写っていた。窪地の様子などが明らかにそれを証明していた。私は書き入れさえしていた：「埋葬地はここだ！」

サーシャとミハイルは探査に出かけた。窪地（ポロセンコフ窪地と名付けた）で、ミハイル・カチュロフ（サーシャによれば、俊敏で猫のようとか）は松の木によじ登った。上から叫んだ：「枕木が見える！」 このようにして、ロマノフ一家の埋葬地を発見した。もちろん、未だ予想の段階だが。1979年春には、私たちはこの発見を現実とすることができると確信した。

私とブラッド・ペソツキイ（彼は素晴らしいカメラを持っていた）は、差し迫っている仕事のために、注意深く準備をした。危険は無いと考えたー2回目の時には、危険は無かった。カラーフィルムを用意し、ブラッドはカメラの調子を見た。写真は素晴らしいものであった。4月末に、我々はスベルドロフスク市に向かった。

・・・今回は、内務局は我々にホテル「大ウラル」を宛がってくれた。レーニン大通りに面し、近くに劇場がある。最も印象に残ったこと：全露中央執行委員会（ВЦИК）議長の記念碑。私は初めてその作品をじっと見つめ、その作品についてじっくりと考えてみた。スベルドロフは忙しい。もちろん党務に。そして、ロシアの仕事に。スベルドロフスク市の労働者達の教師、彼らの父、恐ろしいほど忙しい。それから次のような印象が、レーニンの親友が顔を下に向けて。彫刻家ハルラモフは非常に理解しがたいやり方で、モニュメントの基台（「青銅の騎士」の小さいコピー）とポートレートを合致させることに成功した。

次の日の早朝、最も大事なことが始まる。1 番電車に乗って、我々はシュバキシに向かった。注意を引かないようにするために、我々は別々に向かう。ウラル国家保安委員会（Y K F B）は我々にちょっかいを出さなかった。多分、我々は何ら問題が無い、と局長（キャピタン）が報告をした、が、我々はわからない。思い浮かべる一何故、無関心。結局、思想的な危険性のレベルはきわめて不明瞭に決められるということであろう：「愛好家グループが「対象物」の近くに行く。」しかし、そのような結論を出すために、国家保安局は知っていなければならなかった。この対象物が何処にあり、埋葬地が何処なのかを。

彼らはそれを知らなかった。それらを知ろうとする努力にも着手しなかった。

彼らには、これは仕事にはならなかった。

どうということなのか？ 現在まで、私の頭を悩ませている。

次のような説に可能性がありそうだ。彼らは待っていた。我々が探し出すまで。もし探し出したならばだが。9 年後、この説は 100% の理由付けをえた。私は考えて次のような結論に達した。「彼ら」は「墓」を見つけるのは不可能だと。というのは、正確なデータ、しかりした結論を出せるもの等は、彼らの所には無かったから。何故？ 全ては単純なことであった・・・内務局で、「たれ込み屋」は、彼らに何を教えたのか？ 馬鹿げたことを。

映画脚本作家であり、警察関係のシリーズ映画の作家（著者自分のこと *）はスベルドロフ市におけるロマノフ一家の滞在に興味がある。彼に前述したアルバムを見せた。彼を郷土史研究家に引き合わせた。彼らは暇がなくて、サーシャを呼び出し、「リャボフと一緒に、そこであなたは何を？」という質問をするなどしてられない、ということがわかった。

彼らの高度な視点からは、これらは全く些細なことであった。それ以上のものではなかった。町中で、「余りにも喋り過ぎた。」軍需企業は再び。外国のスパイ。リャボフは・・・

私はサブリン（？ *）海軍少佐ではない。

素朴で、感動的な人間であった・・・自分の船の水兵と士官に説明をした。ブレジネフは老いぼれであり、国は深い谷に落ちると。一緒に、レニングラードに行き、アブローラ号のそばに立ち、ラジオ放送をすることを決心した：祖国は危険な状態にある！

老人達は、サブリンの行動に、位相の不誠実なズレ、至聖所での暗殺の企てはないと見た：****？****。発達した社会主義において、もちろん、新しいデカブリスト（帝政時代の 12 月に反乱した将校達のこと *）は誰にも必要とされない。英国のある所で、王立海軍の、そのような将校を赦免し、当分の間、精神病院送りとした。

我々の所ではそうはいかない・・・

銃殺！

あきれた・・・

・・・しかし、我々は非合法活動をしている。サーシャの提案に従って、我々全員はソ連邦の地質学者の野外制服（サーシャが調達をした）を着た。「装備」は完全：シャベル、先の尖ったパイプ、大ハンマー、・・・

もし何かあったら。我々は地質学者であり、鉱物、土壌の「試料」を持っている。我々には、ゲンナジイ・ペトロビッチ・ワシリエフがいる。彼は、ニジネータギリスカヤ地質探査グループの副会長である。万事オッケーだ。覚えている限りでは、ワシリエフは公印入りの書類まで準備していた。

人と出会うことは、我々には最悪なことであった。

私たちは人と出会うことは無かった。なんとも不思議なことであった。朝から夜まで作業をした。2 日間連続して。土曜日にやって、次には日曜日がやって来た。我々の周りで、キノコ狩りの人たちが声を交わしていた。我々は・・・

掘った、大ハンマーでパイプを地面に打ち込んだ。誰も注意を向けるものはいなかった。まるで、誰かが我々を守っているようであった・・・

不思議だ。

サーシャとゲナ（＝ゲンナジイ *）の忠告に従って、我々は鋭く尖らせたパイプを打ち込んだ。1 m 半～2 m 間隔で、枕木の敷き詰められている箇所近づけながら。これらの枕木の敷物は、我々が、50 年間に貯まりに貯まった土壌の 20 cm 下に発見したものである。

地質学者は誰でも、そのようなパイプを、有用鉱物があると予想した場所に打ち込む。

（もちろん、彼らが特別な装置を持っていない場合であるが。しかし、本当であろうか？ ソ連邦は装置が貧弱な国であり、生産を内容とした歌は豊富である。）

パイプを打つ、打つ、打つ。サーシャは「ソーセージ」（パイプに詰まった土壌のサンプル *）を叩いて抜き出す。それは前のサンプルと違っていた。それは青みがかった黒色をしていた。触ってみると油っぽい。

「あった、これだ！」 私から声が思わず飛び出た。

「生体に対する硫酸の作用の痕跡だ！ 埋葬箇所はここだ、ここだ！」
サーシャとゲナはよく聞き取れない返事をした。普通の人間には理解するのは難しい、
全ての出来事が決して不条理劇では無いことを。
我々は次の週には、ここへ来ることに決める。

朝、電車が揺れる、全員が少し興奮している。そして・・・ 小雨なのか、それとも・

ブラッド・ペソツキイが私を酷く驚かした。彼はあくびをしながら、落ち着いて、自分の部屋から出てきた。彼には不安の欠片も無い。神経の太さは軍人並み・・・
ポロシェンコフ窪地に出る。静寂。透き通る朝の空気が文字通り、草木を洗っていた。穏やかで、美しい。そして、仕事を開始した。

3 m四方に、枕木を組みあげる。猛然と掘り始める。サーシャが低い声で話す。
「ここは本来の地質ではない、少し痛んでいる。かつて、誰かがかなり手を加えた・・・」
全員の顔に緊張がみなぎった。穴を掘り進むにつれて、緊張が増していく。女性らしき人が近くを通り過ぎる。我々のほうにごく普通の視線を投げかけながら、遠ざかって行った。我々のほうも、平静だ。今、私達は人を受け付けない。これは無意識の高慢さ。一時的な。これは無意識の信念。これは、神意・・・
土壌はだんだん黒くなる。突然の叫びが：
「見てみろ！ 鉄片だ！」

ブラッドは、手にスコップを持ちながら、発見物の当たりで、立ちすくんでいた。私は近づいていく。私は一見して全てを理解した。

「これは・・・骨盤の骨。」 言葉が喉に引っかかってしまったように、私はつぶやく。
全員の動きが止まった。同行者の一人の喉が痙攣する音がはっきりと聞こえた。私はそれが誰かは言わない。我々はそれほど付き合いは長くはない。私には名前を公開するような権利などはない。*****？*****。もし、検察庁の予審判事ウラジミル・ニコラエビッチ・ソロビエフが彼らを尋問したかった場合には。（？ ＊）

痙攣が吐き気を催す。全員の顔は、粉を振り掛けたようだ。慰みは終わった。無法のソビエト政府の非常な日常性が本番となる。

もちろん、法的視点から、我々は微塵も違反をしていない。後になって、多くの人々が我々（特に、私とサーシャ）を批判した。相当する機関の許可を得ずに、我々が墓地を掘返したと。法に則って罰するべきだと。酷い侮辱をしたと。

そうであろうか？

当時、レーニン主義者達：ユーロフスキー、ゴロシェキン、エルマコフ、ボイコフ（その他）は、殺した人の酷い遺体を、人の目から恥ずかしそうに隠した。これは酷い侮辱であった。しかし、ボリシェビキでは、この概念は大きく変えられた。裁判は聖なる仕事をなしている、と彼らは見なした。

法律は埋葬のために特別に作られ、柵で囲われた場所を、「埋葬地」と名付けている。墓地とも言う。

もちろん、例外はある。例えば、「塚」。その下には「パルチザン水兵ジェレズニャク眠る」 もし、臨時会議の敵がそこに眠っており、誰かがそれを掘返したいならば、否が応でも法律と関係することになる。

私は不信を持っている。塚は地図などには表示されていない。モスクワのバガンコフスキー墓地には、ジェレスヒャク（？ ＊）が眠っている。

その通り・・・ 全ては聖人アウグスチヌス（初期キリスト教会の最大の神父 ＊）式で：少し前には、我々は法律に順応なソビエト市民であった（これは過去）。今では、我々は、ルビャンカの視点からは、労働者政府の敵である。このやっかいな瞬間は、過去と未来の間にある目に見えない線である。

将来、何が我々を待っているのでしょうか？

「しっぽを巻いて逃げよう！ もたもたするな！」 しわがれ声が叫ぶ・・・

過去に名を残したとしても、それは今はもうなくなっている。*****
*****？*****
*****。

否。恐怖であった。ＫΓБはスパイを追いかけてはいなかった。これはＫΓБをいつも理性的ではなくしていた。ＫΓБは異説者達を、不同意者達を追い詰め、根絶した。*****？*****。

我々皆がビクビクとした。誰かが直接に驚きを見せた。少し子供っぽく。誰かが内心ぞっとした。かつて、アンナ・アンドレブナ・アフマトバは愛の予感で胸がぞっとした。その後、彼女は大衆の前でぞっとするようになった一袖の中の盾と矛に・・・

・・・我々は尻尾を巻かないし、逃げもしない。我々はさらに働き続ける

最初の骨が出てきた。骨は黒みがかった緑色をしていた。我々は謎解きをする。これは

硫酸の長い間の作用の痕跡である。ボイコフ同志がエカテリンブルグの薬店に請求して手に入れた硫酸である。

3個の頭蓋骨を引き出す。それらは大きく破壊されている。顔面には、銃床による殴打。「ユーロフスキーのメモ」を思い出す。「識別できないほど、硫酸で遺体を損壊する・・・」ユーロフスキー同志は、歴史家パクロフスキーに伝えなかった。損壊は硫酸だけでは無く、銃床による激しい殴打でも行ったことを。

我々は、自分の目でこのことを確認した。

一つの頭蓋骨に、弾丸の入射口。穴は後頭部の左側にある。出口の穴は大きく、方々に砕けて、右のこめかみに。大口径の弾丸、9 mmは下らない。これは明らかだ・・・

頭蓋骨の一つは子供のようである。

右の下顎に金のブリッジを持った、大きくしっかりとした頭蓋骨は、私の主張どおり、ニコライ二世のものと、我々は判断する。歯が悪いのは見た目でも明らかだった。皇帝は何時も歯痛に悩んでいた。トボリスク市で、皇帝はしばしば歯医者椅子に座り、治療を行った。そして、他の歯医者でも。固定概念、典型的な固定概念！ 金なので、つまり、皇帝。間違いは後で多く発見される・・・

時間が経過していく、危険が増大する。最初の女性は、我々の脇を無関心に通り過ぎて行った。

もし、今、誰かが通るならば、・・・

我々は急ぐ。

「ニコライ二世」の骨を、セロファンに包み、窪地の端に掘って埋める；「墓地」に特別に準備した、子孫への手紙の入ったカプセルを埋める。（我々はコムソモール中央委員会の青年の指向を貫く！ 白髪のコムソモール青年は同じようなカプセルを埋める。強い伝統である。）しかし、我々は完全に違う目的を追求している：もし、ソ連邦KGBの意思によって、埋葬地が消えたとしても一せめてこれが残ってくれたら・・・

決める：ニコライ二世の頭蓋骨は、時が来るまで、サーシャが自分の所に残す。2つの他の頭蓋骨（一つは明らかに女性。親知らずが、未だ歯茎から出きっていない。娘達のうちの一人である。二つ目は、多分子供のもの。もちろんこれはアレクセイ・ニコラエビッチ！ ああ、幼稚園、それ以上・・・）は、私がモスクワへ持ち帰る。そして、必ず、私がソ連邦内務省（МВД）の元同僚へ「出向く」（大臣に話すリスクをしていない。多分この点が、私の基本的な間違い。誰かが知っている・・・ この頭蓋骨にシェロコフが関わっている－多分、彼は我々側に立った？ 我々をしっかりと助けた？ たとえば、事前の鑑定？ さらに何か？ ああ、我々はこれらのことを全く気がつかない。）そして、しかるべき鑑定が行えるように努力する。

穴を埋める。晩春の水（これが我々の仕事の邪魔をした）は、直ぐに発掘場所を水浸しにする。我々はいらいらする一少なかったら・・・

夜中中、サーシャの家でウオッカを飲む。殺された家族のことに触れないようにし、「白軍の」歌を歌う。「神よ、皇帝を守れ！」 我々はほとんど歌詞を知らない。メロデーもいい加減だ。歌詞の2番目は、未熟な人間には難しい・・・

朝、私はタクシーを拾った。森で物を紛失したと運転手に伝えた。森でキノコ狩りをしているときに、時計を。窪地に向かった。端で車は止まった。そこまでは道路がある。私は「時計を探し」に出て行く。

発掘現場に近づく。何か奇妙だ・・・ 地面が見えない、全く見えない！ 一晩で、10 cmから15 cmも草が生長し、我々の仕事の後を覆い隠してしまっていた。頭に浮かんだ：「神は我々を守っている・・・ いや、我々ではない。彼らをだ・・・」

さらにもう一日。全く気分の乗らない一日が過ぎ去る。サーシャと話し合う。秋に、私がやって来て、ユーロフスキーがあつた窪地から余り離れていないところで焼却し、焼き場の下に直接遺物を埋めたはずの、二人の遺体を探し出す試みをする・・・

我々には疑念は無い、ユーロフスキーは真実を語っていたと言うことに。第一に、我々は埋葬地を見つけた。第二に、ユーロフスキーは人をだますための作文はしなかった。彼は、自身の報告を、パクロフスキーに口述した。歴史、政府のために。政府が興味があるならば。メモには、余計なことは書かれていない。自分の役割を持ち上げ、同志達の役割を低く評価する試みなどもない。例えば、貴金属を横領しようとして、坑口の近くにある遺体に飛びかかるハゲタカの群れを記述したところで、どれだけの価値があるか。

これは、「自分」のためだけに予定されていた容赦のない真実。これは「レーニン」式真実である。隠すことの無い。ユーロフスキーは、レーニンを決して処刑人、策士としてではないものとして、受け入れていた。20世紀のリシェリエ（* ?）として受け入れていた。ユーロフスキーは知らなかった、例えば、レーニンがポーランドの領域で、政治活動をどのように計画していたのかを。レーニンは「最も人間味溢れた人間」であつた。レーニンは真実を話した、そして他の人を教えた。

レーニン、赤軍をポーランドに、正常に、正規に派遣することを提案した。そこで、斬り殺し、焼き払い、その後、「強盗団の仕業」！

とはいえ、この文章を書いている、私は思った、ボスの考えを詳細に知っていたユーロフスキーは、レーニンに惜しめない拍手を送った。労働者階級には好都合だ、前進！

もし、ソロビエフ検事がユーロフスキーのメモを心理鑑定に処する必要があると判定するならば、世界は納得する。

副産物である疑い深い人。どのような歴史上の場面においても、そのような人物は不可避免的に存在し、何の反論もしない。

深夜に、どこかの草地を思い出す。さらに何か、不可解で、神秘的な。私は灌木のところに立っている。長年をかけて、灌木はこんもりと茂っている。窪地を取り囲んでいる森の外れを見た。私には思えた（多分、現実だったのかも）。私がゆっくりと茂みの中に隠れていく人の列の姿を見ている。先頭・・・ 皇帝？

ふとそんな気がしたような。

クニャゼフ将軍（内務局局長 *）が、電話付きの黒塗りの高級車ボルガを与えてくれた。170km先まで行く予定である。ニジニイ・タギルにあるデミドワ（皇帝一家の女中 *）の住居。車を飛ばす、天気良好。全く車の走っていない幹線道路の標識に、虹のマークが：ここはニジネ・タギリスキー金属コンビナート。町の空気は、保養地どころではない・・・

直ぐに、小雨、アスファルトは濡れ、光っている・・・

人、車道部分の端に、突然現れた。あたかも亡霊のように。空中から。彼はじっとしていたが、突然道路を横切りだした。

車の方は、高速で走っている。左に急ハンドルを切る余裕はない。が、運転手はそれをやる。しかし、ボルガは言うことを聞かない。速度が高すぎる。車は道路の右側に滑っていく・・・

車はひっくり返り、下へ飛んでいく。

運転手は、びっくりして周りを見回す。漸く言葉を口にする。「ごめん。」 私は回転数を数える：1回、2回、3回、・・・

数えるのを止める。薄暗がりが出る。残りの意識で感ずる：これが最後。全て終わり。現世の私の道はこれまで・・・

ボルガはひっくり返った。私の膝は、私の顔に押し込まれた。腹のところには、2つの頭蓋骨の入った鞆。揺れる音、轟音、そして静寂。道路にクラクションが鳴り響く。逆さになり斜面を下っていく人間が、日常では考えつかない状態で、物を見ているのがおかしい。ガラスが飛び去っていた。運転手の首から、血が流れていた。細い流れで。運転手は生きていた。私も。私には何の傷も見られなかった。これは奇跡だ！

後になって、検察庁の私の友人が、声を震わして語った：「これは、彼ら（* 銃殺された人たち）がおまえを助けたのだ！」 どう考えていいのか、私はわからない。

モスクワで、ブラッド・ペソツキイが、自分の友人で、将校であり、レーニン科学アカデミーの聴講生でもある人物に、撮影を終わったフィルムを現像することを願い出た。全部ではない。穴や頭蓋骨が写っていないフィルムを。このことは2ヶ月後のことであった。しかし、素晴らしくできあがりの良いカラー映画を見たとき、私には・・・ だめだ。私は確信した：これは私なくして行った。全てが余りにも真実らしくない。非現実的、ファンタスティック過ぎる。

以前の仕事のことで、友人に電話をする。彼は官庁に勤めており、自分の仕事の専門から、鑑定を行うことができる。詳細に、正確に。多分の「自分の仕事」のように。仕事に対する自負として。

町中で会う。彼は指で写真をいじくり回しながら、簡潔にまとめた私の話に黙って耳を傾ける。明るい灰色の目で見ると。

「心の中で想像してみよう。」 彼はゆっくりと語り始める。「私は同意したとし、研究所の法医学のところに問い合わせたとする。そこに、親友と言うほどの中ではないが知り合いがいる。何と私は説明をする？ どんな伝説を私が述べる？ 君は既にそれを作文したのか？」

私は沈黙をする。私は突然に理解した、私が馬鹿だったことを。知性ある人間は、私の馬鹿なような提案に対して、かような反応するのは当然である。丁寧に、かつ、しっかりと。

「内務省は機能している。忘れていた？ 捕らえられる。一巻の終わり。しかし、何のために？ 君は多分君主制主義者になった。私は党员であったし、今も党员である。私は何も見なかったし、聞かなかった。君は私に問い合わせもしなかった。」

大失敗。

この人物は、大分前に亡くなった。しかし、私は彼の名を挙げない。事情がわかってい

るからである。彼は最後の時まで、自分の信念を変えなかった。もし、彼の若干の誤りの基礎が見つかってしまったとしたら。彼にとっては不愉快であろう。あの世でさえ。

私は頭蓋骨から、毛髪の一束を抜いた。不思議なことに一部分が残っていたのである。私の手元には、埋葬地の底から掘り出した土壌の試料がある。これは、本質的に、ロマノフ一家と彼らの従者達の屍である。鉱山跡のところの原っぱから、いろいろな遺物を採集している。焼けた長靴の胴、肌着用の螺鈿のボタン、金メッキの半分焼けた双頭の鷲付きのボタン。どの遺物が誰の物なのか、私にはわからない。しかし、これら遺物は何の意味があるのだろうか？ これらを、聖ガン（宗教における聖なる器の一つ *）に納める。蓋の反対側に、「埋葬地」のカラー写真と文章を貼り付ける。文章はタイプしたものである。この文章が全てを説明している。この聖なる発見物を、時期が来るまで保存する必要があるが、私にはある。この時、私は全く考えていなかった。その時がいつやって来るのか。

* * *

私の家で、頭蓋骨を、これ以上保管しているのは、非道徳的で、かつ、危険であることがわかった。サーシャに手紙を書いたら、同意してくれた。話がまとまる、1980年（1年後）に、全てを現地に戻すことに。モスクワにいる私には、特殊なプラスチック材料が必要となる。それを利用して、3つの頭蓋骨の複製を作るのである。サーシャは石膏を自分自身で確保する。スベルドロフク市で石膏を探し出すことを約束する。

プラスチックを探すのに、結構時間がかかった。モスクワ川河岸にある旧修道院にいる彫刻家達に、知人等を通じて、漸くたどり着いた。彼らは少し驚いたが、私にプラスチックの入った袋を幾つか供給してくれた。

私の家には、正教会の8つの先端のある銅製の十字架がある。この十字架は、昔の映画関係の出張で、コストロム（? *）へ行ったときに手に入れたものである。彫刻刀で、十字架の後ろ側に、福音書の言葉を刻む。「最期まで受難する者は救われる。」切るわけにはいかない。思いもよらず、書き込みを損なうことがないようにするため、それを最小限の大きさに短縮する。この十字架を、遺物を元に戻すときに、大地に埋めることにする。戻さざるにはいられない。この考えは、だんだんと強くなっていく。

我々は皇帝家族の遺骸を発見したことに、私は何の疑念も抱かなかった。時折、深夜に私は目が覚める、バルコニーに出る。静寂、時折、レーニン大通りを時代遅れの車が通り過ぎる。ヘッドライトの白い光、尾灯の赤い光。車が急に増えだした時、光景は魅惑し始める。

・・・奇妙な考えが、私の頭に浮かんでくる。彼ら？ もちろん、きっとそうに違いない。しかし、かつて私は学んだ：犯人の無罪を示せ。もし彼に本当に罪があるならば、証拠は御影石のように揺るぎないものである。

犯罪世界と戦っている人の中のごく少数が、この視点を分かち合っていよう。罪があることを適当に証明する。これが全て。簡単で、明らかで、何の企てもない。

しかし、今は、出来事は普通ではない。もし、我々が考え違いをしているならば、もし、直接及び間接証拠—そう自分で想像した—が役立たずならば、厄介な仕事や極めて嫌な事以外、この歴史から抜けられない。

私は反対のことを考え始める。仮定して見よう。ロマノフ一家の抹殺命令が、モスクワから来たと、ユーロフスキーは書いている。そして、遠回りの経路を辿った—ペルミ市から。これは真実のように思われる。戦争が継続中で、電信の通信状況は悪かった。

そして、直ぐに：ユーロフスキーは、デマで惑わす。モスクワから何の命令もなかった。ウラルソビエトがロマノフ一家を片づけることを決定した。ユーロフスキーはそのような決定に反対を貫く気はなかった。決定は決定であった。我々は実行するだけ。

よろしい。ここには、特別な明瞭さはない。ウラルソビエトがモスクワと交わした書簡は、濡れた手の中で滑る魚を思わせる：モスクワに嫌疑をかけることを欲する者は、わずかな疑念の無い状態で、嫌疑をかける。モスクワを庇いたい者は、庇う。

つまり、殺した。誰の命令かは重要なことではない。事実には正に事実である。

さらに何があったのか？

ユーロフスキーと彼の同志達は、犯罪行為は別々ながら、一つの言葉を証言している。殺した。窪地に運んでいった。硫酸を浴びせ、道路の下に埋めた。

騒動を持ち込み、確信を粉碎して、誰がこれに反論をするであろうか？

ニコライ・アレクセイビッチ・ソコロフ。彼は確信している。鉱山地区に被害者達を運び、遺体を損壊し、焼却した。皇帝一家を、他の誰も、他のどこへも運ばなかった。

結論は非常に深刻である。優秀な検事で、正直な人間である彼は、嘘をつくはずがない。彼には嘘をつく必要がない。彼は確信したことについて書いている：

検事ソコロフはどんな結論に達したのか？

検事は、鉱山のところで、ボリシェビキの焚き火の跡の中に、人骨らしい（これについ

てはソコロフは直接には書いていない) 焼かれた幾つかの骨片を発見した。そこにはアイコンもあった。銃剣で切られた痕跡のあるアイコンも、ソコロフは見つけた。結論を出した。遺体を着物を着た状態で切りつけた。遺体を切り離し、焼いた。

これらの証拠に関連したソコロフの正しさの確実性は絶対的なものではないが、反駁しがたい。

何故か？

第一に、焦げた骨を、ソコロフは鑑定しなかった、否、できなかった。鑑定無しには、どんな法学者、刑法学者もソコロフの出した結論以上の事はできない。

第二に、アイコンに付いていた銃剣の打撃。これは私の目ではそれ以外の何物の跡ではない。

皇女達、皇后の遺体には、多分、デミドワにも、宝石があった。きわめて立派で、きわめて高品質の宝石。遺体の搬送中に、それなりの宝石を剥ぎ取った、手当たり次第ではなく。鉱山のところの焚き火で、シェレメチエフシキイ(コプチャキ村の売り子)が見つけた、10カラットのダイヤモンドが、このことを揺るぎなく証明している。

全体として、殺した遺体にあった宝石類はどうなったのか、という疑いが当然ある。これに関して、子供達(皇帝夫婦の*)の乳母であったアレクサンドラ・テグレバヤの証言がある。「・・・宝石は2つの胴着の間に隠しました。」

微妙な違い。遺体を坑道に落とす前に、遺体を丸裸にした。

処刑人達の前には、着物の山があった。

私には想像することもできない。殺人者達、即ち、強盗のプロ達が着衣を触り回り、それに入っていた物全てを注意深く取りだした様子を。

想像もできない！ この私の不信には、説明がある。第一に、一味は恐怖で震えていた。そのような状況では、経験者でも物怖じする。どう考えても、彼らは初心者であった。彼らは恐れをなしていた！

さらに、銃声が鳴り響いていた。シベリア軍団とチェコ軍隊は、町の近くまで進撃してきていた！ 時間的余裕など無かった！ ナイフで解き、ナイフで切って、ナイフで切断して・・・

証拠：後になって、鉱山のところの広場で、ソコロフは発見した。ダイヤモンドの欠片、ラスプーチンからの贈り物であった娘達のビーズに付いていたトパーズの欠片。その他諸々を。銃剣が触れた痕跡があるものもあった。

ソコロフは次のように結論をした。遺体が見つからないようにするために、遺体を切断したと。そして断定した。切断し、焼却したと。

打撃の跡のあるアイコン(付録にイラスト付きで、ソコロフは示している)。このようなアイコンは首にかけてはいない。これらのアイコンはラスプーチンに対する価値ある思い出の品である。皇帝家族は服につけていた。アイコン全ては弾丸と銃剣の打撃に晒された。

これが全て・・・

もちろん、これは一つの説である。検事ソコロフが述べていることより、そんなに悪いものではない。

しかし、他の説がある。

ロマノフ一家は銃殺されたのか？

モスクワとエカテリンブルグの間で交わされた、皇帝一家の死に関する書類全ては、狡猾なデマである。殺人を模倣して行われたカモフラージュである、という説がある。殺人は元々なかった？

この説を考察してみよう。

生きているロマノフ一家は、ウラルソビエトには、全く必要がなかった。何故？

マヤコフスキーの言葉に従えば、正に「ハイエナとオオカミの中で生きている、鳥かごの中の如く、生きているものには、極小さな意味が、死んだものには、更に小さな意味が。我々はボリシェビキの歴史の向きを変えた。古い物は永遠に放逐せよ！ 共産主義者そして人間が、まさか血に飢えているとは！」

これは詩「皇帝」の最後の部分である。最初の異文。この詩を禁止した。その時、彼は神聖な物を書き上げた。「・・・王冠を手にすることができる、しかし、鉱山と一緒に！」

ウラルソビエトの人間性と実利主義の評価を、私は読者に委ねる。ウラルソビエトはフランソワ・ラブレー(？*)かエラズム・ロッテルダムスキー(？*)の庇護下で活動していたと思うこともできるようだが、私は知らない。

モスクワには、困難なことが。ロマノフ一族を生かしておく必要が、モスクワにはあった。例えば、ドイツ皇帝カイゼルに彼らを金と交換で引き渡す。ブレスト和平に関する賠償金の減額のためである。

しかし、7月6日、ボリシェビキの熱烈な同伴者で左派社会革命党員ヤコフ・ブリュムキンがドイツ大使ミルバフをモスクワで殺害した。そのようなことで、交換の案は自滅し

た。

最期には、最も「推理的」な説、最も引きつける説とは・・・

皆と同じように、私も推理小説を読む。コナン・ドイルからユリアン・セメノフまで。「もし、空想したらどうなるだろう？ 私はありそうもないことを考える。ロマノフ一家を殺害した。しかし：頭の切れるチェキストであるユーロフスキーは、シベリア軍団とチェコ軍団が遺体を捜すであろうと考え、捜査を逸らす方法を考え出した。本物のロマノフ一家を殺害し、まず、鉱山（エカテリンブルグ市の付近には沢山あった。ユーロフスキーも書いている。）の奥深いところに投棄した。しかし、替え玉の。特別に選び出した11人を、ロマノフ一家と同じ方法で殺害した、という説である。そして・・・」

その後、なるようになった。

ユーロフスキーはメモで、仕事の中身を逸らし続け、トリック使い続けていた。実行した仕事を白状するのは恥ずかしかったのか？

私は知らない・・・

ユーロフスキーはそのような仕事を行ったことを、当時の他のチェキスト達と同じように、彼も自分の作戦の巧みさを自慢をした。これについてよく話をした。例えば、直属上官に必ず報告をした。

何故、隠した？

さらに。私は思う。シベリア住民から偽ロマノフ一家を見つけ出す。これを彼らはあつという間にやった。体重、背丈、体型、等の似た人を選び出す。これは、当時の全能の権力では、可能性の限界にある。いや、今日における国家保安局、スパイ、その他の機関においても。

当時は・・・

シベリア軍団は町に近づいており、時間がない。一刻の猶予もない。でっち上げをする？ まずダメだろう・・・

多分、もっと遅い段階ならば？ もっと早かったならば？

自分の本性が、馬鹿ではなく、理解があり、思慮深い人間であると、ユーロフスキーは曝け出している。しかし、彼は天才ではない。その通り。何故か？ 複雑さ？

もちろん、鑑定だけが確信を与えることができる。鑑定は何時？ ソビエト権力時に？ この権力は、永久に？

私の疑念は全くの抽象的概念を帯びてきた。

前日の説の明瞭な弱さの中で、私を確信させている、唯一のことは、私に常に話していることである。どんな実行の組み合わせ、「遊び」レベルのどんな行動も、複雑なことはなく、常に単純明快でなければならないということである。というのは、複雑さはどんな仕事も崩れさせる。

卓越したチェキスト達が確信してやったこと。時折、この問題を判断する羽目に私はなった。

手の込んだ複雑さーロングランを当て込んだ映画のためにはある。そこでは、常に、全てが得られる、というのは、作家と監督の意思が保証されるために。しかし、人生では・・・

人生には修正がある。戯言は許さない。

私が思うには、ユーロフスキーはこのことを良く理解していた。

・・・深夜に、車を見つめた。時折、棚に視線を送りながら。その棚には、2個の頭蓋骨があった。これは・・・ これはよくない。私はこれをわかってはいた・・・

1979年秋、私はスベルドロフク市に出向いた。サーシャと一緒に、ポロシェンコフ窪地をぶらつくためであった。推量してみる。ユーロフスキーは何処に焚き火をもうけ、そして2つの遺体を焼いたか？ 我々は理解している。彼は全てを埋葬するように命令をした。焚き火に残ったものも全て。その焚き火の下に。

一日中、我々は、ポロシェンコフ窪地をシャベルで掘り返した。我々は自分から行動した。次のような考えの中で。ほら、道路に穴が。穴が見つかった。そこから遠くないところで焚き火が燃えた。そこで、2つの遺体が赤々と燃えた。ここで？ それとも、ここで？ それとも・・・

我々は地層を剥ぎ取っていく。その下に、古い焚き火による炭が。さらに、焦げたものが。が、肝心なものはない・・・ シャベルでは、ここでは仕事にならないことがわかり、次の機会まで、この企ては先送りとすることにした。私は戻った。

翌年、さらにもう一人の共同参加者が我々の元に現れた。政府委員会の人物で、皇帝家族の悲劇に非常な衝撃を受けていた、アリック・エセーニン。大柄で、低音の声、おとなしい。彼は、元の場所への遺物の返還に参加することに直ぐ同意した。彼は私に何の疑念も引き起こさなかった。国家保安局の回し者の誠意ー最も手が込み、巧みなーこの「誠意」

は、いつも、あるいは、軽く言えば、その通りなのだが。注意深い人間には疑念を引き起こす。

アリックの誠意は、疑惑外であった。サーシャは彼の参加に同意した。浅い縦坑を地面に掘ることを素早くする必要があった。短い夏の夜に。

大夫暗い中に、場所に到着した。枕木を持ち上げる。短い縦坑を掘った。狭く、幅は人が立ってられるほど。そして穴。アリックは手に懐中電灯を持ち、そこに最初に入っていく。そして直ぐに、下から我々に叫び声を出した。

「ここ・・・ 何か、頭蓋骨が・・・。後頭部を私に向けている。多分、ここに骸骨全体がある。わからないが・・・⁽¹⁾」

アリックが這い出てきて、私が潜った。横になった。湿っぽく、何か気味が悪い。なんともいえない臭いが、この丸屋根－実質的に高さ30cmのアーチからしていた。そして、頭蓋骨。私はそれを拾い上げ、上に引っ張り出した。

明らかに女性の頭蓋骨。私のつたない知識でも、これはわかった。突き出した後頭部から引き出す。前歯は完全、懐中電灯下で、金属色に見えた。

「これは、アンナ・デミドワ。」 私は断言した。女中。歯は高価ではない。後頭部の下に、櫛を見つけた。曲がって、余り大きく。頭蓋骨の下にあったように、私には思われた。何故、頭蓋骨は硫酸で焼かれていないのか？ 私にはわかった。車から、仰向けに投げ捨てた。頭は、地面にぴったりと後頭部を付けることになったからであろう。

我々は頭蓋骨を元の場所に戻した。3つの頭蓋骨全てをセロファンで包み、持参した私の十字架と一緒に箱に入れた。先に掘り出し、サーシャが保管していた頭蓋骨の破片も、セロファンで包み箱に入れた。上に丸石を置いた。他の者達に見つけにくくするためである。土をかけた。故人の冥福を祈った。

脚注（1）アブドーンが掘りに入ると、私の日記には記載してあったが、思い出すと、これはエセニンであった。（著者の注釈）

さらに、我々は、私の持参したプラスチックを溶かし、2つの頭蓋骨の模型を作った：サーシャが保管し、私がニコライ二世のものと見なしている頭蓋骨と、小さい頭蓋骨。これはアレクセイ・ニコラエビッチであると、我々は考えた。

模型は私とサーシャのところに残した。この仕事を、チュソバヤ河畔にあったサーシャの郊外の家で行った。

これらは、1980年のことであった。

皇帝一家の予想された埋葬地の発掘日誌より 1979年5月-1980年7月

1979年5月31日。皇帝家族埋葬地としての、証拠らしいものを見つけ出すために、第184番踏切の所の凹部で作業することにした。

持ち物：斧、のこぎり、大ハンマー、シャベル2挺、ドリル、パイプ用レンチ、ポリエチレン袋、巻き尺、標本用袋、袋、食料、レベル用紙、描画用紙、カメラ2台、鉛筆、リックザック、ミトン手袋。

作業計画

1. 場所の全体撮影—番号1の区域、下調べ。
2. 探査線に沿っての掘削—割目1。
3. 物証の隠されている場所を見つけること。
4. 時間に余裕のあるとき—番号2の区域へ行く—廃坑。

朝7時、快晴。ブラジスラフ・ペソツキーが、各場所を詳細に撮影をした。写真には、イパチェフ邸跡、その庭園、パポフ屋敷、ボズネセンスキー教会、ハリトノフ屋敷が含まれている。

8時45分、郊外電車でシュバキッシュまで行く。快晴、温度+20度。予定の場所に到着し、リックザックを下ろす。

枕木の下に5本の溝をうがう。溝の間隔は70 cm。溝のうちの2つにドリルをうがう。重油の臭いのある黒い層が出てきた。これは求めていたものであった。ロマノフ家と彼らの従僕達の遺物。この場所に9人、アレクセイとデミドバ以外の。遺物全てに、灯油と硫酸の作用が確認できた。

場所の周りをよく観察した。白樺の木の下には、さび付いた鉄製バケツ、ハウロウ引きの青色の急須。

草や、茂みや水に埋もれている旧道に沿って、肉眼では見えないが、枕木が横たわっている。探針棒で感知できる。手で掘り始めた。土の質が異なってきた。黒色で燃料の臭いがする。明らかであった。何かを燃やしたものであることが。この箇所でのドリルの差し込みは簡単でもあった。

1979年6月1日。6時起床。アブドーンンのところで朝食。ゲンナジイ・ペトロビッチがやって来た。地理探査の許可証を彼が持っている。彼が我々の中の代表者であり、探査の指導者でもある。アブドーンンは次席、私は科学分野の次席、ブラジスラフ・アナトリエビッチは写真代表、保安と雑用の代表者も兼ねている。

現地にたどり着き、埋葬地と予想している場所の発掘を開始した。苔や草の層、大地の表層をはぎ取ると、枕木が現れた。

快晴、気温20度。区域番号1の場所に手をつける前に、第184番踏切の方から2枚の写真を撮る。枕木を取り払い洗浄後に、第184番踏切の方から、もう一度区域番号1の全体を撮影。

枕木の第一層を取り払うと、その下に、道に沿った方向に並べられた、枕木の第2層が見つかった。木の枝、木の幹、石、レンガも積み重なっている。枕木の第3層に突き当たった。ここでは、道に沿って小川が流れている。小川は、求めている物証をその下に沈めている。深さ60 cmまで掘り返した。深いところから気体がわき上がり、水が泡立っている。

深さ80 cmのところで、最初の発見物。黒い色をした股関節の一部分、一見して、強力な化学反応で処理されたものと判断する。

発見物は幾つかの椎骨。シャベルでの作業を中止。湿った粘土。粘土は流れており、その中で、何かを見つけ出すのは困難。手に沿って水が流れる。ゲンナジイ・ペトロビッチはシャベル、錆びたバケツ、道で見つけた深皿で水を掻き出すが。

骨盤を見つけた。枕木の下、黄色く汚れた水の下に、手の骨。湿った粘土の層をシャベルで取り払う。直ぐに水で一杯となる。

私は水の中で手探りをする。肋骨、手の小骨を探り当てた。水をくみ出そうと試みたが、無駄であった。

着物の欠片は全く見つけられなかった。掘返した区域全体で、骨が見つかった。泥水表面全体に、泡が立ち上がっていた。

ブラジスラフが、丸い穴の開いた厚さ0.5 cmの陶器の破片を見つけた。これは、医療用の陶器製容器の一部である。化学薬品入れの。多分それには硫酸が入っていた。

水中に長い間手を沈め、掘返し、骨片を取り出していたブラジスラフが、突然頭蓋骨を見つけたと言った。歯の付いたあご骨を引き出した。前歯2本がなかった。最後に、黒く亜麻色の髪の毛の残物のこびりついている頭蓋骨を引き出した。頭蓋骨を洗浄する。頭蓋骨内部に、焼かれた痕跡を確認した。脳もあった。脳は色と形を保っていた。頭蓋骨などの写真を撮った。掘削を継続する。

遺体は重ねて置かれたことがわかった。椎骨を引き出した。アレクサンドル・ニコラエビッチとゲンナジイ・ペトロビッチはさらに6本の金歯（ブリッジと2つの王冠）の付いた頭蓋骨を見つけた。

撮影を行う。再び泥の中での探索。ブラジスラフが、また、頭蓋骨を引き出した。（そう言えば、彼は考古学者であった。）

川の中で洗浄をする。頭蓋骨の後頭部に、弾丸による丸い穴がある。右側頭部には、2等辺三角形の断面をした銃剣によると思われる穴。弾丸による穴の対抗部分には、ほかの穴が。弾丸が通り抜けた穴。

頭蓋骨は、小骨などと一緒に見つっている。大きさは小さい（明らかに、娘達の誰かの）・・・

3つの頭蓋骨と一緒に撮影。集めた小骨と一緒に。その後2つの頭蓋骨。小さいのと穴の開いたものを私が受け取った。金歯の付いた頭蓋骨は、アレクサンドル・ニコラエビッチ・アブドーンに引き渡した。それ以外の骨類の入った箱を、ゲンナジイ・ペトロビッチが持った。

その後、墓地を暴いたことの証書を全員で作成し、参加者全員が署名をした。証書は鉄製の缶に収めた。

1979年6月2日。廃坑。天候は激変した。温度+5度。

粘土質の広場を少し掘りきると、金属片が幾つか見つかった。多分昔の探査の時のものであろう。ワイヤー片、留め金片、骨の破片。

廃坑から半径30 m以上にわたって、各所に、石炭に混じって、カラフルに着色している陶製容器片、いろいろな大きさのガラス片が見つかった。そのうちの一つは、入念に研磨されていた。

1979年9月6日~10日における仕事の計画。

1. 秘密の埋葬地の位置を、確定した目標物から測地すること。日記に記すること。

2. 最終物を収めたカプセルを、塩化ビニールから防水布、木、他の物に入れ替えること。カビだらけになっていた！！

3. デミドワとアレクセイの埋葬地を探し出す試みをする。地面を掘り返したが、焚き火の後を見つめることができなかった。

4. 廃坑のところで、注意深く探査を継続すること。物証の採集。特に、予防準備をして、縦坑に降りてみる。

5. 町で、ベゴバヤ、6番建物を視察すること。ユーロフスキーの家があった所である。

1979年9月6日~9日。私、アブドーン、ワシリエフ（8日と9日に参加）達で、デミドワとアレクセイの秘密の埋葬地の探査を実行した。他のロマノフ一家と彼らの従者達の秘密の埋葬地の状況の記録も行った。この他に、ガニナ窪地を、ユーロフスキーと彼の部下達、そして、ソコロフと彼の部下達が訪れたという物証の収集に努力をした。

6日と8日は窪地の探査、7日と9日は廃坑の探査。

1. 全ての仕事は7月遅くから8月に行う必要があった。それ以前では、雨が多く、かつ蚊がもの凄い。

2. 窪地と埋葬地には何の変化も見られない、そのままだ。1979年6月の埋葬地の暴露の痕跡は認められない。土地は平坦で、草木が生い茂り、掘った後に植えておいた低灌木は良く根付いていた。1本の枕木は北方向を向き、2本の枕木は南方向に転がっていた。

2日間、地面に長さ1.5 m~2.5 m、深さ30 cmの溝を切り出し、デミドワとアレクセイの埋葬箇所のはずである焚き火の跡を探した。一つの溝のところで、大きな焚き火を見つけた。南東方向、森の端に、「大きさ2平方メートル」。

1980年7月6日。

1. ニコライ二世のものと思われる頭蓋骨。下あご骨だけが残っている。あご骨の右側に一本の永久歯が残っている。一番奥の。右側の歯の根元に、大きさ2 mm×4 mmの銀の充填物がある。左側には、5本の歯に金製ブリッジがある。見るからに高品位の。臼歯と犬歯にブリッジがある。犬歯の金は左側から上の方に穴が開いている。

2. アレクセイか、アナシタシアのものと思われる頭蓋骨。下あごには、奥歯から前に数えるならば、左側に5本、右側に4本の歯が残っている。左の永久歯には、セメントの詰め物があり、右側の第2永久歯には、銀の詰め物がある。

3. タチャーナ・ニコラーエブナのものと思われる頭蓋骨。

上顎と下顎の部分が良く残っている。前上の2本以外の歯が全て残っている。下の奥歯に銀製の詰め物がある。

残りの2つの頭蓋骨には、下の右にも左にも、親知らずは伸びていない。

1980年7月6日の夕方、19時近く。私たちが掘り出した遺物の再埋葬のために、特別の3つの箱の準備をした。赤い浸染剤を塗り、上にラッカーを塗った板を、ゲーナ・ワシリエフが調達した。

箱は、長方形に叩き接合した。内部に、遺物を納めた（塩化ビニールの包みに入れて）。

1. ニコライ二世（？）の頭蓋骨、右側の金製ブリッジ。

2. タチャーナ・ニコラーエブナ（？）の頭蓋骨。

3. アレクセイ・ニコラエビッチ（？）かアナスタシア・ニコラエブナ（？）の頭蓋骨。

同じ包みの中に以下のものを入れた。

1. アブドーニンが持っていた骨片（ニコライの頭蓋骨を除く）。

2. ワシリエフが持っていた骨片。

3. 松林の下にあった骨片。

4. アルコールの入った2本の瓶の中に入れた。2つの頭蓋骨から外れた、私が持っていた歯、埋葬時拾い集め、誰のかわからない歯。これら以外に、細々とした骨片など。

上述した全てを箱に収めた。上に骨。磔り付けとなったキリストが付いている銅製の十字架をおいた。十字架の裏側に銘を記した。上から右へ「最後まで耐えた救世主」。「採骨 79. 6. 1. 戻し 80. 7. 7」

箱は釘で打ち止めた。モスクワ時間20時33分（ロシアでは駅での時刻表示は全国同じでモスクワ時間表示 *）の電車で、シュバキッツに向かって出発した。乾燥し、明るく、暑い天気であった。地方時間では遅かったが、結構未だ明るかった。

穴を掘り、そこへ箱を納めるように、アブドーニンは主張した。そうした。

墓場の脇に、1.5mの深さの溝を掘り、そこから墓地に入り込むように、私は提案する。私の理由。多分再びこの墓地の静寂を、私たちは破る。とにかく、私たちは、より十分な証拠を集める必要があった。私は弾丸の探索が、最も大事だと提案した。

私の提案は受け入れられた。62年+1昼夜ほど遅れ、ユーロフスキーがやったことと反対に、ちょうど12時に、塹壕を掘り始めた。

電灯で照らしながら仕事をした。電灯の消耗は早かったが、照らしは続けた。墓地に入り込む。50cm~60cm進んだところで、アブドーニンが骸骨に出くわす。この場所を精査する。大きな頭蓋骨、私たちの方に、頭頂部を向けて横たわっている・・・

ここで終了。デミドワの頭蓋骨をあらかじめ、場所に戻し、深部に箱を納める。手元に櫛が残る。箱の上には重い大きな石をのせ、塹壕を土や、木の枝で埋め戻す。他人が、偶然にでも掘り返しをしないようにするために。また、この大石に出会った人が、それ以上掘り返ししないようにさせるために。地面を平らにし、周りの地面をきれいにし、生きている芝生で断面を覆った。塹壕の跡がわからないように。表面全体に、枯れ枝や小枝をばらまいた。

アブドーニンが、脱帽して、墓地の前に整列することを提案する。行った。

* * *

全てが終わったとき、状況が恐ろしいほど複雑になっていることに気がついた。今は、状況が変わった。墓地の場所の保存に対する非常に大きな責任が我々に降りかかった。スベルドロフ市に出かけたとき、私は遺物を掘り出し、確実な場所にそれを隠すように提案をした。たとえば、レニングラード市のペテロパブロフスク要塞博物館の館長と交渉し、秘密の場所に、時が来るまで隠すようにと。

もちろん、うわごとのようなアイデアを、私たちははじめは信じていた。

1989年に、イーゴリ・ビノグラードフと、私が知り合いになったとき、彼は私にそのような信用を引き起こした。彼はしっかりとし、誠実な人物であった。私は全てを彼に話し、助言を請うた。「これからどうしたらよいのだろうか？」イーゴリは心配し始め、仲間になることに同意した。イーゴリとの話し合いの後だが、亡くなったブラット・オクジャワも私たちを支持していた、ということがわかった。

私は間違っていないかった。彼らの誠実さは、疑問の余地もなかったし、彼らの共体験と共感はそれ以上であった。残念ながら、全ての人がそうではなかったが。ほとんどは無関心であったし、それ以上でもあった。このいやな「アイデア」（*）が実現しないことを願う。

忘却はやってくるのであろうか？ その時まで？ このいいときはいつやってくるのか？

1978年末に、閣僚会議とソ連邦共産党中央委員会が、テレビ映画「革命家として生まれて」に、ソ連邦政府勲章を授与することを決定した。この経過は簡単ではなく、困難であった。政府委員会の全員が、私たちを支持したわけではなく、ショロコフに介入を許したのである。そして、問題はあっという間に解決を見た。当時は何の疑いもなく、私たちは他の人より劣ることがなく、功勞により勲章をもらったと、私は心から思った。不安は、心からの喜びと入れ替わった。当時の映画界の誰も、釜とハンマーの入った貴重な金製の勲章を夢見なかった。

当時、私はしばしば映画会館へ出かけた。そこでは、国内外の検閲のない映画を見ることができたのである。同士達とも交流することもできた。

ある日の夕べに、私は小ホールでの映画鑑賞に出かけた。いつも通りに、客で一杯であり、空席を探しに壁沿いにあった階段を上っていたとき、「ゲリー！」という声を耳にした。振り返った。ラリサ・シェピチコであった。活躍のめざましい監督であった。ちょうどその時には、パーベル・ビコフの小説をもとにした「ソトニコフ（？百人隊＊）」を終了していた。80年代の作家の間では、ビコフは、大祖国戦争時の悲惨な現実を語ろうとしている少人数の中の一人であった。彼には映画「円形の橋」があった。その中で、子供のバルチザンの歴史を描写し、 коммуニスト、隊長が当然のごとく命を犠牲にした。祖国の文学において偉大なるものであり、「社会主義的ヒロイズム」と呼ばれていた。

ラリサは寂しげで、物思いにふけっているようであったが、私の方を親しげに見つめた。少し笑みを浮かべながら、私にささやいた。

「おめでとう。アレクセイ・ペトロビッチ（・ナゴルニイ ＊）と一緒に、あなたのことで喜んでいます。」

「この時、悩んでいた私の頭の中で、光明が輝きだした。全てがわかった。「革命家として生まれて」は受賞した。が、「ソトニコフ」は・・・

私はこの試写に行かなかった方が良かった。

床をすり抜けて落ちた方が良かった。

同じようなことが起こる時、他人ではなく、君に・・・・その時価値のスケール表が、壁の所で燃え上がる。バルタラス（？ ＊）の前での物騒な文字のように。その時、君は理解する。君は柙に乗った。そして・・・・非常に軽いことを。

私は必ずシェロコフを守る：彼は自分のために戦い、心からこの自分を信じた。全ての他のものは意味を持っていなかった。戦いは同情を知らない。

1998年4月に、プログラム「古いテレビ」が、映画「革命家として生まれて」の試写を提案し、私を招待したースクリーン前での会談のために一とき、私は拒否をした。というのは、ラリサを思い出したからであった。この世界での不公正さを感じもした。大分時間も経過し、私は別人になっていた。不明瞭なことを喋る・・・・御免被る。

これらのことは、この映画に出た俳優に対して、私が尊敬も抱いていない、ということとは全く意味していない。彼らは全て有名で、有能な俳優だ。提案された枠内で、彼らはしっかりと演じた。監督兼プロデューサーであるコハン（？ ＊）のおかげではなく、事務的な企ては、むしろ反して、全て何か人間味を帯びていた。

1997年末に、故人（シェロコフ ＊）の娘、イリナ・ニコラエブナが、私に電話をしてきた。私たちは知り合いでもなかったし、一度も会ったことはなかった。イリナ・ニコラエブナが番組「今日の英雄」についての私の話を耳にしたのではないかと、私は謎解きをした。私たちは昔のことの思い出し話をした。バガンコフスキー墓地を訪問し、シェロコフの墓を慰問したことを、私は話した。話の終了間際、イリナが話した。

「1978年に、夕べの茶会のあるとき、私と母に、父が話をしました、「ゲリイがロマノフ一家を発見した。」と。」

以前には、全能の大臣と「懇意」となることなど私にはあり得なかった。1991年に、あるレニングラードの新聞が書いた。ロマノフ一家の墓所で、リャボフが宝石類を探した。シェロコフの依頼のもとで。何を書いているのか・・・・この一節の著者は、しばしば国境を通過していたようである。マフィアの依頼を受けて、宝石類の運搬のために。あのような場合には、ダイヤモンドをそれなりの所に隠す。

ロマノフ一家はダイヤモンドを胴回りに隠した。胴回りは解かれ、全ての宝石が没収された。何度も繰り返し、私は話しているが、宝石はアフリカの黒人とインドのクーリー達の奴隷状態解放のための聖なる仕事に使われた。死体は裸体にして穴に投げ込んだ。私は断言する。人々は正常であった。レニングラード新聞の記者と違って。宝石類は「それなりの場所」には隠されていない。これ故に、穴には、骨と弾丸だけが残された。硫酸の入っていた陶器製瓶の欠片も。

ソ連邦の内務大臣が、本当に正常な人間であったことに感謝をする！ 大臣の良心の責務は、党及び政府における責務より重要であった。

スベルドロフスク市への私の出張、10月革命古文書館とレーニン図書館館長への手我に署名をし、私に全ての助カースベルドロフスク市と周辺の見取り図と、縮尺地図など⁽¹⁾を指令したのは、本当に奇妙なことであった。シェロコフは、私の活動目的の真意の謎解きができていなかったようである。

私は、彼に具体的なことは何も話さなかった。

彼は、私に何も具体的な質問もしなかった。つまり、ロマノフ一家のこと。

私の友人で、共著者であるナゴルニイは多くのことを知っていた。しかし、最も重要なことに関しては、私は彼には話をしなかった。

スベルドロフスク市の内務局の誰かが、内務省の委託を立派に成し遂げ、特別班が私たちを見張ったとする。シェロコフはリスクを冒さなかった。自分の立場や私のボスを。なぜ？ そのような仕事のために、ソ連邦には国家保安委員会（KGB）がある。

少なくともシェロコフは、話をしていたのであった。彼の娘であるイリナは、何年もたってから、私に、この言葉を伝えた。

脚注（１） ソビエト時代には、地方の地図は、手に入れられないものであったことを知っている人は、今日では数少ない。全ての本物の地図には「極秘」の印が押されていた。特定の組織、その関係者のみが利用できた。普通の市民は、店で、それなりの地図は買うことができた。が、「パロディもの」であった。この「地図」を当てに、指定されているところを探して行っても、決してそこにはたどり着けなかった。位置をいい加減にごまかしていたからである。「敵」が、わからないようにするためであった。が、敵は衛星から撮影して作った詳細な地図を既に持っていた。なんのこった。ソコロフとディテリフスの地図と、内務省で我々が手に入れた地図を比較して、我々は何度も確信した。インチ規格の過去の地図とセンチメートル規格の現在の地図を併用して用いるのは、専門家でも簡単ではないことを。（著者の追記）

（１０２）

私たちは、薄氷を渡っていた。頭でそれを認識していたが。ただ頭で・・・ KGBは万能ではなく、どこにでもいるわけではなく、何でも知っているわけではない、ということに私は慰められた。ルビャンカ（KGBの本部のある地区名、KGBの一つの呼称名*）にいる友人には少し大事な仕事がある、ということに気がついた。私は間違っていた。

この人物の心理、考え方、教育水準を、私は早急に理解したがった。この人物の死の周りを、私の人生が回っていた。そして私の友人の人生も。

シェロコフは、私の要請をソ連邦閣僚会議の主要古文書管理の長に、届けてくれた。そして、私は１０月革命古文書館に入館することになった。

驚くような優しさで、私に対応してくれた。古文書参照部局には一私は正に、そのような所で働いていた、図書館ではなく一珍しいほど知識が豊富で、可愛く、好感の持てる、いろいろな年齢の女性達がいた。彼女たちは、気持ちよく私に接してくれた。私は直ぐにこの雰囲気慣れ、この優しさに対して、内務省で身についた態度で接することをやめた。彼女たちによって出された、私の調査のための資料は全てが興味あるものであった。私は直感した。目的の成功が私を待っていると。

新しい証拠、事実、データの量は膨大であった。最初、私は少し途方に暮れた。局の職員達は、そのような場合には、私の気を紛らしてくれた。例えば、ある時には、刑事の日記を見せてくれた。今日での屋外探査の諜報員。そのような人物の報告を、私は大量に読んだ。そして、少なからず、私は全くの類似性、一致に驚かされた。世紀初めの刑事と、現在の特別部隊の将校の心理さえも。同じ言葉、同じ仕事における考え、同じ時間と分、それらを用いて、「対象物」の行動などを記録した。

警察局の秘密のエージェントとしてのジナイダ・ゲルングロスー・ジュチェンコの個人的な仕事を、私は読破した。この女性の悲劇的な運命は、私を感動させた。彼女は確信を持って追跡をし、あらゆる分野の情報を、革命家の政治警察に報告をした。警察局の感謝は全くなかった。１９１５年、戦争中に、ドイツに住んでいたジュチェンコ（そこで、彼女は革命家達の復讐から身を隠していた。）は、裏切り者として、監獄に送られた。彼女は祖国の憲兵に援助を要請したが・・・

彼女のことは、戦争と、始まった革命の中で忘れ去られた。最も輝かしい自分のエージェントを助けるために、元の「上司」は指さえ動かさなかった。彼女の件に、新しい事実を私は見つけた。ウクライナ民族主義者指導者ステパン・バンドルを、青酸カリ入りの弾丸の入ったピストルで殺した、バグダン・スタシンスキー、国家保安省の軍人が惚れ込んでいた。彼は、自分の思いを指導部に通告をした。しかし、理解も支持も得られなかった。全身全霊を祖国に傾けたものだけに、愛する権利がある。暗殺をする物には無い。スタシンスキーは上司の抱擁の方を選んだ。彼は国境警部隊を離れ、戻らなかった。

今日では全てが明らかになった。当時はそうでは無かった。私は関連づけ、比較し、必然の結果にたどり着いた。仕事は政治とは全く関係なかった。人物に関する仕事。ナチ党員は、激情の共産党員より、きわめて行儀の良い人たちであった。優しい女性達（* 図書館員）は、驚くべき歴史を私に語った。老党员の古文書中に、それがある。８０年もの前の。古文書で党歴を確かめる。年金は極めて高い。ほら、幾つかの場合。警察局の秘密のエージェントのカード目録中に、痕跡を見つけることができた。保安警察と情熱あふれる老人との間の協力が。局の責任者であるナタリア・ワシリエブナが、悲しそうに私に語

った。「私たちは丁寧に断ります。K G Bにも報告しません。だいぶ時間がたっている
で、・・・申し訳なく・・・ 本当です、信じてください。」

私は信じた。文学雑誌の主編集長の話を思い出した。「私たちのスベルドロフ市のある
大通りに、著名な革命家の記念碑が建つ。信じますか？ 私は回想記の中に、信じられな
いことを見つけた！ この熱烈なボリシェビキを、エカテリンブルグの地方保安局で見か
けた、ということをや年配者達が思い出した。2月革命の時に。彼は無慈悲にも焼かれた！」

エカテリンブルグ市の保安警察が行った、ある「指示」を検分した。匿名「カザック」
のもとで、エカテリンブルグ組織内のあるボリシェビキが、保安局に全てを通報した！

「カザック」・・・ 彼の記念碑を建立するのか？ 巨大で、綺麗で、素晴らしい。
これは奇妙なことである・・・

手元に、ニコライ二世の日記を持ってきてくれた。黒インクで一杯に書き込みが為され
たノート。書体は少し右向きで、文字は少しブロックン。これらはロマノフ一家全員の共
通した癖である。この日記に何か感銘した所があったか？ 無い。日記の内容は地味で、
空疎、読者にもよろうが。日記内には余計な詳細が細々と記されている。しかし、私は驚
くべき箇所に、何度も出会った。ドイツでの出会い（多分？ 私は引用しなかった、この
ことを悔やんでいる）の後、ニコライはきわめて奇妙な感情に苦しめられた、と書してい
る。「私は2人とも愛しているのでしょうか？」 彼は自問している。将来の花嫁である
アレクサンドラ・フェドロブナこと、アリサ・ゲセンスカヤ（つまりニコライ二世の妻の
旧名 *）と、彼の最初の愛人であるマチリダ・クシェンスカヤのことを言っているのか。

このようなことは、非常に純粋な人物だけが書くことができた。そのようなことには疑
念があるが・・・

他のメモもあった。きわめて興味をそそる。例えば、1917年の革命の開始に関して、
「動乱時代に似た」事件として。至る所に、「臆病、卑劣、裏切り」。ドノ駅に停車中の
皇帝専用客車内で退位宣言を書いた後で、直ぐに書かれていた。戦艦ポチョムキンでの蜂
起に関しては、「黒海艦隊に悪魔が現れた。」等々。これらについてはもう触れない。こ
れらは、この本の課題に関して、直接的な関係を持っていないからである。何度も引用も
されているし。

彼は1918年末まで、日記を書いた。それ以降のメモは無い。これは、「特命の館」
（接收したイパチェフの館のこと *）での生活が、通常では無かった、ということであ
ったと私は考えている。将来に期待をもたらしてくれるある出来事があった。皇帝は何も
書き残さなかった。というのは、期待に胸を膨らましており、うっかりと口を滑ることを
心配していたのであろう、と私は思っている。日記の中でさえ。この日記は、いつでも館
の司令官であるユーロフスキーが要求することができていたからである。

何が起きたのか？

ロマノフ一家は、ロシア軍内で、彼らに同情している将校から手紙をもらった。単純な
手紙では無かった。手紙には、ある人物の忠誠と献身が表記されていた。ある人物はロマ
ノフ一家に申し出ていた・・・脱走することを。

虜囚下にあるロマノフ一家と、彼らの同情者との間の一風変わった書簡について、私は
知った。これについては、ディテリフスが自分の著書「ウラルにおける皇帝一家とその従
者達の殺害」において、触れている。白軍のコルチャック将軍の命令により、「上述の殺
害に関する調査を監督をする者」として指名された。将軍は、1919年4月3日の新聞
「イズベスチャ」を引用している。フランス語からの翻訳は分かり易いものであった。こ
の件についてのみ、私は触れる。興味があり、知りたい読者が、この新聞の記事と、直後
に翻訳家が行った本物とを比較できるようにするため。

1 番目の手紙。

「神の加護とあなたの冷静さが、何の危険も犯すことなく、目的を達成させることを期
待しています。あなたの部屋の窓の1枚を剥がす必要があります。窓の位置を私に正確に
知らせてください。皇太子が歩けないならば、状況は複雑になります。が、そのようなこ
とは考慮済みです。私は克服できない困難なことだとは思っていません。正確に書いてく
ださい。皇太子を搬送するためには、2人が必要ですか？ あなた方の誰かがそれができ
ませんか？ その時に、1時間か2時間、皇太子を何かしらの麻薬で眠らせておくことは
できませんか？ これは医者をする仕事ですが、あなたは時間を正確に知っておく必要が
あります。私たちは必要な物は届けます。ご安心ください。私たちは、成功の確信のない
事には実行しません。神と歴史に誓って、自身の良心に誓って、この約束をします。ある
将校。」

皇帝の返信。

「角から2番目の窓、庭への出口、すでに2日間、夜も開けっ放しにしている。玄関付
近の7番目と8番目の窓は、庭への出口。何時も開けっ放しである。部屋には、司令官と
部下がいる。内部の警備のためである。人数は13人。銃、ピストル、手榴弾で武装して

いる。我々の部屋を除いて、1つのドアには鍵がない。司令官や彼の部下達がいつでも我々の部屋に立ち入ることができるようになっている。当直は夜間は、1時間に2回、屋敷付近をパトロールをしている。私たちの部屋の窓下で、武器をガチャガチャさせるのを良く耳にしている。バルコニーには機関銃1機が据えられている。バルコニーの下には、緊急時には、もう一機の機関銃が据えられる。我々の所には、医師、女中、炊事担当の少年がいることを忘れずに。我々を困らせていることは全くない。逃走時には、自らの意思で我々に従うであろう。通りに面した私たちの窓の反対側に、警備隊の小さい建物が建っている。建物には50人ほどが詰めている。全ての鍵は司令官の所にある。司令官と私たちは良く挨拶を交わす間である。とにかく、可能な時期を知らせてください。我々の従僕達を連れて行けるのか、答えてください。玄関の前には、何時も自動車が止まっています。各警備ポストからは、いつでも電話で司令官と連絡が取れています。もし従僕達が残るとしたとき、彼らに危害が及ぼされないと、確信ができるのでしょうか？」

ロマノフ一家は、何の疑念も持たなかった。これは、彼らの返信から明らかである。彼らは自分たちの従者の将来を心配していた。これは彼らの名誉に関わるからである。将軍は疑っている。先に言うておこう、我々は彼に同意する：その通り。ミハイル・コンスタノビッチ（・ディテリフズ ＊）の結論は、簡単に言えば、根拠不十分である。将軍について熟考してみると、・・・憎悪が溢れている。破壊者と殺人者達に対する、理由のある憎悪。この憎悪は、実際において、反論を無に変えてしまう。

1. 「これは全てロシア語ではなく書かれた。」 その通り。フランス語で。我々は翻訳文を読んでおり、多かれ少なかれ編集されている。

2. 皇帝に対する呼びかけにおいて、将校や君主主義者にとってはあまり使われない「代名詞をなぜ使っているのか？」 その通り。多分、文は将校が書いた物では決してない。

3. 「なぜ、「皇帝の息子」の単語を使用し、「皇太子」の単語を使用していないのか？同じ意味なのか？」 その通り。これら2つの単語の意味を、手紙の作者は理解していたのか？

4. 「家族内だけで知られていた単語「ちびちゃん」をどこから？ 多分、手紙の作者は、盗み聞きをしていた。

5. 「窓は1枚なのか2枚なのか？ 窓からどのように連れ去るのか？ さらに2つの扉もあるのに。はじめにそれらを壊すのか？」 その通り。しかし、手紙の作者は、連れ去る気持ちはなかったであろうと思われるが？

6. 「皇帝は保安所を見ることはできなかった。というのは、その建物は小さく、扉は窓より高かった。」 これは面白い指摘である。が、そうでは無い。兵隊の誰（保安隊の誰かが彼に手紙を渡した？）か、ボリシェビキから派遣された屋敷の労働者の誰かが、そのようなことを、故意に皇帝に伝えた？ どれが信頼できるのか？

7. 「電話線については、皇帝は何も知ることはできなかった。そう、電話線は全くなかったのである！」 その通り。皇帝は博識であったことは以前に述べた。存在しない電話線について、皇帝が「ある将校」と彼の同僚の真剣さを評価していた、ということのためにのみ彼（皇帝 ＊）に話すことができた。（？ ＊）

8. 「屋敷の周りを、歩哨が回っている。高級軍事訓練を受けているまじめな皇帝は、歩哨を正しい呼名で呼ぶことができなかった。これには納得する。しかし、多分、皇帝は、彼らをそのように呼ばなかったのか？

9. 「「当直」は、毎晩は居なかった。「衛兵伍長」は居た。これは規則のイロハである。」信頼できるクレーム。しかし、我々はその出所をすでに説明をした。

10. 「皇帝が、ハリトノフとツルップについて忘れることがあろうか？ 多分、モスクワでこの書類をでっち上げた者が忘れていた！」ディテリックスは真実に近づいていた。しかし、再び予測に間違いを犯した。書類は本物である。ハリトノフとツルップは不用として書類から除外された。余計な詳細・・・。

将軍の結論。書き写しはねつ造された。

(110)

その通り。しかし、このでっち上げの証拠は全く他の特徴を帯びている。私たちはそれに戻ろう。

労働者階級に、全力を挙げて、政治的デマを信じさせる努力をした。「大10月社会主義革命」の合法性と歴史的必然性だけではなく、それに伴う非常極まる行為などの必然性なども。レーニン、スベルドロフ、トロツキー、その他は、良く理解していた。権力を奪取した多幸感、遅かれ早かれ、大衆の知る所となることを。大衆は権力には全く関係が無く、蜂起に対する人民の虐殺と大弾圧、その他は、長く、つらい、忘れられない記憶となる。反対側、即ち「地主と資本家」が制裁のための理由をもたらした、ということ、もし信用しなくなれば。

この非常に単純な考察は、「血のニコライ二世」との関係、まず第一に認める必要があった。示す必要があった、皇帝は単に血に飢えた躁鬱患者ではない（ビルボアの偽の日記を思いだそう。その日記の中では、トルストイと歴史家シェゴロフが断言していた。ニ

コライ二世は、召使いの少年を、自分自身で残忍に殺したと。) 、彼は、罰を法律を基礎にして、判事に委ねていた。共産党とロシアソビエト連邦社会主義共和国の指導部は、よく知っていた、いつでもどこでも、審理や裁判を逃れようとした犯罪者を厳しく罰することを。

1919年7月19日の新聞「イズベスチャ」が報道していた。「王位にいた死刑執行人を、ソビエト権力の手から奪え返すという目的を持った、反革命者の陰謀が暴かれた。暴かれた陰謀に関する書類は、特別配達人の手で、モスクワに送付された。」

最初の、校正済みの書簡を、我々は読んだ。「将校」と彼の不確かな共謀者と「白軍の陰謀」。皇帝と彼の家族と従者―監獄に入っている人と一緒になった、この陰謀の参加者。しかし、まず第一に、陰謀に関する書類を読み始める必要が、我々にはあるのであろうか？既にわかっていることを話しておこう。陰謀は、ジェルジンスキーの委員会、地方、エカテリンブルグの彼の部局、地方の非常委員会によってでっち上げられた。県庁はペルミ市に会った。ウラル・ソビエトが全労働ウラルに対して司法権を持っていた―完全に独立した非常委員会であった。それ以外の何物でも無い。

特別部署での隠語では、安全局の内奥で考えられ創作された、そのような陰謀は、煽動と言われる。散歩のあるとき(あるいは、部屋のドアをノックして)、誰かが皇帝に愛国者である将校の手紙を皇帝に渡した。白軍の特別配達人はいた。とにかく、募集されたエージェントが、皇帝と家族に、でっち上げた書類で援助を教唆した。目的は明らかである。名誉を傷つけ、その後、処置をする。

ロマノフ一家が、再びロシアの権力に戻らないことに、赤軍の指導部は全く注意を向けてはいなかったということに、注目しておく必要がある。全国民が暗い世の中にあるとき、皇帝を復帰させるような力はロシアには無かった。将校達はレストランで、「神よ、皇帝を守りたまえ」と、感情を込めて歌った。高位の宮廷人達は哀愁を持って過去を思い出した。コルニーロフ将軍は、臨時会議が王制を復興させるならば、彼自身は軍事・政治から手を洗う、と宣言した。これは単なる言葉では無かった。白軍の将来の指導者は、ロシアの現状に従った王制のアイデアの実行を確信していた。次のことも付け加えることができる。前線のどこにも、皇帝一家の名前を持った人物は一人も居なかった。ペストが発生したかのように、彼らは前線から、逃げ去った。ニコライ二世は、不幸の運命に、自らの近親者達にのみ興味を注いだ。国内でも、国外でも、国の支配に皇帝が復帰できるなどと誰も考えなかった。

どうしたのだ？

一つの見方。レーニンや彼の同士達には、不安定で動揺しやすい大衆が理解しやすいための、恐ろしい物が必要であった。その例として、「血の皇帝」が復帰することは許さないとすることなど。このアイデアの政治宣伝はボリシャビキの上層部で打ち立てられた。

別の見方。社会主義シベリヤ政府は、全世界に、何か明瞭で、かつ驚くような物を喧伝したかった。ロシアの権力に、最も暗く、最も過激で、最も非人間的な力がたどり着いた、ということ。ヨーロッパとアメリカは知る羽目になった。やりこなせない。(？＊)これ故、最初、エカテリンブルグでは、シベリア軍は殺された遺体の探索をした。

彼は誰だったのか？このロマノフ家の連絡員、このシャトルは、特殊任務下にあった邸宅と「王制主義者グループ」の間を往来した。地方チェキストの怒り狂った頭の中に存在したらしい？

正規の職員、あるいはロマノフ一家に入り込んだエージェント(最初は、どうしても良いことであるが、募集された)である人物は、疑いなく、特殊な才能を持った人間であった。極めて優秀なエージェントを****必要性を理解して、チェキストはうまい具合に社会を駆り立て始めた。その考えの基に、ロマノフ家の連絡員、これはシドロフという人物、連絡網を整えた少将。シドロフについて述べると、彼は農民であり、自分の皇帝に対する信頼を持ち続けていた。

後年、長編小説「23段下へ」で当時センセーションを巻き起こした作家カスビノフは漸く、天才的なエージェントの名を挙げる。その人物は、医師ウラジーミル・ニコラエビッチ・デレベンコ、皇太子の医者である。カスビノフには、この医者は、完全な敵である。共犯者。とにかく、プロレタリアート独裁の復讐する刃を持った信頼できる奉仕人。彼はどのような人物だったのか？

デレベンコは専任講師であり、1912年から皇太子アレクセイの個人医師。臨時政府の命令に従って、トボリク市に同行した。その後、エカテリンブルグ市へ。即ち、「派遣」されたのであり、志願しての皇帝家族への同行ではなかった。それ故、ソビエト権力によって逮捕はされず、特命を帯びた邸宅への出入りは自由であったし、邸宅から退去もすることができた。十分に確信があるが、前述した挑発を考え出していた、地方チェーカーはデレベンコを逮捕しなかった。愛他主義や合法性からでは無く、即ち、彼らの将来計画のためであった。

1919年9月に、オムスク市でデレベンコが語った供述の中に、次のような内容があ

る。皇太子の居る部屋に入ることを彼は強く要求した。「いつでも無条件の警護の元で」。皇帝と皇后と一緒に、3人が一つの部屋に住んでいた。そうこうしているときに、デレベンコはユーロフスキーを知ることになった。

自分の「回顧録」（この本は、十月革命国立古文書館に保管されている。）で、ウラジミル・ニコラエビッチ（・デレベンコ）は、強調している。「明らかな、皇帝一家、あるいは虜囚の誰かとの個人的な会話、手紙などを彼らに渡したり、受け取ることに關する話が、まさかそんなこととは。規則は厳しく、その違反は死を意味していた。私には、妻、母、子供が居た。命令に違反するなど考えもしなかったし、できなかった。」

規則はもちろん犯してはいけない。死罪は、身近な者まで恐喝をする。この規則を破ったりしたならば？

ドニエプル水力発電所にあった強制収容所から、刑期前出所をした後に、デレベンコによって「回顧録」は書かれた。その後、彼はどうなったのか？ 私は知らない。が、謎解きはそう難しくは無い。

もちろん、以上で述べてきたことは全て予想である。しかし、その予想は、十分に信頼できるものである。どれほど信用できるか。他の例がある。ロマノフ一家は、未知の人物からは、何の報告類なども受け取らなかった。そのような報告類は、知古であり、全く疑念の無い人物を通じてのみ受け取った。医師デレベンコは、まさしくそのような人物であった。

手紙の調査を続けよう。

手紙を見、それを手に持ち、翻訳文を読み終わったとき、ソビエト権力が数ヶ月で崩壊しないで、1991年まで継続したか、を私は理解した。

手紙を自身の目で見たとき、読者もわかると思うが、独裁政権は頭が良かった。殺人者だけとしてではなく。

私の目の前に、大きさ10cm×8cmの空色がかった灰色の封筒があった。脇が開封されている。封筒には、大きく赤いインクで「手紙」の文字。

さらに、もう一通の封筒が。大きさ11cm×7cm、空色の紙で、長い方に沿って開封されている。フランス語で、右から鉛筆書きがある。封筒の裏側には、2cm×2cmの白い紙でできた紙テープが。

さらに4枚の罫線紙。「将校」の署名が、黒インキでフランス語で書き込まれている。ロマノフ一家の返信が、フランス語で、同じ用紙に、下半分に、灰青色のインクで。翻訳文は別の紙に、同じ書体で。「連絡員」からメッセージをもらい、ロマノフ一家はノート用の紙に返事を書いている。この書簡に注意してみよう！ 直ぐにわかる。皇帝一家が、ばらばらになっていないノートに書かれた手紙を得て、同じノートに返信を書いたとすれば。チェーカーは、君主主義者グループをだまし、書き写しを没収して、全部の書き写しを、いつでも得ることができた。しかし、このためには、グループはごくごく小さいものでなければならなかった。

ロマノフ一家の最後の手紙は伝わっていなかった。チェーカーには、全てはわかっていた。いたずらに残されたこの最後の手紙は最大の証拠である。全ての書き写しは、ロマノフ一家の一時的な行為では無かったことの。この行為は、チェーカーが全てお見通しであった。

さらに、新聞イズベスチャに、完全な翻訳（当時の視点で）が掲載されたことは、紹介済みである。これは、ただ一つの目的のために行われた。知識層に共感を示している労働者と農民が、書き写しは母なるロシア語であったことを、少しでも疑ってはならないということ。そうでない場合には、フランス語の文が公表された。が、これでは真実が暴露される。

翻訳文は、原書内容そのままである。

「神のご加護と、あなた方の冷静さで、我々は何の危険もなく成功することを期待している。あなた方の部屋の窓の家の一つを、必要なときに、必ず開ける必要があります。子供の皇太子が歩けないということ。行動を複雑にしますが、それは予見済みです。大きな障害と我々は思っていません。皇太子を運ぶために、2人必要なのか、それとも、あなた方のうちの誰かが皇太子を運ぶのか、明記してください。前もって、計画実行の正確な時間がわかれば、皇太子を1時間か2時間眠らせることができますか？ これは医師の領分です。必要なときには、それなりの薬を提供します。ご安心を。完全な成功の確信がなくて、どんな計画も実行しません。神の前に、歴史の前に、我々の良心の前に、我々はあなた方に、この大事な約束をいたします。ある将校」

この翻訳には、文法上において簡単な間違いがあることに注意しよう。外国人が翻訳をしたのか？ ロシア人の翻訳者ならば、ロシア語の文法上の誤りをするはずはない。が、ここでは？ 「*****？」

「イズベスチャ」には、単に「将校」だけの署名があり、「ある将校」ではない。モーパサンの翻訳家の「発見」を私は思い出す。この翻訳家は次のことを強調していた。原語

で「人生」の題名小説が、「ある人生」と名称されている。これはひどく小説の題名を変えてしまっている。

おそらくそんなことはない。フランス語で「ある将校」、ロシア語で単に「将校」。等々。

ロマノフ一家の返事。(返事文章に、著者による文章の修正・訂正が幾箇所でも行われており、それに従って日本文に翻訳した。*)

「広場に面している角から2番目の窓は、既に2日間にわたって開いている。昼も夜も。大きな玄関付近の、広場に面している7番目と8番目の窓は、何時も開いている。部屋は司令官と彼の部下達が使用している。内部の警備を行っており、13人ほどである。特に、全員が武装している。拳銃や爆弾も持っている。どのドアにも鍵はない。我々の部屋以外。司令官と彼の部下は、いつでも、好きなときに、自由に我々の部屋に入ってくる。夜には1時間に2回巡回警備をしている。我々の窓の下での彼らの話し声を良く聞く。バルコニーに1台の速射砲、下にもう1台。我々が知らないと思っているのか。我々の所には、医師と2人の女中と少年が居ることを忘れないでください。彼らを残すことは我々にはできない。医師は既に3日間、腎臓の痛みでベッドに横たわっていますが、もう良くなってきています。我々は2人の若者をずっと待っています。彼らは1月もの間町のどこかに閉じ込められています。理由はわかりません。(水兵クリメンチ・ナゴルニイと下男イワン・セドネフのこと。一著者注) 彼らが居ないので、父が坊やを、部屋や庭に運んでいます。

(※ これは明らかに、皇帝の娘の一人が書いたものである。単語「父」は公式報告では削除されている。) 医者デレベンコは、町に住んでおり、毎日、5時に子供の所へやってくる。彼を忘れないでください、我々は彼を一度も見なかった。(なんともとてもないことだ！) 私はあえて歓喜の声を上げる。(※) 留意しよう。この重要な文言はフランス語の書類中には無い。何故か？ これはつまり・・・ チェーカーはエージェントを相手の攻撃に晒すつもりはない。ロマノフ一家の気配りの文の内容は理解できる。どのような場合においても、デレベンコは何らかのアリバイのようなものを必要とした。覚えておいてください。館の警備隊が居るときだけ、皇帝家族と会っていた、ということ。そのことを、医師自身が常に強調していたことを。考慮に入れておこう。医師の「援助」を、家族はそれなりのものとして受け入れていることを。ロマノフ一家の頭に浮かばなかったのでしょうか？ 彼らの目前にいる優しく思いやりのある人物は、医者ではなく、チェーカーが募集したエージェントであるかもしれないことを。繰り返す。この状況下で、他の誰からも、皇帝は「援助」の提案のある「書簡」をもらっては居なかった。誰からも・・・ (一著者注) 私たちの窓の向こう側の、通りの反対に、小さな建物の中に、警固隊がいる。50人ほど。納屋の中の箱に、私たちの唯一の持ち物がある。番号9番の小さくて黒い箱と、古い手紙と日記などが入っている番号13の大きくて黒い箱のことが気に掛かっている。もちろん室内は箱や物で一杯である。泥棒にも狙われている。(公式の書面にはこの部分はない。第一に、権力側にとっては暴く必要がない。第二に、全て真実。アレクセイ皇太子のベッドの上に吊されていたアイコンが、アブデーフ警備司令官の時に、盗まれていた。後になって、ユーロフスキー自身が語っている。彼の部下達が死体から宝石をはぎ取るために、彼らが死体に飛びかかったことを。(一著者注) 司令官と我々との関係は良好である。(留意しておこう。ディテリフスはこのことに疑念を抱いていた。明らかに、無駄だった。ユーロフスキーは執行人であり、サデジストではなかった。自身の為した行為に悩み、喜びに浸ることはなかった、と私は思う。(一著者注) とにかく、私たちに前もって知らせてください。あなたができるなら、私たちの従僕達を連れ出し事ができるならば。主玄関前には、何時もトラックが駐車している。各ポストには呼び鈴と電話があり、司令官室と連絡が取れている。(ロマノフ一家は、状況を説明している。だいたい正しい。(一著者注) もし、従僕達が残ったとしたら、彼らは大丈夫なののでしょうか？

ドクトル(※)は考えないよう頼んでいます。(ロシア語としての格の使い方がおかしいことが、翻訳は外国人がしたということを証明している。この外国人の筆跡と「将校」へのフランス語のテキストも異なっている。後でわかる。特殊な仕事のためにであろうか、実際には、二人が関与した。(一著者注) 我々と女性に期待して下さい。神よ我々を助けたまえ。我々の冷静さに期待して下さい。(2カ所に文字「c」の脱字がある。一著者注 露文中で ※)

ビコフ(・パベル ※)(後になって、カシビノフも)は、他の部分を引用している。目的は同じ。現実の陰謀を見つけ出すことの仕事はきわめて緊張を必要とすることを印象づけるため。陰謀が存在していればの話だが。陰謀は大変で、数多くの不幸をもたらす。しかたがない・・・

チェキストが、闇の中の青春時代の曙に、馬を手に入れた。

その後、それに乗って、全力で疾走した。数十年にわたって・・・

「将校」の2つ目の手紙。

「あなた方の部屋の窓の向こうに、小さな建物があり、50人ほどが詰めていますが、

心配しないで下さい。何かあったときでも、彼らは危険ではありません。あなた方の指揮官に関して、何か決まった（信頼でき、確かな）ことを話して下さい。私達を少し安心させるために。あなた方に今話すことはできません、あなた方全員を連れ出すことになれば。我々は期待しています。とにかく、家からの逃走後、医者以外が付いてこないことを。医師デレベンコのために全てを行います（良いやり方：ロマノフ一家は信じ、理解する必要があった。「知らせる者」が、どんな深刻な危険にさらされるかを。一著者注）詳細な行動計画を日曜日よりずっと早くにあなた方に示すように。今までのところ、それは次のようです。信号を聞いて、部屋のドアを閉め、家具でドアを防御して下さい。室内で貴方方を捕らえ、脅かすであろう警備隊を、あなた方から離す。窓から、このために特別に仕立てたロープで降りて下さい。下では、我々が貴方方を待っています。あとは困難ではありません。移動手段に手拔かりはありません。カモフラージュも今までになく完璧です。子供を下ろすことができるかという、最も大事な件について、十分に考慮しての返事ができますか？ どんなことがあっても、室内の父、母、子供が最初に下り、その後に娘達、そして医師が娘達の後。これについて、可能なのかどうか、貴方方の意見も添えて答えて下さい。ある将校」

（念を押しておきます：文法間違い文章を訂正せず、そのまま記載一著者注）

この手紙に明らかに存在したであろう心理的圧力について注意を向けてみよう。「将校」には、ロマノフ一家のもっともでしっかした同意が、絶対に必要であった。かような同意―彼らによって準備された犯行とかなり重要な件の証拠。（？ ＊）しかし、彼らの答えは意外であった。

「私達は逃げたくはありません。逃げることもできません。私達は力づくで誘拐されただけです。私達をトボリスクへ移動させた力と同じく。私達にはそのような気力はありません。（この手紙を読んだチェキスト、作戦参加したウラル・ソビエトの人物を、私は思い浮かべる。ユーロフスキー、ゴローシェキン、ベロバロードフ・・・ 彼らはどれだけがっかりした顔をしたことか。目にどれだけの惨めなためらいが。ロマノフ一家の臆病さがどれだけ彼らをへこませたか。幾ら骨を折っても、無駄に。しかし、そんなことはどうでもよい。彼らはポリシェビキ。彼らはうまくやりこなす。一著者注）指揮官は沢山の兵を持っている。彼らはしばしば心変わりをし、心配をするようになった。彼らは私達監禁者を丁寧に扱っている。私達の生活が良くあるように。彼らが私達故に苦しめられることを、私達は希望しません。貴方は、特に我々のために、神の名において、血を流すことを控えなさい。彼らと貴方自身を比較してみなさい。（多分、これは控えめな呼びかけ。多分、ロマノフ一家は、自分たちの刑使の手から全ての切り札を手放せたがっている。権力の視点において、そのような立場は、彼らの名誉を回復させると、幼稚にみなしたとして。多分、これら全ては書かれた。というのは、誰かが彼らに、これらを書くように助言をしたから？ 私は知らない。一著者注）階段を使わないで、窓から降りるのは不可能。下ろすことさえ。さらには、大きな危険は。指揮官と下の階の銃座の窓が開いているので。そこへは内側のドアから入り込める。（私達をこっそりと連れ去る、という考えを放棄しなさい。）（注意して下さい。再び同じ考え、呼びかけ、この語句に極めて大きなしつこさが。万一、手紙が不適切な人間の手に渡った時について、権力の目で、ロマノフ一家は保険をかけたがっている。他の結論を出すことは不可能である。残念ながら、ロマノフ一家（人民も同じである）は未だ知ってはいないし、理解していない。伝統的なモラルはポリシェビキは拒否しており、彼らの「モラル」は単純で無限の酷い言葉に入れられていることを。即ち、モラルとは労働者階級に役立つ物であること。といっても、ここでは、労働者階級は関係ない・・・ 著者注）もし、貴方が私達を注意深く見守っているならば、貴方は、何時でも、不可避であり得る危険の場合に、私達を助けることができます。

（ロマノフ一家は小説にのめり込んでいる。少し言い過ぎをご容赦。が、これは明らかに真実である。気高い騎士の時代は過ぎ去っていないし、宮廷人は全力を出して名誉を重んじていると、皇帝と家族は思っている。しかし・・・ 明らかに、皇帝は忘れていた。ごく最近、プスコフの駅で、多くの物達の黒い影が方々に走り去り、信頼でき献身的な者達だけが残ったことを。しかし、彼らは既に牢獄に。他の者達は、糞である・・・ 著者注）

この書き写しの引用を少しの間、中断する。皇帝、彼の家族、彼の従僕に哀悼の意を私は示す。しかし、私は理解している。23年以上にわたるニコライ二世の統治時代は、暗黒の、ざっくばらんに言って、多くの酷い面を持っていた。皇帝は、意識的に、最も野蛮で、無学で、悪意に満ちた力を、出現させた。彼はみなした。この力の「生粋の君主制」は彼の統治を確固たるものとする。残念ながら、最大の間違い・・・

ポリシェビキは計算した。ニコライ二世の統治において、懲役、流刑、拘置所、中央監獄、絞首台、銃弾で、7万5000もの人が犠牲となったと。23年間で。

全てを比較をするとわかる。ポリシェビキの70年間にわたる統治において、4000万を下らない人が地上から姿を消した。

救出において呼びかけた悪意は、不可避免的に、滅亡という更なる大きな悪意を得ることになる。

続けよう。

「外で何が起きているか、我々は全く知らない。雑誌も、新聞も、手紙も手にすることができなかった。窓を開けることを許可して以来、監視が強まり、頭を突き出すことさえ禁止しています。顔に弾丸を受ける危険があります。」皇帝の2回目の手紙は、このように締めくくっている。

「将校」の3回目の手紙。筆跡は荒れており、早書きである。明らかに、状況が、差し迫っている。

「友人は暢気にしていません。長い間待っていた時がやって来たことに期待を持っています。（この部分は、ビコフとカスビノフによって、公表されていた。－著者注）チェコ軍の蜂起は、ボリシェビキを大いに驚かせている。サマラ、チェリャビンスク、東も西も全シベリアは臨時政府の権力下にあります。スロバキアの友軍はエカテリンブルグから80kmの所にいます。赤軍の兵士は反撃ができていません。全ての外部の動きに注意して下さい。期待を持って待機してして下さい。その時には、私は貴方に祈り頼みます。注意を怠らないように。と言うのは、ボリシェビキは、退去するより早く、貴方を抹殺する行動をとるでしょう。昼も夜も、1時間も怠ることなく準備をして下さい。貴方の2つ（数字が2から3へ鉛筆で修正されていることに注目－著者注）の部屋、家具の位置、ベットの位置の略図を書いて下さい。貴方方全員が就寝する正確な時間を書いて下さい。

（脇に、鉛筆で書き込み。（11 1/2）これと、前に述べた訂正は全てロマノフ側書いた公算が大きい。これは多分、返信を正確とするために。－著者注）貴方方のうちの1人は、毎夜、2時から3時の間に寝てはいけません。毎夜、誰かが見守っています。短い返事を下さい。お願いします。情報全てが、外にいる貴方方の友人にとって、役に立つのです。これは、貴方方を引き渡した兵士自身に****（？ *）貴方方の返事を書面で伝える必要があります*****（？ ？）貴方方のために死を賭けている一人。ロシア軍の将校。」

この手紙に、2つの無視できない状況が読み取れる。私の私見であるが。最初の点を考えてみよう。先導者はロマノフ家の動きを聞き出す試みをする。極めて正確に、前線の状況を彼らに説明をする。具体的な詳細の説明を圧縮する。それ（？ *）は心理的に受取人を酷く叱っており、彼（？ *）に現実には「寝ないこと」を強いている。意図は分かり易い。突然ロマノフ一家は事を急ぎだし、「同志」による彼らの遂行を軽減した？そして、「誘拐された者となっていることを希望する」ことを止めた？」

特命の家の日誌に、記述がある。医師ボトキンが暖炉に隠された爆弾を見つけ司令官に報告をしたという。想像をしてみる、見つけなかった、或いは見つけたことを。しかし、報告をしなかった？（？ *）その場で全員を銃殺、直ぐに・・・

2番目。扇動者は、手紙を配送した兵士の存在を主張する。それがどうした・・・しばらく論ずる。

1番目。ロマノフ一家の部屋に入れる「兵士」はいなかった。覚えていますか？デレベンコはロマノフ一家と、決して2人だけで会わないようにしている。

特命の家には、ウラル工場の労働者だけが勤務していた。その通り、彼らは壁に下品な言葉を書き、下品な絵を描いた。彼らは酔っ払っていた。人民の中の洗脳され、固い信念を持った人、その上、労働者が「重要な迫害者」と秘密の関係を結んだということを、信じることは不可能である。何のために？ 目的は何？ 助けることができるの？ ばかげている。彼らには何の動機もない。目覚めた良心？ 宗教的な恍惚？ ひらめき？ これらの言葉全てはむなしい、ああー・・・

私は思う、非常委員会はロマノフ一家と、自分のエージェントに調子を合わせていたと。心理的に、そのような仮定は完全に合っている・・・私に質問があった。ほら、医師デレベンコ・・・彼は非常委員会のエージェントであったと確信しなさい。しかし、彼を殺さなかったのは何故か？ ロマノフ一家に対する非常委員会の陰謀への彼の参加の痕跡を抹消するために。

何故？ 私は答えている。デレベンコは自分の役割をこれ見よがしに演じた。「陰謀」は「バレバレ」であった。妻と子供に煩わされている、監視下にある医者が、何を、何について誰に話をすることができるか？

何も、誰にも。

はっきりさせよう。長期にわたり、ボリシェビキ（ユーロフスキー、その他）は原則的に殺人者であった。しかし、残忍者、快樂を持った、或いは精神のいかれた殺人者では彼らは無かった。非常委員会の「下位の」仕事で、[地下の気違い]、ノイローゼ患者、そのような病人が出現した。メンジンスキーはノイローゼ患者であった。彼の一味であるグレフ・ボキイは製倒錯者でサディストであった。しかし、これは遅く、これはその後。（？ *）

私は除外しない。ユーロフスキーとエカテリンブルグ非常委員会の指導者ルコヤノフが、彼らの素晴らしいエージェントである医師ボトキンに人間らしく感謝をしたであろうことを。後になって、革命家の心理が変わり、地方のトップに新しい人間がついた時、デレベンコを逮捕し、収容所送りとした。罪も無いのに、信じていたのに・・・

ロマノフ家の返信は、次のページの3分の2と、裏面の半分を占めている。鉛筆で書かれ、文字は丸みを帯びている。娘のうちの誰か一人が、急いで書いた。

「角からバルコニーまで、5つの窓が通りに面しています。2つの窓が広場に。全ての窓は閉じられ、目張りされています。白い塗料が塗られています。弟は病気で、ベッドに横になり、全く歩くことができません。部屋が振動する毎に、弟は恐怖におびえています。1週間前に、君主制主義者達から夜に私達をモスクワに連れ出すという提案がありました。結果に完全な確信が無くて、危険を冒したくはありません。24時中、私達は厳重な監視下にあります。」

「将校」の4番目の手紙は、単純な白紙で、半分に切り裂かれている。筆跡は前の物に似ている。

「番兵と隊長の変更は貴方に手紙を書くことを、我々に邪魔をした。この理由がわかりますか？（非常委員会のある突発的な出来事が、非常な感動を引き起こしている、殆ど歓喜のような。信じられない程の厚顔無恥な人、卑劣な人間だけが、直接に、同じような質問を出すことができた。刑史達は必要なものを探すが、乱暴で単刀直入の言葉は無い。「弱虫のアブデフが期待されるユーロフスキーに取って代わった理由を知っていますか？」

その通り、全ては単純！「X」時刻がやって来る・・・（著者注）貴方の質問の答えです。我々は、皇帝と祖国への義務の良心を失っていない、ロシア軍の将校団です。詳細なことは知らせません。貴方はよくわかっています、既に助けられた貴方の友人は、我々を知っている。（刑史達の厚顔無恥は限界に達していた。ドルゴルコフはエカテリンブルグに到着して直ぐに殺された。ゲンドリコバは、まだペルム刑務所で苦しんでいる彼女の命は1月以上だけ残されている。彼女を宮廷女性朗読家シュネイデルと一緒に、汚物場に連行し、銃床で叩きのめす。しかし、核心において、その通りだ。*****「我々を知っている」－著者注）開放の時は近づいている、篡奪者の余命は幾ばくも無い。とにかく、スロバキア軍がエカテリンブルグにずんずんと近づいてきている。軍は町から数キロメートルの所にいる。転換期となっており、今や流血の惨事を恐れる必要は無い。ボリシェビキは最期の時に、全ての犯罪を犯すかもしれないことを忘れないで下さい。行動しなければならない時がやって来ました。下の階の機関砲は危険にはならないということを信じて下さい。隊長に関しては、我々は彼を連行することができます。深夜の（夜12時の）呼び笛を待っていて下さい。これが合図です。

この手紙に対する返事は無かった。この手紙はロマノフ一家に渡らなかったのだから。家族を殺害する理由付けのための企みはもう必要は無かった。

要するに、「同志達」は情け容赦なく、自分を、自分の「モラル」を、自分の才能を書き連ねた。未来は、それにもかかわらず、酷すぎるものであった。

・・・601号書類に、紙の切れ端を、私は見つけた。それには、ニコライ二世が次のように書いていた。「一寸の土地も渡さない。全てが入り交じっていた。馬、売春婦、ならず者の前で赤旗を持った大衆。良心も名誉も無い、悪いものと一緒に、全てが混じっていた。ただ一言だけ言うことができる。待っていた・・・」皇帝自身がこれを作文していたとすれば、私は彼を正當に評価をする。彼は、自分の国の未来を、20世紀最後まで、正確に見定めていた。



イコンの裏側に肉筆「聖皇族受難者達我々のために神に祈りたまえ」



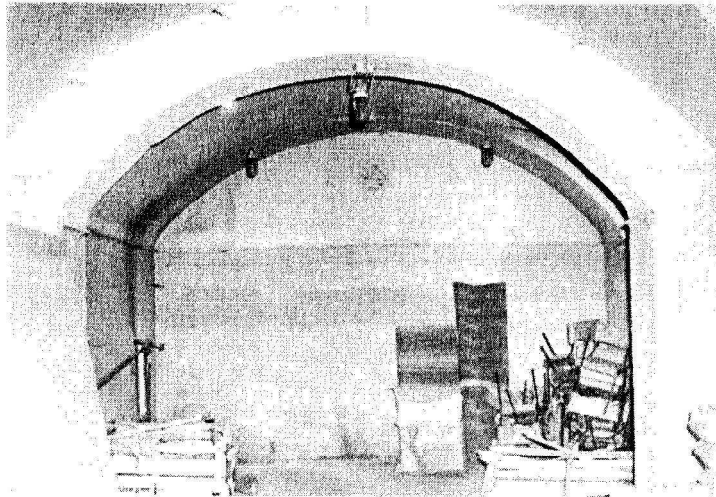
皇帝家族がここに住んでいた時の特命の家（イパチェフ邸）の外観。



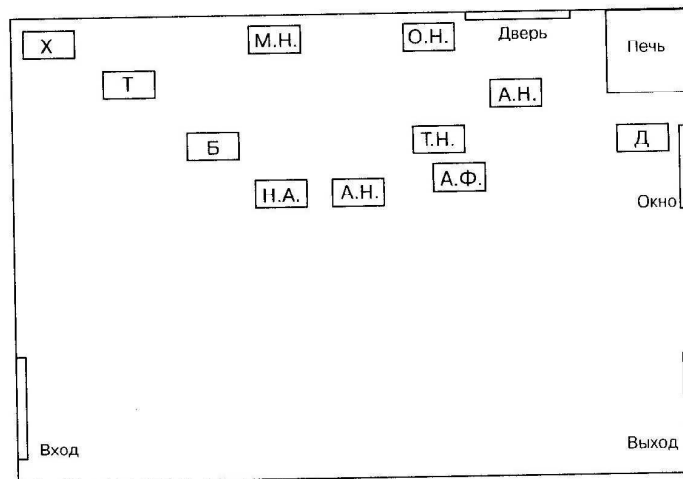
食堂。ここに家族が集った。ここで、詩を朗読した。



1 階（半地下）の部屋、ここで、7 月 1 7 日夜、ロマノフ家族と、最期の一息まで彼らに仕えた従僕を殺害した。



1976年8月における前記の部屋の様子



最後の瞬間時の配置・・・

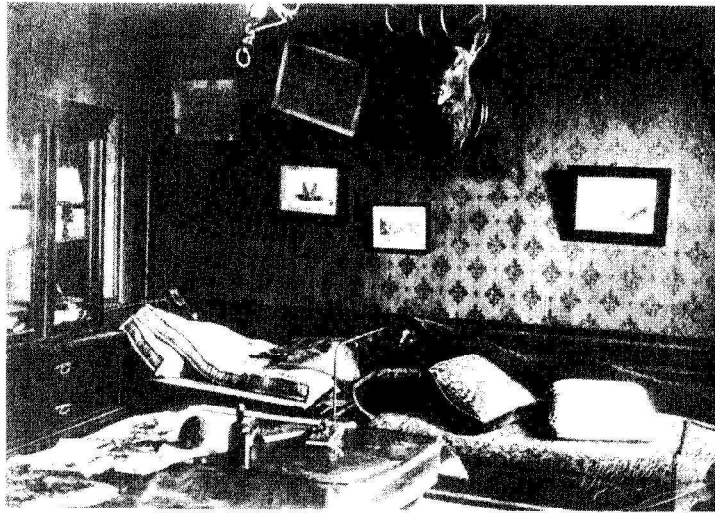
X	イワン・ミハイロビッチ・ハリトノフ
T	アレクセイ・エゴロビッチ・ツルップ
Б	エブゲニ・セルゲービッチ・ボトキン
О. Н.	マリア・ニコラエブナ・ロマノバ
М. Н.	オリガ・ニコラエブナ・ロマノバ
Т. Н.	タチヤナ・ニコラエブナ・ロマノバ
А. Н.	アナスタシア・ニコラエブナ・ロマノバ
Д	アンナ・ステパノブナ・デニドワ
Н. А.	ニコライ・アレクサンドロビッチ・ロマノフ
А. Н.	アレクセイ・ニコラエビッチ・ロマノフ
А. Ф.	アレクサンドラ・フェドロブナ・ロマノバ



7月17日にトラック「フィアット」が犠牲者達を運んだ道



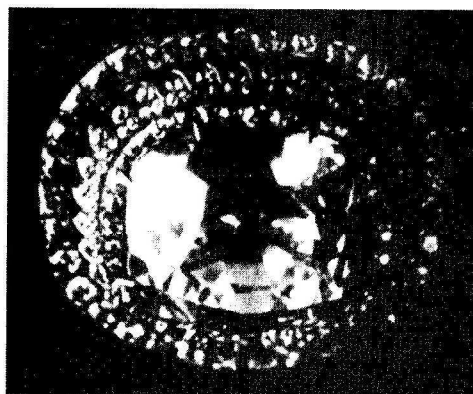
ニコライ・アレクセービッチ・ソコロフ。コルチャックが、彼に犠牲者の創作を委任した。



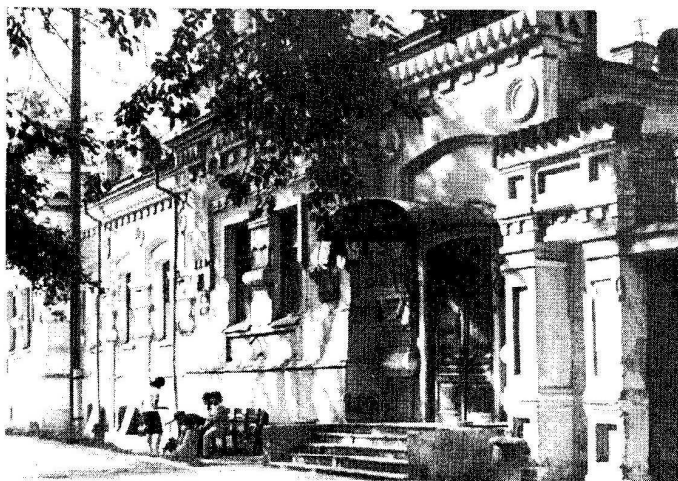
ユーロフスキーが使用していた「パポフの家」の室内。



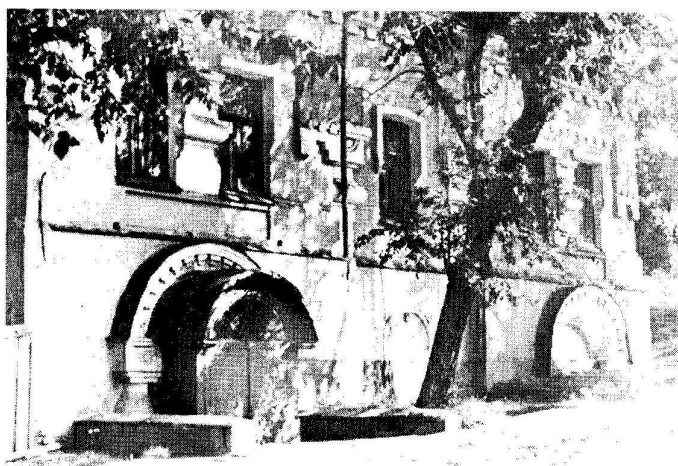
ロシア王国の財宝。多分、これらの貴金属はユーロフスキーが送り出したもの。



皇后の所有であった、このブローチは100カラットのダイヤモンド、周りにはサファイア。「世界革命の仕事」のために、ボリシェビキが利用した。



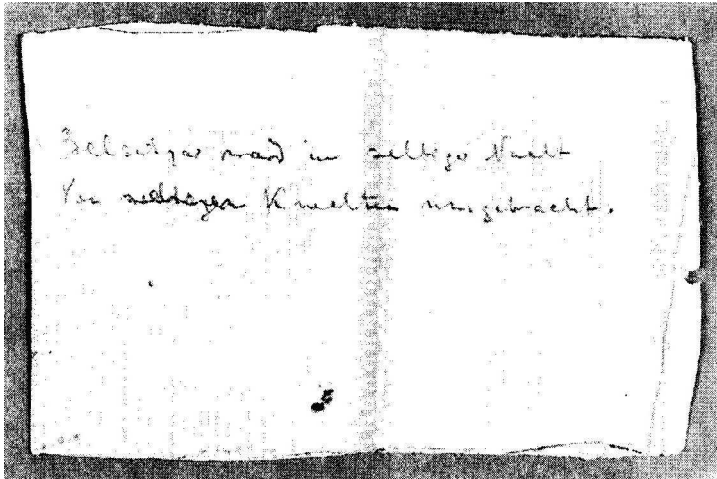
元イパチェフ邸。カール・リフクネ
クト通りから見た様子。
1976年8月



元イパチェフ邸。
路地側から見た様子。
1976年8月



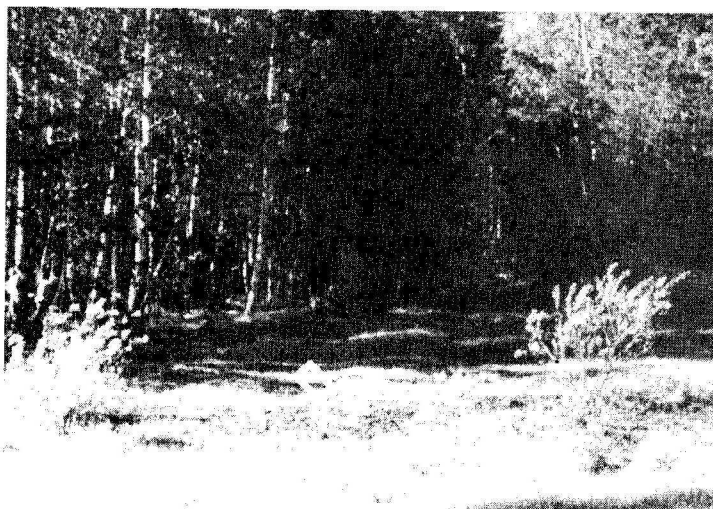
ポロシェンコフ窪地。芝生の層をはぎ取った。枕
木の上側の列が見えている。



「死の部屋」内の壁紙への書き付け



ポロシェンコ窪地の全体写真
中央に低木。ロマノフ家の「埋葬地」



旧コプチャコフスカヤ道。「埋葬地」
の上に古い轍がよくわかる。



ニコライ二世の娘のうちの一人の頭蓋骨。穴がよくわかる。9mm弾丸の入射口。



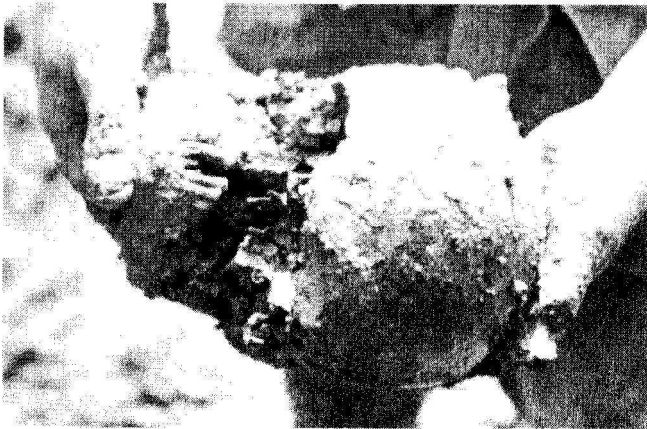
ニコライ二世の娘のうちの一人の頭蓋骨。穴がよくわかる。9mm弾丸の出射口。



アンナ・ステパノブナ・デミドワの頭蓋骨。硫酸の作用の痕跡がよくわかる。



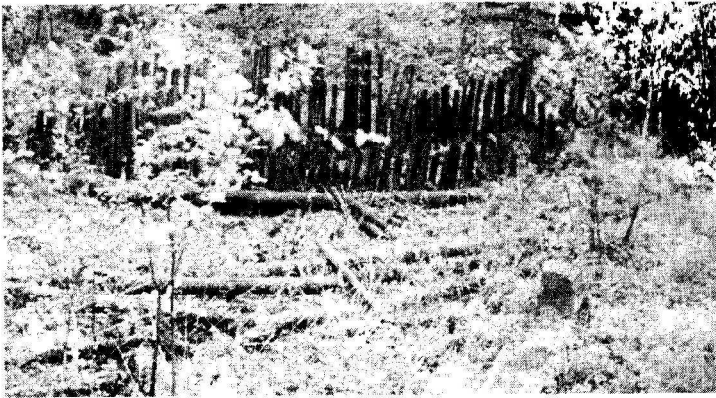
ニコライ二世の娘のうちの一人の頭蓋骨。



アナスタシア・ニコラエブナの頭蓋骨
を引き出した瞬間。



暴かれた埋葬地



「ガニナ窪地」。遺体探索時、ソコロフの兵士達がタイガ中にあった沼を間そうさせた。



「露出坑口」。坑道を確保した丸太が見えている。



抹消された「イパチェフ邸」の場所に残っていた古い庭の木と空き地。家は無い、問題はない？

ロマノフ一家の処刑を誰が命令したのか？ エカテリンブルグかモスクワか？

最初の説の根拠は、以下の点にある。ウラルソビエトは、非常に強い自治組織であった。名目上はモスクワに従っていたが、全ての決定を独裁的に行えた、ということである。モスクワの命令により、この犯行が実施されたという、どのような書類も、発見されていない。ウラル・ソビエトとモスクワの間の書簡は、無条件に次のことを証明している。ウラルソビエトは自立して活動しており、モスクワには、事後に報告をしていた。全く反論できない根拠がある。1918年7月16日、コペンハーゲンから、レーニンは電信を受け取った。「元皇帝が殺されたという噂がある。事実の伝送をよろしく。」その日の16時に、レーニンは返信をした。「噂は根拠がない、元皇帝は無傷である。全ての噂は資本主義印刷物のでっち上げである。レーニン」ある一人の著名な歴史家（かつては熱烈な共産主義支持者、今では完全に穏健派）が、若干の疑いを持って、私に質問をした。「君は、レーニンに不誠実さにおいて激しく怒っているのかね？ 彼は何も知らなかったのだ！ 彼ら（ウラル・ソビエト *）が全てを決定した！」

そのような確信には、一定の根拠がある。ロマノフ一家の乗った汽車が、エカテリンブルグへ向かって鉄路を動き回っていたとき、ヤコブレフのせつかに刺激された、エカテリンブルグのボリシャビキは直接レーニンと連絡を取った。これは滅多に無いことであった。

ウラル・ソビエト議長のベロバロドフは質問をした。「貴方に質問をさせて下さい。高度な判断が必要です。ロマノフ一家の乗った汽車が予想外の動きをしています。ロマノフの安全に関して、中央権力の我々の信用を疑わせることを、我々に強いているのではないか？」（彼ら、ウラルソビエトの安全に関して－著者）

予期せぬ展開・・・

ベロバロドフは生まれながらのゲス。1938年には、後頭部に銃弾を受けた。（銃殺されたということ *）ゴロシキンは、この弾丸を1941年に受けている・・・

このゲス的なことは神経疾患によったことは疑いはない。それだけによった。決して、「独立独歩」からではない。

よく考えてみよう。悪名高いユーロフスキーの「メモ」は次の言葉で始まっている。「7月16日、ペルミから合い言葉で書かれた、ロマノフ一家を殲滅する命令を含んだ電信を受け取った。16日夕方6時。フィリップ・ゴロシキンが文書で命令をした。」

もし全てを自身で決定したとするならば、ペルミから、何故そのような命令が？ この際、ペルミは？

ユーロフスキーの言葉に、重要な言葉がある。それが全てを説明する。「電信」他の言葉で言えば、この時には、エカテリンブルグの電信は、モスクワと連絡を取ることはできなかった。国内戦時には良くあったことである。モスクワは、ペルミを経由して、「殲滅」に関しての命令を送った！

他の説明ではうまくいかない。書類から我々は知っている、ロマノフ家の問題を例外とすることなく、エカテリンブルグは全てをモスクワと一緒に判断した。モスクワ以外に誰と！

ソコロフは、モスクワとエカテリンブルグ間の電信を明白に解釈した。モスクワは命令を下した。エカテリンブルグはロマノフ一家に関して行われた仕事について報告をした。

さらに、もう一つの書類がある。私が、全露中央執行委員会（ВЦИК）基金で、それを見つけた（利用部の私の案内者の手助けで。）。これは、ウラル・ソビエトとモスクワの間の、いわゆる直通通信による対話の記録メモ（ヒューズ型電信文字装置を使っていた。）。この記録は既に公開されて皆が知っている。しかし、私は全文を引用する。というのは、それには、悪名高い鍵となる言葉があり、それが多くのことを説明し、多くのことの真相を明らかにするからである。次の通り（訳者注 かつて使用されていた日本での電信文も文字数を減らすために、最大限の努力をしていた。それと同じように、ロシア語での電文も簡約されていたようであり、極めて理解しにくかったが、我慢して「意識」した）

「人民会議（СНК）議長レーニン同士へ、スベルドロフ議長へ、エカテリンブルグより、18年7月17日。（ロマノフ一家殺害完了の時である。－著者注）地方労農幹部会の装置から。エカテリンブルグに敵軍が接近しつつある。元皇帝と彼の家族を誘拐するという白軍の陰謀を非常委員会が暴いた。書類などは我々が手に。命令により地方ソビエトはニコライ・ロマノフを7月16日（これは間違い。多分動揺していたため。－著者注）に銃殺をした。彼の家族をそれなりの所へ避難させた。この結論に関して、我々の方から次のように報告をする。

ウラルの赤色首都に反革命ギャング団が接近しており、王位にあった迫害者が人民裁判を逃れる可能性がある。（彼と彼の家族を誘拐しようとする試みる白軍の陰謀が暴かれ、名誉を傷つける文書を公開しようとしたことがわかった。）革命の石を実行している地方ソビエトは、ロシア人民に無限の血を流させた罪により、1918年7月16日（同じく

17日ー著者注）夜に、元皇帝ニコライ・ロマノフを銃殺することに決定をした。この判決は実行された。ロマノフ一家の家族はエカテリンブルグ市から非難して、安全な所で換金されている。裁可を願う。
地方ソビエト幹部会
返信を装置の所で至急待つ。」

電文の余白には、赤インクで潔斎が。「第1番記録・・・」

よく知られていること。ソ連邦中央執行委員会（ЦИК）の1918年7月18日付の有名な記録で、ウラル・ソビエトの決定は「正しい」と求められていた。

しかし、我々は既に知っている。ペルミからロマノフを銃殺する命令をもった電報があったことを。

今、決定的な言葉。それは次の通りである。あの書類の中にあった「貴方の決済を願う。」

何かここでは、そうではない・・・銃殺の決定は自分たちで決めた。書類を自分たちで作ら上げた、モスクワ無しで。そのような事はできない？ 果たしてそうであろうか？

モスクワへ7月17日に発信された電信を、ソコロフは解読した。明らかに、それは話し合い後に、直接通信で出されたものであった。その内容は次の通り。「スベルドロフに伝えること。主人と同じ運命が家族もおそった。公式には、家族は避難中に非業の死を遂げたとする。」 理解するのに、頭が良い必要は全くない。直通通信での話し合いの後、モスクワの指導部はびっくり仰天する。どういうことだ？ 皇帝を殺し、家族は？

モスクワをがっかりさせないで、モスクワの命令の遂行を再確認するために、エカテリンブルグは、この補足の電信を送った。

他の説明を私は見ていない。

ウラル・ソビエトには、斯様な独自性はなかったー皇帝と彼の家族の殺害に関する決定を独自に行うことは、ウラルソビエトにはできなかった。そのようなレベルではなかった。どんな荒々しく、乱暴な勇気などここでは役に立たなかった。ウラル・ソビエトにどんな勇気があったというのか？

誰が命令を出したのか？

トロツキーが、自分の回顧録に書いていた。「我々が、ここで決定をした。」 想像してみよう、そのようなレベルの決定は、レーニンの承認無しではあり得ない。ただし、これは今のところ推量である。実証事実が全くない。革命の指導者をロマノフ一家の殺人で告発することは、間接的証明が閉じた（私はそれらを引用した。）とき、あるいは、指導者の関与を直接証明する署名入りの書類が見つかった時だけに可能であろう。あるいは証人の証言。陰謀には無関係であるということは全く理解できる。レーニンは、世界に対して（ヨーロッパの彼の急進な同志達に対しても）、血の復讐者、吸血鬼として見られるのを希望したのであるだろうか？ 思い出そう。マヤコフスキーの場合では？ 「共産主義者、そして、人間は血に飢えてはならない。」 彼らは皆、良く見られたがっていた（指導者の感じの良い写真を思い出す。）。彼らは2重人格者達であった。

全く信用のない（その当時）写真を私は見た。首にロープが巻かれたドイツ人民の指導者の遺体。この写真は、ニュルンベルグ市での処刑後、直ぐに撮影されたものであった。歴史は時折、異なった時代の出来事を直結してくれる。そして、出来事はより明らかとなり、透明性を帯びるようになる。

ニコライ二世とその家族を。残忍に殺した。

アドルフ・ヒトラーの同僚達を。正当に処刑した。

ロシア、人民にとって、何の役に立つというのだ？ 何の役に？

ニコライ・ベリャエフは確信した。1917年に、人民の多数が、本質において反人民革命を実行したと。

哲学者のこの確信には、ある霧のような質問が潜んでいる。それを避けて進むことはできる。が、チャーホフが言っている。必要がない。その通り。が、何故？

この本質については後で。

1918年7月25日、エカテリンブルグ市は、ボリシェビキからシベリヤ軍団と反乱チェコ軍団によって占領された。ウラル・ソビエトは、ペルミ市に待避した。

1918年8月21日、第3赤軍の指揮官ベルジンは、ペルミからモスクワに、特使を派遣した。特使には、鉄枠をはめ、ウラル政府の印が押されていた長持ち、長持ち用の鍵、第84号のための袋を持たせた。これら全てを、全露中央執行委員会議長スベルドロフ同志に引き渡すように指示されていた。同伴したテクニストから明らかである、長持ちの中には「元皇帝ニコライ・ロマノフに所属していた物品」。袋には何があったのか？ 不明。書類が、「（十月革命）」国立古文書館の全露中央執行委員会基金に保管されている。この書類から、これらの情報を私が読み出した。

不安をかき立てる文書であり、想像をかき立てる・・・

表面に黒いタイプ印刷をした文書。裏面は紫色。のびのびとした、少し誤字の多い指揮官の署名（月並みにロシア語を操れる者の視点からは。）。発信番号と受信番号・・・

私は少し考えた。「長持ちには、ロマノフ家の財宝が。これは確実な予想。番号84の袋には、ロマノフの「陰謀」に関する書類が何故ないのか？

私は想像した、黒色のボロボロのジャンパーを来たライダーが、クレムリンのスパスカヤ棟をくぐり抜け、全露中央執行委員会の建物のところで、ブレーキをかけた。

彼は階段を上がっていく。階段はもう皇帝のものではない。吸い殻が転がり、一面泥だらけ。ボロボロになった、宮廷での元制服を着た中年が、白髪の手を物憂げに揺り動かしながら、掃除婦を見ている。彼女は、バケツとぞうきんを持ち、床に付いた革命家の靴の跡を熱心に清掃している。

全露中央執行委員会書記局。配達使は、机の上に長持ちを置き、袋を渡した。書記は署名をし、スベルドロフ同志の部屋のドアの向こうに消えた。

スベルドロフが出てきた。隠しきれない興味心を持って長持ちを見た。ずり落ちそうな鼻眼鏡を鼻に押さえつけながら、低い声で、

「私のところに運んで来て。」

スベルドロフは手にした鍵で、秘密の錠を慎重に開ける。蓋が開く、・・・

ヤコフ・ミハイロビッチ・スベルドロフの眼前に驚き物が現れた。薬剤師で、政治流刑者で、革命家である彼が、以前に一度も見たこともない物が。

皇帝の財宝。

彼はまじまじと見る。指で、宝石、鈍く光る金に触る。指はかすかに震えている。緊張のためか、それとも・・・

スベルドロフ同志は電話を取った：

「ウラジミール・イリッチ（＝レーニン　＊）？　スベルドロフです。私のところに来て下さい・・・」

レーニンが駆け込んでくる。財宝の上に、かがみ込む。

「面白い・・・　君は驚いた？　無駄だ。これらは人民、労働者、農民の労働の成果だ。物質的な不公正は、このようなものではなかったのではないかね？　それはそれとして、袋の中には何が？」

上品な金製のナイフ（多分クレムリンの前所有者から没収したもの。）で、スベルドロフは袋を切り裂く。レーニンに紙の束を差し出す。

レーニンは読み、少し考え、そして、彼の目つきが変わる。が、平静で、皮肉っぽい表情は生き生きとなる。

「陰謀の書類・・・　うむ・・・」スベルドロフの方を見る。

「良くやった。良くやった！　私は何時も話していた、革命は、ツァーリズムによって押さえつけられ追い詰められた人民の理性を、天まで持ち上げた。

スベルドロフにぴったり近づき、ジャケットのボタンを掴んだ：

「内緒で話す。極秘に。私は確信していた。私一人だけが考えつくことができた・・・　そのようなことを。デルジンスキーは少し気が弱い！　論争はするな！　ポーランド人に引き渡し、皆殺しとし、その後、強盗団のせいになせよ。デルジンスキーにはこのような考えは浮かばない！　彼はポーランド人だ。」

恭しく、物思わしげに頭を振った：

「エカテリンブルグ市民、ウラル市民、君たちはよく考えた！　世界では、誰も敢えて言わない、我々がロマノフ一家を殺害したと。違う！　我々は彼らを処刑した。良心に基づいて。君は納得するか？」

スベルドロフは、心酔してレーニンを見ていた。

通の人なら確信している。財宝の入った長持ちは、戦争と革命のざわめきの中で、忘れられ、紛失した。1925年の土曜労働日の日に、クレムリンの階段の一つから、発見された、ことを。この長持ちの中身が、何処で使用されたかは、既に私は話した。

・・・1990年、ロンドン（この旅行については、そこで見たことと一緒に、後で話す。）で、ソトビス会社のロシア部で、私は沢山の写真（複写物）をもらった。それは、オークションで売られていたソコロフの遺品に関係したものであった。それらの写真の中に、極めて面白い写真が一枚あった。丸天井のホールに机がある。机の上に、ロシア皇帝の財宝が置かれていた。背広を着た男性達、極めて地味なドレスを着た女性達が机の周りに群れ集まっていた。ソビエトの勤務員であることは明らかだ。他の人と離れて脇の方に、余り背丈のない人、頭が禿げて、顎髭と口ひげのある人物が。彼も机の上の財宝を見ている。私の知り合い達、特に、探査の仕事に参加してくれた人たちは、この写真を見たとき、彼らは驚いて手を軽く打ち合わせた。「これはレーニン？　どんな机なのか？　驚き・・・

・」そして、追加する。「いや、これは、おそらくレーニンではないだろう・・・」

私は知らない。しかし、この写真を見たとき、以前に述べた私の空想が、根拠があると思うようになった。

主たる役割を、レーニンが果たした。それともレーニンではない人物が果たした？ レーニンか、レーニンでないものが、ロマノフ一家の殺害命令を出した？

書類はない。が、それらしき物はある。

誰も革命の指導者を非難しない。決定の採用において、指導者は同志の背後に隠れていたということ。そうでは無かった。県へ、ソビエトの指導者へ、党の指導者へ、彼の手紙はワンサカとある。「銃殺」、「逮捕」の単語を、ありふれて使った命令（相談文でも、意見文でもない！）の。

多分、ウラル・ソビエトは、指導者にびっくりする贈り物を進呈したかった？

子供じみて、無邪気な予想。

コペンハーゲンへの返事は、まるで彼は無関係であることを証明しているようである。

しかし・・・

レーニンの最も身近な同志であり、人民委員会委員長であるボンチ・ブルエビッチは歓喜して証言した。革命家ネチャエフの方法論に、レーニンは完全に同意し、彼に感激した。そして、ロマノフ家を、容赦なく始末することを確信した。

狂信者、「革命家入門」の著者、「全てが許される」という原理に従って革命の仕事を論ずる学生ネチャエフを比較すること、殺人に歓喜すること、組織に関して疑いのある同志の根絶に、何の躊躇もなく決定を実行し、びびることもなく殺害した者。これは、指導者の怒り狂って、容赦のない信念の証拠ではなからうか？

「我々の仕事は、酷く、完全で、至る所で、呵責のない破壊である。」これは「革命家入門書」からの引用。「革命の巨星」は、セルゲイ・ネチャエフに世界の労働者階級の指導者として与えた評価である。

ドストエフスキーの小説「悪魔」の主人公シガレフは、奴隷、密告、スパイ行為、専制、存在の群集心理を宣言する。未来社会の基礎として。これらの例のパンプレット的面から、もし話を逸らすならば、レーニンの輪郭がこれら革命の原理を通して姿を見せていないであろうか？ シガレフが30年に一度、社会に放り投げることを勧めた「痙攣」の概念ではなからうか？

この痙攣は、1881年3月1日以来、十分に正確な間隔で国につきまとい続けている。今日に至るまで。これは、ロシアは革命のエイズに感染し、未だに治癒していないことを示している。

・・・証拠はない。しかし私は確信している、一人が殺害を命令したと。ロマノフ一家だけではなく。1918年から1924年におけるテロルの知的教唆者はレーニンであった。全てが彼の良心に従って。1918年3月1日、モスクワで、イワン・ブーニンが自分の日記に書いていた。「ソビエト会議。レーニンの話。なんと生き生きしていることだ！

正確には言い表せない・・・」

ユーロフスキーが、皇帝家族のうちの、一人か二人を容赦したかのようなことを、私が読んだり聞いたりしたことがあった。私の視点からすれば、この仮説には何ら根拠がなく、ポリシェビズムの全く違う他の心理と実践を前提としている。そのようなものが実際に存在していたのであろうか？

さて、私は何を言おうとしているのか？

レーニン主義学校と呼ばれたポリシェビキは、「階級の敵」の、「ならず者」の、血も涙も無い不屈な処刑人であった。本質的に、彼らの解釈において。

人々は、レーニンとその同志達のために、骨身を惜しまなかった。これらの人々は、団結しており、潜在能力は高かった。これらの人々の助力で、巨大な建物が作られた。死刑執行のための、彼らの犠牲者のための内部の経験は、「世界革命の最終的勝利まで」、積み重なっていった。人々を鉄の手で幸福に駆り立てることには、情け容赦が無かった。

何の必要があつて、何故、ユーロフスキー（確信に満ちており、決して揺らぐことが無い人物）は、突然に、「人民と革命の敵ーロマノフ家」に対する同情の「悪臭がする七面鳥」を心と頭に取り入れる必要があつたのか？（＊ ？）

ユーロフスキーは誰も容赦しなかった。ニコライ・イワノビッチ・エジェフに、犠牲者に対してのある同情のようなものを、私は予想することができる。エジェフ自身、人間精神のポリシェビキ創設のある種の結果であった。エジェフには、意味づけをすることは何も要求されなかった。国家保安の活動に関して追想する必要も無かった。それ故、言うならば、エジェフは誰かの銃殺の代わりを務めることができ、見せかけで擁護に立つことができ、強制収容所からの手紙にも応答することができた。

ユーロフスキーは経路の始めにいた。我々は納得する。これが基本的な相違であることに。プロレタリア独裁の原理の立場から、ユーロフスキーは殺害をした。彼に人に対する同情があつたとしても。そこには、弾圧に支えられた権力があつた。

1982年11月10日、ブレジネフが死んだ。夕方、私は妻と共に、コンサートホールへ出かけた。「警察記念日」のコンサートであった。多くの人たちが当惑し、途方に暮れて立ち尽くしていた。誰にも事情がよくわかっていなかった。レオニド・イリッチ・ブレジネフが死んだ。私は理解した。シェロコフにとっては、辛い日がやって来る。私にとっては、今後、将来は「明るい」ものとなるのであろうか？

シェロコフの時に、国家保安委員会（КГБ）と内務省（МВД）の関係は、常軌を超えて深まった。「兄」は次第に、全能の省（「弟」 *）を前にして、謎めいていて超絶していた意義を失っていった。私は、映画「革命家として生まれて」の顧問カルペッツに、2回シリーズの台本、最終版、我々のテレビシリーズを持参した。内務省はこの台本をキッパリと拒否した。我々に話した。我が国には麻薬中毒者はいない。ソ連邦を麻薬中毒者が通過するなど、あるはずも無い。2本の映画の全くの無力さ。これは、我々の全般的な体制順応主義の悲しい結果である。しかし、ここが肝心な点では無い。私は思い出す。恰幅が良く、眼鏡をかけ、ゆっくりと、インテリらしく話していたカルペッツ将軍が突然、激怒した。「君は、何を書いたのだ？ 国家保安委員会の誰だかが我々のところに現れ、質問をする。そのようなことに関して、貴方のところ（内務省一著者）に、何かありますか？

（話は、犯罪側の登場人物のうちの一人についてであった。） この調子は何だ？ この厚かましさは何だ？ 君は、37年でのレベルでこれを書いているのか？ この時は終わった！」カルペッツは悔しがっている。「これに対して、私は両手を腰に当て（自信満々のそぶり *）て、問い返す。君のところー君のところは何が？」 ホンの些細なことに、彼は激昂した。私とナゴルニイは、国家保安組織の反駁を許さない権威の以前の伝統を敬っていた。カルペッツは、新しく、極めて積極的な大臣、ブレジネフの友人であった時、忘れる最もありふれた例となった。（？ *）

これは些細なこと。しかし、極めて特徴的な些細なこと。全ての国に（事実である、少し後になって）、歴史が轟き渡った。地下鉄の警察官がКГБの職員を殺したという。

私は予想することができる。シェロコフの興隆は、ソ連邦の国家保安委員会の指導部とアンドロポフ個人にとって、完全に耐えられない状況となったと。シェロコフの汚職、骨董品に対する異常なほどの嗜好性、に関する責任追及は加速していった。その関係の人物の「根絶」だけでは無く、打算的な目的を持って、彼を非難した。

そのような時代であった。そのように物事を見ていた。最近亡くなった、私の親友、オルロフ（著作権に関する全ソ機関も代表）を、ソ連邦中央委員会に招聘した。そして、副議長の妻は古い家具の収集に夢中であった、ということを描いた。「君は革命家だ！ 何故、古い家具が革命家のところに？」 中央委員会の職員はオルロフに熱く語りかけた。

疑いなく、状況はシェロコフを絶望（それとも名誉。私はこれには少しも反論はしない。）への行為へ導いていった。状況は深刻で、重大であった。

気味の悪い情報が入った。ニコライ・アニシモビッチ・シェロコフが自殺をした。私は聞いた。彼には完全に公的に、「友好的」に電話をし、警告をしたと。逮捕するために、КГБの職員が出向いた。「貴方には未だ少し時間がある・・・」 そのように大臣に話しかけた。彼は祝典用の制服に着替え、猟銃を口にくわえて発射した。

此の凄惨な出来事の詳細が完全に正確なのかを、私は保証はしない。それは原理的には正確ではある。これは伝統である。91年に、内務大臣プゴが同じようなことをした。彼は確信をしていた。かつて、スターリンがヤゴダとエジェフと一緒に行動したように、エリチンが彼と一緒に行動することを。

私は知らない。プゴには何の罪があったのかを。彼の肩の上には、どれだけの責任のある荷が乗っていたのか。私は思う。為したことに驚いたのではなく、即ち伝統であったと。

シェロコフには何の罪も無かった。何にも！ 彼は誰も殺してはいないし、誰も強奪していない。彼の時には、内務省は犯罪活動の調査及び阻止に関するまっとうな組織であった。彼の時に、内務省は近代的で十分な装備をするようになった。しかし、彼は理解していた。党関係の同志は、彼に骨董品への熱中を許さないことを。彼はでしゃばった。シェロコフ。これで終いではない。

ソ連邦共産党中央委員会の外国局主任ファーリンのところに、とても素晴らしい収集物があつた！ しかし、ファーリンは控えめな騎士のように、静かに生活し、一人暮らしで自分の宝物を楽しんだ。ファーリンは誰も出し抜かなかった。しかし、シェロコフは出し抜いた。彼は余りにも自分の力を信じた。自分の地位の堅固さも。彼が言ったことを、私は思い出す。金製勲章の受章と軍将軍の称号の拝領の後、「今、我々は何でもできる！」

私は、全てにおいて、この人物のおかげを被っていた。今、彼について書く。心から誠意を持って書く。

彼の墓と、彼の妻スベトラナの墓は、バガンスキー墓地の「ミリチア（警官 *）区画」と呼ばれている場所にある。目を見張る墓である。少し異教の感じがし、確かに心にしみる。古い様式を取り入れた石碑の上の2つの像、個人の顔の特徴はない、ただ動きだ

け、お互いに手を引き合っている。シェロコフの伴侶は、大分前に、銃で自殺をした。あり得ない侮辱と八方塞がり。質問「何のために？」ーロシアには、いつでも響き渡っている。ロシアの政府は、献身的で専門家である人々を、評価しない。これはロシア権力の病気である。

素晴らしい記念碑。

ノボデビッチ墓地には、ある軍司令官の記念碑がある。故人は、手に電話の受話器を持っている。これは、生前の彼の活動を象徴している。

シェロコフ夫婦は、そのような無意味なことを避けた。

・・・その後、私の共著者であったナゴルニイが亡くなった。私は一人ぼっちとなった。ロマノフ家の探査記録資料のための、場所保存のための、重い責任を持って。

サーシャ、私、ブラッド・ペソツキイが残された。我々は不安を抱えながら生き続けた。今では、国家保安委員会が指を少し動かすだけで・・・ 文字通り、我々はただでは済まぬ。

自分の記録資料の最期の一枚まで、極ありふれた段ボール箱に入れて封印をした。保管のために、自分の親友に、非の打ち所のないほど純粋な人物に、渡した。

今日、国内外で、私が、国家安全の秘密の協力者であったことが知られている。わざとことを曖昧にする。エージェントは何を怖がるのか？ 誰を怖がるのか？

しかし、この簡単ではない話を始めるより先に、概念を明瞭にしよう。これが大事である。

まず、「エージェント」とは何か？ これは、政治警察や犯罪警察の探査機関からの依頼を受けて活動をする人物である。正確を期そう。エージェントは、それ相当の機関が募集を行った、最もありふれた市民であった。この募集は、仕事に興味をわく場合にだけ、成り立っていた。

推定するのは難しい。検討中の仕事に、エージェントが入り込んだことを。とにかく、エージェントは依頼された仕事を遂行するだけである。

正確にはなかなか言えない。成り立ての秘密の協力者は、仕事先に何かを示すということで、応募が成り立っていた。仕事先が今日まで知らなかったことを。我々の場合には、ロマノフ一家の埋葬場所。

第一に、国家保安委員会の頭脳と力と手段を持ってすれば、国家保安委員会は評価をすることができ、エカテリンブルグの非常委員会の前任者たちによって、1日そこそこで掘られた穴を発見することができた。

第二に、そのような件には、募集は必要がない。そのような者は人に話しかける。何処で、状況は。この人物は全てを話してしまう。沈黙することは無分別であり、余りにも深刻な結果である。

私を誘わなかった。何処へも、決して。

しかし、誘いがかかった。私は、死体のように、出不精で、無職でいる方を好んだ。しかし、場所は示さなかった。私は人物が変わった。

1989年夏、モスクワでの、全ソ劇団会議の展示会で、遺骨の写真を展示した。その時、全ソ劇団会議は特別の夕べをもうけた。犠牲になった家族に思いをはせるための。私のところに、夕べの主催者が近づいてきた。国家保安委員会の名において、極めて慰安的な考えを伝えた。ただそれだけの。「リャボフに伝えてほしい、何をはっきりさせるのか？

ロマノフ家か？ 我々（国家保安委員会）は迅速に、かつ確実にできる。」

しかし、私は心を引かれなかった。国家保安委員会を無視した。

私が、「情報提供のエージェント」の、あるいは、いわゆる「施設（？ *）」の協力者として、あるいは、志願のエージェントであったということを、国家安全委員会は必要としていない、ということがわかった。

即ちー依頼。どんな？ 何のための？

次のように言える。リャボフは国家保安委員会の依頼を完遂した。そして、パラセンコフ窪地の穴に、3つの頭部を個人的に運び入れた。それらは、1918年からクレムリンの地下室に保管されていた、3個の頭部そのものである。皇帝、皇后、そして皇太子。それらはユーロフスキーが、スベルドロフに、実行した事を立証するために送ったものであった。かつて、ロシアの将軍が、ハッジ・ムラト（* ?）の頭部を、アレクサンドル二世に運んだように。

これら全ての脚本を書き上げ、撮影する準備が、私にはできていた。

・・・そのようなことがあったのは、ええと、なん年だっけ？

論理的に予想してみる。70年代の終わりに、アンドロポフは採択した。切り札となるか、ならないかわからないが。政治上における決まり切った声明を国民に。「ニコライ二世と彼の家族の埋葬地を、我々は知っている。我々は一般に告知する。元皇帝とその家族は、不当に殺害されたと。我々は提案をする。元皇帝を丁重に埋葬することを。訂正し、

償い、回復することを。」最後の最後に、フランコ（＊　？）は国内戦の参加者のための記念碑を築いた。フランコは記念碑に書き入れることを命令した。「生が諸君を離反させた。死が諸君を一つに結んだ。」これは和解。論争を止めると言うことは、すばらしい。

こんなわけで、アンドロポフに報告をした。リャボフという人物が、ロマノフ家について興味を持ち、彼らを発見したと。「彼を招聘してくれ。」アンドロポフは指示した。

そういう訳で、私はルビャンカへ。国家保安委員会の全能の指導者の部屋へ。想像を逞しくして。我々の出会いは、いわゆる「非合法の部屋」でのようであった。「非合法の」と「秘密の」概念間の差は極めて大きい。「秘密の」部屋とは、ごく普通の、犯歴などのない市民が借りる物。この部屋へは、実務職員が、予定表に従って、自分たちのエージェントを、順々に招聘する。「非合法の」部屋には、登録された実務職員が住み着いている。が、大事なものは、この部屋は組織に所属しているということである。今の場合は、国家安全委員会に。

部屋には・・・ アンドロポフが、ルビャンカの自分の執務室に、私を招待するとは、私は思っていない。これについては、余りに多くのことが知られていた。しかし、本題は未だかってないことであり、結構デリケートであった。

「非合法の」部屋での面会は、私には、非常なる感銘を与えた。

私は思う。部屋はモスクワの中心から余り遠くはない。材質が良く、手入れの行き届いた、しっかりとした建物の中にあった。ユリイ・ウラジミロビッチ（・アンドロポフ）は、ここに住所登録をしていた。彼の専属職員は・・・という名で知っている。・・・は匿名である。この部屋は、8階建ての建物の4階にある。広場には、もう一部屋が。それも使用している・・・ これは蛇足である。

中庭に入っていく、角に玄関口、左にあるエレベータで上がっていくと、著名なオペラ監督と出会う。国家保安委員会との自分の親密さを隠したかったが、そうはできなかった。

私がベルを押す。きっちりと制服を着た、白髪の中年の人が私の顔を見る。

「服を脱いで下さい。貴方の前にロッカーがあります。」

奥の部屋へと進んでいく。素晴らしい家具の並んだ部屋。本が詰まった棚。壁には2枚の素晴らしい絵。ソファに両足を投げ出している人物。彼、アンドロポフ。黙ったままジロジロ見る。「君の写真を見た。似ていない。座りたまえ。」

「若いときの写真で・・・」 私は遠慮がちに話し、ソファに向かい合っている椅子に座る。

「よく見えるでしょう。私は若かった。」

彼は黙って私を見続ける。博物館の展示物を見るかのように。私も黙り続ける。

「第一に、」彼の声はさえない。

「私はオネーギンを読んだ、読み直しもした。君は知っていよう。切断された皇帝の頭部に関する伝説について？ スベルドロフのような・・・」

「私はこの伝説を知っています。」

彼は頷いた：

「これは、伝説ではない。」

頭を少し回した。制服の職員が、テーブルの上に高く聳えている覆いを取り払った。透明の液体の入った3本の瓶が現れた。レニングラードの科学アカデミー博物館、元クンスト・カメラで見たことのあるようなものである。ルイシュ牧師の収集物。子供の頭部。

ここに皇帝。目を閉じて優しい顔、苦痛で少ししかめ面。ここに皇后。目をカッと開いている。目には全くの無気力さ。子供も目を見開いている。いつも通り髪をくしけずっている。右側に髪分け目がわずかに残っている。3人の首は、白いもので隠されている。

「これは・・・ なぜ？」私は漸く言葉を発する。

「切断した・・・」アンドロポフは冷静に語る。

「滅多に見られない光景・・・ 君は発見した・・・ 場所を？ 埋葬地を？ 我々の資料からすると。そうだ。」

この「そうだ」は、反駁を許さぬようなものだった。

「私への要求は何なのですか？」 声が震えるのを押さえるのが精一杯。

彼は沈黙し、私をにらみつける。

「君のやっていることを、美容室で仕事をさぼっている女性のやっていることと比較できるか？ 我々は全て知っている。誰が君を助けているかも。非常に大変な責任が、ゲリイ・トロフィモビッチ（・リャボフ）・・・ そうではないかね？」

「私はどうしたらよいのですか？」

「君は重大な国家的犯罪を行った。」彼はぞんざいに語った。

「労働者と農民の隊列の打倒に、君は寄与した。潜在的に。」

「裁判になるのですか？」

「我々が裁判所に命令をすれば、裁判となる。」

私は裁判にはうんざりだ。アンドロポフが続ける。

「これら3つの頭を包装する。我らの関係者が、それをしかるべき場所に持って行く。君が示してくれる場所にだ。」

「もし・・・私が同意しなかったら？」

アンドロポフは自分の部下を見続けた。眼鏡をかけた目にはかすかな笑みがあつた。

「同意しない？ 何故だ？」

「もしかしたら、この話し合いは言い訳かもしれない。（＊　？）貴方は場所を知りたがっている。そして、そこを抹消したがつている。私が知っているわけがないでしょう？」

「場所を知るために、君と一緒に1時間そこら一仕事をする。場所を知るために、劇場は必要ない・・・（？　＊）」

頭部の入った瓶の方を向いて頷きながら、

「私は監督ではない、ゲリイ・トロフィモビッチ（・リャボフ）。とにかく、受け入れる。それとも受け入れない？」

そして、私は決心をする。

「ところで、何故貴方がこのことを？」

「君は直接質問をし、私は直接返事をする。政府にはいろんなことがやって来る。これは・・・埋葬地。我々の全体の、政治的な資源・源泉である。」

想像が高まった。今、私に。同意しなさい。私は十分に最もらしく全てを述べた。

全能の国家保安委員会の、全能の手段を見るものには、さらに想像は高まる。

新聞「ソビエトスカヤ・ロシア」で想像が高まったのはそんな昔ではない。親愛なる新聞は、私を警官に任官させるよう促した。が・・・達しなかった。シェロコフは私には好意的であつたが、警官の身分で賞してくれなかった。非常に悔しい・・・

もっともらしい出会いと話し合いであつた。というのは、アンドロポフも国家安全委員会も決して、そのような状況で、私には対応しなかったからである。秘密は余りにも多い。余りにも信じられない結果。偶然居合わせた人（彼らにとって、私は正にこの人に当たる。）を信じない。

この空想はブルジョワのその他の出版物によって、正しいと証明されなかった。このための何の小さな根拠もなく、いや全くなかった。

とはいっても・・・

とはいっても、直接の質問を共和国保安省（ФСБ）の指導者にすることはできる。彼らの適当な返答は、私の役には立つはずがない。この事は私は十分に知っている。

どこでも、いつでも、どんな状況下でも、特別局は自分のエージェントを明らかにすることはしない。教会を再建する場合以外は、局（ВЧК—ГПУ—ОГПУ—НКВД—НКГБ—МГБ—МВД—КГБ—ФСБ）は旧秘密エージェントを追い続ける。かつて、ソビエト政権が保安部の秘密エージェントを追いかけたように。無慈悲に、妥協することなく・・・

なおさら、国家保安省（ГБ）との「共同作業」で、私とアブドーンを非難するものは、一寸したことを理解する必要があつた。エージェントが任務を遂行した時、彼を「仕上げ」から排除する。ありとあらゆることで、仕事への彼の参加を均し、ぼかす。いうならば、何の「成果」もなかったことにする。例えば、「一度きりの任務」であつたとか。仮に認めよう。エージェントに権利があるのであるだろうか？ 万能の組織、国家保安委員会（КГБ）に反抗することができるのであろうか？ 全てを公開し、自身だけではなく、組織を暴露することができるのか？

これは不可能である。

出版物を通しての私の発言は「オペレーション」の継続であるとみなしている人に対して、私は簡単に、明瞭に言う。そんなことはない。と言うのは、1989年には、国家保安委員会（КГБ）が全てについて社会に報告することは、有益であつた。体制からの月桂冠を得たであろう。罰を受けるのではなく、全く人権面から。結果の公表において私は必要なかった。

それでも、これら全てを疑っている人には、これら全てはどうでもよい。そのような人には他の問題がある。

ここに、私は提起する（提起することは極めて危険！）ことができる。そのような中傷者達は何度も、1989年に、*****

なおさら、余り留意しないで読んだ人は、私が切断された頭部の存在を信じている、と考えているようである。

何というか・・・ボリシェビキは全ての点において才能があつた。故人となったウラジミール・ソロウヒンは信じていた。全てはその通りだと。信じていた画家イリヤ・グラシユノフは今でも健在である。ある問題（？　＊）があつた。これら頭部は誰も決して見た

ことがなかったという。
誰も決して。

80年代の初めに、私とサーシャは、ロマノフ一家のトボリスク経路を辿ることに決めた。知事公舎ーアバラフスキ修道院。この考えは、私が考えたものであった。雑誌「アブローラ」の1976年号で、偶然に読んだことに若干影響されたのである。それには、レニングラードの女性詩人ニナ・コロレバの詩があった。この詩は、若干は知られていたが、既に忘れ去られていた。その詩を全文書き出す。

(詩は難しい。－＊)

解けたのか？ それとも、目が覚めたのか？
有り難う、愛しい人。
煙の匂いを持って、
地上に戻ってきたかのよう

蜂蜜の甘い芳香の匂い、
緑の松の匂いのする小川に、
トボリスクの木造小屋の、
焼き付ける太陽の下で。

私は顔を上げたよう
誰かの微笑みで、
私は又待っていたかのよう
不安定な喜びのために

川面に映った町、
黙して、慎重に。
ここで、盲目のクーヘルベケルが死に
大地に埋められた。

炎が揺らめいていた年に
細い旗の下に、
その町には笑いはなかった
皇后とその子供達に・・・

私は溜息をする、
彼らを助ける、尊大ではなく、
災難、弾圧に関わって
悪意に関わって。

(殆ど意味が飲み込めていない。－＊)

冷たいガラスに、額をぴったり寄せて、私はたたずんだ。ガラスの向こう側を、大きな雨粒が滑り落ちていった。それは涙のようであった。私自身が涙を流しているかのように、私には思われた。否。そうではなかった。私は本当に泣いた。号泣は私をふるわせた。許しを請う涙であった。「今日、許せ、ブラジコ、神の僕・・・(？ ＊)」

良いとも悪いとも判断しないし、したくもない。これは、私には、今では何の価値もない。これ故、心の状態を人間的に表現できたとすれば、素晴らしい詩である。

この素晴らしい詩に、ソ連邦中央委員会はどのような反応をしたか？

「アブローラ」の編集長を仕事から解雇した。信じられないような決まり文句・・・ズボンには「脱ぐ」ことはできる。細い方の部分には「問題」が。同じようなやり方は、既に言葉の側面。ほら、「仕事から」・・・

レーニン同志の時代は価値の作り事である。当時、多くのことを考え出し、今日ではしゃっくりが出る。(？ ＊)

もし、何故と問いかけるならば？

女性詩人は問題を提起した。全人類の立場に関しての。何故？ 10年も経過した後に、囚人となった皇族の運命について、考察をしては駄目なのだろうか？

何と、駄目なのである。何となれば、「全人类的」、これが危険。これは我らの言葉ではない。この言葉には、「シオニズム」が隠されている。まさに、我々は「全人类的」ではない。我々は10月革命から生まれている。「昔に為された話をするように、我々は生まれた。」(？ ＊)

よく考えてみよう。昔作られた話。

権力の所に、彼らは残り続ける。我々の所には、いつも、「旧式」。自動車は産業の英雄、「フルシチョフ品」には、全てに、誰も何の期待を持っていない。

多分、期待は、今では少ない。ポリシェビキにおいて。しかし、何時か、この大半がポリシェビズムの短いズボンから、均等配分から飛び去ったならば。その時には、全ての人々のチャンスとなる。例外なく。

・・・そして、我々は出発した。

見知らぬ土地－それについては全く知らない－に、突然やって来たときに、その土地は、良くても、極めて上っ面の印象をもたらす。知識、同情、追体験で重くのし掛かるトボリスクへ、我々は到着した。

ほら－町。丘陵に建つ家は、クリン、カリーニン、キーロフの町外れと何ら違うことはない。ゴミ、ゴミ溜、建設現場、廃墟。トボリスクに昔からある木造家屋は取り切れていない。「ここに市立公園を作ります。」 ふむ・・・

下方、要塞の修道院の壁の端の向こうに、一見して、良く保存されていた。水平に続く家屋の列。木造の劇場。県知事庁舎。無意識に記憶が蘇る。作家で、地方学校の校長でもあったエルショフ。ここには、ラヂシェフがいた。メンデレーフ、画家ペロフはここで生まれた。その他沢山の人物が。これらの思いは、道ばたのところでどこかへ飛んでいく。囚人や流刑囚としてではなく、我々はここへ来た。が、これには興味がある。ほら、あそこに、見窄らしく古びた監獄が。県知事公舎。バルコニー（かつて、皇帝と皇太子はこれに思いを持っていた）はというと、ない。周りの庭も。見窄らしい映画館が建っている。斜めに伸び上がったブームの上に、プロペラ飛行機。ソ連邦の技術発展の記念碑。

県知事公舎の反対側に、後期の建築様式の手の込んだ建物。「コルニロフの家」というらしい。ロマノフ一家を連行してきた全員、そして関係者がここに住んだ。タチヤナ・ボトキナは、侍医であるエブゲニイ・セルゲービッチ・ボトキンの娘。ボトキンは、コルニロフの家から、皇帝、皇后、娘マリアをどのように移送したかを、自分のメモの最期の頁に書き残している。ボトキンは書いている。旅行機が動き出し、角を曲がるまで、じっと見送った。心臓が凍り付き、大きなショックを受けた、と。タチヤナにはわかっていた。敬愛しているこの人達を二度と見ることはないだろうと。

厳しい言葉－決してない・・・

墓地。3つの墓石の真ん中に－キュヘリベケル（デカブリストの一人、プーシキンの友人＊）の墓。頭には何も思い浮かばない。（私と違って、ニーナ・コロリョバは非常に感傷的だ。）プーシキンの詩を私はつぶやく。「夕食を私は食べ過ぎ。ヤコフはドアを謝って閉めた。私の友人、キュヘリベケルのように、私は気が滅入る。」私はキュヘリベケルを可哀相に思う。彼は革命家であった。馬鹿で気の毒な人間であった。彼は、10月25日の攻撃に助力をした。意識的に。これは誇張ではない。

1825年12月、ウイリヘリム・カルロビッチが、皇帝の兄弟であるミハイル・パブロビッチ大公を撃った。彼らは同年で27歳だった。かつて、キュヘリベケルの父はパブロフスキー宮殿の責任者であり、パベル・ペトロビッチ皇帝に近い人物であった。銃撃が起こった。しかし、火薬が湿っており、不発であった。ミハイル・パブロビッチは自分の兄弟である皇帝に、犯行を許してくれるように依頼をした。キュヘリベケルは20年の懲役を受け、永久追放となった。そのようなことで、彼はトボリスクに住むことになった。

・・・私は彼の墓のそばに立ち、考えた。彼によって始められた革命の曲がりくねった小道は何処に続いていたのかを。彼の意思と理性の後継者たちは、数百万の人々を簡単に射殺した。これらの人々の理性は、10月25日の向こう、「呪わしい過去」にあるという疑いの元で。これらの人々は全世界的な生活共同体を建設することには役に立たなかった。そこでは、各自が各自を密告するという・・・

イルチッシュ川の向こうには、少し目を引きつける広大な水平な森が続いていた。空の底なしの天井は、私に襲いかかるかのようであった。私は誰？どこから来たのか？何処へ行くのか？どうして私がここにいるのか？この古典哲学の永遠の課題は、私を打ち負かしはしなかった。いや。私の周りの大地は永遠であった。私の頭の上を、さっと通り抜ける風は始めも終わりもない。起こりうること全ては、既に起こった。

私は神に許しを請うた。心から。涙ながら。

・・・トラックに座る。陽気な運転手は、イルチッシュ川沿いに、アバラクスカヤ修道院へと我々を運ぶ。多分、ロマノフ一家は、アバラクへの行程中に、汽車の窓からこのような光景を見たことであろう。今の我々とほぼ同じような。村落、教会、そして広大な天地。手を差し伸べよう、届くかも。気味の悪い幻想・・・

地面にめり込んだ家々、かつては華麗であったろう古びた残骸のような教会が見える。18世紀～19世紀に、地方独特に発展したバロック様式である。村には、この様式は希である。ここでは、村ごとに、そのような教会が建っている。我々を出迎えるかのように。

廃墟、廃墟、廃墟・・・

オビ川とイルチッシュ川の出合いの所には要塞がある。そこへ入ってみる。消えかかっている焼け跡。教会の中、悪臭と乾いた糞。多分、教会は捨てられた。全ての教会が。しかし、今は私には見えるように思える。祈りを捧げる群衆の中を、ロマノフ一家が進んだ様子を。私には聞こえる。彼らを歓迎し、神の加護を期待して手を差し伸べている様子が。彼らに喜びがここで・・・

我々は幻想や夢を見るのが好きだ。本物は余りを与える。完全な荒廃のもとにある。いや。もう沢山だ。ここから去って行く・・・

この地方の住民たちは、小さいステリャディ（チョウザメの1種 ＊）を購入する。それをビニール袋に押し込み、塩を振りかける。ホテルで見かけたときには、机の上に、北方民族の塩漬け肉が並んでいた。それほど旨くはないが、ステリャディ。今まで、絵でしか見たことがなかった代物である。

その後、博物館に行く。修道院の柵内にある。肩にスカーフをかけた高齢の女性が館長。多分。我々を受け入れてくれたが、余りうれしそうではない。今では多くの人が、ロマノフ一家、ゲルモゲン大主教（覚えているだろうか、彼は地方の、ロシア全体の反革命の支柱であった。）の運命に興味を持っている。女性はうんざりしていることであろう。これはやっかいだ。彼女は権力を警戒している。彼女は私の署名書を、時間をかけて注意深く読み、その後ため息をついた。「よろしい。貴方は何に興味があるのですか？ とはいっても、私にはわかりますが・・・」ニコライ二世が撮影した写真のコピーでできたアルバムを、我々は拝見する。アマチュアのコピー。県知事庁舎内の教会、薄暗い部屋、家具、窓、・・・このアルバムは何故か、印象を引きつけなかった。その代わり、陶製皿、銀の食器、・・・

これらの物を、彼らは手にしていた。見ていると何か奇妙な気分となる。食事で、彼らは座り、食器で静かな音を立てていた。彼らの中に・・・

他の日、定期バスで、チュメニ市へ。道中に、パクロフスキー村がある。かつて、この村に、グリゴリイ・ラスプーチン（皇帝一家の信を得た修業者 ＊）が住んでいた。

長い道程、うとうとし続ける。耳にはナデジダ・プレビツカヤ。高音で、力強い声。声は悲劇的に響く。「ロシアよ、雪でおまえを埋めた、白い吹雪となって、わびしい夜の風、君の上に祈りを歌う。」周りは夏、暖かく気持ちが良い。しかし、何故か、「沸き立つ、力強い」ものが、心を打つこともない。

バスは停車し、我々は下車した。平坦だ、机のように。真っ平らだ。際限なく。左に「ボリソエ村」、その方に進む。「関係者を何処で探す？」「ほら、彼の家・・・」年齢不詳の女性は平静に答える。ドアをノックをする。ワイシャツとズボン姿の40歳ぐらいの男性が私の証明書をじっくり見る。

「貴方は、シェロコフから？」

「そうです。委託されています（全て嘘、大臣からは何の委託も受けていなかった。）ラスプーチンの家の視察と、その報告を。」彼は人の良さそうな笑みを浮かべて、見つめる。

「貴方は遅かったですね・・・ちょうど1年ほど前・・・ご覧の通り、ない。」

「ないと？」サーシャが加わる。指導員（サーシャ？ ＊）は胸を搔いた。

「命令が届きました。徹底的に片付けるようにとの。もし、もっと知りたければ、中心通りに沿って、機械工場まで進みなさい。そこに、撤去した残骸があるので、見ることができます。彼の以前の家と並んで、本屋がありました。」

通りに出て、先へ進む。ここに自由気ままに住んでいた。今では、同じく自由気まま、ゆったりして。しかし比較できるのであろうか？

ほら、本屋。1階建ての見窄らしい小さい店。グリゴリイ・エフィモビッチ（・ラスプーチン ＊）の家は、透かし彫りの窓を持った2階建て。ありふれた家ではない、木造の邸宅だ・・・ほら。ない。原因は、かつて、モスクワがエリチンにイパチェフの家の取り壊しを命令したのと同じか。人民の道程は多様に成長している。不健康な興味・・・店に立ち寄る。記念に、ブレジネフ同志の本「処女地」を購入する。象徴・・・

機械工場。右側の遠方角に、なにやら不用なものが。地面の上に文字通り忘れられた故人（？ ＊）。丸太、杵、ドア、その他諸々。古い真鍮製の賭け金を窓から、注意深く折り取る。賭け金はすり減っているが、本物である。かつて、あの修道士の指が、これに触れていたかも？「ラスプーチンが皇帝一家をダメにした・・・」、「ラスプーチンが皇帝一家を墓に送り出した・・・」いろいろなことが語られ、語られ続けられよう。論点を変えよう。主眼は他の所にある。皇太子はラスプーチンがいると、血を流さなかった。修道士は血の流れを止めることができた。彼の言葉。「私が生きている間は、貴方は生きている。」疑う余地のない真実がある。ロマノフ一家とラスプーチンは一つの目的で団結していた。ラスプーチンは、ドミトリ・パブロビッチ大公、愛国者プリシュケビッチ、軍人スホチン（旧ソ連時代の著名な芸術家、リュボビ・オルロバの母は、旧姓がスホチナ

であった。人生ずっと、リュボビ・オルロバは自分の出自に悩んでいた。多分、自分があの軍人の姪であったから？ 酷な時代・・・ 舞台上で歌う。「私の母なる、広大な国・・・」、夜ごと恐怖で立ちすくむ。）、医師リゾベルト（画家セロフの絵からは、精錬された若者、犬を抱いている。）、フェリックス・フェリクソビッチ・ユスポフ侯爵（ラスプーチンは彼を「ちび」と呼んでいた。）達の愚行で亡くなった。

何故？。どこからそのような素朴な、まるでボリシェビキのような確信。明らかな張本人を殺すことには失敗し、混乱。これによって無分別な目的を遂げられる？ 無分別な目的は、卑怯な方法では達成できない。しかし、残念。誰もこれについては覚えていない。

彼の遺体は、死後そのままにおかれなかった。納骨所を見つけ、引きずり出しワイヤーを巻き付けた。一条まとわずに、皇后の窓のそばで。

アレクサンドロフスキー宮殿で、事件の現場で、このシーンを私は撮影した。引きずっていった。怒り狂った「革命群衆」は遺体を引きずり始めたその時、私のそばに立っていた2人の娘が怒って見ていた。突然ヒステリックに笑い出した。

「君たちは何を笑っているのか？」 私は驚いて質問をした。

一人はヒステリックな痙攣で、息苦しくなっていた。

「おまえは・・・ 悪党だ・・・ おまえは嘘をついている？！ 誰も何処へも彼を引きずってはいなかった！ これはユダヤ人の一口話だ！」

「では、ロマノフ一家は、つまり、生きていますか？」 私は尋ねた。

「その通り。何もあざけることはない。彼らはその後、農民となり、長く幸せに暮らした。そして、同じ日に亡くなった！ おまえは、悪党！」

私は彼女らを広場から追い出すように命じた。彼女らは長い間当たりをぶらつき、スローガンを叫んでいた。

私は少し考えた。何故、共産党側に、このような神話が必要であったのであろうか？

「本質において、ロシア的に」。答えは分かり易い位置にある。国家保安院会議長クリュチコフは、ゴルバチョフ時代に、気がついた。「組織」が銃殺をし、死の強制収容所に140万人を送り出したことを。これは、もちろん4000万人ではない。もし党が、ロマノフ一家に生きることを保証し、農業に従事することを強制したならば・・・

博愛の党は大変貴重だ。

ラスプーチンが使用したかもしれない掛け金を、私は今でも持っている。

1977年に、モスクワは、イパチェフの屋敷を爆破するよう命令を出した（これについては、私は既に記述している）。サーシャが、モスクワにいる私に手紙を書いてきた。数日間で、屋敷の周りに特別仕立ての塹壕がもうけられ、その後、ゴンゴンと音がし続けた。サーシャは、廃墟から、多分屋根の一部分の思われる物を手に入れた。

私が自分の目で、殆どが運び去られ、若干の残物はあった廃墟を見たとき、悲劇的な感情が戻ってきた。ストルイピンの予見のある言葉。「何も理解しなかった。何も学ばなかった。」 完全に、クレムリンの老人学的命令に、ラスプーチンの殺人者である大公に、我々全員に関係していた。殺人によって、歴史を変えてはならない。殺人によって歴史を緊張させ、悪化させることは、何回でもできる。が、生きた歴史は多くの場合抽象的である。組織はあからさまな人間の愚かさを知覚しない・・・ そして、卑劣さは、それ以上である。

「特命屋敷」は消滅した。「人民の復讐」広場。他の多くの物。

問題は残ったままであった。そして、問題はだんだんと膨らんでいった。

1981年、出版社「ソビエトスカヤ・ロシア」が、ナゴルニイとの共書である小説「私は防諜機関員」を発行した。このソビエト権力に絶対的に忠義である小説が、ソ連邦国家保安委員会、ソ連邦共産党中央委員会に激高を引き起こした。事情は以下の通りである。我々は、今までかつてなかった文学的役割で、レーニンに人間的特性を与えることを試みた。レーニンは権力者で神。直に革命の船が、彼のいない中で遠くへ航行始めるということを考察した。小説では、全く希望のない、悲しむべき考察であった。「人の選択においては、無限の誤りがある。」と、レーニン自身が言ったのである。後継者はいないという結論となった。後継者は、最も深く考えるレーニン。（？ ＊）

私たちは再販を準備していた。本はあっという間に売り切れた。が、突然、雷が鳴り響いた。「そのような反省は、レーニンに固有ではない。」と、マルクス・レーニン研究所の通人達が、私たちに書いてよこした。

「リャボフとナゴルニイは、ロマノフ一家を処刑したことについて、詳細を話している。－これはすでにソ連邦国家保安委員会の印刷局（＊ ？）－初版において、我々はこの記述を削除するように勧めた。編集者が我々の言うことを聞いてくれた。我々はこの小説を再版することは余計なことであると見なす。」

出版社に、でっぴりとし、中年の制服を着た人物が現れた。ソ連邦国家保安委員会の印

刷局局長であるヤコフ・パブロビッチ・キセレフである。出版社の編集長ノビコフと局長ヤコフとの話し合いの場に、私は居合わせなかった。しかし、直に、ノビコフが私を自分のところに招待した。彼は好意的で、温和であった。

彼はこびるように話し始めた。

「私には少しのお願いがあります。貴方の小説には、ブランゲリ（＊　？）とのシーンがあります。一度ならずに。聞いて下さい・・・ 何故、ブランゲリ？」

私は面食らった。

「しかし・・・ ピョートル・ニコラエビッチ・ブランゲリは国内戦争時の実在人物である。すなわち、この戦争の「ブランゲリ」期間について、小説で話をしている！」

「私はわかっている・・・ しかし、「ピョートル・ニコラエビッチ」は？ 君には思われたい？ この人物は血に汚れた死刑執行人？」

私には全てがわかっていた。長い説明もすることはできた。しかし、結論はピクトル・イワノビッチ（・ノビコフ　＊）には必要がなかった。

彼は考え込みながら続けた。

「レーニンはまだ・・・ 指導者のイメージがある。イメージ。君の場合、誰と何？ これは本当にレーニン？ 君の場合・・・ これら全て削除しなさい。第2版目は訂正が必要だ。」

我々は別れた。各自が各自の正しさを信じたまま。本は出版されなかった。

1985年がやって来た。ペレストロイカが始まった。私はわからない、ゴルバチョフは真っ先に何をしたいのかが。しかし、信用している。思慮があり、教養のある人間は、共産主義の人間的な改革を身にまとうことができると。知的弾圧と強制収容所のシステムは状況の圧力下で他の物に変化する、否・・・ このことについては、私は大分昔から信用はしていなかった。

1988年初め、私は決心をした。最終的に、そして断固として、我々の発見物を公表することを。もちろん場所は公表しない。事実だけである。

サーシャがモスクワにやって来た。1987年のある日に、彼が私のところに立ち寄って以来である。私は彼に話した、全てを話すときがやって来たと。

この考えに有頂天になることはなかった。サーシャが私に話した（後になって、書面で。）。「時未だ到来せず」と。「我々の子供達が、多分、いつか、取り組むであろう。」と。

これは私を奮い立たせなかった。私はサーシャの危機感を理解していた。ゴルバチョフの改革、ソ連共産党モスクワ市委国家保安委員会の第5局はどこへも消えていなかった。社会の雰囲気は少し生き生きしていた。この「新鮮さ」は解剖室の空気にたとえることができた。勿論、開いている覗き窓のところで。サーシャは警戒をし、正しく行動した。なるとなれば、昨日の「指導者」を信用することは、何の基台ともならなかったからである。

私は心から残念であった。仕事、危険、眠れない夜、結果に。私はサーシャに話をした。

「君は理解しなさい。その時まで。君の子供達が、我が祖国の歴史を、筋が通り、しっかりと理解できる人間となるまで。なんとも長く待たなければならないことか。しかしながら、もし我々が、発展する独裁の期間中に為すことをやっておれば、今日はより簡単に。今では、ほら、歴史雑誌に自分の名を登録したがっている多くの者が現れている。ほら、各々の結論をもたらしている。誰も保証することはできない。結果は我々の仕事全部を抹消することができる。」

しかし、サーシャはためらっていた。少なくとも、彼は最終的に、全てを受け取り、全てに同意した。これについて、私に手紙をくれた。

これら結構複雑な歴史の中に、2つの状況があった。今、それらについて話そう。

同じ1988年の初めに、サーシャは私に手紙をくれた。1982年の手紙と似たような物であった。もし、このサーシャの手紙を、何らかの理由で、私から取り上げたとしたら。その手紙には、ポロシェンコ窪地の計画が。ロマノフ一家の埋葬地があつた窪地の端にあり、そこでは新しいアスファルト道路が古い道路と盛り土で連結される。この手紙で、サーシャは私に提案してきた。差し迫っている公表において、埋葬の真の場所を500m程ずらすことを。その時、私は雑誌「祖国」の原稿を準備していた。私はそのようにした。サーシャの危機感は、無駄ではなかった。このところの事情については、後で戻ることしよう。

2番目の状況は次の通りである。サーシャと私には、共通の知人である牧師がいた。既に言及した手紙で、サーシャは私に知らせてきた。牧師は出版における私の行動に非常に不満であることを。全ての功績はサーシャの物だと。「わかるだろう、全ての名誉はリャボフの手に入るよ！」と叫んでいた。逆に、こちらモスクワでは、ありとあらゆることが私の耳に入ってきた。「サーシャは信用できない。」サーシャは「必ず私に先んずる。」等々。

これら全ては仕事の促進を遅らせた。残念ながら、牧師は余りにも我々の仕事に対する理解が少なかった。彼は心から、我々の為したいことに全力を捧げてくれた。英国国王の剣が我々の肩の上に下ろされ、最も権威のある勲章を我々が首にかけられるように・・・？ 多分、そうかな？

我々の目的は違うところにあった。勲章を我々は渴望はしていなかった。

しかし、残念ながら、仲違いになった。

ビクトル・アクシュチツのロシア正教哲学雑誌「選択」で、皇帝家族の惨劇に関する脚本を、私は公表した。ビクトルは当時、私を無条件に信用し、心から支持をしてくれた極めて数少ないうちの一人であった。後日、彼は、私の脚本によるロマノフ家に関する映画に融資さえしてくれた。しかし、やむを得ない事情で、この仕事を継続することはできなかった。

ついに解決の日がやって来た。新聞「モスクワ新報」から、私に電話があった。当時、この新聞は最も読者がおり、最もよく知られていた。新聞の売店には、何時も人々が行列を為して並んだ。真実を渴望していた人々が。

私のところに特派員がやって来た。背が高く、少し猫背で、もじゃもじゃ髪で眼鏡をかけていた。ロシア時代の典型的なインテリの風采であった。話し方はゆっくりで、声は低い。小うるさく、正確。彼は適当に頷きながら聞いていた。(私には思われた。*****) 殆どメモを取らなかった。数日後、私のインタビュー記事が、「モスクワ新報」に掲載された。「大地は秘密を漏らした」証拠として、頭蓋骨の写真が公表された。我々が皇帝のものと考えている物である。

私はプーシキン広場に出かけた。スタンドのところには群衆が群れていた。私は聞いた、熱狂的な評価と意見を。興味は偽物ではなかった。

しかし、他の言葉も聞こえた。「誰にこれは必要なんだ？」 「大分昔のことを、何故蒸し返す？」 「反ソ的な敵対行動・・・彼らの責任を問う必要がある！」

私は、受難の人にも、正義の人にもなることなく、静かに忘れ去られていった。

仕事は続いた。エカテリンブルグにおける惨事に関する資料の公表に関する準備を、私はした。

1988年3月に、雑誌「ユーノスチ(青年時代*)」に、ルポルタージュ「警官にはいくつの顔があるか？」を掲載した。ソ連邦内務省のシステムは、様々な原因で、根元から腐っていた、という話である。シェロコフの後、何人かが長を勤めたが、誰も問題を解決しようとはしなかった。1988年の内務省は帝政時代の内務省と何処が違っているのか？ 技術の点で？ 部局数の数で？ 耐えがたくもの凄いの汚さで？ 賄賂と犯罪の傾向で？ 技術とコンピューター素晴らしい仕事、オスタップ・ベンデル(？*)が言っている：「有効な初手のアイデアが必要である。」

そのようなものはなかった。全ては、旧態依然として、慣性のままに進んでいった。

ソ連邦共産党中央委員会は、資料を3度借り出した。テメンティエフと彼の次席は必死になって味方をした。何となれば、ソ連邦内で最も読まれた(第3位)資料なので。

公開後、私は、国家思想代表者リガチョフの判断を受けることになった。彼は私を「人民の敵」と呼んだ。ソ連邦内務省は、全ての新聞に、私を「職務利益の裏切り者」のアイテムで表記させた。

私は確信をしていた。雑誌「ユーノスチ」は献身的に、確信を持って、ロマノフ家のルポルタージュを公表するものと。

それなのに・・・

人間の背骨は自身の限界を持っている。(＊？) *****)

その時、私は「ロージナ(祖国*)」に目を向けた。

資料に大変苦勞することになった。部局の編集者は、太めで、のっそりしているが、極めて職能の高い女性であった。私に、修正、訂正を依頼するのは何時ものことであった。私には彼女はこの資料を怖がっているように思われた。この資料を、歴史家、評論家に読ませた。判断は、時折、真っ向からの反対であった。彼らの意見に対応するのにあつぱあつぱであった。私は映画の自分の仕事を憂いを持って思い出した。そこには、神よりも偉い編集者がいた。各部署の編集スタッフ、即ち、往時の聖なる異端審問官。ご婦人方、高官集団を通り抜けるのは全く不可能であった。脚本には、殆ど何も残らなかった。自分の映画が無条件にクレムリンの老人達に気に入られるように、監督が調子を合わせるのを、驚くことができようか？

私の年代の人はわかっている。タルコフスキーの映画は当時(最近でも・・・)、正に爆弾のように爆発した。彼の映画は、何時も逆らい、食い違っていた。

大半には、我慢するか満足する羽目になった。

・・・私は疲れ、神経質になり、資料を細々に破った。私の妻は、編集次長ワロージャ・ドルマトフに電話をした。当時、私には完全に未知である人間を、私は正に評価をす

る。全責任を彼は自分のものとした。資料は回復した。ワロージャは、危険を冒して、資料を「プラウダ」の編集長アフアナシエフに提出した。（当時、「ローディナ」は「プラウダ」の管轄に入っていた。）アフアナシエフは読了し、決済を下した。彼の考えは、資料は疑念の余地なく公表するに値する、ということであった。編集長は紙の端に書き加えた「我々が手を出さないと、他が公表する。」

・・・突然電話のベルが鳴った。不安にかられた妻が私を電話まで呼び出した。

「こちらは「モス・フィルム」です！」私は受話器に耳を押しつける。

「こんにちわ、ご迷惑をおかけします。モス・フィルムの監督のカレン・シャフナザロフです。」私は彼を彼の映画で知っていた。「ジャズに夢中」は、文句なく、素晴らしく、才能溢れた作品であった。素晴らしい俳優、悲喜劇に溢れた題材。私はこの映画を気に入っていた。「ロマノフ一家、彼らの惨事について何かをやりましょう。脚本を書いて下さい。」カレンが私のところに来てくれた。私は彼に資料全てを見せた。書類、写真、皇帝家族の惨事について、我々は多くを語り合った。

直に、わたしは脚本の第1案を書き上げた。案は旧態以前とした方法で検討された。芸術面の助言、意味ありげな発言。第1案は支持が得られなかった。「君は殺害について集中しすぎている。殺害はロマノフ一家だけではない。君は党全体、個々人に罪を要求している。それではダメだ！死に至る前の関係、生き方に集中するべきだ・・・」私は反論した。「私の脚本には、生き生きとし、活気溢れた人物がいらないと？関係は？死・・・では、我々は何について、映画を作ろうとしているのか？」

私は誰も説得しなかった。彼らは自分の立場を維持し、シャフナザロフは沈黙した。私はわかった。やって来た全てが、気分の悪い作られた喜劇だと。私が提案したものと比較して、もし、監督が他の何かを希望したならば、彼は私と一緒に仕事をしなければならない。しかし、私を嫌な目に遭わせたくもない。映画では監督が全てを決定する。合法的に脚本を退ける必要が、カレンにはあった。

それ以上に、彼の依頼で、もう2本の案を、私は書いた。突然手紙を受け取った。「自分の決定を貴方にお知らせしたい。「ボズネセンスキー大通り」の脚本に従った映画の上演は中止します。それに関連し、予定の計画に関する貴方の全仕事は中止、映画作品は閉鎖」（字間開けは著者による）。カレンは書いていた。「私は自分として受け入れられる芸術監督としての文学的脚本の決定を見つけることはできません。貴方が思っているように、これがなくては、映画作品を撮影するのはできません。多分、これは私の責任か、想像力の欠如・・・」カレンは旨くやった。段々と、彼は私を元気づけてくれた。

私が、ロマノフ一家に関する個人的なドキュメンタリ映画を撮影することに決めた、とシャフナザロフは自分の手紙で引用した。「私には、これに関して、何の特別な、貴方に対するクレームはない。もちろん、テーマ自身は誰の責任ともなり得ないし、ロマノフ一家の惨劇の歴史を物語る、様々な映画の出現はあり得る。少なくとも、私は決心した。これら全ては、「ボズネセンスキー大通り」の潜在力を弱める。「ボズネセンスキー大通り」は、正しく、殆どドキュメンタリー的な歴史性を向いている。その歴史性とは、もちろん、純粋なドキュメンタリー映画の出現に関連してである。」（？＊）

残念ながら、この手紙には狡さがある・・・

我々の関係の事始めを語ろう。私の概説を編集局へ。どこから、シャフナザロフはあれの存在に気がついた？

この概説は、日の目を見ることなくたらい回しにされており、「プラウダの編集長の部屋にあった。ことを、私は既に述べた。これは即ち、ソ連邦共産党中央委員会の部屋で、とりもなおさず、カレンが受け取ったということを示している。カレン父はソ連邦共産党中央委員会書記の秘書であった。

「いろいろな映画の出現は可能である。」しかし、「ボズネセンスキー大通り」の脚本の潜在力は全てを弱める。」そのような言葉を、映画の監督が口にできるはずがない。自分の目的を達したい人物が発した言葉である。

その目的とは？

シャフナザロフは私から、欲しいもの全てを得ている。3つの案、詳細、脚本、写真、書類、私の口頭の話。それ故、彼にはもう私は必要がなくなっていた。彼には彼に密接に関係している作家、ボロデヤンスキーがいた。疑いなく才能があり、シャフナザロフをよく知っていた。それゆえ、2人は、お互いに片言で意志が通じ合った。

もし・・・ならば、特別な罪はなかった。もし、カレン・シャフナザロフが企てをしなかったら。障害をなくすために、そして、全く違った脚本の制作のために、必要な資料を、自分の作家に提供するという忙事のために。これは推理である。理由がある推理である。私はそう信じた。

ボロデヤンスキーの脚本で撮影された「皇帝殺害」は、精神病院で治療を受けている、ある精神病患者について話をしている。彼は、自分をロマノフ一家の殺害者、ユーロフスキ

一であると信じ込んでいる。この精神病は、治療に当たっている精神科医に感染し、医者は自分はニコライ二世であると思いみ始めた。これは、シャフナザロフが私と一緒に筋を目論んだものであった。

何故、これが必要となったのか？ カレン・シャフナザロフにとって、家族殺害に関する映画は、完全に不可能であった、と敢えて仮定する。彼の父はゴルバチョフの側近。中央委員会、幹部会で関係が深まっていった。話は、厳しく、依怙贗眞の無い、頭にショックを与えるもの。レーニン主義者、ボリシェビキが何の罪のない人を殺した？ ということである。

そんなことは決してない！ このためには、最小でも、ゴルバチョフは知っていなければならなかった。レーニンとその党が死刑執行人、殺人者、銃殺者であったことを。ゴルバチョフさえ、これについては少しも触れなかった。シャフナザロフは「直接の」映画を撮影すると、決定を下すことができなかった。それで、精神問題として映画は撮影された。ゴルバチョフ、中央委員会は余り目くじらを立てなかった。映画では、精神病者の妄想が進行していく。現実的か？ 妄想か？ シャフナザロフは魚を食べ、皮を残した！

これはできなければならない。私は認めてやる。ボロデヤンスキーとシャフナザロフが、「期待される共産主義者」ユーロフスキーを、クレムリン病院（実際、ここで胃がんで死にそうであった。）ではなく、精神病院に入れ、現在のユーロフスキーは治療担当医師を、自分の精神病に感染させる。という風に考えてみると、これは「進行」ではない。（＊ ？）

これはでたらめであり、責任を回避するための幼稚な試みである。もしそうならば。

何度にも渡るインタビューで、映画「皇帝殺害」の制作者達は粘り強く繰り返した。このテーマは、何年も前から、我々は気にかけていた。映画のための資料も何年にもわたって集められた。これらは全て、シャフナザロフとボロデヤンスキーの良心に委ねられた。

モスフィルムの最近の社長カレン・シャフナザロフがテレビで発言した。ロマノフ一家の遺物は、彼に、ロマノフ一家の問題に通じている人に、大きな疑念を引き起こしている。我々は新しい映画の出現を期待している。カレンにはこれができる・・・

・・・私はこれについて全てを話すのは、過去をほじくり、この不完全な世界にため息をつくためではない。ただ、私は考えている、皇帝家族の周りには、多数の投機筋がいる。「素直な人」、でたらめな人がおり、彼らは何度も驚き、がっかりしている。

そのような問題は、瀕死の国、盗みや汚職で手に入れる、あるいは、生活のために日々の糧を手に入れる社会にある。

トーリャ・イワノフが私に語った。かつて、映画会館のレストランで。カレン・シャフナザロフを見かけたとき、彼に近寄って話しかけた。「こんにちわ、カレン。私は、リャボフではない。私は君に、愛想を尽かした！」

映画、映画・・・

1年後、トーリャは私と同じ態度をとるようになった。ソ連邦の映画界では、関係者の間でそのような関係はノルマである。

最近亡くなった監督エブゲニイ・ニコラエビッチ・アンドリカンス（彼が初めて、我々のナゴルニイと一緒に映画を撮影した。）は信じ、何時も話していた。「我々にとって、映画とは何だ？ 周りを見回してみよう、****。（？ ＊）」

覚えていますか？ 「映画作品は閉鎖。」 シャフナザロフ私に書いてよこした。あ、いや・・・

覚えていますか？ 「・・・テーマ自体は誰の責任でもない、いろいろな映画の出現が可能である。」・・・ これは私には、慰めというよりは、将来のものの基礎付けである。

* * *

「ロージナ」での公表は、爆発的な社会意見を引き起こした。編集局は全てのメールを受け入れた。怒りの不容認から提案・・・まで。年金を、将来のロマノフ一家記念碑に。読者全体の傾向は、この公表に対しては、好意的なものであった。私は、沢山の同情の声を聞いた。

5月に、「ロージナ」は、調査の主要部分である第2稿を掲載した。この記事には、埋葬地の場所、その調査についての話が書かれている。サーシャのコメントを、私は全面的に採用した。私は、スベルドロフのサーシャから手紙を受け取った。5月か6月に彼の手紙を受け取ったように思っていた、が違った。記憶違いであった。手紙は11月に来たものであった。そして直ぐに2通目も。さらにもう一度、私はサーシャの洞察力に驚かされた。危うく起こったかもしれない個人的な不注意に。

スベルドロフの地域研究者、ガラガン・パベル・イワノビッチとブルハノフ・アレクサンドラ・チモフェービッチの2人は、私に手紙をよこした。私が示した場所が重機で掘返され、土壌が持ち去られたと。彼らは、見取り図と写真で再確認した。

一致とはならなかった。私には何の疑念も無い。、若干の遅延があったとしても、国家保安委員会は仕事に取りかかり、我々の仕事の結果を抹消することを決定したことを。い

つも通りである。

大分後になってから、私は知った（大分思い過ぎの予見だが）、私のインタビューと「ロージナ」での公開の後、直ぐに、国家保安委員会は、私に決まり切ったサービスを提供した。私の通信を検閲し、電話を盗聴したのである。そして、「ナリュシカ（？ ＊）」の利用。しかし、この最後の件は、私は信用することはできない。私は全く気づいた覚えがないからである。幸運にも、手紙にも、電話の話でも、「真」の埋葬場所は明示していなかったのである。

私に、ロマノフ一族、その関係者、・・・からの電話が鳴り始めた。ロマノフ一族の「生き残った」親族達であった。私は、丁寧に、哀悼の意を込めて話をした。しかし、誰とも会わなかった。

あるとき、玄関のベルが鳴った。中年の女性が若者と一緒に現れた。クリムから来たと言っていた。感じの良い若者は18歳・・・

「私は、助けられた、アレクセイ・ニコラエビッチの娘です。」女性は断言した。

「アレクセイ・ニコラエビッチは、銃殺から難を逃れ、その後、家族を持ちました。私は、その家族の子供です。」

若者は黙っていた。私は詳細を話してくれるようお願いをした。誰が、何が、どうなっているのかを。

彼女は沈黙した。多分、ど忘れした？何を話して良いか・・・、

私たちは別れた。

後になって、そのような希望者達を、私は検事ソロビエフに遣わした。ソロビエフが彼らをどのように扱ったのか、私は知らない。

映画を制作したかった。私たちの探査について。ロマノフ一家の運命について。惨劇の原因について。その結果について。あったこと全てについて。アクシュチッチに助けを求めた。残念・・・彼にも、彼の友人にも、そのような資金はなかった。映画の制作には、高額のコストがかかる。

控えめであった私に、新聞、雑誌、テレビが興味を持ちだした。ロマノフ一家の探索について、ヨーロッパやアメリカで話題となった。あるとき、イーゴリ・ビノグラドフが私に電話をしてきた。私の友人であり、著名な批評家、文学研究家。話は以下の通りであった。彼のところに、マリオリナ・デ・ズリアニというイタリア人女性が来ている。ロシア語が達者で、ロマノフ一家について興味を持っている。イタリア人読者のために取材をしたいとのことであった。私は同意した。直ぐに私のところに、中年の魅力的な女性が現れた。生き生きとし、気兼ねをおかない、イタリアのネオリアリズム映画になじんだ手振りをして。彼女は偽りのない興味で、私を質問攻めにする。彼女の助手は、この話し合いの様子をビデオに撮る。私たちは親密になった。「トーリャ・イワノフ」が現れる。私は、ケベリンの小説「開かれた本」を扱った、レニングラードの監督血トフの映画を思い出す。本当のプロらしい仕事は希である。インスピレーションのある物さえ。別れの時、私が話す。王朝の破滅に関するドキュメンタリー芸術映画を作りませんか？彼は同意した。私たちは本当に親交を深めた。彼は我々の話の場をビデオに撮った。私たちはモスクワ郊外にも出かけ、広大な森で自然を満喫する。そこの森の自然は「4兄弟鉱山」に似ていた。トーリャは撮影に没頭する。その後直ぐに、彼はアメリカへ仕事のために出かける。私に、亡命者達の大量の出版物を持ってくる。第一次世界大戦の亡命者達が撮影済みの映画を見て涙を流した様子などの話をする。

映画界では、私より、トーリャの方がよく知られている。トーリャには彼を愛し、評価する連中がいる。レンフィルムで、将来の映画のディレクターを、あつという間に見つける（これが最も大事だ）。彼は制作を請け負う用意のある映画会社を見つけ出す。会社は銀行から300万ルーブルの大金を手に入れる。当時は大金であった。多分、何もかもうまくいっていた。そのような状況下で、映画「最期まで耐えて」が生まれる。

人生で初めて、私は脚本家と監督の役を同時に担った。少し大変であった。私は映画をよく知ってはいたが、*****・・・何にも。周りには、興味を持ち、私欲のない人々が。彼らが手伝ってくれる。詩人が語っている。「水平線は火の中だ。明るくて耐えられない。」

（＊？）

トーリャは私に、将来の映画の美術家と衣装担当美術家を紹介してくれた。彼らは夫婦であり、愛らしい人たちであった。

レニングラードに行く。私はレンフィルムに立ち寄った。全く様変わりをしていた。私の入ったグループは丁重であった。第2監督と、レニングラードの名跡を巡った。私が喋り続ける。彼女は素直に聞いている。ただ彼女には言いたそうである：「貴方の話は素晴らしい。が、監督が話しているよう・・・」

我々はペルミに飛んだ。皇帝の弟であるミハイル・アレクサンドロビッチ、彼の運転手

ボルノフ、秘書ジョンソンがここで亡くなっている。我々の映画は、ロマノフ一族の革命後の運命を、追跡していかなければならない。

古い町・・・ 真っ平ら、地面から工場の煙突が突き出しているようだ。空気は化学工場からの微かな臭いをただよはせている。時折、呼吸が困難となる。

我々を、著名な「王立ホテル」に案内する。ここに、大公が自分の従者達と住んでいた。ここから彼を連れ去った。番号はない。廃墟。ゴミ。

ある一説がある。3人がモトビフリンスキイ精錬所に連れて行かれた。そこで殺し、釜に投げ入れた。完全に、抹殺した・・・

先へ進む。通りは少し下り気味となる。町の古い地区となる。このあたりからは工場は何の変化も受けていなかった。勿論公園がある。ロザラ・ゼムリャチカ名称の。ハンガリーの共産主義者で、レーニンの友人でもある。ベル・クンと一緒に、この女性革命家はクリミアで、10万人のブランゲリ軍（反革命軍 *）を銃殺した。これらの兵士や将校は、半島に自主的に残留していた。レーニン名で、彼らに退去と自由が約束されていたのに。

誠に酷いことである。想像を働かせてみる。燃えたぎる炎が、顔をなめているとき、人は何と感ずるか。彼は理解する。命は終わりだ。が、体は・・・ 体はぱっと燃え上がる。全てが・・・

皇帝の近侍であったミハイル・アンドレビッチ・ボルコフが話していた。ミハイル大公の近侍チェリシェフの言葉で（ボルコフとチェリシェフは、一緒にペルムの牢獄に収監されていた。）。夜遅くに、大公の部屋に来た者が話していた。「本当に、ロマノフ一族は我々を煩わした！」

なんとも簡単・・・ 人間は煩わす、いや、人間ではない。革命は人間の本質を暴露する。真実を裸にする。

我々はスベルドロフスク市へ飛んでいった。行政機関が司令官共々逃げ回っている時には、本質的に生活はどこにもない。我々は道路に立った。ここから郊外へと低い木製の家屋が始まっていた。ある中庭で、祝日用の豚を切断していた。豚は異常な声で鳴いた。そのような状況では、少し惨事はしたくなる。（* 祝日のために、豚殺すること）

パラセンコフ窪地。トーリャが撮影に適した場所を探している間、私は、第二監督に「場所」を示すのに成功する。現場は、わからなくなる程変容していた。埋葬地の上にあった記憶にある灌木は、消え去っており、鉄道の横断歩道も消えていた。また、森は伐採されていた。このため、標点がなくなってしまうていた。艱難辛苦して、私は穴の上に立つ。足の下には、枕木。今では、全く深くはなっていない。

「ほら、ここの地面に、彼らを捨てた。道路に。」私が話す。

ナタリア・ビクトロブナの目は、カッと見開き、手を痙攣したように振り上げ、軽く十字を切る、「神よ・・・」。それだけを言う。

・・・その後、我々はオトクリタヤ鉱山の縦坑を降りる。底に、沢山の蠟燭を立てる。蠟燭は静かにぱちぱちとはぜる音を出す。私が語る。トーリャが撮影する。ガニナ窪地。誰かが掘った形跡がある。新しい土壌の塊。私は正しかった。既に「狩猟者」が見つ、せつせと掘返し続けていた。

私の同行者達は沈黙した。彼らは圧倒されていた。祖国の詳細な歴史に触れたことで、肯定的な感情を持つことができようか？ 我々は余りにも長い間、何も知らなかった。真実は我々に襲いかかってくる。文字通り、巨大な容赦のない岩となって。

この映画には、複雑で不幸な運命があった。個人的な優先権、成功に関する話だが、かつて、ある人物が、サーシャに吹き込んだように、衣装担当芸術家とその妻が、トーリャに熱烈に、粘り強くアタックしていた。「君はリャボフの寄付興業の撮影をしている！君の存在は？ 君は最悪では？」

全世界で、そのようになっている。「分断し、統治する」原理は全国民を征服している。しかし、我が不幸な国においてだけ、前代未聞で、説明の付かない結果を与えた。

トーリャはしかめ面をし、陰気になり、難癖を付け始めた。彼を脱線させてしまった。残念・・・

ロシア博物館の、宮廷の装飾のあるホールで。18世紀の絵画の中で、ワイシャツを着た金髪の少年が縦列扉の奥へ去っていく。手に蠟燭を持って。彼の後ろには、夢のごとく、皇帝が後を追うように続く。抱きしめようと、が追いつかない。皇帝は、自分の肖像画の前で立ち止まり、じっと見る。*****。が、最後の我々が皇帝ではない、ニコライ・アレクサンドロビッチではない、ピョートル・アレクセービッチだ。棺の中に、目を閉じて。カメラからトーリャの視線を、私はひつつかんだ。そしてナタリア・ビクトロブナの視線も。私は突然理解する。映画が終了した。私は思いついた。そのようなことは決してないだろう。

2つの主要な場面を撮影する間が未だある。イパチェフの邸宅に皇帝と家族を送り届け

る。周りには群衆、悪意と憎しみの叫び声。そして、銃撃。

我々は余りにも長い間知らなかった。どうであったのかを。想像は少し残酷に、耐えがたく描いた。我々はそれらしく全てを撮りあげた。射撃、処刑士達のいらだちの顔、拳銃の銃口からの発火、叫声、被害者の目に現れている死の恐怖、銃床による打撃、・・・

今、私は理解している。基本的な間違いがあったということ。詳細な撮影は、概して、アリストテレスがかって紹介した戦慄ではないものと呼び起こす。これは嫌気の戦慄であって、浄化ではなくカタリシス（＊ アリストテレスが提唱した、悲劇による感情浄化）である。（？） ＊）

映画「白馬」で、時がやって来たとき、私はこのシーンを全く別のように撮影した。

あの中身の入った聖なる器を、私はある人物に渡した。物腰が柔らかく、声は静かな聖職者である。イーゴリ・ビノグラドフが私を彼に紹介してくれた。神父さんは私を気にくてくれた。彼は、無条件の信頼を惹き起こした。

彼の案内で、私はロシア正教会と連絡が取れた。私は詳細な手紙を書いた、住所は書かなかったの、具体的に宛先はない手紙を。私は援助を願い出た。皇帝家族の遺物を発見したことについて話をした。活動全般、皇帝家族のこと、名誉ある人々全員について。特に、帝政時代から、ペレストロイカ後まで生き延びている人々について。

主教グリゴリイから、同情の返信をもらった。彼は非常に高齢で、病弱。が、できるかぎり助力を約束してくれた。「貴方は偉大な仕事を為しました。」彼はそのように書いてきた。昔、彼は白軍将校であった。多分、私の父は、仲違いの戦争時に、彼とどこかで出会っていた？

私は教会の注意を引き寄せたかった。これにどのように近づけるか、私は知らなかった。私の神父は、祖国の階層組織と交際するよう説き伏せなかった。これについて彼に頼んだことは、完全に無思慮であつ。「府主教と司教は、この権力と戦った。神の与えた言葉を持って。だいぶ前、天国について。その後、「宗教改革派の人」、反キリスト活動家。その後、妥協者と****。彼らは何もしていない。何も彼らを振り向いていない。ただ悪いだけだ。彼らはみんな国家保安委員会に協力をしている。」 私は反論を試みた。「しかし、貴方自身は教会にいる。」 彼は頭を振って否定をした。「私は神に仕えている。これは・・・」 そして黙った。

・・・数年後、ゲンナジイ・アンドレビッチ・ジュガノフのいる幹部会の席に座っている彼を見た。

私は理解する。嘘つきで、馬鹿で、内容もない、欲張りな権力は彼を怒らせた。多くの点で、前任者より少し辛辣。これはその通り。

しかし、ゲンナジイ・アンドレビッチは、何も拒否することなく、何も誰も責めなかった。ジュガノフには、過去に「幾つかの間違い」があった。それ以上ではない。これは、ゲンナジイ・アンドレビッチは、「それなりの地位」にいるということを示している。

かって、北ウラル収容所の囚人達が私に語った。「これは見張りだ。」

私の聖職者－どうでも良い、眉をしかめて座っていた。そして、・・・

何故、牧師が？

今日、全てが身近になり、現実を帯びてきた・・・

監視付きで行きたい？

同盟者と同行者の共産主義者達はかって7回殲滅した。（＊ ？）

彼らにはそれが伝統。

今回は、殲滅される－もし・・・

一つの希望－神が許容しないこと。

私の妻は、かって、作家ニコライ・サムベリヤンの校閲者であった。彼女が電話をし、私たちは出会った。サムベリヤンは喜んで応対してくれた。「君は正しい、ここでは、教会なしでは何もできない。私の友人、府主教・・・を君に紹介しよう。」 そして、サムベリヤンは大きな名前を挙げた。

数日後、私はダニロフ修道院に招待された。敷地の奥に、2階建ての建物を見つけた。その建物に、府主教に属している事務部があった。私は予定時間に訪れ、呼ばれるまで、長い廊下を行ったり来たりしていた。漸く、主教が現れた。私に近づき、丁寧に頭を下げた。その後、召使いがやって来て、会議用の机のある部屋に私を案内した。周りをじっくりと観察した。私は救世主のイコンの前で、規定の恭しいお辞儀をする。キリスト教徒になるかのように。

「座って下さい。ブラジコは申し訳ないに行っています。彼には一刻も猶予のない仕事があります。私が代わって伺います。」

我々の発見物について、はっきりと明瞭に話をする。聖職者は、発行文献で全てを知って

いる。彼は、注意深く耳を傾け、冷静に聞いてくれている。興味を示してくれることを期待していたが、ない。無関心な目。「私が自身による発見物の「品質」を信用しているのか？」という質問さえ、彼はしない。長い沈黙、目を下げる。漸く喋る。

「教会は漸く自由と独立を得たところです（これは1989年のこと。ゴルバチョフのペレストロイカはゆっくりと減衰している。）。私は期待しています。貴方が全てを正しく理解してくれることを。」

「何のことですか、神父さん？」

「私たちは、漸く立ち上がれたところです。、貴方は極めて疑わしい資料、事情を申し出ています。教会が再び足かせをはめられることを、貴方は期待しているのですか？」

「私はそのようなことを期待していません。全てを調べて下さい。一緒に、私も入れて。いや、私なしで。私は全てを貴方に申し出ています。もし、私、そして私の同僚が間違っていたならば、何が・・・しかし、全てが裏付けられるならば？」

「いや。私たちは、今、危険を冒すことはできません。」

ここで、私は滅多にない、失礼なことをしでかす。私は話す。

「しかし、神父さん、我々のイエス・キリストは、我々のために十字架に登りました。正義のために。我々全てが奴隷であることを止めるために。そうではないのですか？」

彼は同情するように私を見る。私は精神病者のよう。彼が話す。

「馬鹿なことをいっています。」　ただそれだけ。これが全て。

私は何も得られず、帰ることになる。私はがっかりした。著名な文学上の主人公ががっかりするように。覚えていますか？　「アブ（昆虫　＊）」のアルツールが語る。「私は、神のように君を信じた。が、君は私に、全人生に渡って嘘をついた。」　彼はこれを自分の最も身近な人物に語る。カルヂナル・モンタネッリに。

よく似ている。ああ！・・・

・・・半年後、再び、教会の高位の人のところに客となる。彼の別邸で。我々はお茶を飲んだことを、覚えている。ブラジコは好意的であった。彼は遺物の同定と、それなりの葬送のアイデアに賛同する。彼の依頼に従って、レストラン「中央」で、作家ウラジミール・ソロウヒンに会う。他の誰かもいたような・・・我々は教会の食堂に座って、長いが一般的な話をする。サラウシンは丁重であったが、耐えているようであった。彼は私の言葉の一つも信用していないように、私には感じる。

さらにもう一人の教会の代表者が、私に電話をしにくる。若い声。

「こちらは、祭司のディオニシです。会いましょう。」

グリボエドフ記念碑のところでの出会いを、彼は私に指定する。地下鉄を出て、赤い服を着て、ベンチに座っている若者に近づく。いろいろな年齢の娘達も。

「こんにちわ、私です。」　そう言いながら、彼は手を差し伸べてくる。「私は、外国教会に属しています。遺物の同定と埋葬に関するロシア正教会委員会を設立することを、私は提案しています。方法を見つめましょう。」

私は同意する。第一回の会議は、レニングラード大通りから余り遠くはない、ある地下室で行われる。私と妻は、その委員会の会員となる。

必要な物をディオニシに渡す。ロマノフ一家関係の公判本、監査結果、遺物、の全て。それは地下印刷選集として出版された。一度だけではなく。私とトーリャは王朝の滅亡に関する映画を撮影するつもりであると私は話をした。しかし資金が少なく、「ベーターカム」カメラのリース代金もないことを。

「おー、それはたいしたことではない。」　ディオニシは嬉しそうに話した。

「我々のところに、そのようなカメラがあります。外国から贈呈されました。そのカメラを無料であなた方に提供しましょう。」　トーリャ・イワノフはコンプレックスは無し。

（＊　？）　ディオニシとの打ち合わせがあった時に、彼（？　＊）は喜んで招聘する。

「映画会館に出かけよう。私の好きな良いレストランがある。旨いものを食べながら、話をしよう・・・」

私は若干当惑しながら待つ。ディオニシがどう返事をするか。彼は修道士。彼自身がそう言っている。彼の友人もそう言っている。

彼は喜んで同意する。

映画会館のレストランの隅で、私たちは、ロマノフ一家の件だけではなく、いろいろと話をする。ディオニシは自分を「デニス」と呼んでほしいという。次から次と火を付け、全力でタバコをくゆらす。

さらに1月、私は約束されていたカメラを、今か今かと待ち続ける。

どうしても良いか・・・

およそ半年後、通りで、私に誰かが追いつく。誰・・・ディオニシであった。彼は聖衣を着て、胸には十字架を。視線を遮って、

「ほら・・・　特別にやって来た。そこから、わかりますか？　主教。彼は私を・・・

私は叙聖された。」

私は控えめに祝ってあげる。

カメラや撮影について、言葉がない・・・その時、レストランで、全くありそうもない、注目すべき出会いがあった。デニスと彼の友人が手を洗いに行ったとき、テーブルにはっきりしない風采の若い人が近づいてきた。私の前のテーブルの上に、ボールペンと紙を置いた。

「数値を書いて下さい、必要なだけのゼロを付けて。これは本当です。ドル建てでも、他の為替でも結構です。」

「その代わり？」 私は微笑んだ。冗談。多分・・・

「何も見つけなかったと、貴方は公表しています。中傷が、貴方の全身を汚しています。が、儲けている・・・」

「何故、これを？」

「貴方にはわかりませんか？ 仮病を使ってはいけません・・・全てを取り消しなさい。骨格はない、全く何もない。かつて何もなかった・・・」 彼は目を細めて私を見た。

「違う。」

彼は肩をすぼめて、去っていった。不安そうなイワノフ（・トーリャ）は少し驚いて私の方見て、言った。

「私は、クリュチコフと知り合いだ。ルビャンカに、今すぐ行こう。これは必ず「スパイ」だ。

これは、スパイではなく間違いだと、私はトーリャを納得させるのに苦労した。しかし、心の中では、心配だ・・・

2人の青年が私の元に現れた。ロシア国外教会の使者と言った。

「聖骸の一部でも、私たちに渡して下さい。貴方のところにある物をです。」

私のところには「聖骸」はない。しかし、彼らは根気が強い。発掘の際に黒土を入れた小さいビニール袋を1つ、彼らに渡す。

ディオニシの取り巻きの女性は、さらに強烈に、私の所にある物の「一部分」を渡してくれるように懇願をする。

「それがないと、お金もビデオカメラもダメになるでしょう。」 彼女らは話す。

司祭グレフ・ヤクーニンが私を訪ねてきた。著名な反対者である。彼は裁判にかけられ、地位を奪われていた。私の目には、彼はあらゆる尊敬に値していた。私たちは長い時間話し合った。グレフは、中央委員会への私の「メッセージ」を読み終わり、憤慨して叫んだ。

「本当に・・・呼びかける必要があるのか？ このように書いて？ 貴方に幸いあれ・・・」

その時には、私は幻想の中にいた。

私の頭にが何も思い浮かばなかった、私が「中心」になろうとは。よくわからない人物の群れが、私の周りに群れるとは。このような人々は何の益にもならないであろう。大騒ぎ。が、私は彼らを追い払わなかった。私には経験がなかった。

しかし、本当の善意者達が現れた。彼らの一人が、個人レストランの所有者を説得した。マニャを多数集め、食事を提供し、その後、オークションを開催するという、頭の良いアイデアで。大金持ちはこのアイデアを気に入り、彼は・・・あれを買う。善意者は私の提案をふれ回ったとき、誰も何も買わなかった。ホールでは皆欠伸をし始めた。

その後、食事をし、飲んだ。

私には明らかに運が悪かった。

イゴリ・ビノグラドフ（モスクワ新聞でインタビューをするように働きかけてくれた人物）は、自分の家に、友人達を集め、遺物の探査について話をするように勧めた。遺物をどのようにして発見したかを。

出席者の誰も私は覚えてはいない。ただ、フィジル・イスカデルだけ。彼は、私の話に注意を向け、興味深く聞いてくれた。ただ彼一人であった。思うに、他の人々には、私の話は、全く何の印象も与えなかったようである。

イスカデルが尋ねた。

「次の詩を知っていますか？ 「襟章のエナメル十字架、灰色の上着、ラシヤ・・・」（＊　？）

私は知らなかった。彼は最後まで吟唱した。ゲオルギイ・イワノフの素晴らしい詩。人情味があり、切なく、悲しみに満ちた。画家セロフ作の皇帝の絵を、私は思い出した。皇帝は腕を閉じて座っている。皇帝は正にこの灰色の上着を着ている。目には・・・

皇帝が玉座を去り、
全てを許し、全てに別れを告げる。

王冠がかすんでいく、
転がり落ちた2月のぬかるみの中で。

この詩もまた、ゲオルギイ・イワノフのもの。大分後の作品。この詩を読んで、私は革命博物館での展示会を思い出した。「偉大なる2月」。多分、初めて「ブルジョア革命」と呼ぶことの可能性に、博物館員は、信じられない程自信があった。（＊　？）

ゲオルギイ・イワノフ、目撃者は、それを他の言い方をした。

私は妻と一緒に、ビノグラドフ家を何度も訪問をした。マリオリナは、予定されているロマノフ家の本に関係して、長らくモスクワに留まった。夫との関連で、彼女はモルドゾット伯爵夫人であった。この名称は、イタリア国王に関係した、彼女の夫の先祖によって自分のものとなった。ムッソリーニの要請により。マリオリナはソ連反対派の人々と友好を深めていた。ベネチアにいる彼女の元を、詩人ブロードスキーが訪れている。ロマノフ一家の埋葬地探査に関する私の話に彼女は感銘し、私と私の妻を、ベネチアに客として招待してくれた。これ以外に、彼女に、将来の本について相談をすることにもなる。

ベネチア・・・

私たちはソ連からやって来た。私たちは何も知らなかったし、何もできなかった。美しく充実した生活の仕方も。今では、このことは全く興味がない。これはよく知られていることである。ベネチアに、古いロシアの痕跡が僅かながら残っている。これについて話さずにはいられない。

聖マルク教会の広場の向こうに、湾の向こう側に、サン・ミゲル島。ここは、高いレンガの壁のある巨大な墓地である。常緑樹があり、ロシア人の目には見慣れない墓がある。壁の中に墓がある。

我々は昼に、この島を訪れた。岸にある、よく揺れる橋を下り、門と鉄の潜り戸を通り過ぎた。永遠に彷徨っても、飽きそうも無いような所であった。静かで、心安まる場所であった。我々は物思いに浸った。が、突然、高い柵が見えた。その向こうには緑の空間が、ロシア文字の記された墓が。

ここに、著名なジャギレフが眠っていた。遠くないところには、ストラビンスキーが。私は少し考えた、アンナ・アフマトワは、勿論、当然だ。彼女の詩を覚えているだろうか？

「違う、他の天の下ではない。他の翼の保護下ではない。その時は、私は自分の国民と一緒にいた。私の国民のいるところに。不幸であった。」　これは「レクイエム」（＊鎮魂ミサ曲）、これは1961年。アンナ・アンドレーブナは、この行を書く権利を持っていた。全ての人生をつうじて、母国において、彼女は自分の権利を主張した。誰かが彼女を操った。1922年、彼女は容赦なく言った。「しかし、追放者は、いつまでも、私には気の毒だ。囚人のように、病人のように。君の道は暗い、放浪者、他人のパンはニガヨモギの臭いがする。」　アフマトワは残り、亡くなった人達を自慢した。「災難の最中に、残留者は青春を駄目にし、***我々は自分を引き止めなかった。」　私はこの詩の行を覚えていた。それを暗唱できていた。しかし、墓のところで、心の中でも、私は思いきってそれを朗唱しなかった。突然、私は疑いだした。足の下にあるのが祖国なのか？心、精神にあるのは祖国ではないのか？　国家政治保安部（ГПУ）と戦った人は置き去りにされた。アンナ・アンドレーブナは詩人。「ロシアの詩人、詩人以上の詩人。」　彼女はできた。他の多数の人達は去って行った。霧の中の青年時代の曙にブロジンスキーは断言した。「・・・ワスレフスキー島に、私は死に行く。」　しかし、行かなかった。何時も、デヤギレフとストラビンスキーと一緒に残った。サン・ミゲル墓地に。シャラピンを引きずっていった、ノボデビッチ墓地ではなく。アーメン、セルゲイ・ラフマニノフを連れてこなかったことに。そして、タルコフスキーも。

・・・素晴らしい旅行。ロマノフ一家に関しては、ここでは誰も何も知らなかった。知らない。

ここでは、もうムッソリーニも記憶になくなっていった。ミラノの度を越えた記念仕立ての駅は、ムッソリーニ党首を思い出させることはなかった。

我々はスターリン同志については今日まで覚えている。勿論レーニンも。霊廟があるので、忘れることはない。

・・・その後、我々はパツヤへ向かい、ジョットのフレスコ画を堪能した。ユダは主に接吻をし、皇帝の護衛に主を指さした。これは変だ・・・　私が気がついたのは初めてではない。この接吻が更なることを示していたのかもと。侮辱、磔、死、復活。多分、ユダは自分の義務を完遂した？　かつて聞いたことのあるこの名言に、私は今同意する。自分の義務を完遂する必要がある。何にも反して。とにかく・・・、

夕べには、パツヤの学識者達が、ロマノフ一家の本に関して、マリオリナを祝った。私は、スラブ学の教授と並んで椅子に座った。マリオリナが演壇で、ゴルバチョフの名前を挙げ、いい人のようなことを語ったとき、私は他のイタリア人に語った。

「ゴルバチョフは地獄の使者（イタリア語での発言単語　＊）。」　私の隣人が、突然立ち上がり、ホール全体に聞こえるように叫んだ。

「リャボフ氏が、ゴルバチョフは悪魔の犬だ、と言っている。」

・・・祝宴終了後、我々はベネチアへ戻った。マリオリナが話す。

「貴方は間違い。わかっていないの？　モスクワで飛行機のタラップを降りたとき、手錠をかけられるわよ。私の方はモスクワでは、自由に動き回れなくなるわ！」　私は答える。

「ほら、わかるだろう・・・　ペレストロイカを。ペレストロイカで、手錠・・・　手錠は、ロシアには、永久にあり続ける。」
が、我々は、友好のまま別れた。

ゴルバチョフは、何の値もしないであろうと、私は名指しした。私はただ、イタリア語で、他の言葉を知らなかった。この言葉を言ったのは、偶然ではなかった。

「ロージナ」での出版後すぐに、私の家の電話は鳴り続けた。慇懃な男性の声が、ソ連邦共産党中央委員会の思想委員会からの電話であると告げた。「雑誌「ロージナ」への貴方の公表物に、非常に興味があります。いらして下さい。質問があります。」

当然、私は出かけた。私には興味があった。私はまだ幻想中にあった。クイビシェフ通り、通路、門、国家保安委員会の将校。私は、何処へ何をしに行くかを説明する。返事は、「通行証が必要です。多分、彼が貴方にあつらえます。」　通行証のために進んでいく。そして、戻ってくる。先へ進み、その後、左に曲がり、19世紀から20世紀初めの建物の中、極めて現代的、古い蒸気船の中のように。再び、国家保安委員会の将校。エレベータ。何階かはわからない。どこかの部屋。礼儀正しく、親切な若者達。お茶を飲み、パンを食し、ゆったりと話をする。大事なこと。

「ミハイル・セルゲービッチ（・ゴルバチョフ　＊）が言っている。国には、ガソリンが充ち満ちている。マッチで、全国が爆発するのに充分である。君の発行物が、そのマッチの範疇内にあることを、君は認めないのですか？」

「認めません。穴である。そこにロマノフ一家が埋葬されていた。歴史の、我々の人生の事実である。これに対して何かをしなければならない。」

彼らは視線を交わした。そのうちの一人が話をする。

「ゲリイ・トロフィモビッチさん。ミハイル・セルゲービッチに詳細な手紙を書いて下さい。」　私は家に帰り、詳細な手紙を書く。皇帝一家の遺物をどのようにして発見したのか、私は話す。（国の共産党のトップを刺激しないよう、大文字で書く。）　私は証拠を持ち出し、結論を。最大限の丁重さを持って、何故、ロマノフ一家を丁重に埋葬しなければならないのかを。私はゴルバチョフを説得することを試みる。私の個人的なメモを、貴方は「消し去る」ことはできるとして：遺物を探査した、それを埋葬した。忘れることはできない。私はむせび泣く。

封印をし、偉い人の宛名を書き、ソ連邦共産党中央委員会受付へ持って行く。私の手紙を受け取る。返事はない。私は1月待った。2月、3月、・・・

結局のところ、私はわかる。返答はないであろう。ミハイル・セルゲービッチは戦争のキリストではない。（？　＊）　宗教臭い、極めて怪しいもくろみの下に自身をさらす。

宗教の高僧は判定をしなかった。（その通り、ゴルバチョフと違って。それらはキリストの戦争（？　＊））

問題が山積している。そして、私は誇りのある孤独を感じ始める。

この気分は時折、解消する。私の所に「視点（？　＊）がやって来た。ブラッド・リスチエフ、リュビモフ、ヂマ・ザハロフ。リスチエフとリュビモフは、興味がなくなさそうに、壁に視線を送った。私は待った。質問をするのを。誰かが、何かを・・・

長年にわたって、私は写真類を収集してきた。これは、皇位継承者である皇太子アレクセイ・ニコラエビッチ、モスクワ近衛連隊の軍服を着ている。かつて、完全な略奪にあうまで、この軍服はツアルスコエ・セロのアレクサンドロフスキー宮殿内の皇后の部屋の中に、吊されていた。多分。他の写真、コピー物である。皇位継承者としての皇帝ニコライ二世、アタマンスキー連隊の100人親衛隊の軍服を着ている。王位の継承者は、常にこの連隊の連隊長によって指名された、「義務」のようなものである。他の写真。大半は複写である。しかし、実物の写真もある。その中に一自筆署名入りミハイル・アレキサンドロビッチの写真。ペルミで死んだ大公。聖なる新しい殉教者達。皇帝、皇后、子供達の珍しいアイコン。

・・・偶然であった。裁判で、より正しくは、モスクワ市裁判所。

私の反対者達は、私の不道徳を確信して、大声を上げた。「あいつの部屋には、壁に、ロマノフ一家の写真がぶら下がっている。血のニコライ二世のも！」

議長は大声で反応した。

「わかりました。部屋にニコライ二世！を吊している人物を、我々は期待することができ、ということです。」

・・・ちがう。黙りこくった。そのかわり、ジーマが話した。

「あたしはこれについて放送をします。」

彼は約束を守り、オペレータと一緒にやって来た。私は全てを話し、非常に興奮していた。これまで、私はテレビに出たことはなかった。大分昔にあったかも。「国境」の時。当時、カメラの前での話は、決まり切っていた。この映画は、評論家、関係者には、印象を与えなかった。

「国境」・・・これは大分昔のことであった。これに関する私の思い出はほんの僅かであるとは、私は思っていない、*****。しかし、映画では、ロマンス（？＊）が聞こえた。それによる、ソ連邦共産党中央委員会との重大な戦いが展開した。今日まで、皇帝一家との直接的な関係を持っているロマンス（？＊）。

レーニン図書館の特別保管局で、私は働いていた。ロマノフ一家に関する物を、私は片っ端から読み、調べた。革命に関する物も、国内戦に関する物も。その後、1938年まで続く文献など全てに関して。これらの全ての資料は、見えない鎖でお互いに結びつけられていた。最も悲惨な鎖の環の一つが、ロマノフ一家の抹殺である。

家族抹殺の参加者らの性向は、判断の対象外である。ただ、判断をすることができる、何があったのかを。東の国のことわざがある、「水差しに水が入っていなければ、水差しから水はこぼれない。」

参加者達には良心の欠片も無く、名誉も、心も無かった。彼らは、世界プロレタリアート頭領の、悪魔のような才能によって生まれた、人間に似た機械の、ロボットであった。彼ら、非人間の内の一人が、1963年に思い出を語っている。銃床で無慈悲に殴りつけ、まだ生き残っている家族と、家族の女中であるアンナ・デミドワを撃ち尽くしたと。この事は、私を驚かせなかった。全世界で、何時の時代にも、やり始めた仕事を最後までやり遂げることが、全ての処刑士のありふれた方法であったから。このやり方は失われてはいない。輝かしいボリシェビキのお爺さんは、感動を持って話をしている。「赤軍兵士は、アナスタシアの愛犬を銃剣で突き刺した。我々がドア（2階への階段の所にあった。）の側を通過していたとき、扉の向こうから、犬の哀れな長い吠え声が響いた。最後の祝弾がロシア皇帝に。犬の死体は皇帝一家と共に投げ捨てられた。「犬に、犬並みの死を！」ゴロシキンが軽蔑を込めて言った。」

まさしく、人に対する軽蔑にインターナショナルが隠されないでいるだけではなく、評価のための普通の言葉は全くない。（？＊）

しかし、同意して下さい：執行者の口にした、優しい言葉「わんちゃん」は死刑判決として響く。殺人と暴行としての党だけではない。党は全てを行った。

我々全てに。

私は面白い本に出会った。その作家は、アリフェリエフという人物。この人の本は読んだことが無かった。彼は、皇帝家族の沢山の手紙を集めていた。逮捕後に、自分たちの友人、親類、知人宛に書かれた手紙である。ほんの題名は「監禁中の皇帝家族の手紙」。

ある頁で、詩と音符を見つけた。詩の作者は、詩人セルゲイ・ベフテーフ。彼が、トボリスクにいるオリガ・ニコラエブナに送ったものである。シベリア軍団がエカテリンブルグを占領したとき、イパチェフ邸の部屋の一つの床で、紙束を見つけた。その紙に、オリガの筆跡で詩が書かれていた。当時、セルゲイ・ベフテーフについては誰も知っていなかった。これは皇帝の娘の詩である、と教えた。後になって、この詩は以下のように呼ばれた。「オリガ・ニコラエブナの祈り」

ちがう。これはベフテーフ。とにかく、テキストと一緒に楽譜があった。名のある作曲家が、これらの詩にロマンス曲を作った。書き写す（むしろ描き写す）ために、私は3日間も費やした。私は楽譜は読めない。これは素晴らしい作品であった。第一に、何かを立派に為すことは、ある一つのことだけでできるので。貴方がまさに為すことを、貴方が理解しているならば。私は全くわからない。全く知らない。しかし、多分、不可解な靈感、確信、が私のペンを走らせた。私は問い合わせた。何よりも、

私はこのロマンスを、映画の作曲家エドアルド・ハガガルティンに持って行った。俺は驚いた：

「ゲリイ、基本的な間違いが3点ある。どうしたのだ？」

「私は楽譜は全く理解できない。」私は返答した。彼は啞然として座った。

「これはできない！ そのようなときには、君は嘘をつくべきだ。大いに！」

しかし、私は嘘をつかなかった。エディックは音楽院の学生を招聘した。特別な声、メゾソプラノが必要であった。女子学生は我々に歌ってくれた。私は気を失うかのようなであった。そのような歌をかつて一度も聞いたことは無かった。

エディックが言う。

「君はわかる・・・我々は削除するか、序曲を作り直す。序曲は、ベートーベンのラ（＊　？）。これはロマンスの弱い部分である。私がそのようなものを作り上げることができたとは誰も信用しない。アラハイカ（？　＊）　そのように、今まで誰も書いてはいない。メロディーを全く変更しないで、私は少し作り直す。我々はこれら全てを裁判でやることができるだけだ・・・国家保安委員会の。」

国家保安委員会・・・私は本当のところ、国家保安委員会のことを忘れていた。

ハガガルチャンは修正し、自分流に書いた。彼は何の変更もしなかった、とにかく、素人の耳には。「白ロシアフィルム」の監督ステパノフが、シリーズ映画「国境」の1つで、このロマンスを持ったシーンを撮影した。我々は彼には秘密を打ち明けてはいなかった。このロマンスは、エディックの作品と、彼は素直に認めていた。

映画は、国家保安委員会で、検閲にかけられた。

最初の質問。「どのようなロマンスのための物か？」　説明をする。誰も満足しない。

「ハルピンの亡命レストランで、我が諜報員が、有名なソビエトの詩人の詩に付けたロマンスを歌った！　皆さん、そんなことがあるはずがないでしょう。」　私とナゴルニイはショックを受けた。「どのような詩人がいいのですか？　指名して下さい！」　検閲官はためらい、その後、次のような理由を持ち出した。「これは、よく知られているバブチスト（？　宗教の一派）賛歌だ！」　ハガガルチャンが、「これは賛歌だ。すみませんが、私が個人的に書き上げた！　詩は、作者に属する！」　検閲官達は見交わし合った。そして・・・同意した。

最初に、モスクワの映画会館で、その後、テレビで、全世界で、臨終のこの詩の言葉と音楽が響いたとき、自分の感情を伝えることはできなかった。

我々に似合っていた、神よ、耐えること、
荒れ狂い、暗澹たる日々の時に、
堪え忍ぶ人民の迫害と
我々の刑史の拷問を。

我々に強さを与えよ、神について正しい、
近親者達の悪事よさらば。
十字架、重くて血に染まっている、
貴方の優しさを持って出会うこと。

反乱のうねりの中で、
敵が我々に強盗を働く時、
屈辱と侮辱に耐える
イエスキリスト、助けてくれ。

世界の所有者、宇宙の神、
祈る我々を祝福せよ
平静で慎ましやかな心を与えよ
耐えがたく、恐ろしいこの時に。

入口前で祈り、
貴方の従僕を口に吸い込め
非人間的な力
敵のために少し祈る。
イエスキリスト、助けてくれ・・・

エドアルド・ハガガルチャン、アレクセイ・ナゴルニイ、私、そして、この秘密に関与していたもの全員が、それぞれに感ずる物があつた。同志ジェルジンスキーの万能の官庁との、この小さな戦争において、勝利者はいない。認めてやる。悪名高い彼らの「臓物」は、正しく動作した。知識不足ではなかった。

私たちは本当の喜びを感じた。

私たちは、悶死した我が皇帝に思いをはせた。

血に飢えた権力は、彼らを破滅と苦悩へと運命づけた。

このロマンスを、歌手、ソ連邦諜報機関のエージェントが歌った。彼女は満員の亡命者の前で、レストランで歌った。肩章を取り外すこと無く。

彼女は、心から、哀悼を込めて歌った。彼女は彼らと共体験をした。これを誰も否定することはできなかった。

彼女は知っている、余りにも遅いとしても、彼らと神に、行われたことに対して許しを

請うことを。

我々全員も同じく、許しを請うた。

ここに、勝利があった。過去の上に。私自身の上に。

死、おまえの武器は何処に？

地獄、おまえの勝利は何処に？

イエスの使徒はこれら全てを、そもそも知っていた。

我々は・・・我々は教えてもらった。生きることの意味とあれも、そうじゃないの？

自分のプログラムを、ジーマ・ザハロフはテレビで示した。その後、通りで、見知らぬ人たちが私に声をかけてくれ、心からの敬意を示してくれた。

その間に、映画「最期までの受難人」の撮影は続いた。1990年秋に、我々はアラバスクに出かけ、コンスタンチノビッチ大公の受難の歴史を撮影する。

旅行途中で、スベルドロフスク市に立ち寄った。イパチェフ邸の場所を、200人もの群衆が取り囲んでいた。十字架が立ち、話が行われていた。私には気がつかなかったが、私の方にサーシャが近づいてきた。私が来ていることを、サーシャは知らなかった。この事について私はサーシャに知らせていなかったの。この事を私は後悔した。私たちは抱擁し合い、話の輪に入った。サーシャは微笑んでいた。

「行こう、本当のことをはなさいの？」 私は黙りこくった。彼は手を振り。

「私はこのような人混みは嫌いだ。」 私は映画について話をし、私たちは再会を約束した。しかし、以前のような情熱はもう無かった。残念・・・

スベルドロフスクからアラパエフスクまで、100km強。道は全てに渡って最悪。とにかく、乗り切って、ホテルにたどり着く。ホテルはここではありふれたもの、廊下の端まで全て快適だ。翌朝、町を巡る歩くことに決めた。周りを見ながら、考え事をしながら。

アラパエフスクは極々ありふれた地方の町。チャイコフスキーの家（彼の父は、この地域の全ての工場の管理者であった。）は、綺麗な宮殿様式の外観を持っており、それが注目を惹くというのは本当だろうか？ ああ・・・ モスクワにあると同じような、近代的な家がある。多くの木造家屋はもう、時代遅れ。人々はゆったりし、静かである、ゆっくと談笑している。

「我々のところのジプシーは・・・ならず者で、泥棒。それに、殺人が起こった。」 警察署長は憂鬱に語った。

大聖堂は巨大できらびやか。その中に、パン工場。ドアを入ると、丸天井の下にいた。ガラクタ、臭い、全てが壊れていた。教会としての物は何も残っていなかった。工場としては、何に使用したのかわからない鉄くずが。

我々は既にこれら全てを見た。ボリシェビキ、ソビエト権力は多様な思考で異なるところは無い。基本まで、全くの全てで。その後・・・

この「その後」が、決して一度もやって来ていない。

人々の群れが、店に溢れている。ここでは、安い（モスクワと比較してだが）女性用のカラフルなプラトック、その他が売られていた。誰も何も知らなかった。チャイコフスキー博物館で、なぜだか、私は気分が進まなくなった。

・・・いくつもの通り、大聖堂、大量のほこり、ゴミだらけの舗装道路。それらが気分をもたらした。眠気では無く、朦朧では無いものが襲いかかった。自分では知らない。明らかに、無生物の物が、自分の中に色々な時の印象を残している。その時、今にも聞き耳を立て覗こうとして、ある人物が現れる。誰か知っている？ その時、壁が話し始める。

あそこに、ナポリナヤ小学校が。モダニズムの要素を持った長いレンガの建物。窓は大きく、多分明るいので、子供達は心から楽しかったであろう。多分、この学校へは子供達は走って通ったであろう。1918年当時のこの学校の写真を、私は現在と比較してみる。何も変わってはいなかった。主要な詳細、複雑な格子模様を持った窓枠はそっくりそのままに保存されている。

4月に、第18番学校が収容所になった。ここへ、皇后の姉である、エリザベータ・フェドロブナ、大公セルゲイ・ミハイロビッチ、帝国の血の侯爵ヨアン、コンスタンチン、イゴリ（彼らはコンスタンチン・コンスタノビッチ・ロマノフの息子達）、を逮捕監禁した。大公コンスタンチン・コンスタノビッチ・ロマノフは「K.P.」の名を持つ詩人でもあった。覚えていますか？ 「私は窓を開け放つ、心は我慢できない・・・」 チャイコフスキーは、この詩を、自分の音楽に取り入れた。チャイコフスキーの家は、ナポリナヤ小学校から余り遠くは離れてはいない・・・

ここに、エリザベータ・フェドロブナの誓いの友である修道女バルバラ、セルゲイ・ミハイロビッチの秘書フェドル・ミハイロビッチ・レメス、大公パベル・アレクサンドロビッチと侯爵オリガ・バレリアノブナ・ピストリコルスの息子で詩人ある侯爵ウラジミール・パレイ、が幽閉されていた。ウラジミールは、「K. P.」のドラマ「ユダヤの王」を、フランス語に翻訳をした。著者は語っている。「君に、私の楽器をあげる。」 ウラジミールは

才能があり、将来有望な詩人であった。彼の詩では、哀愁と深い悲しみの主題、破滅の主題が首位を占めている。殺人者達が彼の手を捕まえた時、彼は19歳に満たなかった。

「K. P.」は1915年に亡くなった。パーベル・アレクサンドロビッチは、1919年1月に銃殺された。ペトロパブロフスキー要塞で。寺院の前で。そこには、大公の先祖が葬られていた。彼らと一緒に、有名な古銭学者の大公ゲオルギイ・ミハイロビッチ、歴史家の大公ニコライ・ミハイロビッチが殺された。

他の説がある。要塞の壁と牢屋の間の狭い通路に引き出して銃殺した。後になって、ここで、クロンシュタット蜂起の参加者の多くが刑死した。墓地に、ニコライ・ミハイロビッチの愛猫をおいたとの話がある。レーニンが気づいた。「我々の革命には、そのような些細なことは必要ない。」

書類がある。似たようなこと。1918年10月20日、ゴーリキーがレーニンに依頼をしていた。結核で重篤なガブ ril・コンスタンノビッチ・ロマノフを解放すること。ゴーリキーは書いていた。「非常に良い人間です。重篤です。どうして、受難者を造るのですか？」手紙には、医師マヌヒンの結論が添えられていた。医師は確信していた。病気はガブ rilの命を奪うと。侯爵を保釈するようにとの、医師の個人的な願いが、その後も続いた。

レーニンは、ジノビエフに電報を出した。「心配をしている、ロマノフにフィンランドへの出国を許したのは越権甚だしいのではないかと。彼の病気に関する情報は大げさではないのか。直ちにフィンランドに出国させないで待つように勧告する。」電報は1918年10月22日に、ペテルブルグに届いた。しかし、ガブ ril・コンスタンノビッチは退去するのに成功していた。「K. P.」の子供達のうち、彼一人だけが生き残った。侯爵オレクは、第1次世界戦争中に、前線で死んでいた。名誉の戦いで。前線で、純血種の馬に乗り、彼は敗走するドイツ軍を追い、重傷を負った。皇帝は侯爵ゲオルギエフスキーを叙勲した。金製の第4等十字勲章で、将校として。

多分、1983年に、私と妻は、オレグ・コンスタンノビッチの埋葬地を探す試みを実行した。私たちは、「K. P.」の元の名前であるオスタシェフへ到着した。ボロカラムスクから余り遠く離れてはいない。宮殿の周りの*****は保存されていた。が、レンガの廃墟。宮殿の外見は見違える程変わっていた。今ではそこには、なんだか高齢者の家らしいものが配置されている。壁や窓から、破滅さが漂っている・・・寺院を見つけた。かつて、侯爵オレグの墓の上に建てたものである。何か・・・全てはいつも通り、至るところ。壊された公共便所。当然ながら、墓は消えていた。多分、探索者達が墓を掘り返し、宝物・・・を探したのであろう。

自分の小説「コビリン」で、侯爵オレグはロシアの生活の流動性について書いていた。彼は次の言葉で小説を閉めている。「将来はどうなるのか？」

侯爵がそれを知らなかったことは、神に感謝であろう。

誰が知っていたのか？ 神が天から許すとは。

・・・私は教室の脇を通り過ぎた。侯爵達にとって、ここでの生活は、もちろん、ペトロパブロフスク要塞の牢獄での生活よりましであったろう。例えば、彼らが寺院での祈りのために出かけることができるようにはしていた。地元の住民達は彼らの通行に居合わせ、歓迎をし、皇族であった囚人達のために祈りを捧げ、彼らに同情した。

しかし、ロマノフ一家の運命はあらかじめ決められていた。ある時、電報がモスクワに回ってきた。「逮捕者達が逃走した。」ペルミのボリシェビキが、ミハイルとその側近達を殺して片付けた時に、中央に発信したのである。これら「正当化する」電報はあつという間に知られることとなり、この電報が、即ち、権力が要求していた社会の意見を確立することになった。より良い正当化としての告発。ボリシェビキはよく知っていた。さらにより良くするために、似たような兵法を採用した。

まず、逮捕者達をたたき起こし、学校から連れ出し、馬車に乗せ、移送の口実として「さらに安全な場所へ」（慣れ親しんだ理由！）と語り、そして、処刑の場所へと連行した。実のところ、死刑ではなかった。最もありふれた（極めて念入りだったにもかかわらず）殺人そのものであった。命運の尽きた者達を、ベルフナヤ・シニャチハのところの小さな森まで乗せて行き、そこで下ろした。森を進んでいった。逮捕者達は目隠しをされた。このトリックは、処刑執行人達のしきたりであった。大騒ぎは起きなかった。100m程進んで、「メジュナヤ」鉱山の坑道に、次々と突き落とされた。あるものは即死し、あるものは不具になり、生き延びた。エリザベータ・フェドロブナは生き残り、3日の間、負傷者の介護をした。地域の住民達は、昼も夜も地底からの歌声を聞いた。まだ賛美歌を歌うことができていた。死刑執行人達は、地域医者のところから松ヤニを持ち出し、それに火を付けて、坑道に投げ入れた。その後、静寂となった。

シベリア軍団は坑道から遺体を掘り出した。遺体はいろいろな深さにあり、あちこちの坑木に引っかかっていた。遺体を安置室に運び入れた。安置室は墓地にあった。門のどこ

ろの丸太小屋。医者による検視後、カバーが掛けられ、棺に納められた。「聖なる神」の歌声の元で。大群衆の手で、寺院まで運ばれた。これらの群衆は、世界革命・・・の仕事に同情したのであろうか？

教会葬の後、棺は祭壇の右にある安置所におかれた。当時の目撃者達はそのように証言している。これら全ては、1919年10月18日のことである。

1年後、赤軍が町に接近してきた時、コルチャック將軍の白軍は後退した。全ての棺は、最後の道を辿ることになった。本当に最後の道を！ 軍団はシベリアを通過し、中国との国境線に向かった。国境線から余り遠くないところで、棺の乗った列車は、赤軍パルチザンに襲われた。列車から、侯爵ヨアンナの棺が引きずり下ろされた。パルチザンはそれ以上のことをしなかった。災難者の遺体の収まった6つの棺は、北京にあるロシア公使館の敷地内に臨時避難所を見つけた。聖セラフィム・サロフスキー寺院に、地下礼拝堂に。(映画「国境」で、私は、この納骨所からエピソードを導入した。しかし、国家保安委員会は。警戒を怠らなかった。監督ステパノフに、このエピソードを撮影することは、完全に禁止した。) 2つの他の棺は、神の意志に従って、エルサレムへ、ロシアのマリア・マグダリナ寺院へ。

私が「臨時避難所」と記したのには以下の事情からである。1945年に、赤軍が満州に侵攻した時、北京にある聖セラフィム・サロフスキー寺院から、6つの棺が消えていた。明らかに、永久に。しかし、・・・

しかし、最近、我が国の国家安全年代記の中に、アドルフ・ヒトラーの頭蓋骨は発見された。誰かが知っている・・・

私たちは、朝早く「メジュナヤ」鉱山に到着した。草は濡れていた。かび臭い泥水が襟をはい、背中に沿って流れる。我々はゆっくり進んだ。足の下で、枯れ枝が折れる。秋なので既に乾涸らびている草は、人間・・・の短い人生に対する悲哀を思い出させる。

「ここ・・・」 陰気に案内人はさりげなく言う。

目の前に、楕円形の地面の凹みが見えた。大きさは3m×2m。深さは2m～3m。我々は斜面に沿って降りていった。地面は下に行くに従って固くなっていった。私は当惑して質問をした。

「・・・底はどこ？ 大分深かったと思うが？」

直ぐに案内人は陰気に答えた。

「ここから見て下さい・・・」

私は見た・・・

丘。大きくて、高さは10mはあろうか。斜面と頂上には木々が。梢は高く高く聳えている。

「これは、鉱山の廃土です。坑道内から遺体を掘り出す時、廃土持ち去らないで、ここにばた山を造った。」 誰かが質問をした。

「生きている人間を本当に突き落としたのですか？」 修辭的で、素朴な質問。質問者自身肝心の言葉を知らなかった。

私は思い出した。「ロマノフ一家に、我々はうんざりだ！」

・・・あの恐怖の年の痕跡に沿って、我々はアラパエフスク村に戻った。ほら、墓地が。しかし、遺体安置室はもう無い。その場所には、その哀れな残骸が醜惡な堆積となって積み重なっていた。そこには、かつて立っていた。

寺院については、私は既に話をした。

納骨所を探し出すことが残っていた。そこには1年程、棺が置かれていた。私は地域役所に向かった。彼らは興味を持ち、寺院の床を開けるのに同意した。

しかし、これをするには無かった。神よ・・・地域の住民達が現れた。素晴らしいマナーを持った年配の女性、アブグスタ・セメノブナ。「燃える18年」に、地元の小学校に、彼女は通学していた。大公セルゲイ、その他の犠牲者達の葬儀にも参列した。アブグスタ・セメノブナが語った。

「彼らの棺が通りを通過していく時、群衆がどれほど泣き叫んだか、貴方にはわかるでしょう。」

インテリの外見をした中年が近づいてきた。

「貴方はロマノフ一家に興味があるのですか？」

そして、私にマフラーを差し出した。長い、信じられない程長い・・・ 多分、マフラーは絹製。黒っぽい灰色、小さい模様が描かれている・・・

私は、はっきりと、はっきりと、通りの中間に、大公達を見つけた。彼らは、何かを話しながら、ゆっくりと進んでいた侯爵イゴリの肩で、この長いマフラーが揺れていた・・・

正に、夢心地、死者の言葉が爆発する。(？ ＊)

「・・・侯爵イゴリに所属していた・・・ この女性の父は死体安置所でマフラーを掴み取り、皆は死人達の物を山のように積み上げた。各自が欲しい物を、各自で選んだ。記

憶によれば・・・」

「この女性は誰？」

「言わない。貴方はモスクワの人。彼女は貴方に渡したがっている、がそれはダメ。マフラーは今私のところに届いている。彼の遺言に従って、」彼は去っていく。

「どこです、地下納骨所は？」アブグスタ・セメノブナに私は尋ねる。

「ほら、そこです。」アブグスタ・セメノブナは驚いていた。

「これは増築部分では？」

「見ての通り・・・」

増築部分に近寄る。扉は無い。

「ここ？」

彼女はうなずき、最初に入っていく。辺りを見回しながら、

「ここへ・・・私はここへ来てはいなかった・・・当時。彼らを運び去った時・・・

その後、これらは・・・戻ってきた。何ができるだろうか？」

ゴミ箱・・・

あの伝説の年に、ポリシェビキであるモデスト・ヤコブレビッチ・スタルチェフが、ここで指揮を執っていた。ハンサムな顔立ち、目は生き生きとしており、表情豊かで、耳は少し突き出ているが。外見からは好人物であり、馬鹿のようには見えない。これは写真からのこと。しかし・・・

人は見かけによらぬもの。スタルチェフは地域の長であった。全てが彼の指導の下で行われた。外見は好人物・・・ついでながら、レーニンも全く同じような人物。スタルチェフはここで天寿を全うした。アラパエフスク村で。この墓地に葬られた。

我々は彼の墓を探し当てることはできなかった。

さらにもう一つの感動的なことがある、詳細：スタルチェフの上着のルバシュカには、布地で覆われた2つの大きなボタンが見える。彼は工場の若い労働者。覚えていますか？

「回転する－空色の球が回る・・・」映画「白馬」の主人公は「空色のマフラー」を正しく歌った。1文字だけの違い(шар(球)とшарф(マフラー)*)であるが、意味は全く異なる。ある者は呪わしい帝制の絶滅を夢見、ある者は君主制の復活を夢見る。

1990年3月に、雑誌「我等が遺産」の編集部が、私にロンドンに出向くように勧めた。骨董品会社「サトビス」のオークションに出るようにとのことであった。判事ソコロフの資料コレクション、19世紀から20世紀初めまでのロシア絵画、皇帝家族に関係した品々、愛好者向けの品々が販売された。これが、私の初めての海外への出国であった。モスクワでは、冬が全力で荒れ狂っていた。

ロンドン空港には、夕方遅くに到着した。ロシア語のよくできる入国管理官が、しつこく私に尋ねる。何故、何のために、私が大英帝国の領土内に入るのかと。代表団(代表団のような者であった。世界的に有名であるこの会社が、まとめて招待をしたので。)の他の団員達は何の質問もされていなかった。管理官は、私の尻尾を捕まえようと必死であった。というのは、「国家保安委員会のエージェント」であるという、私の評判が既に伝わっていた。

ようやくのことで、管理官は理解した。私が拷問されても口を割らないことを。終いには、何やらつぶやきながら、彼は渋々私を解放した。我が国でよく聞く「****(格言？*)」に似ていた。

我々は、会社が派遣した、乗り心地の良さそうなバスに乗った。ここで、最初の衝撃が。とにかく私にとって。道路脇の街頭が点滅し始めた。木々や家のシルエットは、バスが止まっているかのような印象を与えた。「彼らの道路はかような・・・」私の隣人は薄笑いを浮かべながら説明をした。

ホテルに到着をした。深夜となっていた。いつも通りに、カウンタの向こうに、眠そうで、悪意に満ちた顔を見ることを期待する。旧ソ連邦の領内で、誰か、どこかで、そうでないのを見ましたか？誰もいないし、どこでも無い。しかし、ここでは笑顔をみせている、見せかけでは無い、心からの。ほんとに不思議な・・・

レストランに入って、私が驚いたことがある。白黒映画の時代に、アメリカ映画で見たような、階段の下からまっすぐに始まっているレストランであった。前世紀末の建物。しかし、建物は良く修理されていて綺麗であった。レストランでは、我々のところにテーブルを動かしてきた。テーブルには様々な贅沢な料理がのっていた。ビールもワインも。これら全ての費用が主催者持ちであった。代表団の団員達がこれを「理解」した時に、彼らは歓喜して、個室内の冷蔵庫の中身を自分のトランクが満杯になるまで詰め込んだ。ホテルの部屋の小さい冷蔵庫の中には、何でも入っていた。ビール、水、お菓子、焼き菓子、等々・・・これらが全て無料であったことを、最後まで、私は知らなかった。残念。さもないと、知っている者・・・持ちこたえられない。

他日、会社で。「ロシア部」の部長ジョン・スチュアート（スコットランド国王の末裔、オートバイに乗ってやって来た。極めて友好的で、遠慮深い。教養を感じた。）が、私に宝物を見せてくれた。数日後に競売に出されるものであった。

家族殺害に関する書類、最初の1冊（そのように、私は覚えている。私は思う、正しいと。物的証拠は次の冊に決して添付されないことを）。動揺して、私はよく考えることができなかった。ただページをめくった。私の顔は引きつっていたのであろう。ジョンの驚いたような視線に私は気がついた。

その後、私は物質的証拠をじっと見つめた。それらは全てどっちみち公表されているものであった。モスクワとエカテリンブルグ・・・が交換した電報の色について話そう。ブランクはくすんだバラ色、「政府」、端がちぎれている。皇帝家族に対するポリシェビキの陰謀の血に飢えた悪意が、これらのブランクに印字された。長老、友人、関係者によって。アラパエフスキーの囚人に渡された受領証。誰それのところから、金を取り上げた。誰それのところから写真館からの領収書を取り上げた。誰それのところからは書類を。これらの領収書は、「メジナヤ」鉱山から引き上げた遺体の所にあった。紙には血と膿がしみこんでいた。紙には、あの世の凍り付くような様相が残っていた。私は少し考えた。これは、ごく当たり前の概念を示している（＊ ？）。歴史に触れること。

しかし、これが全てでは無かった。殺戮の1日、2日前に、ヤコフ・ユーロフスキーは「4人兄弟」鉱山に出かけていた。遺体を隠すための場所を選ぶためである。イパチェフの家の指揮官自らが、堅く茹で上げた卵のかごを取りだし、それを修道院の修道女が囚人達へ運んだ。ユーロフスキーは原っぱ（この原っぱを、ソコロフは「原っぱの医者」と名付けている。その意味は今にわかれよう。）に切り株を見つけた。それに座り、卵の汚れを取り始め、飲み込んだ¹。その後、「期待される人物（＝ユーロフスキー ＊）」は、大便をもよおした。自分の「準医師のメモ帳」から頁を切り裂いた。このメモ帳を、用足しの終了後、仕事で用いた²。この事から、原っぱに「医師の」という名が付けられたわけである。

卵の殻、人糞で汚れた紙は、調査が念入りであったことを示している。

今、全てが、私の目の前にある。

私の感じたことを伝えるのは難しい。結局、コンスタンチノビッチの血に染まった領収書、これが一つ、これが殆ど正常。しかし、そのような者のために・・・

私は人生で初めて思った。レーニン、スターリン、トロツキー、エジョフ、ヤゴダ、ベリア、その他、我等の頭領は、勿論「法の下で」、署名より先に、自分の用件を遣わした。畜生。その後・・・ 判決、指示、要望、余白の備考、それらがあの世に送り込んだ。私はこれについては既に言及している。4000万人のロシア人を、ソビエト人を、白軍の人たちを、あの世に送ったことを。

クレムリンの便所と執務室は、日常の認識とは相容れない。私にとっても同様だ。

しかし、他の面からすると、これが全て。マヤコフスキーの言葉を借りると、どっしりと、ぞんざいに、はっきりと。私は口がきかなくなり、ジョンは私の脇で寂しげに微笑みながら立っていた。

脚注（1）封筒の中に殻。ペしゃんこで、黄色がかった沢山の欠片。（著者の注釈）

（2）大きさ12cm×12cmの紙片の上には、印刷文字がある：「・・・肺肉腫、脾臓」。明らかに、アルファベットの索引。（著者の注釈）

彼は、スコットランド王の子孫であり、他の世界の人物のようであった。

ジョンは、自宅で歓迎会を催した。古い、多分、16世紀の建物、家には沢山の回廊、廊下、狭い通路、低い天井の部屋があった。英国人は幽霊を崇拝している。何故か私にはわかったような気がした。

沢山の招待者がいた。ロマノフ家の関係者、元ロシア帝国の伯爵、侯爵、名門の宮廷人（お互いに紹介し合わなかったのも、誰が誰だかわからなかった。）。リベン侯爵は、私に、ロシア革命と旧体制に関する自分の本をくれた。表紙には、レーピンの絵「国会」があった。レーピンは、イワン・クリコフ、ボリス・クストヂエフと一緒に、この絵を描いた。3人の画家が描いたにもかかわらず、絵は完全に見える。色合い、構成、人物全てに至まで、完璧に溶け合っていた。私はしばしばロシア博物館に出かけていた。長い間、この絵を良く見ていた。描かれた人物の顔には、死相が漂っていたように感じた。とにかく、そのような感じが。チャーホフの「桜の園」の中の「はぜた弦」はこの絵の雰囲気の中で鳴り響き、そこにいた全ての在席者達はその音を聞いた。私は思う、ドメニク・リベンはこれがわかっており、「定例国会」の表紙に使用したのは偶然ではなかったと。

私のところに公爵夫人ベンケンドルフが近づいて来た。ジョンが私を彼女に紹介して、

ジョンは直ぐに去っていった。友人達と宴会をしに。私たちはどこにも動かないで、ロシア帝国の運命やロシアの将来の運命について、語り合った。

公爵夫人は、低い声で、はっきりと、綺麗なロシア語で話をした。彼女はそれほど若くはなかったが、チャーミングで綺麗であった。彼女のドレスの襟には、小さいダイヤモンドのブローチが光っていた。双頭の鷲の。私たちは永遠の課題について話し始めた。罪は誰にあるのか？ 全能の長の曾孫、政治警察の、悪名高い独立憲兵隊の、陛下の個人官房の第3部局の創設者。彼女は悲しそうに語った。「私たち、ロシアの宮廷人達・・・他に誰が・・・」

「ユダヤ人」、ボリシェビキ、エスエル、その他についての言葉はなかった。これは、誰が話をしているかというレベルに依存してから。

この記念すべき出会いの前の数日間、私は報告書を書いた。ソトビスについてである。遺物の発見の詳細について、30人余りの人たちが聞きたがっていた。最前列に、侯爵コリツイン（ロンドンの、モスクワではない）、「王の個人的な友人」、（彼の名前は何と言ったか）が座った。私を、冷たく薄笑いをしているような目つきで見た。もぐもぐ言った。

「*****君の週。」 この言葉が私を動揺させた。直ぐに、がっかりした。実際、「ユダヤ人」に関して、侯爵は何も話さなかった。

私は問題にアプローチした。それは、私が既に言及したものである。ベリャエフの意見について話をした時。

イパチェフの家の「死の部屋」の壁に、殺戮後、2つの書き付けが残されていた。

最初の書き付け。「Belsatzar ward in selbiger Nacht Von seinen Knechten umgebracht」。(ドイツ語文 *)

これは、ハイネの詩「バルタサル」(バビロン王 *)の最後の21行目である。バビロン国の最後の王となったバルタサルは、ペルシア人による町の包囲時、高官達のために宴会を催した。エルサレムの寺院から、バルタサルの祖父が奪ってきた聖なる器から、皆が葡萄酒を飲んだ。その時、一瞬、皆は壁に怪しい炎の文字が現れたのに気がついた。予言者ダニエルを呼び寄せた。書き付け解明した。「мене、мене、текел、упарсин」何を意味しているのか？ 神はお前の統治を算定し、統治の最期を告げた。これが「мене、мене」、お前は秤にかけられ、本当に軽いことがわかる。これが言葉「текел」の翻訳。そして最期に、「упарсин」。お前の統治は分裂される。ミデヤン人とペルシア人によって。「まだ日の出前、奴隷は国王を殺した。」ハイネの詩の21行目はかように翻訳される。

誰がこの書き付けを残したのか？

殺人者達の中の誰か。「死の部屋」に入った、シベリア、チェコ軍団の将校、検察を疑うことはできるのであろうか？ 一人の人間もその時には、部屋にはいなかった、他の人に隠れて秘密裏にこれを書くことなど。そのようなことが可能であったらうか？

別の問題は殺害後のことである。

殺人者の中に、マジャール人がいた。彼らはドイツ語を不自由なく使えた。この書き付けを、学歴のあるウラルソビエトの誰かが書いた。例えば、ボイコフ。

誰かがすることはできた。私にはそう思われる。その時まで、町にはシベリア軍団とチェコ軍団が入ってきていた。

書き付けは、他のドイツ人が書いた。この書き付けの張本人は、ゲーテの詩を正確には記憶していなかった。文章に混乱があったからである。彼は助詞「aber」を見落としていた。それは、ゲーテの詩では「ward」の後にある。最初に、「selbiger」を書いた。が、削除し、削除した文字の上に、正しい文字「seinen」を書いた。

翻訳して究明してみよう。ハイネは語っていた。「Бешашар был одна ко же, в ту же ночь своим слугами убит」。

匿名の作者による壁の書き付けは、第一の解釈として、「ベルシャツアールがいた。その夜に、召使いによって殺された。」この書き付けは、イパチェフの家で行われたことの確認のように響く。全てを殺した。無条件に「それでもやはり」。

提案のリスクを冒してみる。工場の普通の労働者達がイパチェフの家の警護員であった。この警護員が、自分の感情を別な方法で表現した。さらに、アレクサンドル・ブロックが断言している。「ドイツ語の詩において、ハイネは常にユダヤ人であった。」これ故、「バルタサル」は、ヨーロッパ語では無く、旧約聖書におけるユダヤ語で呼ばれた。「ベルシャツアール」と。

私は思う、壁に書き付けをした者は、この名前の書体に、一定の意味を与えたと。

けれど、私はこれには固執しない。

これに対して十分な根拠があれば、断言する。圧倒的な多数のもとで、皇帝を殺したのはロシア人ではなかった？ 外国人が？

私はあると思う。

1974年に、本「幽閉中の皇帝家族の手紙」をアメリカで出版したアリフェリエフが、幾つかの文献を推薦している。歴史家に反論されたり、結構な疑いに晒されたような。

これらの文献について話すと、なんだか私が反論しているようだ。最初の文献はウラル・ソビエトの決定、7月14日深夜2時受理。「会議は全会一致で、元皇帝ニコライ・ロマノフとその家族、従者達を処刑する決定をした。」これでは、モスクワは全く関係ないことになる。違う。私が思うには、そんなことはあり得ない。死刑執行人の役割を演じることは、モスクワ、レーニンには都合が悪い。私は既にこれについては言及している。それゆえ、ウラル・ソビエトはモスクワに適当なカモフラージュを考え出すことができた。

2番目の文献は、極めて興味深いものである。というのは、血に汚れた事件の参加者の全ての尋問において、同じことが繰り返される。ユーロフスキーは、ラトビア人兵士達と地下室で「仕事」をした。ソコロフが尋問した中の一人、ペルミ地方裁判所の検事ピョートル。シャマリンは、今度は自分から、殺人者の一人であるパベル・メドベージェフの尋問をした。ペルミのカマ川に架かっている橋のところで、彼を逮捕していた。メドベージェフは自分の指揮官の命令を実行しなかった。橋を爆破しなかった。何故、メドベージェフはこの命令を行わなかったのか？ 答えは単純である。良心が苦しめた、自身の血に汚れた罪をどうにかして償いたかった。

本当である。ボロシロフ同志が、自分の回想記の中で、他の多くの知人達が断言したと。メドベージェフは「状況とは関係ない。」ということで、橋を爆破しなかったと。「宣言に忠誠を尽く」して残ったと。

これは本当ではない。メドベージェフは自発的に降伏をした。これは彼自身の証言から明らかである。

他人に後続して、メドベージェフは繰り返していた。家族の抹殺の時に、「死の部屋」にいた人物。ユーロフスキー、ピョートル・エルマコフ、ユーロフスキーの助手（メドベージェフが指名はしていない）、同志エルマコバ（メドベージェフが指名はしていない）、そして、7人のラトビア兵、そして、メドベージェフ自身。合計で12人。

ユーロフスキーのメモに戻ろう。彼は書いている。「・・・判決を実行しなければならぬ、ナガン歩兵銃を持った12人（その中に7人のラトビア兵）を選抜した。2人のラトビア兵は娘を撃つのを拒否した。」

シャマリンは説明をした。ボリシェビキの大半はラトビア人。そのように、メドベージェフも断言している。言葉を換えれば、メドベージェフは、この言葉からすれば、イパチェフの家 にいた非ロシア人全員を指名した。

このように、ラトビア兵は7人いた。

アリフェリエフが明らかにした「特殊任務の命令記録」に、10人が示されている。しかし、我々は「ラトビア人」に興味を惹かれる。それはちょうど7人！ この数値は、「ユーロフスキーのメモ」の数値、及びメドベージェフの示している数値と一致する。

これらは誰か？ アリフェリエフが挙げた名前が次の通りである。

ゴルバト・ラオンス
フィシェル・アンゼリム
エデリシュテイン・イズドル
フェクテ・エミル
ナド・イムレ
グリーンフェルド・ビクトル
ベルガジ・アンドレアス

3番目以外は、全てハンガリー名である。

多分、著者は単純にこれらの名前を考え、無理に利用したような気がするが？

私の知らない人間を、こんな風に、疑い始めたらしきが無い。その人の本は殺された者に対するミサ曲。

完全な理由が無いが、少し私見を話す。そのようなことは多分ダメだろうか。1919年4月15日から25日にかけてソコロフによって行われた、イパチェフの家の検査記録が書き留められていた。壁の下品な絵と札付きの卑猥な悪口以外に、手の込んだ非常に恥ずべき、鉛筆による壁への上書き。「第6 ペルハシュ 1918 12/15/カラウ・・・」。この上書きの下にさらに他の上書きが、「やった、どうやら、マジヤール語で」、同じ鉛筆で、同じ書体で：「V e r h a s A n d r a s 1918 V U / I S E o r s e g e n」。

アリフェリエフの書類で、これは最後の名前。ソコロフの書類とこの書類を比較して、十分確かな結論に至る。この書類は本物である。別な問題、アリフェリエフの書類には、「メビウス」なる者、軍革命委員会参謀長が存在する。実際には、ウラルソビエトにはメビウスはなく、「委員会」はなかった。ここに矛盾がある。彼（？どちらの＊）の結果が除去されることが望まれよう。

これが全てでは無い。1989年（あるいは90年）に、この書類の中の一人の名を挙げた。極めて批判的に名を挙げた。イムレ・ナジである。ハンガリーで起こった「蜂起」の、ソビエト軍による鎮圧後、ブダペスト監獄の中庭で絞首刑になったハンガリー政府代表。当時、私は語っていた。ある西側のラジオ放送のインタビューで。ナジは第一にコミュニストであるが、死刑執行人でもあったと。

2日後、ラジオ「自由」は、私をとことんこき下ろした。私は中傷者であり、イムレ・ナジは純粋な民主主義者であり犠牲者でもある。イパチュフの家にはいなかったの、そのようなことができるわけではない。彼はソビエトロシアの革命軍の成員であり、さらに、ウラルから東部へ。多くの評論家はいらだち、確信を持って語った。

彼も、私も、当時は知らなかった、イムレ・ナジが、裏切り者、悪党、血に飢えた処刑執行人、ソ連邦国家保安委員会の優れた「戦友」であったことを。エージェントとしての彼の匿名は「ボロジャ」、国家保安関係機関に信頼と信義をもって勤めた。彼によって売り渡され、殺された数十人に対して良心をとがめさせながら。彼の腕は肘まで血に染まっていた。彼は働いた、強制からでもなく、恐怖からでもなく。

私は信じる、かような非人間は銃殺にためらいもなく参加することができる。いや、皇帝家族の抹殺に。

国家保安委員会の書類では、「ボロジャ」をハンガリー人と名指ししている。

1956年秋に、ブダペストで蜂起があった時、イムレ・ナジは、蜂起者達に呼びかけた。「皆さん、私もハンガリー人、皆さんと同じように。」

しかし、極めて事情に詳しい人から、私は何度か聞いた。「ナジはユダヤ人だ！」　そうか・・・

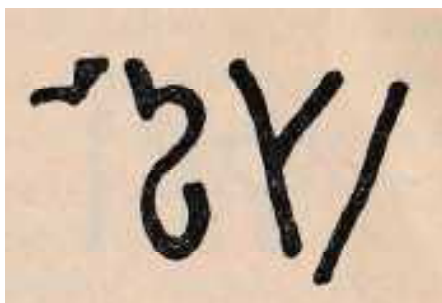
私は思う、ナジの民族性は意味を持ってはいない。ナジは昨日までの自分の友人を裏切った。民族性ではなく、共産主義の信念から。思い出してみよう。「お互いに密告し合わなければならない。」　イムレは、単に、自分の恥ずべき義務を成し遂げた・・・

・・・2つめの書き付け（窓敷居に、インキで）は「試作」あるいは・・・と見なされる。

あるいは、ボリシェビキによって行われたとする、極めて決まり切った認定。

書き付けは次のようなもの。

図



アメリカのパガヌッティ教授は断定している。この書き付けは、かつて、英国の学者エネルによって解説された。その意味は次のようなことである。「ここで、秘密の力の命令に従って、皇帝は犠牲にされた。全ての国民がそれについて知る。」　エネル（パガヌッティの言葉によれば）が示した、窓敷居のところの文字は、ヘブライ語の先駆者である、古代アルメニア語での暗号文を示していると。

しかし、パガヌッティは暗号解説の表を提示していない。解析内容なども。

ユジャコフ教授（1906年～1969年）編纂の「大百科事典」の第1巻に、論文「アルファベット」がある。表中に、古代ユダヤ文字、ヘブライ文字、を私は見つけた。それらは、1918年には、死に語であり、ただラビの学者達とサンクトペテルブルグ宗教アカデミーの教授達が利用していた。職務のために。旧約聖書と新約聖書の歴史なくして、ロシア正教を教えることはできない、「正しい信念」に関する科学と同じく。（？　＊）

ヘブライ人は当時の今もヘブライ文字を使用している。彼らは「特定集団内の用語」として、イディッシュ語を持っている。それはドイツ語と、その他よくわからない言語等との混成語である。手紙での話では、インディ主語の単語はヘブライ語の文字で形成されている。ウジャコフの本に、私は4つの文字を見つけた。（図に示したのと良く似たものを見つけたと、予め断っておく。）

単語なのか、それとも、ちんぷんかんぷんな言葉なのか、私にはわからない。それが次のものである。



今では、相変わらず話す。「ルースキイ」、「ルースカヤ」。残り全ては、あれやこれやの「民族」の「人物」。ほら、「ユダヤ人の民族の人物」が、ロマノフ一家の抹殺と、その抹殺の組織へ参加した。こう言いながら、私は少なくとも、ある民族の「人物」を分離したいし、分離していききたい。そして、これらの「人物」を他の民族の「人物」と対比したい。モスクワに、世界に、あるユダヤ人共同体からの報復を恐れることなく、*****。普通の人々は全てを正しく理解しなければならない。*****—中世時代の兆候。

更に。私はただ分析をし、理解したい。私は誰も非難し、射すくめるつもりはない。そのような問題を普通に設定しなければならないのであろうか？（この当たりの内容が？*）

—————
脚注 1993年10月、私は自分の映画「白馬」に関して、モスクワ・テレビのインタビューを受けた。他日、敬愛している（嫌みではない）新聞が、私を最大限に非難した。全く分かり易い理由で。ユダヤ人共同体は、直ぐに検察庁に出向いた。そこに知性ある人々がいることを願った。私のインタビューから、全く何の不道德なものは何も出てこなかった。刑事事件への告発は拒否された。（著者注）
—————

国王アレクサンドル三世が、ユダヤ人の状況に興味を示した時、内務大臣であるイグナチエフ伯爵は、ユダヤ人の権利などに気をわずらす必要はありませんと、返答した。何故なら、ユダヤ人達は何の権利もないのに、至る所に潜り込んでいるからと。

敵を見つけ出す素晴らしい方法は偏見。これと戦うのは不可能。ロシア人作家サルチコフ・シェドリンは、これを他人以上に理解していた。「歴史は自分の頁に、ユダヤ人問題より非常に厄介で、全くの無関係な人間性の苦しい問題を、決して書かなかった。殆どの人々は絶望的に苦しみもだえ、彼らの所から全てを奪い取る。この不死の臨終状態で想像することは可能なのであろうか？**しかし、ユダヤ人はその中で生まれ、そのために生まれる。**」（太字強調は、シェドリン自身によるもの）多数が集まる教室で、私が発言する巡るあわせにならなかったが、实际的に、ホールから何時も同じ質問が響き渡る。「ユダヤ人が皇帝を殺したのか？」私は何時も同じ返事をする。「ボリシェビキ達が皇帝を殺した。その中に、もちろんユダヤ人もいた。付け加える。卑劣な人間、人間のくず。どんな民族にもそのような人はいる。

この血の歴史の中に、ヤコフ・ユーロフスキー、フィリップ・ゴローシェキン、スベルドロフ、ボイコフ、その他の多数の革命家の存在を、誰も否定することはできない。「個人」に所属するより、正確には人間のクズに属する。

ユダヤ人に市民権を与えるよう、皇帝に訴えた、心からのロシアの国家主義者であるピョートル・ストルイピンの頼みを聞き入れなかったという皇帝の先見の目のなさを、誰も否定はしないであろう。

全国の至る所から、多数の人々がレーニン同士の軍隊に殺到した。「生粋」の国籍の汚れた政治は、彼らの永遠で、不断に蓄積している侮辱を利用しているということ。知らないままに、革命と国内戦時に、最も血に汚れた仕事に「投げ入れる」ことも。その後、不用になったので、ツバを吐き出すことも。「敵の仕業」さえ創作することも。ロシアでは、全てを何時もユダヤ人に責任なすりつけるのが常となっている。彼らは人民の中に細菌のように入り込む。彼らはロシア人を押しのける。彼らは全体として害である。本質において、今日再び、「最終的解決」の問題となっている。これは明らかに、国の南部で、いやモスクワでさえ、響き渡っている。

その通り、皇帝はユダヤ人が嫌いであった。「ユダ」としてか、彼らと呼ばなかった。
(ユダはユダヤ人に対する蔑称　＊)　ニコライ二世が、ロシア人民の*****について話した。彼、皇帝は常に、民族の指向のために「いわれなく迫害をする」者の側にいるであろうと。

しかし、皇帝は警察局にガルチング(？　＊)を配置していた。例えば、実際にはアブラム・ゲッケリマンを。ガルチングが外国スパイ局を総括し、軍の少将に相当する4等文官になった。

他の言葉によれば、ロシアにはユダヤ人に対向する法律があった。しかし、皇帝は例外的に何でもできた。少しは真実。

新聞「ゼムシン」の記者ニコライ・ペトロビッチ・チフメネフが、話をしている。皇帝がペテルブルグのある連帯での食事に訪れた。食事中、細菌のテロ行為へのユダヤ人の参加に関する話題となった。一人の将校が大声で述べた。「彼ら全員絞首刑！」　皇帝が話した。「ユダヤ人が私の家来であったことを、決して忘れてはならない。」

これは優しい一口話に似ている。それにもかかわらず・・・

この問題は未だおとなしくはなっていない。理にかなった明快さを持っている。

これは全てが原因である。それ以上では無い。(？　＊)

今、ロシア正教会の最高宗務院は、皇帝家族の遺物の埋葬に関する政府委員会へ参加した。****、神聖な問題。家族の殺害はなかったのか？　儀式的に？

この問題には、委員会が返答をしなければならなかった。委員の中には、この点に関して、専門家でない人がいた。専門家は総主教管区にいる。全員がアカデミー教授。

1913年に、キエフで、これら教授の前任者達が、ベイリスの仕事に関する裁判における質問で、明瞭に答えていた。ユダヤ人は儀式において、殺人は行わない。

しかし・・・

――――
脚注　1911年、キエフで、ユダヤ人の外科病院の番頭メナヒリ・メンデル・ベイリスが逮捕された。キリスト教信者である子供アンドレイ・ユシンスキーを儀式で殺したという罪で。子供の遺体は潰され、血は抜き取られ、死の前に、子供は非常な苦痛にさらされた。右翼の出版社は「ベイリスの仕事」を「全世界」に公表した。単純に、ユダヤ系ロシア人だけに罪があるということではなく、全世界のユダヤ人にあると。そういうわけで、ユダヤ人が害毒であると。(著者注)
――――

裁判官はそのような事はあると判断した。子供ユシンスキーはユダヤ人の狂信者によってグループによって殺されたと。儀式の目的のために、キリスト教の子供から血を抜き取ることに、前もって仲間内で合意していたと。しかし、裁判は弁護側の理由を受け入れた。ベイリスにはこれに関して罪はない。

しかし、規定外の審査で、欠席裁判で有罪と認めた。専門化は説得をした。ちょっとした間、ユダヤ人はパスハ(ユダヤ教の祭　＊)用のパンを準備するために、キリスト教の子供の血を要求するものと推定し、信じるならば、その時、マツァ(ユダヤ教で使用するパンのこと　＊)の準備、調理には疑う余地がなく全条件を遵守しなければならなかった。マツァはクレイで、清浄で、汚れておらず、トレフ(ユダヤ教で禁じている食物　＊)であってはならない。専門家は明らかにした。建物付近で、パスハ用のパンの準備の時、その建物で、他のマツァを異教徒が準備している。マツァ、その半製品は禁断の食物となり、投げ捨てられる。

子供ユシンスキーに、服を通して、不潔な針を刺して、パンのために血を抜き出したというのはあり得るのか？　いずれにせよ、土間のある、少なくとも壁がある室内で刺した？

マツァのために、そのようには考えられない。状況の分析のために、「儀式殺人」を信じるとしての前提の元にである。　19世紀におけるユダヤ人の犯罪は、裁判の正当化によって根絶された。或いは「儀式」における罪の排除により。

「ベイリスの仕事」と名付けたことで、この告発は公的に残った。

しかし、私は繰り返す。以下のことは信用できる。皇帝一家と彼らの従者達の抹殺は、ユダヤ人のパスハの数週間後に実行される。汚れた地下室で実行される。レボルバー拳銃を使用して実行される。弾丸は衣服を貫通し、未だ息のある者達を銃床で打ちのめしている。これら全てが、マツァのためと、信用できるか？

しかし、多分、実質的に、「犠牲」？　秘密の上書きをエネリ(？　＊)はどのように解説をするのか？

モーゼの本の第1巻の9章に書かれていた。「人間の血をこぼすものは、自分の血を流すであろう。何となれば、神の形に、神が人間を創ったのであるから。」

モーゼの規則(申命記(モーゼ5書のうちの1つ　＊)、第12の30と31)に、神

はイスラエル人に対して、人々を生け贄にしないように要求している。「大事にせよ。この罪のために私は警告をする。大事にせよ。この大地を汚さないように。」

ロシア皇帝が犠牲になったとすれば、この生け贄の祭壇は共産主義者の圧制者の廟内の台座。

それとも、よく知っているような単なる儀式？ 実行されるものは明らかであり、首尾一貫して、厳格でかつ同じ？ 当時、皇帝一家殺害は、実際において、儀式であった。

とはいっても、昔から現在まで、どんな死刑判決の実行はそのようなもの。

この件の実行委者であるユーロフスキーは、1938年に、クレムリン病院で永眠した。彼の遺体は当時の進歩的な習慣に従い、火葬場で焼かれ、骨壺に入れられ、遺骨安置所入りした。私かこの壁のへこみのところに立ち、時と人間の生のはかなさに、少し驚いた。特に、人間の評価の変遷に。昨日の歓喜は呪いに変化した。呪いは跪く歓喜に取って代わった。私の耳元でささやきが聞こえる。「この呪わしいユダヤ人の墓はどこか？ 抹殺する！」 私は話した。五十里に同情はない。どこに墓があるか知らない。我々皆がそう・・・ 変化するのであろうか？ それ故、我々は地獄で焼かれる・・・

下手なドイツ語の書き付けを持った、大分黒ずんで、垂直な黄ばんだ壁紙の本物の部分。この部分は息をし、話をし、暴露していた。虐待者と殺人者を。彼らは特別ではなかったし、何の一族にも属してはいなかった。「殺すなかれ」はキリスト人にだけあるわけではない。この命令文はユダヤ人にも、ムスリム人にもある。

それを犯しているのは、民族的原理ではなく、壊れた全人類的原理に従って。

私を正しく理解することを、私は希望する。たった一つの極めて単純な理由に従って、ユダヤ人に言及した。彼らは殺人に参加した。繰り返すが、これははっきりさせるためである。彼らはこの犯罪の組織者であり、教唆者でもあった。

私が人種の特性、或いは宗教の特性に固執していることを示しているのか？ 否。何となれば、ユダヤ人の信者を殺してはいないし、ユダヤ人の狂信者さえ。かつて、人類が生んだ思想、共産主義に反動的で、敵対する思想であるとみなした見なしたものを殺した。嫉み、憎しみから殺した。実存の方法論のように、全てを奪い、分け合うために殺した。より正確には、心いくまで強奪した。略奪した。ここには、民族的属性の意味はなかった。ただ「党派」という犯罪集団への属性のみが。それ故、皇帝殺害に関して、この決まり文句「ユダに殺される。」は何の些細な関係も有していない。何となれば、この決まり文句は、民族的な公的な意味を持っていないからである。何よりもまず、思想的にも。

もし誰かが、ある社会団体で、ロシア正教会で、この決まり文句を、もつばら、民族的内容に限って適用するならば、どうなるか・・・これは次の一步である。が、ヒトラーに追従するものではない。しかし、極めて先は遠い。奈落は限界を持っていない。

ロンドンで、私には、非常に大事な仕事があった。私は王朝の破滅に関する映画を撮影したかった。(これについては言及していた。) 金が必要であった。BBCの独立プロデューサーが私に会いたがっていた。彼は好人物であった。ソ連邦からの訪問者にはお金がないことがわかっていて、私のタクシー代を支払ってくれた。

彼のオフィスはロンドン郊外にあった。古い2-3階建ての建物。そのうちの一つに、私の信頼をおく恩人が部屋を構えていた。

最初に、彼の書斎に、大きなレーニンの写真があるのを見た。秘書が語った。彼女は少しロシア語が話せた。「ボスは、左翼支持者です。」

次に、ボスは、私に次のような映画の構想を提案した。5歳の少年がエカテリンブルグにおける痛ましい事件の目撃者となる。皇帝家族殺害、及びその後全ての目撃者。「この少年の目で、映画を撮影していく。驚くような成功が期待されよう。我々のところでは、子供達をあがめている。」 私は返答する「我々のところでも同じです。しかし、あなた方と違うところは、我々の方では、そのような「手段」は全く受け入れられません。我々のところでは、観客に作り話は不用です。医学上の事実。(？ *)」

我々はお互いに理解し合えなかった。

しかし、次の日、私は報いられた。BBCのロシア局のマーシャ・スロニムが私を招待した。私は彼のところを訪れ、ロシア正教の牧師と知り合いとなった。極めて知的で、物腰が柔らかかった。マーシャは小柄な女性で、機敏で、笑顔に富み、親切であった。彼女は突然に電話を取り、少し話した後、私に受話器を差し出した。「ウラジミール・キリロビッチが貴方と話がしたいそうです。」 私は面食らった。しかし、彼女はほほえみ、そして謙って「こんにちは、閣下」。この言葉を私はだいぶ前から知っており、慣れてはいた。しかし、今も生きて語られているとは。

「こんにちわ。私は大変嬉しいです。私は貴方の発見物について聞いております。それらが真実であることを、私は期待をしています。これは本当に大切なことであると私は思っています。我々にとって、ロマノフ家にとって、全てにとって。貴方は自分の発見物に、自信を持っているのですか？」

「そうです。私一人ではありません。」

「成功をお祈りします。」

短く、簡単な話で、私には彼は、ミステリアスな人であった。

それ以降、私はあの大公閣下と話すことはなかった。

ペテルブルグで、自分の映画を撮影している時、ペトロパブロフスキー寺院の納骨所に彼の墓を訪ねた。

ソビエトのある新聞が伝えた。私がロマノフ家の骨で商売をするために、イギリスを訪問したと。

イギリスでさらに何があったのか？

画家アレクセイ・パブロビッチ・ズビルキンの絵「ポロシェンコフ窪地のロマノフ一家の埋葬地」を、私は手に入れたかった。そして、その絵を、イギリス国王にあげたかった。雑誌「ロジナ」での私の話の公表の1年前に、内務省の向かい側、ジートナヤ通りにある店で、私はアレクセイ・ペトロビッチの絵を見つけた。寂しい春の風景であった。灰色の空、太陽の輪郭が、空に僅かに見え、大地はまだ目覚めていない。青い雪、川の水、まだ春来たらず。私はこの絵が気に入った。それを購入し、その後、画家の自宅の電話番号を見つけて、電話をした。そのようにして、我々は交流し始めた。後になって、皇帝家族の悲劇について多くを、彼と語り合った。彼は注意深く、かつ同情しながら聞いてくれた。彼自身の軍経歴自体が極めて悲劇的なものでもあった。クリミアでの捕虜、強制収容所、抑えがたい生への執着、友の死。アレクセイ・ペトロビッチの心には、多分共体験するものがあったと推定した。絵がある。場所はポロシェンコフ窪地である。何か奇妙でミステリアスな色彩を帯びている。私がこの絵を見た時、私は間違いはないとわかった。絵の達人は常に、自分の感性を絵に表現するものである。多分、そのような状況で、絵が描かれた。

何故、私はそのような思慮がなく、無用な歩みをすることを決めたのであろうか？ それは次の通りである。ノーボスチ通信社で、ロマノフ家に関する私の最初の発表が行われるよりだいぶ前に、ロマノフ家の遺骸の運命について、ソ連邦政府に問い合わせるように、女王が自分の腹心の一人に頼んだ、という報道を私に示したからであった。ソコロフが報告しているように、全員が焼かれたとは、女王は信じてはいなかった。質問が伝えられ、返事が戻ってきた。その要約文を私は読んだ。銃殺後、エカテリンブルグから余り遠くない場所に埋葬した、ということであった。

私は少し考えた。女王は自分の先祖の運命に、十分な興味がある。(アレクサンドラ・フェドロブナは英国王の直系である。) あの酷い出来事の記憶において、悲劇の場所の写真を得ることは女王には興味があるであろう。

残念ながら・・・私は忘れていた。かつて、ロシアの親族に援助と救助を約束した、国王ジョージ5世が、簡単に前言を翻したことを。そこへ、英国人労働者が行くことは結構危険で、より現実となるにはまだ時間がかかりそうだと考えて。私は忘れていた、ジョージ5世とその後の英国教会は、まず第一に政治、状況に従う。私は考えと心が至らない。

ソ連の役人の近寄りがたさは、全ての他の国の役人の近寄りがたさより大きい、とは私は理解していなかった。

心の動き・・・

強い世界には心はない。決して無かった。そして、決して無いであろう。

馬鹿な考えが私の頭に突き刺さった。アーメン、我々代表団の厳しい長は断固として発現した。「英国に自発的にやって来て、自由に歩き回った。が、私のところでは、決して何もするな！」

・・・オークションの日がやって来た。ライサ・マクシモブナ・ゴルバチョバ（ゴルバチョフ書記長の妻 *）の依頼により、ツルゲーネフの原稿の1部（多分、「父と子」で、著者の鉛筆による記号の入った2、3枚のものであった。）を購入した。ソコロフの古文書を手に入れることを考えても居なかった。（誰？複数だが *） 私は更にもう一度悲しんだ、自由世界が我々全てを水平線の向こうで待っていることを。特に仮想の線。（？ *） それに近づけば近づくほど、それはお前から遠ざかる。（？ *）

出版、テレビ、簡単な話。これら全て、明らかに、専門家達を傷つけた。私を、法医学の専門家が訪ねた。その分野で著名な人であるセルゲイ・セルゲービッチ・アブラモフである。援助の用意があると話してくれた。資料の持っている価値は、政府のレベルの問題であり、事前の準備無しに、そのような問題に近づくのは不可能だとも。再会を約束し、3つの頭蓋骨の沢山の写真（正面、側面、上面、下面、細部）を持ち、ヤウザ川へ。セルゲイ・セルゲービッチの所に出かけた。それは、河岸にあり、法医学検査研究所の一つであった。

アブラモフは中年で、中背、顎ひげと口髭を生やし、白衣を着ていた。彼の低い声の話し方や滑らかな仕草が、地方のチェコ人医師を彷彿とさせた。私の写真を見ながら、彼は

話した「そうか、そうか・・・」。覚えている限りでは、彼は鼻に眼鏡をかけ、注意深く観察をし始めた。私に目を向けてた。眼鏡の下から、当惑し、がっかりした両目が私を見つめる。「足りない、極めて乏しい。試料が少ない。これでは、我々に何かができるか、・・・私にはわからない。」しかし、私は写真は残した。数日後、私は電話をし、こちらへ来るように招待をした。

出会った。彼は私に写真を戻し、自分の結論について話をした。アブラモフは考えていた。提示された3個の頭蓋骨は、遺伝的特徴（小さい円形の顎、その他など）から、同じ家族に属するものであると。

私たちは、気持ちよく別れた。アブラモフは言った。検察庁で話を行った。不明人の遺骸の発見事実に関して、彼らは犯罪として告発することに同意した。そのためには、私が埋蔵地を教える必要があると。

私は驚き、拒否をした。

残念・・・

誠に残念なことに、アブラモフは誤解をしていた。神よ許し給え、一瞬でも、彼の専門性の能力に疑いを抱いたことを。いや。ただ、全ては余りにも早すぎ、いらいらし、気ぜわしく。そして、アブラモフは私の「魅力」に屈したということ？

私が、過去に、同じく・・・「仕事」をしたことに。アブラモフには罪はない、私に罪があった。それと同時に、アブラモフは私に根掘り葉掘り聞いて、私の絶対的な確信に感心しているようであった。大きい頭蓋骨は皇帝、それ以外に誰であろうか？ 私は断固として主張した。ほら、見てご覧。頭蓋骨に、掻き傷がある。これは、皇帝が皇太子の時に受けた打撃の跡、日本で、気の狂った警官によるものである。

アブラモフは疑いだした、が、私は重要視し、・・・

「掻き傷」は、全てフィルムか印刷による単なる傷であった！

・・・後になって、アブラモフは政府委員会の委員となった。彼の専門により全てが解明された。おお神よ、私の居ない場で、粛々と。

「ニコライ二世」の頭蓋骨は、実際には、アンナ・ステパノブナ・デミドワ、小間使いの女中の頭蓋骨であった。2つの他の頭蓋骨はニコライ二世の娘のもの。検査はそう断定した。私はスベルドロフスクの新聞を保存している。その新聞に、著者は、ある程度の皮肉を込めて書いた、「ゲリイ・リャボフは間違いを犯した。」。実際には・・・

皇帝は歯の治療をしていた。彼の歯は病んで、ぼろぼろであった。我々は、完全で大きな頭蓋骨の左下の顎に、金ブリッジを発見した。もちろん、我々は考えてもみなかった。このブリッジは、ごくありふれた品質のものであったことを。

3体分の遺骨を元に戻していた時、穴の中で発見した頭蓋骨に、無光沢の歯を発見した時、我々は考えた。金属。女中、もちろん・・・

後になって、極後になって、冷静時になった時、探査において、明らかとなった。皇帝ではない、女中。女中ではなく、皇后。これらの歯は、金属ではなく、白金製であった。熟練した手による高価な義歯であった。

私を「検査」した。動詞を括弧で囲ったが、この検査が嘘の特徴を帯びていたというわけではない。決してそうではない。ただ、今、確かな皮肉を持って、これらの件に関係をしている。

1990年夏に、「外国センター」の特使がやって来た。第一の波（？ ＊）の亡命から。彼は比較的若かった。ベオグラードの学校を終了していたようである。亡命者達は自分の若者達を伝統に従って教育をした。

彼は家具と絵の写真を撮った。開けっぴろげで、友好的に説明をした。「我々は確信をしています。ロマノフ家のポートレート、絵画、骨董品を、国家保安委員会が貴方のために特別に「置いた」。我々を、全世界社会を誤解させるために。」

私たちは、友好の中で別れた。私はずるをしていないと、彼は多分理解した。

・・・しかし、特使は興味を持ってはくれなかった。これらの資料などを手にしなかったし、溜息をつくこともなく、涙も流さなかった。私の手元には、2つの十字架が入り、公爵の王冠の下に文字「K」が入った茶碗；金色の頭の鷲と頭文字「H-P」の入ったワイングラス。更にもう1個の茶碗、アラパエフスクで非業の死を遂げたセルゲイ・ミハイロビッチの食器セットのもの。

写真等は、また、注意などを引き寄せなかった。

とはいえ、来訪者としての王制の信念を少しも疑うことなく、私は言うことができる、彼は明らかに、全く、自分の諜報機関に没頭していた・・・

これらの物品は、好みであることは明らかであり、贅沢ではない。私は何度も読んだ。彼らによって略奪された人民の体の上で、ロマノフ一家は贅沢に暮らしていたと。家族がペテルブルグの冬宮に住んでいたときには、多くの非難が彼らに浴びせられた。

ロマノフ一家が、フィンランド湾岸に、彼らのために、特別に建築家トミシュコによっ

て室内は近代風に作られた、いわゆる「下の別荘」と呼ばれた所に転居した時、別荘には何の贅沢な物はなかったし、壁はありふれた写真で飾られていた。

叫び声が上がり始めた。「ロマノフ一家は生きている、弁護士として繁栄している。彼らにはセンスはない。全てはブルジョア的に。」

評価は政治状況に関係して、上がったたり下がったり。

実際には、それほど大きくはない海岸沿いの邸宅は、何の企てもなく、普通の人の生活ことを考え（近年の規準に従っても）て作られた。大ロシアの皇帝のための家としては、極めて質素であった。しかし、これでは十分ではなかったのであろうか？

・・・他の来訪者がいた。国外ロシア正教会の司祭ビクトル・パタポフ神父が、自分の母親マーシャ、旧姓ロジャンコを連れて私を訪ねてきた。彼ら二人は、理解しがたいほどの信頼と同情を表して、私に対応してきた。これらの人からは、善良さと期待が感じられた。多分、人生において初めて、私は高潔な司祭を見た。民族性と政治性の執念を引きずっていない。このような人間は・・・

彼の妻、おばさんは本当に若く、綺麗なロシア人顔をしていた。私は彼女を見て、彼女の叔父が国王にどれほど悲しんで予告したか、を思い出した。国会議長ミハイル・ウラジミロビッチ・ロジャンコがマーシャの何に当たるのか、私は知らない。「恐ろしい革命が到来する。我々はもう統治することはない。」 ロジャンコはニコライ二世に話した。

他のやり方・・・

国会議長ミハイル・ウラジミロビッチには、脅かすこと、苦しめることを皇帝に話してはならないという根拠はなかった。

皇帝は、宗教的であり、神秘的であった。「神が与える。一何もしない。」（？ ＊）そして、返答。「神は何も与えない・・・」

私には思われる。神はニコライ二世と彼の近親者達に、ここに、地球上に、天国における永遠の記憶を贈った。

誠実な、うれしい敬意。現代の宗務院はない。仕方が無い。（？ ＊） 未来の宗務院は、いずれにせよ、ビクトル・パタポフ神父が属している教会の規範に同調する。そうなる。

・・・自分の最初の映画「最後まで耐えて」を撮影したとき、客車の正確な複製を作った。その客車内で、退位宣言が行われた。我々は、客車内の家具類の選び出しがなかなかできなかった。全てが余りにも華美であった。写真では、全くありふれた机、ソファ、椅子、時計、・・・

ペレルゴフスキー博物館の館長が、客車内の本物の家具と時計を、撮影グループに提供してくれたときは、私は本当にうれしかった。そして、私は更にもう一度、これら物品の絶対的な質素さを確信した。

私に、考えと、全てのこの神意の歴史への疑念の余地のない影響に対する確信を起こさせた、事件があった。

私とトーリャ・イワノフは、レニングラードに到着した。トーリャは映画スタジオに向かった。準備と調整のため。私は冬宮に向かった。印象を得るため。

エルミタージュの館員達は、私の公刊物を読んでおり、ジマ・ザハロフのプログラムを見ていた。好意以上の雰囲気を出迎えてくれた。部局の長は、私を、北西部分にある宮殿の側館にある部屋に案内してくれた。ちょうどその日は、部屋は訪問者には閉室となっていた。そして、ロマノフ一家が、ペテルゴフの「下の別荘」に移転するまで住んでいた居室を見せてくれた。その後、謎めいた微笑みを浮かべ、最も右端の窓（海岸通りから見えるかも）の所に、私を案内した。「ここに自筆があります。」 彼女はそう語って、ブラインドを動かした。私は茫然自失した。他の言い方があったであろうか？ ガラスに刻み込まれた署名を読んだ。「N i c k y 1902 l o o k i n g a t t h e h u s s a r e 17 m a r c h」 全てわかった。「ニキが軽騎兵を視察 1902年3月17日」 これは愛する女性だけが書くことができた。既に、娘達は生まれていた。が、皇太子、アレクセイ・ニコラエビッチは、まだ生まれていなかった。彼ら二人は、皇太子が生まれることを夢に見ていた。

「これは、皇后がダイヤモンド入りの指輪で作った。宮殿のガラスは変えないように努めている。」 案内の女性はそう語った。アレクサンドラ・フェドロブナ（妻、皇后 ＊）が窓から離れていき、彼女の衣擦れの音が聞こえたように私には思われた。

馬の蹄鉄のカチカチ音が、河岸通りから聞こえてきた。その音は、静か、本当に静か。馬は、騎士を未来へと乗せていく。未来は既に見えている。その到来までちょうど15年。

裁判の日が近づいてきた。1990年初めに、レニングラードにいる私のところに、サーシャ・アブドーンとゲナ・ワシリエフがやって来た。私は知っている。何故彼らが、そして何を持って。これに関しては、私は嫌な気分であった。私の映画「最後まで耐えて」

はうまく行っていない。私はシーンを考えていた。廟、人の流れはレーニンの棺の所に現れ、それを迂回していく。内務人民委員部の警備隊は自由な場所に、棺の所には機関銃を持った歩哨。着剣をしている。群衆が流れ動いているが、本当に奇妙。人々全てが灰色、より正確には、白黒。彼らははっきりしなく、透明がかってもある。棺の中のレーニンとチェキスト。本物、完全に生きている。血色が良く、肉体的である。彼らは時折、棺の周りを歩いている。そして、何もないように、人々の中を進んでいく。作品の監督が私に言った。「私に受領表をくれ。全ての責任を君自身で受け取ってくれ。そうでなければ、撮影は終わりだ。」 私は受領証を渡し、シーンを撮影した。

避けられないこだわりのようなものが私には残っていたのであろうか？ 失望？ 否。その時でさえ、書いていた。「私はこれこれ、これこれ、自分を信じる・・・」 当時は何も無し。

私は子供で、赤ん坊であった、1937年には、私は5才。

しかし、私は覚えている、両親が机にどのように座っていたかを。黙って、無駄に、自動車のヘッドライトの閃光が私の家の窓に投げつけるかのように。次の日の朝、父は母に話した、何か怖い話を。というのは、母の顔色が変わったから。

自分の長に、私は腹を立てることができたであろうか？ 彼の家族とそれに似た幾百万の家族は、かつて非常に悲しく、恐ろしいことを体験していた、多分。

私には、何のこだわりも、自負もない。2000年が流れゆき、全ては静かになり、忘れられる。誰かの受領書を、誰も決して要求することはないであろう。

トーリャが話した。「これを、私は撮影はしない。君は気が狂った！」（忘れてはならない、まだソビエト権力は強大であつた。たとえ公的でも。（？ ＊）トーリャはわかっていた。）シーンは他の人が撮影した。

そして、ゲナとサーシャ。

サーシャが話し始めた。

「ロッセリ（？ ＊）がエリチンに電話をした。エリチンが我々を招待することを約束した。そして、解決をする。問題を。ロマノフ一家の。」

この話し合いは、ホテルの部屋の中ではなかった、地下鉄のどこかの駅のロビーであつた。

「ゲリイ・トロフィモビッチ、君は我々と一緒に行く？」 ゲナは注意深く質問をする。

彼は我々より若く、それ故、必要以上に敬意を表していた。

「エリチンを我々は受け付けない。」 私はきっぱりと話す。

「何故？」 ゲナは驚く。「だだをこねないで。」

「世論、ロマノフ家の関係者が問題を良く考え、我々を支持するようになるまでの時間が必要だ。エリチンは。彼には、全てはどうでもよいこと。彼が悪い人間だからではない。彼は時代の子で党の子。決して自分からやりはしない。」 決して。

サーシャは肩をすばめた。

「一緒に行こう。強情を張るな。」

「いや、行かない。妥協しよう。エリチンは「仕事を与える」。貴方には、どこにも行き場所はない、が、私は我慢はしない。わかってくれ。貴方は間違いをしている。これからは何の良いことも得られない。」

「よろしい・・・」 サーシャが話す。「それなら、せめて、ロマノフ基金のための規約の計画書を我々に書いてくれ。我々はそのような基金を作り、それを基盤に仕事をしたい。君は法律の専門家だ。」

翌日、私はサーシャとゲナに、手書きで、校正済みの計画書を渡す。私は名称を考えた。

「発見」 サーシャとゲナは賛成した。

後になって、この計画はサーシャのスベルドロフスクの友人の手に渡った。最初のテキストには何も残っていない。ただ名称のみ。

本当か、仕方が無い。私は腹を立てない。

我々は重い気分で別れる。私と彼ら、我々全員は理解している。今後、我々の道は別れるであろうことを。

彼らは重い気持ちで去って行くように、私には見える。

では、私の方とはというと。気持ちは小石のような重さではない。大きな塊、まるで「銅」のような重い気持ちである。

モスクワ。私は戻った。映画「最期まで耐えて」は全く進んでいなかった。対話－銀行－党の銀行（？ ＊）。事件に関する私の視点－彼には他人事。トーリャー映画がボツにならないことを願い、*****。今、映画は「贖罪の生け贄」の名となる。全てが上品で、気高く、そして、「祖国の党」やレーニン同士に罪がないように。

トーリャをどうのこうのと私は判断をするつもりはない。各人は自分ができることをやるだけ。ご覧の通り、私はできなかった。

本当に残念。

1990年秋に、私はケメロボにやって来る。そこで、企業連合の社会団体「タイガの秘密」の公演が行われる。ここの住民であるジマ・アナトリー・ゴルデーフは、コルチャコフの金を探し出すことを決めた。これのために、コンソーシアム（＝企業連合＊）を設立することも。私は、アレクサンドル・ワシリエビッチ・コルチャックの映画を撮影したい。トリヤッチィのダド銀行理事長ビャチェスラフ・ミハイロビッチ・スミルノフが、全面的にこれを支持している。未公表の映画の資料を見たことから、彼は私に全幅の信頼をおいている。

大事なこと。ゴルデーフは、私を、ケメロボ州の長であるアマン・グミロビッチ・ツレーフに紹介する。州ソビエトの建物の、彼の部屋で我々は出会う。私は全てについて話をする。そして語る。「遺物を掘り出すためには、金が必要です。何かを始めることを要求している世論を惹くために。基本であろう。停滞状態から全てを動かすことが。二者択一。

*****一件落着。ロマノフ家の遺物は商品ではありません。そうではないですか？」

ツレーフは同意した。よく考えながら注意して話をする。各々の言葉は金の重み。私は理解する。彼はここでは、ソビエト権力の長。何故、私は彼になびいて、信頼するか、私は知らない。が、エリチェンを・・・

知らない。

ツレーフが語る。

「あの資金について、貴方とロッセリの間で話がまとまったならば、我々は200万か300万ルーブルを提供します。これはできます。うまく行くでしょう。今、必要なもの。何かをしなければならぬ。思い出すこと。まずいことも。繰り返さないために。

ツレーフは、この年以降、何でもやるようになった。本当に何でも。私は彼に無条件の尊敬の念を抱いた。私はこれまで、確信していた。ロッセリとの話し合いが成功するだろう・・・と。

ロッセリなる人物を、私は知らなかった。

喜ばせようと、私はスベルドロフスクのホテルにいるサーシャに電話をした。彼は、私の話を冷たく、つまらなさそうに聞いた。釘を打ち込むように話をした。

「ウラル人は一銭の金も必要とはしていないし、全て自分でやり遂げる。」

これが最期であった。

我々の友好関係が。

埋葬地の敬虔な開封のアイデアが。

記憶しているところでは、1991年6月の初めに、サーシャがモスクワにいる私に電話をしてきた。

「直ぐ来てくれ。君が必要だ。」

何のことかは、私は理解した。私はわかった。ボリシェビキ流に窪地を掘る。適当な目的で。完全に秘密で。合同国家保安部（ОГПУ）の伝統で。大事なものはスコープで。どこから、ロッセリ氏の所に、他の技術、他の伝統がある？

私は大分前からわかっていて、地にあるものを絶対失わないためには、*****を凍結し、それを排除する必要がある。その後に・・・

これはわかった。

「私は行かない。」

「それは間違いです。」

「私が行くほうが、間違いだ。」

私たちは相互に冷え切ったまま、受話器を置いた。

私は、ロッセリに電報を出した。

「スベルドロフスク 人民代表州ソビエト ソビエト議長ロッセリへ 親愛なるエドアルド・エルガルドビッチ ロマノフ家の遺物のある窪地の発掘は高くつく考古学的作業、地域の条件で 極めて困難。労働者の賃金 設備のために金の支払い計画が必須、発掘場所の特別管理、そのような専門家、ロマノフ一家の管理の保証することが必須、大騒ぎと余計な人々を避けること。焦らないことを切に願います 探査に関して宣伝的な自分の意向を持つグループを管理下に置くこと（最期に ロシア国民と歴史のために 遺物の永遠に失われる損失に対する対策をとること） コムソモールプラウダの記事を見ること 敬具 リャボフ」

この電報は私の所で、電話で受け取った。（？ ＊） №144, 1991年4月23日、電信で受理したとの通知状込みで。この通知状の内容。「貴方の電報 144067 23/4 人民代表地区ソビエト ロッセリへ 伝達された 加入連絡 23/4 2110 02 221066/2 HHH 0806 24.04.0004 署名」。

私の耐えがたいほどの単純さのレベルの判断については、私は読者に委せる。そうでなければよいのだが、ロマノフ一家、検閲機関、教会・・・

ウラルソビエト議長ロッセリは既に決定をしていた。スベルドロフスクにあり、その下に「戦闘と政治の名誉の小道に。」（？ ＊）国民と外国人の小道ーイパチェフの家からポロシェンコフ窪地へ。そして、逆。案内人と一緒に。如何ほどの「銭」が？ もちろん得られればだが。

この件の後、再びサーシャが電話をしてきた。私は電報で彼に知らせた。サーシャは憤慨をした。「君は何を！ ロッセリはそのような電報を受け取ってはいなかった！ これは、私は確かめている！」言外の意味。頭を惑わすな。そのような電報は全くなかった。自分の頭を丸坊主にするための櫛を探すのを私は止め、沈黙した。

＊ ＊ ＊

7月中旬、昼に、長距離電話である長い呼び鈴が鳴った。私は受話器を取る。「ゲリイ・トロフィモビッチ？」 「そうです、私です。君は、ゲナ？」 「ゲリイ・トロフィモビッチ、全てが起こった。貴方に電話することが私の義務であると考えました。口外しないことを約束はしていましたが。そういうことです。多分、貴方はむなしい？ 来ませんか？」 「いや、ゲナ。シャベルで作業をしたのですか？」 「そうです。」 我々は不安とイライラを感じながら、電話を終わった。

翌日、再び呼び鈴が鳴った。今度は、スベルドロフスクの映画スタジオの監督セルゲイ・ミロシュニチェンコであった。

この電話には、前説がある。セルゲイは事件の1年前に私のところに来た。私の家でインタビューをし、その後、映画会館で。そこで、私はロマノフ一家の悲劇について話をした。この私の出演の時、次のような出来事が起こった。私が自分の話を終わった、その時、突然考えが起こった。ロマノフ一家の悲劇に関する話はモラルに反しているのではないかと。それは正に情報である。全て体験である、我々の内部にある。では、外部には？ 些細なことであっても、外部的としても、懺悔の要素。（？ ＊） 私はロマノフ家の殉教史を読み、銃弾と蛮行で犠牲になった家族全員について、全てについて言及した。そして終了した。「彼らの心を静めたまえ、神よ、彼らに永遠の記憶を創りたまえ。」

会場の人々は立ち上がった。（？ ＊）

昔流からすると、会場の人々の行為は許せないものであった。それが起こったことに、アーメン。

セルゲイは、その時撮影をしていた。

そして、今彼は電話をしてきて話した。町に噂が広まっていると。権力は埋葬地を暴かなかった。抹殺しなかった。誰も何も知らない。ロッセリは沈黙続けている。彼の部下は又沈黙をするか、全てを否定する。ミロシュニチェンコが質問をする。「話してくれ、スベルドロフスクで権力は何をしたのか？ 君はこれについて知っているのか？」

全てが起こった。ミロシュニチェンコが、事件の前に私に電話をしてくれていたなら。私は知らない・・・

私は彼に話をしていたであろうか？

今、ゲナ・ワシリエフの哀願にもかかわらず、私は「秘密」を、スベルドロフスク知事、いや国民会議議長、いやより正確にはウラルソビエト議長に、明らかにすることに決めた。私は思った。「結局、セルゲイ・ミロシュニチェンコは、何がともあれ、ドキュメンタリ一的に、フィルムに記録をしたいだけである。」 私は話した。

「シュバキシに行きましょう。そこに、町外れから500mの橋部隊の所で、簡単に湿地を見つけられる。無残に掘り返された穴を見て下さい。この穴が、求めている場所です。」

ミロシュニチェンコは翌日も又私に電話をしてきて話した。「見つけ、写真を撮った。野次馬が厄介だった。穴には、医療用ゴム手袋が幾つかあり、板が転がっていた。多分仕切り用の残骸。」

何と愚かな。全く・・・

橋部隊は土壌を凍結させる装置を持っていた。欲するやいなや。しかし、ロッセリ同志（その時は、彼は「同志」であった。）は望まなかった。

私は、一応、エドアルド・エルガルトビッチを理解している。我々は合同国家政治保安部（ОГПУ）、国家保安委員会（КГБ）の厳重な監視下で育った。全員が。ほんの、ごく僅かの人達が、蛇の皮を脱ぎ捨てた。ごく僅かの人、ただ個人的に、重い負担から自由であった。私が思うには、大半の人は、デルジンスキー同志の所轄官庁の抱擁の中に居続けることを喜び、最初の請求で、全てをなすことを喜んでいた。

私は自分をどの範疇に分類しているか？

自分としては、最初の範疇に分類したいのだが。

だが・・・

後悔している。まだ89年に。「修道士デニス」が、ポリシェビキによる皇帝一家の「野

蛮な惨殺」について言葉を発し続けていた時、残念ながら、私は抗議し、この悲劇的な出来事を単に「殺人」と呼ぶように頼んだ。私は、まだゴルバチョフ同志に手紙を書いていなかった。そして、知らなかった。返信を得られないことを。私はまだ信じていた・・・何に。誰に。

スベルドロフスク（ウラル方言ではスベルドロフスキフと発音する）から、州検察庁の検事局局長であるボルコフがやって来た。彼は私に電話をしてきて、クズネツキー通りにあるソ連邦検察庁に来るように依頼をした。必要な書類や写真を携えて。慣わしなそうであると、彼は説明をした。いわゆる「追審査」であると。結果次第により、犯罪の告発に関する決定をする。

ある芝居で言われた。「呼んでいるよ。行きたまえ。」 私は行く。

ボルコフは物腰が柔らかかった。彼はどうやら私に同情しているが、彼は仕事である。私は彼に、自分のメモを説明し、写真等を見せた。埋葬地からの私の十字架を、彼は私に示して、言う。「取りたまえ、これは君のものだ。」 答える。「この件に関して、貴方から確認証を得られることは結構なことです。が、営利的な目的で、私が墓場からこの十字架を掘り出した、と言っています。」 彼は微笑み、全てやることを約束する。十字架はその間、自分の所に残すとも。

それ以上、私は見つけてはいない、手書きの上書きを（？ ＊）。しかし、私は信じている。最期まで耐えたものは救済されるであろう。

私は感ずく。事件が近づいている。

この追審査は、全ての関係者を納得させる。多分、ロマノフ一家の埋葬地が発見された。検事は犯罪を告発する。しばらくして、遺物同定に関する国家委員会が設立される。

そこで何が行われたのか、私は知らない。私は委員ではない。しかし、一度、ロシア共和国（既にソ連邦はなくなっていた。）検察庁に、検察官が私を招聘した。この件の仕事が彼に任されていたのである。この人物はウラジミール・ニコラエビッチ・ソロビエフ。もう若くはないが、彼を「中年」と呼ぶことは、決断がつかぬ。彼は若い。全てにおいて若い。考え、評価、ふざけるそぶり、話し方。彼は私に、珍品を示してくれた。ファーニャ・ロイド・ロイドマン・カプランのレーニン暗殺の企てに関する「事件」。ヤコフ・ユーロフスキーが調査を行った。この時、彼は既にモスクワにいた。多分、モスクワ・チェーカーに。

興味がわく・・・

もし、もちろん、全てを一瞬忘れたとすれば、それについて、私はその結論の通りみなすであろうことは、容赦なく証明している：エスエル左派の蜂起を準備し、組織したのは、チェーカー指導部であった。レーニン排除の目的で。ジェルジンスキーは「左派 коммуニスト」であり、心から「恥ずべき」ブレスト和平を受け入れなかった。彼はレーニンの指導下、保護下にある囚人を受け入れなかった（？ ＊）。ジェルジンスキーは、革命は道を迷っており、その道を直す必要があると考えていた。

ジェルジンスキーの特使は、ドイツ大使ミルバフを殺害した。騒動が始まった。ジェルジンスキーは全てを指導した。エスエル派の自分の捕虜かのようにごまかし続けて。

うまく行かなかった。

8月に、チェーカー（ВЧК）のエージェントであるカピタンが、フェリックス（＝ジェルジンスキー ＊）の依頼を実行すべく、ミヘリソン工場で、演説会後に、レーニンの殺害を試みている。

尋問で、ファニ（＝ファーニャ ＊）は口を割らなかった。誰の名も挙げなかった。検察官に答えた。何も、誰にも、決して「このこと」については話さない。

3日、せっかちにも、彼女を（罵り、引きずっていく。）銃殺した。クレムリン宮殿で、クレムリン警護隊司令官である水兵マリコフが。彼女の遺体は直ぐに、クレムリン第2庭園で、樽で灯油をかけ、焼却された。この庭は現在まで存在している。ボロビツキー棟の右側にある庭である。

・・・この日以来、ウラジミール・ニコラエビッチ（＝ソロビエフ ＊）はしばしば私に電話をしてきた。時折、我々は出合い、今では、私は聞き役である・・・

委員会は信じられない仕事をやり遂げた。この「信じられないこと」の基礎に、彼、ウラジミール・ニコラエビッチ・ソロビエフ。ソコロフの偉業が再評価され、推進されるとは、私は確信に至ることができない。

私は覚えている。数日後、ペンゼンスキー州裁判所の予審判事H. A. ソコロフの「個人的仕事」のコピーを、私が貰ったことを。それ以上に、私を感銘させた。ソビエト権力時、仕事を継続しながら、ソコロフは、ある時、病気及び職務の完遂の不可能であることの願い出を提出する。そして退職し、・・・「休暇」へ。私の記憶が間違っていなければ。そこから、彼の長く、名誉ある道が始まっている－最初は草鞋ばきで、農民の服装をして。秘密裏に－最高指導者に、A. B. コルチャックに。シベリアへ、オムスクへ。その後、不滅への道。

ソロビエフを褒めようとは、私は思わない。いつだったか、彼は自身について長話をした。全ては、彼の専門性のレベルと個人資質のレベルを評価するものであった。

とにかく、彼はいつも単純であり、理解があり、横柄さはなかった。

一度、ソロビエフが私を委員会へ招待した。(他の回には、何かの理由で、私はできなかったが。)

最も厳しい体制の機関と同様に、ホワイトハウス(モスクワ市内にある建物の俗称 *)への入構は厳しかった。この年は、多分1996年であった。1993年の「戦車による攻撃」の事件後、全てが修復された。少しいたんで色あせもしていた。私は覚えている。当時、委員会委員長であった、ツリイ・ヤコフの執務室内の机。この机は以前のような豪華の姿にはほど遠かった。

市場には人出。空しさ、ひそひそ声、内容のない会話。私に、太めで角張ったおじいさんが近づいて来て、質問をする。

「貴方がリャボフ？」

「私はリャボフですが。」

「本当ですか？ 私はマゲロフスキーといいます。同じような委員会の委員長です。が、アメリカでの。貴方は本当にロマノフ一家を見つけたと信じているのですか？」

「確信があります。」

「全ては、完全な戯言であると、我々は考えています。」

ラジンスキー(？ *)と並んで壁の所に座る。彼は微笑み始める。「知り合い？ 滑稽な老人達。彼らはあんなばかげたことを言う・・・」

鑑定委員会の長が発言をする。重要な仕事に対する「自分の同僚」の叙勲に関して問題を提起する。

誰も論争をしない。本当のところ、私は完全に同意した。

しかし、雰囲気は・・・

かつて、私はエゴリチェフ同志、将来の著名な коммунистの所にいた。私が「民警」であった時に、使い込みをしたソ連邦共産党の党員の逮捕に関する処罰について質問をした。エゴリチェフは私の請願書に、すんなりと署名をした。私は当然のこととみなす。しかし、ソ連邦共産党のバウマンスキー地区委員会の会議で、そして、舞台裏で、状況は今と正に同じであった。つまらなく、党派的な。

更に何かを審議している。

ペテルブルグからの伝令使(？ *)が、ペトロパブロフスキー寺院内のエカτεリンブルグ別棟内に、家族の将来の廟の見取り図を示す。恭しく、私は質問をする。何故、皇帝自身及び彼の家族のために、寺院内に準備されていた安置所に埋葬しないのか？ 家族用の場所として、安置所を拡張することができないのか？

返事はない。ヤロフ(？ *)は手を振る。「いい加減にしろ。」

サーシャは、委員会の委員に沢山の自分の「意見」と表を配る。サーシャは話す。

「リャボフはそこに書いていた(「プラウダ」このことを言おうとしている。)。手探りで、新しい遺骨と遺物を探し出したと言っていると。実際は、何も誰も探し出してはいない。これは真実ではない！」

あー、サーシャ、サーシャ・・・ 私は作家である。言葉の力を強調するために、何かを書き足すことはない。

しかし、私の言葉に間違いがある。当時、雑誌「ロジナ」には、一つの欠片もない。私は濁った泥の中に手を沈めた。私はできるだけことはした。掘り返し、私の手、そして指を深くまで潜り込ませた。私は嘘をついてはいない！ 我々は新しい骨を見つけ出した！ これは真実。

埋葬場所についての話し合いが再び開始された。サンクトペテルブルグ、ペトロパブロフスキー寺院に、慎重に賛成をする。そこに全て。ピョートルから更に、ニコライ二世まで。

モスクワが名を挙げる。救世主教会。

なんで・・・ 有名な論理がある。教会は悲惨な目に遭ったが、灰の中から復活をした。皇帝家族も、同じに。

繰り返し、テレビ画面で、出版物でロシアの声が鳴り響く。エカτεリンブルグだ。そこで殺された。そこに埋葬すべき。当たり前だ。風習だ。父親の、祖父の。正に百花繚乱。

このアイデアは録音される。(？ *)

府主教ユベナリイは沈黙している。

私は立ち上がる。「そこに、預言者達を葬るな。その場所で、君たちの父達が彼らを殴り殺した。なんとなれば、父達の仕事を証明せよ。」

しかし・・・ ニコライ二世は預言者ではない。

とんでもない・・・

オリガ・ニコラエブナ(ニコライ二世の娘 *)は自分の手紙の一つで、父の言葉を知

らせた。将来の十字架は、更に厳しいものになろう、(そんなことはない!) しかし、全ての憎しみは思いやりと愛に負けよう。」

そのようなことを信じたがっている。特に、今日。愛情が、テレビの画面で示されている時に。その際、特に工夫を凝らして、面白く・・・

神経質で、慎ましいながら熱狂的なご婦人、オリガ・ニコラエブナ・クリコフスカヤが出てくる。彼女は結構年が行っているが、スタイルがよく、非常に堂々としている。「閣下、これを府主教ユベナリイへ。議長殿、これはヤロフへ、各位様、－これは我々全員に。鑑定は全て偽り。私に重要な鑑定を見せてくれない。それなくして、全て偽りを確信するしかない!」

話は以下の通りである。第一次世界戦争の前、革命の前、皇帝の妹オリガ・アレクサンドロブナは軍病院で働いた、自分の元夫の副官である、公爵レイフテンベルグスキーに嫁いだ。彼は軍の指揮官であった。

この結婚で、息子チホンが生まれた。

あとになって、オリガ・ニコラエブナは、チホンと結婚をした。(? *)

その後、チホン・ニコラエビッチは亡くなった。

オリガ・ニコラエブナは要求した。最近亡くなった伴侶が残した血が試験管に入って金庫にあると。これを調べ、遺伝コードを定め、このコードを、以前の2つ(アメリカとイギリス)の専門委員会で為された結果と比較してくれることを。もう一度、遺物のコードでも。ログエフ教授が鑑定をしてくれることを、オリガ・ニコラエブナ希望していた。彼は、彼女クリコフスカヤ・ロマノバ(=オリガ・ニコラエブナ *)が絶大な信頼を置いている、ただ一人の学者であった。

この声明は、委員会で考慮されることになった。

・・・私はオリガ・ニコラエブナの言うことに耳を傾け、思い出した、それまでの1年前に、私はA神父の所に行った。彼は、オリガ・ニコラエブナを私に合わせるために、私を招待した。そこで、明らかに、彼女は確かめたがっていた。どの程度、私がいい加減な人間なのかを。

出会った。上品で、好感が持てた。オリガ・ニコラエブナは、神父を伴っていた。彼はきつい顔をし、録音機を持っていた。私に質問をする。私は答える。私に問題を出す。それに私が答える。

オリガ・ニコラエブナが考え込みながら話した。

「私が見るところ、貴方は、これが皇帝家族の遺物であると、本当に確信しているのですね。」

「本当に確信しています。」

彼女は、私に聖ヨアンナ、大主教サン・フランチスキイのイコンをくれた。同席していた誰かが、例によって、「全てはユダヤ人の責任である。」といったが、オリガ・ニコラエブナはこれを支持することはなかった。我々は友好のうちに別れた。

それ以降、ことある毎に、オリガ・ニコラエブナは私との関係について、厳しい不信ともいえるようなことを述べた。

セルゲイ・ニキーチン、刑法の専門家で彫刻家が在籍者達に、粘土製の頭部を示す。穴から掘り出した頭蓋骨を元に、ゲラシモフ教授の手で復元したものである。大慌て。

それらは、犠牲者達の写真では決してない。とはいえ、まさかそんなことが!

ニキーチンは誰も欺してはいない。彼は自分の辛い仕事を提示している!

しかし、似ている、本当に似ている。類似は驚くほどである。心臓が止まるほど。かつて生きていた人物を具現化している、この粘土作品は心の底まで深い感銘を与える。

しかし、これは誰にも興味がなかった。

出席者の大半は、これを見たのが初めてであった!

マゲロフスキー(アメリカ人 *)、クリコフスカヤ(=オリガ・ニコラエブナ *)。彼らは理解することはできる。彼らにとって、職人のあつらえのこの頭部は、一つの規準。我々の為したことを信じることができる。

例えば、ブラギン(? *)は?

次長は?

府主教ユベナリイは?

私は覚えている、小学校で、次のような遊びがあった。

「君は電車を信じる?」

「信じない。君は? 電話を?」

「私は信じない。」 さらに。

誰も、何も信用できない。各自に・・・

何を私は覚えていたか?

検事総長次長の石のような顔。

ブラギン氏、元国立電話放送社長の燃えるような眼差し。

皮肉屋のラジンスキーの。
仕事屋のヤロフのポリシェビキ流に。
マゲロフスキーの罵りの声明。

他の全ての者達の眠っているような無関心。

このブラギンの燃えるような眼差しがどこからかを、読者に説明をすべきである。

1994年、私はブラギンに、映画「白馬」を10巻持って行った。ブラギンはずっと左派信仰の人物であったが、まさか今も留まっているとは、私は考えていなかった。

ブラギンは9巻を戻した。10巻目がどこへ行ったか、私は知らない。

国立テレビラジオの社長が映画を拒否している、ということが私に伝わってきた。革命と内戦の描写が「不正確」であるからと。無慈悲さ、及び出口のなさ故に。内緒で、私に話した。家族銃殺の前に、酔っ払ったポリシェビキのシーンを、ブラギンと彼の客（私はホールには居なかったの、ブラギンが誰と一緒に見たのか、名を挙げることができない。）が理解するのが難しく、非常にがっかりしていたと。

きっと、私を見て、ブラギンは何かを思い出し、やはり、少し・・・いきり立っていた。

・・・感謝を持って、私は思い出す、ベラ・クルコバ、ブラブデュークを。彼らはサンクトペテルブルグの「国立テレビラジオ会社チャンネル5」の責任者であった。中央委員会文化局の「指示」からの自由な時代でさえ、「推薦」は追従していた。映画「白馬」をテレビ放送してはいけない！

ペテルブルグのテレビが、全10巻のシリーズを放送した。その時、多くの人々がロマノフ一家の死、彼らの不気味な埋葬、レーニンと彼の党が始めた、自分の国民に反対する戦争の醜悪さを見た。「帝国主義戦争を、市民戦争へ転換しよう！」レーニンはヒステリックに叫んだ。革命まで、そして、その後も。彼は知っていた、何をすべきか。彼は知っていた、何のためなのか。

モスクワのチャンネル31が放送する賭を行った。これ以上の人はいない。

メシエ・シェポチニク、チャンネル6の理論家が語った。「何のことはない。私は全てを知っている。興味がない。」これは、試写のあと。

後になって、上映の責任者がのたまった。「国民は喜劇が好きである。このような映画は、彼らには必要がない。」

論争するのは難しい。

1998年初めに、ウラジミール・ニコラエビッチ・ソロビエフが電話をして語った。自分に打ち勝ち、ある程度の危険を冒しながらも、チホン・ニコラエビッチ・クリコフスキーの血液検査を行った。結果は予想以上のものであった。全てが細部まで一致したと。この検査を著名なログエフ教授が行った。オリガ・ニコラエブナはそれ以上何の反論もすることができなくなった。遺物の埋葬への道が開けたらしい。

私が「～らしい」と書いたのは、偶然ではない。「棺の蛇」は公爵オレク（？ ＊）だけに這い寄ったわけではなかった。蛇は這入りこみ、皇帝家族の遺物を傷つけた。

委員会の委員、府主教ユベナリイが話した。宗務院の全員一致における「特別な意見」。次の世紀の科学が、小数点無し^{脚注}で、確実に言うことができるまで待とう。その時に、ロマノフ家の遺物のようなものとして遺物を埋葬する。それまで、「一時的な、記念的な墓に埋葬をする。」

私はわかっている。何故に、高位の神父達、全世界においては、裁判所が判決を下したし、これまで犯罪者にいろいろ異なった死刑方法（犯罪者の遺骨の埋葬についてではない。）の判決を下す。指紋照合法に基づいて、被害者の最近の写真と頭蓋骨の写真照合法に基づいて（被告はこの人物との関係を否定する。おそらく、検査しろ・・・頭蓋骨－これは人間ではない。）、殺人現場に残っている匂いと、容疑者の匂いの符号に基づいて。

脚注 医学博士、遺伝専門家イワノフはみなしている、遺物の所属製の確実性は99.99999999に等しいと。これは實際上、絶対的な確実性である。

遺伝学専門家は3回調べた、チホン・クリコフスキーの血液も用いて。偽造や間違いを除くために。

どうしたのだ？ 何故、論拠は？

遺物の刑法学的同定に、非難者は納得をしない。刑法学とは何か？ そのような物は全くなかった。100年間。そのような物を信用することができようか？

遺伝学は未だ未だ若い。共産主義者の半可通は、遺伝学をブルジョア的売春婦と呼んでいた。高等党学校の生徒の中に、世紀末に、歓喜する追従者が見つかる、誰が考えることができるか、

1972年、ベルリンで、人骨が発見された。その口には、薄いガラス片が見つかった。かつて、この人物は服毒して自殺した。第三帝国の指導者達は、そのように振る舞った。行動した。推定した、この遺骨は、かつて跡形もなく消え失せたマルチン・ボルマンのものであると。この人物は、アドルフ・ヒトラーの「党」の副官であった。

どのような知人、どのような親類が、年配の人達に、言葉を・・・ 現在では、ドイツの遺伝学者達は識別できない骨に戻った。この骨が、正にボルマンのものであることを証明するために。即ち、遺伝学的調査を要求したのである。まさに、ボルマンの・・・その通り。以前に、過去に。一度ならず、各国で。

我々の所では、ニコライ二世と彼の家族を見た。ペルミで、グルジア（90年代の新聞は、皇帝はここに住み、埋葬されたと断定していた。）で。それらの地で、家族と一緒に皇帝は農地を耕し、種をまいていた。

共産主義者に誘導された人間は何も認めない・・・

最近、ドイツに住んでいるボルマンの親戚達が、遺伝子分析の比較のために、自らの血液を提供した。分析は断定した。発見された骸骨のDNA分子は、ボルマンの親戚達のDNA分子と完全に同一であると。分子レベルの「指紋鑑定法」が、いつも通り、全く間違いをすることなく、十分な働きをした。

ドイツには、心理学的に、正常な人間が住んでいるのは事実である。

ボルマンに関する鑑定は、皇帝、彼の家族の遺骨の検査に、絶対的な潔白さを示している。

ナチス党の幹部、親衛隊の幹部、ヒトラーの同僚、死刑執行人、殺人者、ボルマンは埋葬されるであろう。彼の遺骨をドイツ人は埋葬する。

おそらく、何故かという、ドイツでは、誰も神学学校、神学大学を終了していなかったから。

無教養に関しては、必要なもの・・・

受難者の遺物を、通人は何か役に立たないものとすることを要求する、何故かロシア語にはなかった。「象徴としての墓」。

私は言わない。「神はあなた方を助ける。」

何故、言わないのかという、気折れは全て無学。開化反対論。反啓蒙主義がある。

一般的に、何らかの規範の中に、或いは、教会の父の所に、或いは、聖書の中に、高位の聖職者達は「象徴としての墓」に関する言及を探したのか？

レーニンの場合、実際における象徴としての墓、スターリンはまさにそのように考えていた。

ロシア正教会（他の宗派でも）の場合、遺骨は何の象徴性を持ってはならない。そのような事は決してない。今日、軍はしきたりから遠ざかっているが、教会は・・・

教会は、書かれた、或いは書かれてはいない伝統に従って活動をしている。教会は、右に歩を進めないし、左にも歩を進めない。

別な問題。

エリチンの後には、新しい大統領、或いは書記長がやって来る。大事なことはない。その人物は決定をするだけ。遺骨をどこへ、誰をどこへ。牢獄へ誰を、強制収容所に誰を、誰を銃殺にするか。

理解できる。

単純な人間の。

しかし、キリストの戦争・・・

とはいえ、私は既に言及している。今日、我が国では、そのようなものは、たぶん、ない。あるいは、我々がそれを知ってはいない。我々は誰を知っているのか・・・

1998年春に、彼らは、クレムリンの周りで十字行（＝十字架と幟を持った信者の行進＊）を行った。教会の旗とイコンを持ち、聖職者を先頭にして。「エカテリンブルグの遺物を埋葬するな！ 何となれば、遺物がロマノフの物であれば、遺物は聖なる物である！ ロマノフの物でなければ、時間を消耗するだけだ！」

ペテルブルグでは、赤旗の下での10万人の集会が、ロマノフ家を埋葬しないように要求をする。悩み苦しむ人に給料としてお金を返すことも要求する。（？ ＊）

飢えて苦しんでいる人はかわいそう。が、次のように理解するのは難しいであろうか。頁をめくり、次のようなことを明らかにする。希望がある。その頁に、死刑判決、飢餓、荒廃が書かれないであろうことを。

開かれた頁に留まり・・・

何がある。何があるだろう。最期の時まで。

総務院は知らないのであろうか。聖者に指名されるのは一度限りであることを！ 洗礼を施すのは一度限りであることを。私は既に言及した。教会では、全てが非常に厳格であることを。

自分を、まさに自分自身を、更に誰を、大目に見ることがどこから？

国外ロシア正教会はロマノフ一家を聖なるものとして認め、彼らを聖人として認めた！
これを繰り返してはならない。
私は知らない。連帯ができるのかどうか。
期待はしている。できるであろうと。
しかし、これは駄目であろう。
多分、2000年以降。
或いは、20世紀末に、好ましい急変があった時一血と遺体とその他では、絶対に不可能！

「左派」はクリコフ製作の皇帝の祈念碑を爆破した。エカテリンブルグにあった記念の十字架を壊した。小礼拝堂に放火をした。モスクワでは、ピョートル一世の祈念碑の爆破を試みた。ペトロパブロフスキー墓地の爆破を予告した、もしそこにロマノフ一家が埋葬されるならば。

我々の所では政府は役に立たない。弱い。

大統領は黙っている。

何故？

私はエリチンに呼びかけた。私は彼にお願いをした。誓願をした。貴方がようやくできることをしなさいと。新聞は公表を怖がった。ただ「ロジナ」だけ。

ボリス・ニコラエビッチ（・エリチン *）は黙殺し続けた・・・ かつて、ミハイル・セルゲビッチ（・ゴルバチョフ *）がそうであったように・・・

ほら、多分、来るべきものが来た。ネムツォフ（？ *）の委員会が一貫性のある決定を採択する。これは、ロマノフの遺物である。この遺物をサンクト・ペテルブルグに埋葬する。先祖伝来の墓地に。

しかし、テレビ番組の「ロシアの家」は反対する。番組に司会者が招待した人物は、感情的に、情熱的に説得をする。「彼らではない！」 しかし、何故か、具体的な論拠をあげない。ただ、感情を。新聞に、州知事ムジカントスキイが発言をする。彼は総主教の立場に同意していた。国民の一部分に、反対があれば、埋葬はできない！

或いは、彼ら象徴的な所へ！ そこへ！

歴史学博士モレバは文書を要求をする。ロマノフ一家の遺体を運んだという馬方の受領書を見つけて公開せよ。ポロセンコフ窪地で、穴を掘ったという土工の受領証。これらの書類は、尊敬する教授の視点によれば、遺骸は何かを、疑う余地なく証明をしている。

こう言うは何だが・・・ ロシアには国内戦争があったのでは？

これがどのようなものであったか、歴史学の教授は知っているのだろうか？

罵りのキャンペーン、止めどもないキャンペーン、聞き入れのないキャンペーンが続く。しかし、何故？ これらの人々は何を得るのか？ 彼らは真実を見つけないのか？ 私は新聞を読むのを止めた。殆どテレビは見ない。何ができるのか？ 国家保安委員会のエージェント、警察の警官、シェロコフのために、埋葬地で貴金属を探した。他の人物の遺物を穴の下に置いた。ロマノフ家（クレムリンの地下室からの）の頭部を下に置いた。ロンドンで遺物の取引をした。墓地の冒涇者に社会は犯罪の責任を問うことを要求している。お金を稼ぐために、インタビューに応じる。どんちゃん騒ぎには本当にうんざりだ。私は本当にそれに疲れた。しかし、私は自分を信じている。何でもない。私は立ち通す。なぜなら、右の川にも、左の川にも。私には、真実の武器がある。その他は、重要性を持っていない。

1998年7月17日に、何があるか？ あるか？ 残念ながら、大統領も、委員会も、我々も、誰もわかっていない。酷く惨殺された受難者の埋葬は、強いて言うならば、単なる物理的な仕事ではなく、神秘的な、抽象的な仕事であることを。

プーシキンに既に、19世紀に、悲しそうに言った。ロシアには哲学はない。なぜならば、ロシア語は抽象的言語ではないからだ。

言語が現れた。ベルデヤエフ（？ *）、イリン（？ *）、彼らと共に、他の人達がこれを示した。しかし、多数の所で、同じくごく僅かの上層部で、クレムリンにか？ ダニロフ修道院にか？ 抽象的思考は形成されなかったし、生まれても来なかった。

儀式上の問題。これを我々はどのように為すのか。今日の悲しい総括。

全ロシアの聖総主教は、皇帝、皇帝の家族、皇帝の従僕に引導を渡さないということである。何となれば、墓地が「象徴」となり、未来の科学が答え。まさに、この墓に誰が納まっているのかを与えたとすれば、その時わかる。聖宗務院と総主教は不在であろう。原理的に、完全に物理的である。（？ *）

死者の供養をするのであろうか。もしそうだとすれば、誰が？ サンクト・ペテルブルグの平の牧師が？ 下品なことではない（皇帝に高位の聖職者が引導を渡すという、宮廷の規則を破ることの他に、）が、聖職者は誰を回想するのか？ もし「ニコライ、アレクセ

イ、アレクサンドラ、オリガ、タチアナ、マリア、アナスタシア、ヨアン、アレクセイ、アンナ」であったなら、その時、聖総主教は、何故これをする事ができるのか？

とにかく、これら全ては決して「謎」ではない。これは無原則、極めてはっきりを現れている。これは、慎重さ、それを臆病のような他の風に言うてはならない！そして、最期の問題。たぶん、ロシア正教会の代表にならない？その時、唯一の正しい解決。ローマのパパに接触をし、埋葬の手続きを完遂するようお願いをする。もちろん、パパがこれがロマノフ家のものであると、信用すればであるが。

神は無関心、誰が自分に奉仕しているか。何となれば、神にはえこひいきはない。教会の分立、ことは特別に人間的である。神には、これは関係を有していない。何となれば、伝統は、神にではなく、人間に。

司祭の位（位階制を含む、当然のことながら）は、教会の人と神との間の連結環。秘密の実行時、勤めの時、司祭は神との我々の約束を強くする。ここに、彼らの神への使命。

教会は、司祭の位は、位階制は、信徒を育てなければならないのか？

論争の余地はない。しかし、キリストを思い出そう。キリストは使徒達を教えた。自分の後に従ってきた者達を。しかし、キリストは決して、何も禁止をしなかった。冒涇と墮落を除いては。寺院「***」から商人を追い出したことを思いだそう。これは悪魔に呼びかけている動詞である。しかし、神に似せた人間にではない。

奇妙だ。熱心な役人が一度、階層組織（？*）の要請に従って、全地域に明かりを付けた。信徒衆が誘惑されないように、スコルツェ監督の映画「キリストの最期の誘惑」に、次回には、映画を禁止するように呼びかけた。（？*）

世界の本質が存在する、その理念が。この理念は***を要求はしない、信頼だけを要求する。

しかし、どのような試みも、キリストに、キリストの理解に這入りこむ。幸福へ、行動や立場が間違っている場合でも。何となれば、キリストは決してドグマではない、それ以上に、何度も、何時でも、人間にとっては理にかなった立場にある。*****

スコルツェの映画、即ち、これである。全ソ連邦共産党の中央委員会思想局の評価の基準を持った文化の作品に近づくこと、神の仕事ではなく、これを信用する。我々は政治教育機関と管理機関を得る。が、勤務員ではなく、我々と一緒に、神と約束をし、この約束に助力をする人々。

悲しいことに、ロマノフ一家埋葬の事実上の禁止、象徴的な墓への不明人の埋葬という偽善的な許可。鎖の環。人間の精神と心を破壊するこれらの環を、キリストは名付けている。全てをわかって。傲慢。

判決を下し、裁判をすることが私の役目ではない。私を不安にさせている間違いを、私はあえて語った。ただ、それだけ。

神が我々に使わした試練。なおいっそうの神の栄光へ。全ては許される。幸福へ。

これに何の疑いもない。しかし・・・

98年の4月に、もう一度私は全てを書く。

2ヶ月半後に。誰が知っている？もしかしたら、神が、宗務院を正しく導くのか？

あの日（その日は快晴で、空気は澄んで、空は高く、更に高く・・・）から、19年が過ぎた。時折、私は夢を見る。森の中の道の。踏切の場所には、かつて、見張り小屋ヤコバ・ロブヒナが立っていた。窪地が。突然現れる。予想外に、窪地は文字通り巨大で静寂な墓地のよう。小丘には誰も見えない。が、わたしには見える、皇帝の周りに彼の家来が何百万と取り囲んでいるように。*****。それ故、不公正で、悪意のある、素性のわからぬ、ろくでもない権力の攻撃下で、合法的に地上から姿を消した。

しかし、どうしてもよい。全て一緒。皇帝は神聖、我々について神に祈りたまえ。

敬虔な人、残忍な人、冷淡な人、無関心な人。何となれば、私は使徒の言葉、神はえこひいきはしない、を繰り返す。各自、全て同等に求めることができる。そして、期待することができる・・・

今日は、全てが非常に複雑である。昨日あった。一昨日あった。そしてあるだろう。このために、そして、人間は生きている。苦悩を一掃するために。他のものは与えられない。

というのは、突然に、弱気になったり、気が重くなった時、私は自分自身に問いかける。必要だったのか、価値があったのか？常に、自分に打ち勝ちながら、答える。その通り。何となれば、自由の国に突破口、これは努力。「洗礼者ヨハネの時から、天国は無理矢理襲われ、激しくおそうものがそれを奪い取っている。用いられた努力は彼を魅了する。」

（マタイ伝、11巻、12）

セルゲイ・セルゲービッチ・ベフテーフは皇帝の娘、オリガ・ニコラエビッチの手紙を、詩に作り替えた。

父は全ての人に伝えるように願い、
泣いては、不平を言ってはならず、
悲しみの日々は全ての人に遣わされ、
我々の大きくて、全体の罪のため。

彼は全ての侮辱を忘れ、
彼は全ての敵を許した。
そして、彼のために、復讐をしないように命じ、
全てに願う、全てを愛するように。

彼は話す。平和は悪意の中に沈み、
真実は大地で干上がり、
悲しみに沈んだ十字架は、
汚れた酷く恐ろしい日々の中に。

しかし、時が打ち、時代が過ぎ、
親愛の力は悪意に打ち勝ち、
そして、失われたもの全てが、再び、
相互愛を信ずる。

愛情－生活の極み。これが、我々全員に足りないものである。

本の脱稿後

5月も終わる。総主教も大統領も、未だ自分の決心を変えておらず、葬儀に参列することは多分無いであろう。

しかし、モスクワ市長は自分の決心を変更した。遺物には疑念があり、そのために、外国の首脳たちは葬儀には参列はしないだろうと市長は見なしている。

レオニダ・ゲオルギエブナ公爵夫人は自身の見解を変更した。遺物の埋葬には、ヨーロッパ諸国の国王や女王たちはやって来ないだろうと公爵夫人は考えている。公爵夫人自身は疑念がある故に、葬儀には参列しないであろうと考えるべきである。

スベルドロフスク州の当局はどうするのであるだろうか？

この当局によって準備された、葬式の計画が差し迫っている。この計画における重要な事。「葬儀儀式に直接に参加する人数を少なくする事。遺物移送コースを短くする事。このようにすれば、葬式に関係した諸問題を解決するのはきわめて容易である。」

費用がかからない事に超した事はない。「遺物」は我々のものではないのに、金をかけるのか？ 葬儀に当たって、誰も手当を貰えない。・・・

ペテルブルグ市では、荘厳に葬式が行われた。軍隊、楽隊、聖職者達が敬意を示した。

計画では、棺は「小さい箱」と呼ばれる。なぜ？ というのは、ペトロパブロフスキー寺院中のエカテリンスキー宝座には、9つの完全な棺を納める事ができないからである。棺ではなく、小棺である。

私は今までわかっていない。寺院の副玄関の所にある、1907年の皇帝の命令で準備された安置所を、皇帝用の場所から右側に拡張してはならないのか。安置所には7つの棺があった。今日では、9つの棺が。アレクセイ・ニコラエビッチ（＝皇太子 ＊）とマリヤ・ニコラエブナ（＝娘の一人＝皇女 ＊）の遺物が発見される事を考えて。すべての棺は見事なものであった。多分、退位した皇帝を葬るため？ なんて愚かな。

神は人間の為すこと、考えること全て支配している。いくらでもそれらを変更することもできる。すべてをお見通しである。信じよう、幸福を。

誰も、何も信用しない人の立場と結論を、私は普遍化したかった。しかし、最初に、実際に何が起きたのか、少し解説をしよう。

ボリシェビキは、ロマノフ一家を抹殺するために、トボリスクからエカテリンブルグへ移送した。この抹殺は1918年の7月17日に実行された。遺体は、十分なほどの念を入れて秘匿された。秘匿時の状況（白軍が町に迫っていた。 ＊）は、ユーロフスキーをして、犯罪史上、例のない非道な方法をとらせることになった。「優秀なコミュニスト」（ユーロフスキーのこと ＊）は、裸にした遺体を道路の下に投げ捨てた。

ただ、推量である、全く根拠が薄いのである。

ロマノフ一家の遺体を寸断し、焚き火で焼き、硫酸をかけた。そのような方法で、跡形もなく抹消した。

そのほかの実話。ボリシェビキは、皇帝は森に埋葬されたが、家族はペルミに連行されたとデマを飛ばした。ペルミで、その時、エスエルに対する攻撃を行っていた。そして、エスエルを、ロマノフ一家を裁判にかけないで抹殺したと告発していた。ロマノフ一家は生きており、農民となり、農業に従事しているという噂が伝搬した。この噂は今日至っても生き残っている。

「真実の探求者」（？ ＊）は、何を主張しているのか？

国家政治保安部が、ロマノフ一家の成員と似た、罪のない市民を特別に選抜し、銃殺し、パロシェンスキー盆地に埋めるように、ユーロフスキーには命令をした。歴史家パクロフスキーには、遺体の秘密の埋葬について、そして、近くで2遺体を償却したかのような詩を書くようにと。

その後、80年代に、ソ連邦の国家保安委員会が、自分の秘密のエージェントであるリャボフに、遺物、その他関連物を見せるように依頼をした。そして、ロマノフ一家に関する全てのものを引き渡すように依頼した。

それら以外に、リャボフに依頼をした。当時、ユーロフスキーによって遺体から切り取られた3つの頭を戻すようにも依頼した。

1918年にすでに、その後、ジェルジンスキー、メンジンスキー、ヤゴダ、エジェフ達（全て、国家保安関係のトップ ＊）は、事件が拡散することを予見していた。彼らは知っていた。ソビエト権力は破綻し、正に、1991年から1993年の間に起こったことのようなことが起こるであろうと。

それ故に、前述した人物達は、政治的遺訓、職務上の指示を残した。将来に対して。

目的は？ 上位クラスのレーニン主義者達の目的はどのようなものだったのか？ 「真実の探求者」の解釈において。

この目的のうちの最初の部分を、私はすでに公言した。ロマノフ一家を銃殺し埋葬したと全世界を信じさせること。あるいは、痕跡を残らず抹消すること。あるいは、生きてお

り、農村で農業に従事していると。

何が肝心なのか？

言うほどの問題は無い。

共産党員達の心配事は何なのか？

人民の衣食住が足りること。それ故に、ロマノフ一家をドイツに引き渡し、その見返りとして、ブレスト条約で課された賠償金額を低減すること。トラクターと蒸気機関車を得ること。クレジットを得ること。破壊された生活を、それによって復興すること。農業と生産技術を。歓喜を・・・

レーニンおよび彼の同士達は、ウイヘルム二世、彼の後継者達、ヒットラーも含んで、手を組んだ。これは誰もが知っている・・・

ロマノフ一家は、国際社会主義の赤旗が翻るもとの、静かに生き延びた。後になって、ドイツ国会議事堂で、お忍びで、喜んで、ソ連軍戦車を出迎えた。全ての恨み辛みを忘れて。

なんとも感動的ではないであろうか？

何も特別なことではない。私は、単に系図を復活しただけである。論理的に。ウイヘルム二世は、レーニンに6000千万マルクの金貨を、革命のために与え、援助した。それで、それ以降、ドイツ皇帝（＝ウイヘルム二世　＊）と議長（＝レーニン　＊）が仲が良くないことがあろうか？

偏執狂・・・

「エカテリンブルグの遺物」に関する社会審議の決議

ロシア連邦国会ゲルボフ・ホール

モスクワ、1998年5月21日。

前述の専門家、社会活動家、宗教活動家の報告と発表を聴講し、社会審議の参加者は以下のような決議を採択した：

1. ロシア帝国最後の皇帝ニコライ・ロマノフの家族の「エカテリンブルグ遺物」の同定に関する、ロシア連邦政府の決定を承認する。若干の矛盾があるが、指名された役人と判事の意見を基礎として。このような決定は権威ある裁判所の仕事である。

2. 国内戦の犠牲者埋葬の国家的儀式の実施に関する問題は、社会的意義を有している。この件に関して、政府委員会の仕事、及びロシア政府自身の決定は、非民主主義的であり、エカテリンブルグの惨事の真実を、世界から、ロシア国民から隠そうとする傾向にあると認める。この状況は、1918年における、ロマノフ一家の銃殺時にあった、社会における分裂、市民の反対運動の拡大へと客観的に導く。

3. ロシア正教会宗務院の立場を支持する。

4. ロシア共和国政府委員会の専門家の結論を、原則的立場において、証拠不十分で、支持できない結論と見なす。補足の公開調査の必要性を認める。

5. ロシア大統領エリチエン、ロシア政府首相キリエンコ、ロシア共和国国会、ロシア共和国共和国会議、正教会総主教アレクセイ二世、ロシア正教会宗務院、ロシア共和国検事総長スクラトフに訴える。それなりの決済を出すことを。今日において大事なことは、か弱い市民生活の平穏を乱さないこと、余計な矛盾をもたらさないこと、政治上の混乱を引き起こさないことである。

「エカテリンブルグの遺物」に関する社会聴聞組織委員会代表：

国会議員：Д. О. ロゴジン

社会団体「ロドネジ」代表：Е. К. ニキフォロフ

余録

この本が、どのような背景、どのような状況下で世に出ることになったか、読者には興味があるのではないかと著者は思っている。

私が国会に行ったとき、入り口に招待客が列を作っていた。検査機を通過して、私たちはロビーに入って行った。

当時、私はゴーリキー通りの第4建物に住んでいた。ずっと昔には、我々の中庭は、ゴスプランの建物と、あまり丈夫では無い鉄柵で区切られていた。今では、ありふれた木製の柵である。ソ連邦国家安全性が、これらの建物を警備することとなった。私たちはサッカーで遊んでいた。あるとき、友達のレフカ・チェルノフが、第1玄関の所から、ゴスプランの敷地内へボールを蹴り入れてしまった。高価なボール（1947年であった）を取り戻すために、柵をくぐり抜け、警備将校にボールを返してくれるように頼んだ。が、将校は、口汚くののしった。その時、友達が敷地内に飛び降り、ボールを掴んだ。警備兵が飛び出してきて、友達をひっ捕まえていった。私たちは、友達の自宅に向かってまっすぐに駆け戻った。友達の父イワン・アレクサンドロビッチはすでに帰宅していた。が、未だは軍服を着ていた。父はルビャンカで、ソ連邦国家保安省の書記局長を務めていた。

「行こう」 大佐は、歩きながら、制服のボタンをかけながら言った。

雌鳥の後に繋がっているヒヨコのように、私たちは、第2玄関に入っていった。チェルノフの父が証明書をさっと差し出すと、将校は青ざめた。

「警備隊長をここへ。」 大佐は低い声で命令をした。

慌てふためいて、誰かが飛び出てきた。

レフカを連れてきた。目の所を殴られていた。

少佐が何かをつぶやいた。

「行こう、間抜け。後でとっちめてやる。」 大佐は、真っ先に帰り始め、私たちは彼に続いた。当時は、そのような父を持っていることは本当に都合が良かったのである。

さて、今、私はロビー内にいる。ここでは厳しい保安警備が行われている。そしてようやく、私たちはゲルボフ・ホールに入った。

何を言えば良いのか・・・

空気はよどんでいた。憎しみが臭っていた。長いテーブルに、制服を着た人物、十字架を胸につけた人物が座っていた。国会議員でロシア社会団体会議主幹のロゴジンは温厚で、血色が良く、最上級の品質の服を着た若い人物であり、返し襟には国会議員バッジをつけていた。彼が立派な会議を主導した。彼が会議を取り仕切った。

最初から明らかになった。誰も本質を見つけてはいない。検事ソロビエフ、ロマノフ一家殺害に関する犯罪の専門家グループ、副首相ネムツオフの補佐官の主幹ビクトル・アクシュチツ、そして我。罪深そうである。

議論では無かった。各自、勝手に口に泡を吹いてしゃべりまくった。

監獄の中にいるようなものであった。そう、私には感じられた。

私たちを侮辱し、十字架に処し、踏みつぶそうとしていた。

何のために？

私にはわからない。

なぜ？

返答は明らかであった。

会議では、意見を述べる必要があった。全員が述べた。各自好き好きに。

大きな蝶ネクタイを着け、有頂天になった法学の教授は語った。私とアブドーンは墓を掘り返し、不敬を為したと。ヤコフ・ミハイロビッチ・ユーロフスキー、グローシェキン、スベルドロフ、トロツキー、ベロバロドフ、その他。主幹であるレーニン主義者達は、道に裸の遺体を放り投げて、皇帝家族を荘厳に葬ったと見なしたようだ。が、私達、私達は侮辱をしたと。

ソロビエフには、ばか話ばかりが届き、まっとうな言葉は、闇の中に隠れてしまった。

階層組織の代表者は、最終判断を読み上げる。多分、私たちの上に、社会の上にのしかかっている階層集団はただ一つだけに呼びかけているようであった。平穏、忍耐、めっそうもないがー「エカテリンブルグ遺物」ゆえの兄弟殺しの実行、科学的証拠。まあ、そういうことにしておこう。しかし、奇妙である。私たちの反対者達の最も手厳しい発言は惹起した・・・嵐のように長い拍手を。これは平静、それとも忍耐？・・・

全体的状況は、原因の探索についてだけではなく、ほかの何かが必要であると証言していた。

ロゴジン氏はピリオドを打った。ビクトル・アクシュチツが政府の予想される動き、委員会の仕事について話をしたとき、ロゴジン氏は明確に言い切った。政府は国会の信頼を利用しないと。政府は国会にきわめて特定の人物を押しつけた。それ故に、探査者や専門家のようなごく少数の重要人物では無く、政府委員会の見解を信じるように。

私は、代議士や彼らの熱烈な支持者を決して身近では見なかったし、彼らの目も、彼らの顔の表情も見ることにはなかった。

いつだったか、ウリヤノフ（＝レーニン ＊）の群衆達がロシアの権力に行き着いたとき、プレハノフが嘆き悲しみ、陰鬱に語っている。「破滅がやって来る。」

同じような感情が私にもわき上がった。

ツベタエバは「伸びた手の法則」（？ ＊）について書いていた。

キリストは、悲しみながら、ユダヤ教徒達に話をした。「私たちは君たちに呼びかける。が、あなたたちは私たちの言葉に耳を傾けてくれない。」 これはごく一般的なことである。しかし、それではだめ・・・

1998年6月9日、宗務院は声明を出した。「全ロシア総主教は、皇帝、家族、従僕の葬儀に参加しない。宗務院の誰も！ なんとすれば、遺物は、ただ遺物に過ぎない。誰のものかわからない。刑法学と遺伝学は、全く何も証明していない。」

私はがっくりした？ 驚いた？ 途方に暮れた？

次の通りであろう。このような感情は、現在多くの人たちが味わっている。信じていようと信じていないとしても、理性ある人ならば。

私は味わってはいない。なんとすれば、地表には天は落ちては来なかった。精神病院は適所にあり、病人は各自の家で甘やかされてはいない。国会は、芸術的価値のある物、かって忌まわしい国のドイツに奪われた物の未帰還に関する法案を審議し、作り続けている。自分や他人の手に祖国の大地を非売とする法案に関しても。ロシア王国では、全て素晴らしい。何かを変えることができる気の狂ったハムレットはいないし、予期もされない。

国内戦を停止するチャンスはあったし、後悔するチャンスもあった。

その際、後悔したものが、これを為した。ジョルダノ・ブルーノを異端者と見なしたものは、ウリヤノフを大天才と見なす。彼らには必要ない。

総主教、府主教、主教達は葬式に参列しないのか？

ごく普通のペテルブルグの司祭達は、皇帝家族達だけのため、全ての犠牲者達のために祈りを捧げるのであろうか？ これは適当でないが、本質において、「臆病、卑劣さ、欺瞞」。かつて、皇帝自身が日記帳に書き付けたように。

驚いたペテルブルグ市の官僚達は、ロシア皇帝ではなく、王座を退位した大公を葬送すると決定をするか？

官僚に、10月の下品な政変の空論を説明しない。だれが「大公」で、誰が「ゲス」か区分しない。それではだめである。

1918年7月17日、殺人者でろくでなしであるユーロフスキーは不幸なロマノフ一家を道路下に埋めた。それを自慢した。

7月17日、ユーロフスキーの部下達は、殉教者達を、静粛に、慇懃に埋葬する。10月革命の後継者達の気を悪くさせないために。

「人は聞いたとおり、書く」 ある詩人が語っていた。

しかし、耳に綿が詰まっており、頭が混乱し、煮炊きが不十分、その時・・・

その時には、各人めいめい。

ロシア共和国大統領という彼には、反動主義者達のたわいない話を軽く見、妥協無くしっかりと最重要視する可能性があった。

しかし、大統領はクレムリンの予科を終了していた。この予科の信条。「思い通りにはいかない。」

何という停滞期、残念・・・

何の取るに足らない人物達が、ハンドルを取り、いささか気味の悪い人物達は、水平線上に。

誰のせいでもない。

17年に、我々は反国民的革命を為すことに自身で決定をした。

98年に、私たちは、その「熊手（？ ＊）」に立ち向かう。

マリナ・ツベタエバは、1918年に書いていた。「辻堂は重さで売ってしまえ、修道院はハンマーで砕け。教会へ、馬で乗り付けよ！ 血なまぐさい家畜用の水で酔っ払え！

家畜用の仕切りを、寺院の中に！ 寺院を仕切りの中に！ カレンダーに不吉な数13！ 我々を言葉故のコモの下に、皇帝という！」

全ては繰り返す。

待つて久しくは無い・・・

ロシヤはどこへ向かうのか・・・

ロシヤはどこへ、悪い方へ、倒れる・・・

神よ、助けたまえ、静めさせたまえ。

本書の著者について

著者のゲリー・リャボフは、作家であり、映画シナリオ作家であり、さらには、周知のテレビシリーズ「革命家として生まれて」、「国境」、「白馬」の作家でもある。警察と国家安全保障に関して多くの本（これらの本は全く追従のたぐいではなく、困難を伴いながらも著者は事実を書くことに常に努めた。）を著してもいる。殺されたロマノフ一家と彼らの従僕たちの真の埋葬地を、長期にわたる調査の結果、1979年に、アレクサンドル・アブドーニンとゲンナジイ・ワシリエフと共になって発見したのが、このゲリー・リャボフである。この本は、痛ましい遺構の発見に至る困難であった経過、発見物について語っている。また、1979年の発見以降、今日まで続いている単純ではない予後後遺症についても述べている。

本中には、著者所有のいくつかの貴重な写真が掲載されている。

登場人物

ゲリイ・トロフィモビッチ・リャボフ（１９３２年－２０１５年）著者
映画監督、作家、脚本家

マリオリナ

リャボフの妻　？

アレクサンドル・ニコラエビッチ・アブドーニン（愛称　サーシャ）

著者の知人で同志、エカテリンブルグ在住

ブラジスラフ・アナトリエビッチ・ペソツキー

発掘参加者の１人

レーラ・テプローバ

父がチェキスト、著者の大学時代の同級生

アレクセイ・ペトロビッチ・ナゴルニイ

友人、共著者（何の？　＊）

ゲンナジイ・ペトロビッチ・ワシリエフ

友人？　アブドーニンが紹介した人物、途中から参加した地質学者

アリック・エセーニン

知人？　途中からの参加者、政府委員

カレン・シャフナザロフ

編集長

アクシュチッチ

映画関係者？

ハガガルチャン

映画関係者？

ジーマ

放送関係者？　リャボフの知人？

ニコライ・アニシモビッチ・シェロコフ

内務大臣、著者と親密な交流あり

ヤコフ・　　・ユーロフスキー

銃殺現場参加者のうちの１人

リマ・ヤコブレブナ・ユーロフスキー

ヤコフ・ユーロフスキーの娘

アレクサンドル・ヤコブレビッチ・ユーロフスキー

ユーロフスキーの息子、軍人、退役将軍

ミハイル・コンスタノビッチ・ディテリフス

「ウラルにおける皇帝家族とロマノフ家の従者の殺害」の著者

アレクセイ・ニコラエビッチ

ニコライ二世の息子＝皇太子

マリヤ・ニコラエブナ

ニコライ二世の娘の一人＝皇女

デミドワ

ニコライ一家の家政婦

ソロビエフ　検事

ニコライ・アニシモビッチ・シェロコフ

内務大臣

著者と親交？があった

イリナ・ニコラエブナ　大臣の娘

ヤコブレフ

ベロバロドフ　人民委員（チェキスト）

スベルドロフ

ベセドフスキー 外交官

ソコロフ 白軍の将軍

ペトル・ラザレービッチ・ボイコフ 銃殺現場の参加者、全権代表

ミハイル・カチュロフ・ディテリフス

現地探査時の同行者の1人、地質・地理の専門家

ブラッド・ペソツキイ

現地探査時の同行者の1人、アカデミーの学生

アデライダ・アブラモブナ

ボイコフの妻

デレベンコ

医師

クリュチコフ

KGB関係？

フェリックス・エドムーンドヴィチ・ジェルジンスキー

その他

アリフェリエフ

シャマリン

トーリャ・イワノフ

パクロフスキー

パベル・ビコフ

作家？ 「ロマノフ家の最期の日々」の著者

ラリサ・シェピチコ

映画監督

カシビノフ



表紙

Гелий Рябов, писатель и киносценарист,
автор популярных телесериалов
"Рожденная революцией",
"Государственная граница", "Конь белый"
и многих книг о работе милиции
и органов государственной безопасности.
Гелий Рябов вместе с Александром Авдониным
и Геннадием Васильевым в 1979 году,
после долгой исследовательской работы,
определил место захоронения
и обнаружил останки семьи Романовых
и их приближенных, убитых в ночь
на 17 июля 1918 года.
Книга рассказывает о тяжелом пути
к этой скорбной находке,
о не простых и неоднозначных событиях,
связанных с ней на протяжении почти
двух десятилетий.
В книге представлены уникальные
фотографии из архива Г.Рябова.

ISBN 5-7027-0843-1



9 785702 708430 >

裏紙